

正義の味方の人理修復

トマト嫌い8マン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの聖杯戦争から数年、答えを得た衛宮士郎は世界を旅していた。自分の目指した正義の味方になるために。そんな時、魔術の師匠の遠坂凜から連絡があった。そして彼は向かうことになる。世界最大規模の戦いへ。

Fate／GOは読み専だったのですが何となく書いてみることにしました。思い付きでのみ進むので、更新頻度は高くありませんし、続かないかもしれませんが、温かい目で見守ってください。何番煎じでも関係ないてきな思考の元書くので、よろしくです

ご意見感想提案指摘コメント、ちゃんと見るようにしていますので、気軽に書いていって下さい

8月10日

設定を載せました。ガバガバな設定で申し訳ありませんが、この物語を読むときは、設定をなんとなく頭の片隅の隅にでも置いておいて下さい。はい、なんか、大雑把ですみません。

目次

* 軽〜い設定	1
プロローグ	4
特異点F 炎上汚染都市冬木	
見慣れた景色	6
新しいサーヴァント	9
ファーストオーダー	12
泥に濡れた英霊	15
猛犬、参る	18
マスターとして	22
両雄激突	26
理想の先へ	29
黒き聖剣	32
剣の舞	35
急変する事態	40
アニメスファイアの思い	44
彼らの敵	48
第一特異点 邪竜百年戦争オルレアン	
召喚の儀	53
フランスの大地	58
救国の聖女	61
未完の彼女	66
竜の魔女	71
ヴェルサイユの花	74

もう1人の聖女	80
ドラゴンライダー	83
竜殺しを探しに	88
竜殺しの英雄	92
二つの因縁	95
未来への決意	97
心の迷い	100
聖人を探しに	104
王妃として	108
決戦の前	112
決意を新たに	115
オルレアン奪還開始	120
領地の支配	122
戦いは激化し	125
黒いジャンヌを追え	128
狂気の男	132
再会と共闘	135
竜の魔女の元へ	137
聖女と魔女	140
救国の剣	143
終戦の喜び	149
第二特異点 永続狂気帝国セプテム	
自分の未来	154
マスターとサーヴァント	158
ローマの大地	162

異常事態の戦	165
狂気の皇帝	168
正義の味方	170
並び立つ二人	173
客将たちとの出会い	178
その男、筋肉（マッスル）につき	183
母親（ブーディカ）	190
竜の息吹	195
先輩のサーヴァント	200
高速の剣技	206
それはどこか危うくて……	211
頭が上がらない	216
古き神	220
女神の祝福？	224
ユニット、結成！	229
ローマに帰還せよ	235
決戦前	243
進軍が止まる	250
まさかの邂逅	258
話をしよう	263
大王と皇帝	269
決戦の時は近い	278
神祖、降臨	284
決着の宮殿	290
ローマを示す時	297

レフ・ライノールとは	303
夢のジョイント・パフォーマンス!?	310
破壊の大王	319
二筋の黄金の輝き	325
最後までローマはローマ!である	331
第三特異点 封鎖終局四海オケアノス	
二人の進む先に	338
エルドラゴと呼ばれた女	343
頼き海の仲間	348
魅惑の踊り子	353
強襲する狂気	359
迫り来る脅威	365
異様な島	371
迷宮への入り口	376
ラビリンスの主	380
神代の少女	384
ラビリンスの真実	388
もう一人の正義の味方	393
アサシンの心	399
船上の戦場	404
その男、船長につき	409
海賊が海賊であるゆえに	414
海の脅威は止まらない	420

* 軽〜い設定

大雑把な設定

舞台設定

U B Wに限りなく近い世界線の延長

主人公、「衛宮士郎」の設定

士郎は遠坂とは恋人までは至っていないが、間違いなく一番近い存在として士郎の側にいた。士郎が旅から帰ると大体遠坂のところによって報告をしていた

時系列無視で、士郎の年齢は二十代前半ごろ、つまり『一番美味しい外見と設定』のころ

ロンドンへ渡り、暫く旅をした経験あり。あちこちを巡る旅の中で、戦闘スキル、家事スキル、及び朴念仁度合い？が向上。また、戦場を巡った経験から、精神面でかなり大人びている

体内に希薄になっていたもののアヴァロンを所持、しかし本人は知らない。回復以外にも時々士郎に力を貸してくれる

旅をすると同時に、様々な英雄の伝承を調べることとして、サーヴァントに対する知識が増えている

ほぼ無尽蔵の魔力が供給されているため、様々な宝具（神造兵器は流石に無理）を投影、自由に使うことができる。無限の剣製も、サーヴァントに出会えば出会うほど、どんどんストックが増えていくから……

「カルデア」

基本的な機能や役割はF G O世界とは変わらないが、遠坂凜が設立に携わっている

遠坂の家が長年探求していた第二魔法の情報などが、レイシフトのシステムに応用されている……みたいな感じで

一番最初に前所長が経験した聖杯戦争は、なんとか作り上げたレイシフトのプロトタイプによって飛んだ並行世界の話。そこで手に入

れた聖杯のため、汚染がなく、願いが叶い、今のカルデアへ繋がっている。

以降は時系列以外大体同じ

「遠坂凜」

現在意識不明の重体……まあ、のちにアレなことになる

カルデア設立の貢献者の一人でもある

士郎の魔術の師匠で、カルデアに呼んだ本人

自身の魔力を込めた宝石を、念のためにいくつか士郎に渡している

「マッシュ・キリエライト」

ご存知FGOメインヒロイン

士郎のサーヴァントとして共に戦う

毎日が新しい発見で、士郎との旅で色々学びたいと思っている

というか後輩キャラのため、士郎には桜を思い出させる相手でもある

士郎と同じ、或いはそれ以上に危うい所がある

「セイバー・リリイ」

記念すべき士郎のカルデアでの召喚第一号

アルトリアではあるが、士郎の知っているアルトリアとは異なる並行世界の存在。これ故にアヴァロンも近くにいて、触れるなどだけでは発動しないし、回復の速度や性能もやや落ちている

剣の腕もまだまだ修行中、現在は士郎から教わった、守りの型を主体として戦う

「ジャンヌ・オルタ」

元ルーラー、現アヴェンジャー

士郎が第一特異点からお持ち帰り（意味深）した時に霊基が変わった

士郎は何か親近感を抱いていて、助けたいと思っている

単純な一対一なら士郎のパーティ最強
邪ンヌはツンデレ可愛い、いいね

プロローグ

「トレース・オン
投影、開始」

思い浮かべるのは2振りの剣。白と黒の夫婦剣。手に握ったその感触や出来栄えを確認してから、彼はその剣を消した。

「先輩、ドクターがお呼びです。行きましょう」

後ろからかかる声。先輩と彼のことを呼んだのは、薄い髪色で眼鏡をかけた少女だった。立ち上がり返事をした彼は、最後に自分の目の前の入れ物、正確にはそこにコールドスリープ状態で眠っている相手に声をかけた。

「行ってくるよ。必ず助けて見せるから。待っていてくれ、遠坂」

そして彼は部屋にある他の同様の入れ物も見渡す。彼らのことも助けなければならぬ。それが唯一動くことができる自分の、しなくではならないこと。世界のためにも、彼女のためにも、そして正義の味方であるためにも。彼は使命を果たさなければならぬのだ。

「行こう。マシユ」

「はい、先輩」

先ほどの彼女、マシユとともに彼はその部屋を出た。

人理継続保障機関カルデア。何者かの手により歴史が改変され、人類史が焼却されてしまう結末を変えるために、彼はある任務を果たすべく行動していた。

それが未来を修正するための作戦、Grand Order、人類史に本来存在しないはずの特異点を訪れ、原因を排除し、本来あるべき形へ歴史を修正することが、今の彼とマシユに与えられた使命だ。

「いよいよですね、最初の特異点」

「そうだな。一緒に頑張ろう、マシユ」

「お任せください。私は、先輩のサーヴァントですから」

人理の修復、そのために彼らはあるものを回収しなければならぬ。それがあらゆる願いを叶えると言われる願望機、聖杯。それを手にするためにはサーヴァントと呼ばれる、最強の使い魔が必要だ。彼

の隣を並んで歩くマシユ。彼女こそ、彼のカルデアにおける契約サーヴァント第一号である。

ドアを開け、管制室へ入る二人。数名の職員が慌ただしく準備する中、一人の男が話しかけてきた。

「やあ、二人とも。いよいよだよ。人理修復の最初の一步だ。準備はできてるかい？」

「はい。問題ありません」

「ああ」

「それは良かった。このミッションが無事に終わることを願ってるよ。君たちはいわば、人類最後の希望だからね」

準備が整ったようで、職員たちから声がかかる。頷きながら、二人はそれぞれのコフィンに入り込む。レイシフトと呼ばれる方法で、二人は擬似的に転送され、異なる時代の異なる場所へ行くことができる。

「それじゃあ気をつけて行ってきてね。マシユも、土郎くんも」

レイシフトが始まる。人類最後のマスターとなった彼、衛宮士郎はこうして人理修復のために戦うこととなった。

特異点F 炎上汚染都市冬木 見慣れた景色

きっかけは彼の魔術の師匠だった。日本から共にイギリスに来て、魔術を学び、彼は世界を旅した。少しでも多くの命を救うために。かつてある男が憧れ、自身が引き継いだ正義の味方となるために。そんなおり、久しぶりの呼び出しに答えた彼に、師匠はこのカルデアを紹介した。

「マスター募集？」

「そ。なんでも英霊を使役することになるらしいから、適性のある人を集めてるらしいのよ。で、私も衛宮君もあの聖杯戦争を経験した、数少ない実在するマスター。是非にとの招待状が届いたのよ」

「それって俺もか？俺なんてマスターとしては半人前だったし、魔術だって」

「それは確かにそうね。でも衛宮君は聖杯戦争を経験した、それだけで十分よ。それに、衛宮君なら喜んで参加するんじゃないかと思っただけだよ」

「なんでそう思っただ？」

「このカルデアの目的、人理の観測・保護・及び救済らしいんだけど、それって簡単に砕いちゃうとつまり、人類の救済でしょ？正義の味方を目指している衛宮君が断るわけじゃないでしょ？」

自分のことをよく理解しているな、なんて思いながら衛宮士郎は彼女とともにカルデアのマスター候補として参加することとなった。

—————

カルデアについたその日、彼は一人の少女と出会った。それがマシュ・キリエライトだった。彼はマスター候補として呼ばれはしたが、魔術の才能が他とはあまりに異なっていた。軽い検査として行われた魔術のテストには向いていなかったのだ。それ故、基礎的な魔術がおろそかだと言われ、所長のオルガマリー・アナムスフィアによりファーストオーダーからは外されることとなった。

招待されてこの扱いである、普通なら怒るところだろうが士郎は素直にその言葉を受け入れた。もともと自分は他よりも一般的な魔術の才能はない。故に仕方のないことだと捉え、遠坂に応援の言葉をかけ、管制室から出た。マシユに案内され、自身にあてがわれた部屋へ向かった士郎はそこで医療部門のトップ、ロマン・アーキマン、通称 Dr. ロマンと出会った。ファーストオーダーから外されたもの同士、しばしの間二人は語らった。

その時だった。カルデアが大きな爆発に襲われたのは。突然の事態にあたりは混乱し、非常用アナウンスが流れた。爆発は管制室で起こったとのこと。

その時彼の頭に浮かんだのは、魔術の師匠でありここを紹介してくれた彼女と、自分のことを先輩と呼び親切にしてくれた少女のことだった。Dr. ロマンから避難しろと言われた彼は、しかしマスターたちが集められていた管制室へ向かった。

そこは一面炎と壊れた設備だった。その光景はかつて自身が経験を思い出させる。また、助けられないのか、恐怖にも似た思いが駆け巡る。その時、彼は小さな物音を聞いた。急いでその方向へ向かうと、そこにはマシユがいた。息をしていたものの、その身体の下半身は大きな柱に押しつぶされ、どう見ても手遅れだった。

後になってわかったことだが、師匠の遠坂凜を含むその他のマスターたちはコフィンの中で重傷を負い、生命維持のためにコールドスリープ状態にされた。カルデアの施設にも大きな被害が出た。

マシユは死にそうな中で、彼に手を握っていてほしいと願った。それが自分にできる最低限のことだと、これしかできないことを悔やみながらも、衛宮士郎はその白く美しい手を握った。マシユの表情が少しだけやわらぐと、彼は意識を失った。

「マシユは……」

意識を取り戻した彼は辺りを見渡した。相変わらずの炎と瓦礫。しかしどうにもおかしかった。その光景は先ほどよりも、既視感のあるものだったのだ。そう、本当にあの災害に逆戻りしたかのよう

な・・・周りに人の気配はなかった。まるでみんな消えてしまったような。そんな恐ろしいまでの静寂。聞こえるのはただ、炎の音だけだった。

ガラリ

後方から聞こえたその音に、士郎は素早く反応した。

「トレース・オン
投影、開始」

両手にあるのは二つの剣。干将・莫耶と呼ばれる彼の長年愛用してきた剣だ。

視界に入ってきたのは骸骨。それも自立して行動する、魔術で操られる類のものだった。士郎の姿を確認した骸骨兵は、剣や槍を持ちながら、彼に向かってきた。

「こいつらは、キャスターのと同じ?」

向かいくる竜牙兵の首をはね、体を裂く。聖杯戦争を勝ち残り、それ以来もずっと戦う力を高め続けてきた彼にとっては、この程度の相手は敵ではなかった。あらかた片付いた後、さりげなく辺りを見渡していた彼の目に一つの看板が目に入る。その看板が示す年号と日付に、彼は驚かされた。

「2004年12月、だと。じゃあ俺は過去に来たってことなのか? それに、」

どこことなく周りの景色は見覚えがあった。壊れた世界にというわけではなく、まるで以前ここにいたような気がするのだ。それも、破壊される前の街を知っているような。

「とにかく、まずはマシユを探そう。もしかしたらこっちに来てるかもしれない」

そう決めた彼は破壊された街を走りだした。

新しいサーヴァント

しばらく探索した士郎だったが、依然として誰にも出会わなかった。それも竜牙兵をカウントしなればの話だが。

「なんだってあんなに沢山街に？ 聖杯戦争とか魔術は隠匿されるものじゃなかったのかよ」

少なくとも自分の経験したあの戦いでは、できる限りの神秘の隠匿がされていたはずだ。この様子だと聖堂教会もその役割を果たせてはいなさそうだ。

もう一つ気がかりなことがある。それはいつの間にか彼の左手に現れたもの、令呪だった。聖杯戦争においてサーヴァントと契約したマスターの持つ絶対命令権。かつてマスターだったことのある士郎はそれに見覚えがある。だが今の彼はサーヴァントと契約してはいはず。

「くそつ。どうなってるんだ？」

もう何度目かもわからない戦闘を終え、呼吸を整えるために瓦礫の上に座り込んだ。竜牙兵自体の戦闘能力は大したことはないが、これではきりが無い。ふと、悪寒を覚える。見られている、いや狙われている？ どこから？ パツと立ち上がり警戒態勢に入るも少し遅かった。既に矢は射られている。空から赤い閃光が迫る。

ギイン

響いたのは肉の裂ける音ではなく、金属がぶつかり合う音。矢と士郎の間に一つの影が入り込んだのだ。黒い鎧のような姿に薄い紫色の髪、そしてその手に持つ巨大な盾。その盾で彼女は士郎の命を救った。もう死ぬ寸前であったはずの彼女、彼がああ管制室でずっと手を握り続けていた彼女。自分があの時助けたいと思った一人の少女。

「マシユ、なのか？」

「説明は後です。今は私の後ろに、マスター」

矢による攻撃は止むことを知らないかのように降り注ぐ。しかし盾は崩れない。周囲の地面が抉り取られるほどの威力を持つ矢でも、

その盾を貫くことはなかった。

突如として矢が止まる。追撃の様子もなかった。張り詰めていた気を緩め、マシユは構えていた盾から力を抜き、士郎と向き合った。

「ご無事でしたか、先輩？」

「ああ、ありがとうマシユ。そつちも無事でよかった。ところで、その格好は？」

「はい、これはサーヴァントとしての私の戦闘形態です。とりあえず、よろしく願います、マスター」

「マスター？俺が、マシユの？」

驚く士郎。彼の知るマシユはとてもサーヴァントとは思えない少女だった。立ち居振る舞いからしても、お世辞にも運動神経が高いとは思えなかった。それが今は体ほどの大きさの盾を片手で持ち、今自分を助けてくれた。

「先輩？どうかしましたか？」

「ああ、いや。マシユって元々サーヴァントだったのか？」

「いえ、私は元々はサーヴァントではありません。死の間際に、とある英霊がその力を私に譲渡してくださり、私と同化したのです。ですから私は、デミサーヴァントということになります」

「ええと、」

正直士郎はその言葉をうまく理解できなかった。サーヴァントと融合という時点からしてわからない。霊体であるはずの彼らと一体化することができるのか？

「とりあえず、普通のサーヴァントと同じように扱ってください結構いません。霊体化はできませんけど、基本的には同じです」

「まあ、とりあえずそれで納得しておこう」

霊体化できないことをデメリットかと言われると正直士郎からしたらそうでもなかった。以前の聖杯戦争で彼が契約したセイバーもまた、霊体化ができなかったのだから。それは生きながらにしてサーヴァントとなった故である。マシユも同じなのだと一人納得した。

「ところでマシユ、ここってどこなんだ？カルデアからレイシフトしたことだけはわかったんだが」

「ここはファーストオーダーの舞台、2004年の冬木市。カルデアでは特異点Fと呼称しています」

「冬木だって？」

それが本当なら道理で見覚えがあるわけだ。ここは彼にとつての始まりの場所でもあるのだから。あの日、死の間際に助けられ、あの月の夜に夢を引き継ぎ、その後戦いに身を投じ、自分と向き合い答えを得た。それがあって、今こうしてカルデアへ来ていたのだから。

「私たちの任務はこの特異点発生の原因の確認、及び排除でした。おそらくですが、聖杯が関係しているのではないかと」

「聖杯が・・・」

自身が参加した聖杯戦争、遠坂に聞いた話では、あの時にセイバーの宝具で聖杯を跡形もなく消しとばしたらしい。それにより、ほとんど被害はなかった。しかしここではそうはならなかったようだ。

キヤー

突然何処かから悲鳴が聞こえた。まだ誰か生きている人がいるのだろうか。マッシュと顔を見合わせ、アイコンタクトを取る。頷くとともに二人で声のした方へ駆け出した。

フアーストオーダー

骸骨兵に追われて走っていたその女性が転んでしまったのを見て、士郎は走る速度を上げた。

「マシユは右側のやつらを頼む！俺は左を」

「へっ？マスター？ええと、了解！」

即座に干将・莫耶を投影した士郎は、今にも女性に斬りかかろうとしていた骸骨兵を切り裂いた。

「はああっ！」

勢いを殺すことなく、士郎は周りの敵を斬り続ける。視界の端にマシユがその盾を敵に叩き込む様子が見えた。盾を振るい、殴り飛ばしては蹴り飛ばしと無双の強さを見せてはいたが、士郎の目には戦い慣れていないように見えた。少しだけ昔の自分自身を見ているかのようだった。数分の戦闘で、あたりの骸骨兵は一掃された。

「大丈夫ですか、つて」

「あなた、どうしてここにいるの？待機命令を出したはずよね！それに今の戦いは何？あの武器は？マシユもデミ・サーヴァントになれているし、どういうことか説明しなさい！」

「所長、落ち着いてください」

先ほど襲われていたのは、カルデアの所長、オルガマリー・アニメスファイアだった。人を見つけて安心したのか、堪えていたものが溢れ出たのか、怒ったような表情ではあったが、どこかほつとしているようにも見えた。

――
現状の確認と休憩のために士郎たちはビルの陰に隠れるようにし、座り込んでいた。

「なるほど。つまりマシユ、あなたは自分がどんな英霊と融合したのかもわからないのね」

「はい。真名どころか、宝具の名前さえ聞くことができませんでした」
「それは厄介ね。せめてどっちかさえわかればやりようはあったの

に」

「まあそう悲観することはないさ。あの程度の相手、マシユなら問題なく倒せるし」

ジロリと所長の怒りの視線を向けられて、士郎は少しどきりとした。どこか聖杯戦争の最初の頃、遠坂に向けられたものと似ているそれに、少し弱る。

「それにしても、どうしてよりもよってあなたがマスターなのかしら？ 魔術の基本すら全然できてなかったし。本当に過去にサーヴァントと契約したことがあるのかしら？」

「俺の魔術の腕は確かに高くない。けど、聖杯戦争に参加したのは本当だ」

「どうだか？ まあ、緊急事態だし、令呪もしっかり出てるみたいだから、とりあえずあなたをマシユのマスターとして認めるわ」

「そりやどうも」

「それで？ さっきのあの戦いぶりは何？ あの剣は？」

「えーと、これには色々複雑な説明が必要というか」

はあ、とため息を一つつき、オルガマリーは気を取り直した。

「じゃあ後でいいわ。とりあえずは霊脈のあるポイントを探しましょう。そこでサークルを設置すれば、カルデアとも連絡が取れるようになるはずだから」

「わかった。それで、そのポイントっていうのは」

「ここです先輩。ちやうど所長のいるあたりですね」

マシユの盾を触媒にサークルを展開する。すると突然通信が入った。

『応答してくれ、士郎くん、マシユ？ 聞こえるかい？』

「Dr. ロマン！」

「はあ？ なぜあなたが仕切ってるのかしら？ レフはどこ？」

『しよ、所長!? 所長までそっちに？』

「いいからレフはどこ？ なぜ医療部門のトップであるあなたが指揮をとっているのかしら？」

『じ、実はですね、カルデアのスタッフは僕を入れて20人にも満たな

くなつてしまつて。僕が指揮しているのも、僕より階級が上の人がいないからで。マスター適性者たちも47人がコフィンの中で危篤状態です』

「なつ、すぐに冷凍保存しなさい。死なせないことを最優先に！」

『あつ、はい。それから、』

『以上で報告を終えます』

「はあ、結構よ。納得いかないけど、ロマニ・アーキマン！あなたに指揮権を与えます。私は二人とともにこのまま調査を続けます」

『わかりました。何かわかつたらこちらから連絡します』

通信が途絶える。険しい顔をしているオルガマリーは本当に魔術師らしいと土郎は思つてしまう。調査を続けるのは成果を出すため、ひいては今回の事件についての追求に対するカードとして持つておきたいのだろう。でなければカルデア自体の存続も危ういだろうから。しかしマスター適性者たちの冷凍保存は多分彼女が言うように責任逃れのためだけではなく、彼女自身が彼らの身を案じているように思えた。なんだか、自分の師匠にそういうところまで似ているように思えてしまう。

「悪いけど付き合つてもらおうわよ、衛宮にマシユ」

「私は構いませんが、先輩はどうですか？」

「いいさ。俺もこのままここを放つて置くわけにはいかないからな」

「決まりね」

聖杯探索のため、3人は冬木の街を駆け出した。

泥に濡れた英霊

竜牙兵と戦いながらも3人は街を進んだ。やはり聖杯戦争における中立地帯であるはずの教会は完全に壊れていた。

「一体何がおきたらこんなことになるのかしら」

「聖杯の泥が溢れたんじゃないのか？」

「聖杯の泥？何よそれ？」

「俺の知ってる限り、冬木の聖杯は汚染されていた。中にはあらゆる災厄をもたらすものが詰まっっていて、悪意を持って願いを叶えることしかできなかったんだ。だから破壊するしかなかった。けどここにはその聖杯がまだ存在する。だとすれば、それが原因かもしれない、っ!？」

咄嗟にオルガマリーを突き飛ばす土郎。さっきまで彼女が立っていた場所に大きな槍が突き刺さっていた。正確には鎌のような形をし、その持ち手からは鎖が伸びていた。

「残念。仕留められると思ったのですが」

鎖に引つ張られ、槍が引き戻される。その先には長い髪をした美しい女性が立っていた。しかしその姿を見た瞬間、3人とも警戒を引き上げた。

『所長、みんな！大変だそこには、』

「な、なんでこんなところにサーヴァントがいるのよ!？」

「くっ」

慌てるロマニを含む3人と違い、土郎はあくまで冷静に相手を見ていた。黒いフードを深く被り、どこか狂気を感じさせるような笑みを浮かべる彼女は、とても妖艶で美しかった。しかし土郎が一番気になっていたのは、その声だった。確かにどこかで聞いたことがある声だ。

「まあいいでしょう。優しく殺してあげようと思いましたが、そこにサーヴァントもいるようですし。しっかりと味わってから、殺してあげましょう」

『あなたは、優しく殺してあげます』

あの夕焼けの林の中、彼女はその声で囁くかのようにそう言った。鎖のついた奇妙な剣を使った彼女。

「ライダー？」

—————

「ライダー？」

そう彼が口になると女性の笑顔が消えた。冷たい視線が士郎に向けられる。

「そう私を呼ぶということは、私のことを知っていますよね？私の真名を。どうせならあなたは最後にしようと思っていました。気が変わりました。あなたから、殺すことにしましょう」

言い終わると同時に彼女は士郎へ槍を突き出した。鉄が鉄を打つ音が響く。なんとか二人の間に入ったマシユが盾で攻撃を防いだのだ。

「下がってください、マスター」

「いいですね、そのやる気に満ちた眼差し。忠告してあげましょう。私のこの槍は不死殺しの呪いがあります。これによってつけられた傷は、消えることはありません。少しでも気を抜けば、あなたは一生出来損ないのサーヴァントですよ」

語りながらも彼女は攻撃の手を緩めない。マシユも必死に抵抗するが、サーヴァントになったばかりで力がうまく使いこなせないのか、防戦一方だった。盾の隙をつき、蹴りがマシユの体に決まる。それでも倒れないマシユを見て彼女は笑みを深くした。

「はあつ、はあつ。まだですっ」

「健気ですね。そういう人は嫌いじゃありませんよ」

「気があうな。俺もそういう奴あ好きだぜ。見ていてどーにも、ほつとけなくなっちゃまうんでな」

突然どこからともなく男の声が響いた。その声もまた、士郎が聞いたことのあるものだった。1人の男が突然マシユの隣に現れた。杖を持ち、フードのある服をまとい、青い髪を持つその男。士郎はその顔に見覚えがあった。

「お前、ランサー!？」

「残念ながらキャスターだ、坊主」

猛犬、参る

「キャスター？」

「ああ。まあ話し合いは後だ。今は目の前のこいつをどうにかするところからだな」

「キャスター。なぜ彼らに味方するのですか？」

「そりゃ愚問だぜ、ランサーよお。敵の敵は味方ってやつだ。お前らと戦うにはこいつらがいてくれた方が良さそうだしな」

「そうですね。ならばあなたから先に殺してあげましょう。キャスターであるあなたが前線に出たこと、後悔させてあげます」

その言葉を皮切りにランサーと呼ばれた女性はキャスターに襲いかかった。杖を使って攻撃を防ぎ、躲しとしているが、キャスターの方が分が悪いのは目に見える。

「どうしました？詠唱する余裕すらありませんか？」

「ちっ、やっぱやりにくいな」

「わたしも加勢に、」

「待てマシユ、今むやみにあの中に行くのも危険だ」

「ですが、」

「いいから待て」

マシユを引き止め、士郎は記憶を探り出した。ほんの数年前に彼はキャスターに会っているのだ。命を狙われたこともあるし、協力したこともある。その時に彼の獲物を間近で見た。そして魔術を磨くために、あらゆる英霊の歴史や伝承を調べ、あらゆる武器を見た。であるならば。

「トレイス・オン 投影、開始」

その武器は槍。血のように赤く、それを持ってして心臓を穿つ。真名の開放でその槍は因果の逆転により必ず相手を仕留める必殺の槍となる。最大の攻撃は投擲、その一撃は大軍をも制する。その強度、材質、歴史、経験。全てをイメージし、今ここに再現する。

「ちよつとあなた、なによそれ？」

「先輩？」

マシユと所長の驚きの声を聞き流し、士郎は手に握ったその槍を叫びと共に2人のサーヴァントに投げた。

「使え、キャスターー！」

その声に反応したキャスターはランサーの攻撃を躲しながらその槍を掴み、薙ぎ払うようにしランサーを後退させた。

「……いつは、」

手の中の獲物を確認し驚愕するキャスター。士郎へ目を向けると彼が頷くのが見えた。へっ、と口に笑みを浮かべ、持っていた杖を霊体化させる。そしてそれまでの服装から一転し、青一色の姿に変わった。

「坊主、なんだか知らんが礼を言うぜ。やっぱり俺としては、こっちの方がしつくりくらあ」

槍を構えるキャスター。ステータスまで変わったわけではないが、それでもその武器の方が彼らしいと士郎は思った。

「キャスターが槍で私と張り合おうと言うのですか？舐められたものですね、私も」

「そうか？むしろこっちの方が俺としちゃあ最大限の敬意を込めてるつもりなんだがな。そんじやまあ、始めるとするかい！」

戦闘に入った瞬間、先ほどまでのランサーの笑みが消えた。槍を持ったキャスターは彼女を凌駕する槍さばきを見せていた。それもそのはず。彼は槍兵の中でも選りすぐりの1人。その技量は彼女のそれをはるかに上回る。

距離を取り仕切りなおそうとするランサー。それを見たキャスターは地面に手を当てた。その瞬間彼女の周りに炎が溢れた。

「これは!？」

「そいつはさつき、てめえの攻撃をかわしてた時に仕込んでおいたのさ。あいにく、ルーン魔術に詠唱はいらねえからな。こいつで詰めだ！」

いつの間にか杖を持っていたキャスターがその杖を振るうと、炎がランサーの体を包み込んだ。炎と煙が晴れると、ランサーが膝から崩

れ落ち、粒子となって消えて行った。

戦闘終了後、服装を元に戻したキャスターは士郎たちの前に戻ってきた。

「おう坊主、サンキューな。で、この槍なんだが」

「ああ、その説明は後です。取り敢えず持つててくれ」

「そんじや、遠慮なく。で、お前この槍を渡したってことは、俺のことを知ってるってことだろ？」

「ああ。アルスターの大英雄、クランの猛犬、クー・フリーンだよな？」
「おう。まあ今回はルーン魔術の使い手のキャスターとして現界したわけだが。で、何で俺のことがわかったんだ？しかも、あのランサーのことも知ってたみたいだが」

「ああ、会ったことがある。別の聖杯戦争で」

「ほお、そりゃ話が早いな。ならこの聖杯戦争の異常さはわかってるよな」

「ああ」

「ちよつと、そこだけで話を進めないでくれるかしら？」

「先輩、その、私たちにも説明を」

士郎とキャスターが2人で話を進めていると、ジト目のオルガマリー所長と少しためらっているような感じのマッシュが口を挟んだ。ついつい置いてけぼりにしてしまったことに罪悪感を感じながら士郎はこの状況についてキャスターに尋ねた。

「つてな感じで、気づいたら人間はみんな消えちまって、サーヴァントだけが残った。今残ってるのはセイバー、アーチャー、アサシンとバーサーカー。ライダーは前に仕留めたし、ランサーはお前たちも見た通り脱落だ。ただまあ、全員がセイバーの配下みてえなもんだ。何かに侵食されてるのか、若干ではあるが質が落ちてやがる」

「あなたはそれ以来、一人で戦っていたの？」

「まあな。俺としても強者との戦いは望むところだし、このまま放置ってわけにはいかねえしな」

好戦的な笑みを浮かべながら何でもないようにキャスターは笑った。そういうところがあの戦いで出会った槍兵を思い出させ、少しばかり懐かしい気持ちに士郎はなった。

「キャスター、頼みがある。俺たちはこの状況を解決するために来た。俺たちに力を貸してくれないか」

「いいぜ」

「随分あっさり承諾したわね」

「お前たちはこの状況をどうにかしたい、俺は一刻も早くこの戦いを終わらせたい。似たような目的があるんだ。協力しない道理はないだろう」

「よろしくお願いしますね、キャスターさん」

「おう。嬢ちゃんもサーヴァントなんだろ？まあいつちよよろしく頼むわ」

差し出された士郎の手をキャスターが握る。

「しばらくの間だが、お前をマスターと認めてやるよ、坊主。名前は？」

「衛宮士郎だ。よろしく頼む、キャスター」

マスターとして

「セイバーがいるのは大空洞だ。そこに聖杯がある。どういふつもりか、奴さんそこから動くつもりはないらしい。まるで聖杯を守ってるみてえだ」

道を案内しながらキャスターは状況をさらに説明する。現在の戦力を士郎は分析する。キャスターとマシユ、そして自分が一応戦うことができる。現に先ほど襲って来たアサシンもマシユとキャスターと協力して倒すのに成功した。しかし、

「他に残っているサーヴァントはアーチャーとバーサーカーでしたよね？彼らを突破してセイバーを倒す。それで今回のミッション達成ですね。しかし、今の私がお役にたてるかどうか」

「確かまだ宝具が使えねえんだったか？」

「はい」

「せめてあなたと融合した英霊がヒントを残してくれたなら良かったんだけど」

ふとキャスターが立ち止まり士郎へと指を向けた。

「言っとくが、宝具を使うってのは持ち主の気の持ちよう、言わば本能だ。心からの思いがあれば、自ずと使えるようになるだろうよ」

徐々にキャスターの指先に魔力が集まる。身構える士郎とマシユ。しかしキャスターと士郎の間にオルガマリー所長が割って入った。その顔を見たキャスターはふつと笑うと指を下ろした。

「もう大分近くまで来た。決戦前に少しばかり休憩を取るか」

近くの建物に入り、各々が体を休めることにした。相変わらず竜牙兵は湧いて来たため、ここに来るまでもに幾度か戦闘を経ている、士郎と所長は疲れを感じていた。結界をはりにキャスターは1人、屋上へ向かおうとしていた。

「よお坊主、ちよつと付き合え」

「わかった。マシユ、所長といってくれ」

「えっ、はい」

声をかけられ、キャスターを追って士郎は屋上へ向かった。

屋上にでたキャスターは大空洞の方をずっと見つめていた。

「どうしたんだ？」

「二つばかり話しておきたいことがあってな。最初はまあ、お前の魔術についてだ。この槍、ランクこそ落ちてはいるものの間違いなく俺の愛用していたものと同じものだ。お前はこれを隠し持っていたわけじゃないんだろ？」

「ああ。俺の魔術で作り出した贋作だ」

「そこだ。完全に何かを再現するような魔術なんざ、聞いたことがねえ。しかもこいつは宝具だ。そんじよそこいらの槍とは比べ物にもならねえ。どんなデタラメだ？」

「うまくは言えないんだけど、俺がまともに使える魔術の一つ、それが投影魔術だ。武器であればそれを視認しただけでその材質、構造、歴史、あらゆる情報を瞬時に読み取ることができて、それを作り出すことができる。本来投影品はすぐに消えてしまうんだけど、俺のは特別。俺が消すか、壊されるかのどちらかでない限りは、半永久的にこの世に存在し続ける」

「なんだそりゃ？ 本当にデタラメだな」

「といつても、さっきお前が言ったように宝具とかのランクは下がると、剣はともかく、他のものだと通常の何倍もの魔力を使ってしまう。いいことばかりでもないさ。そのほかだと簡単な治療魔術に、強化、解析くらいしか使えないしな」

「世の魔術師が聞いたら卒倒もんのこと言ってるぞ、お前。しかしあれだな。なんだかアーチャーの野郎に似てるな、それ」

「アーチャーに？」

「ああ。なんだかいけすかねえ奴だな。そのクラスの通り弓もちろん使うが、野郎は双剣の使い手でもある」

「それって、こんなのか？」

「そうそう、まさしくそれって、おい待て！なんでお前がそれを持っている!？」

一瞬さらりと流してしまいそうになったものの、士郎の手にある干

将・莫耶を見てキャスターは驚愕していた。

「やっぱりそうか。いや、あいつとはちよつとばかり因縁があるってだけだ」

「因縁、ねえ。まあ詳しくは聞かないで置いてやるよ。で、こつちがむしろ本題だ。坊主、セイバーとの戦いで、お前は手を出すな」

「えっ」

—————

突然言われた言葉を、士郎はうまく飲み込めなかった。手を出すな。つまりは戦うなどということだろう。何故そう言われたのか、全く理解できなかった。自分は足手まといだと思われているのだろうか。「お前の実力が高いのは認める。身体強化してなら、恐らくはサーヴァント相手でもそれなりに立ち回れるだろうよ。それもあって、お前は自分で戦うことで、あの嬢ちゃんにできるだけ負担をかけないようにしてるってとこだろ?」

「ああ」

「それが間違いだ」

「何でだよ?」

冷静な顔でキャスターは士郎を指差す。その顔は真剣そのものだった。

「いいか、お前さんがあの嬢ちゃんを守りたいと思うのはいい。だがな、あのままじゃ嬢ちゃんはいつまでたってもサーヴァントとしては半人前もいいところだ」

その言葉に士郎は言葉を詰まらせる。半人前のまま。それは嘗ての自分を思い起こさせる。あの戦争に巻き込まれた頃の自分を。散々言われた。半人前だと。足手まといだと。愚か者だと。でも、引き下がることなんてできなかった。自分も戦わずにはいられなかった。マシユも、同じ気持ちになるのだろうか。

「聞いた話から察するに、ここだけで戦いが終わるわけじゃねえんだろ?この先どんなことがあるかわからねえ。いつでもお前が嬢ちゃんを守る保証もねえ。そもそも、嬢ちゃんのあの感じからして守られるだけの存在なんて真つ平ごめんだろ?」

「確かに、そうだな」

「それにな、嬢ちゃんはお前のサーヴァントだろうが。サーヴァントを信じてやれないマスターほど愚かなものはねえ。それは相手に対する侮辱とも取れる」

「ああ。お前の言う通りだな、キャスター。一緒に戦うって約束したんだもん」

「とりあえず、どっしりと構えて、嬢ちゃんを信じてやんな。恐らくあの子が勝利の鍵を握ってる」

「鍵を？」

「ああ。あのアーチャーが剣ではなくわざわざ弓でお前さんたちを狙った。よほど何かを警戒しているのだろうよ。あの盾なら、あれを防ぐことができるのかもしれない」

「防ぐって何をだよ？」

「セイバーの最強の一撃をだ。あれはそんじよそこの防具じゃ防ぎきれねえ。なんせ伝説に名高い剣の中の剣、星の聖剣だから」

「・・・エクスカリバー。ってことはセイバーは」

「ああ。誇り高き円卓の騎士の王、アーサー王だ」

「思い出すのは金色の髪、エメラルドのような瞳、青き鎧姿に黄金の剣。届きたいと思ったその彼女が、救いたいと思ったその彼女が、今は敵として立ちふさがることとなるのだ。」

両雄激突

大空洞の前まで来た士郎たち。半人工的なその入り口に立つだけで、その奥に大きな力を持っているものを感じ取れた。それほどまでに大きな魔力だった。思わずゴクリと喉を鳴らしてしまう。

「この奥に、セイバーが」

「ああ。と、その前にどうやら信奉者のお出ましだな」

後ろを振り返るキャスター。そこにある小さな崖の上に1人の男が現れた。白髪に黒いでたち。今回は赤い外套はないようだ。鋭い目でこちらを睨みつけるのは間違いない。サージェント。バーサーカーのように理性は消し飛んでいない。詰まる所彼は、

「よう、アーチャー。相変わらずセイバーのお守りをやってんだな」

「信奉者になったつもりはないのだがね」

黒い弓をその手に持ち、アーチャーは鷹のごとき目で彼らを見下ろす。あいも変わらずの皮肉っぽい口調に何故か少し安心する士郎。しかし気を緩めるわけにはいかない。こうして現れたということは、どうであれ敵であるということなのだから。

「坊主、お前たちは先に行け。俺はこいつとケリをつけなきゃならねえ。セイバーは任せたぞ」

「ああ。けどその前に一つだけ、あいつに聞かなきゃいけないことがある」

「あん？」

自分たちの前に立っていたキャスターの隣に並ぶ士郎。まっすぐにアーチャーを見上げた彼は問いかける。

「アーチャー！お前は答えを得られたか？」

「・・・なんのことだね？」

「・・・そうか」

短い問い。その問いに対して、一瞬彼が言葉を詰まらせたのに気づかない士郎ではなかった。それだけで十分だ。これで彼女との戦い、迷いなく見届けられる。一度伏せた顔を上げた彼は、より強い決意の表情を見せた。

「ここは頼む、キャスター」

「ああ。任せな」

その言葉を受けて士郎はマシユと所長を連れて奥へ進んだ。アーチャーもキャスターも、彼らが完全に視界から消えるまで何もせず待っていた。

「随分と親切じゃねえか、わざわざ行くのを待ってやるなんてよお」

「何、あの小僧がいては気が散るのでね。私の知っているのよりもいささか歳を重ね成長しているようだな。君を相手取りながら奴に気を取られるのは、あまりにも愚かなことだ。であるならば、先により脅威である君を倒す方がいい」

「そーいやあの坊主もテメエとは因縁があるとか言ってたっけな。まあ何でもいいさ。いい加減その顔も見飽きたところだ。決着つけようや、アーチャー」

そう言っただけでキャスターは霊体化させ隠し持っていた槍を実体化させる。僅かにアーチャーの瞳が開かれたが、すぐさま皮肉げな笑顔を見せた。

「やれやれ。私の記憶違いか、君はキャスターではなかったのかね？」

「悪いいな、こっちの方が好みなんであー！」

地面を蹴り、キャスターは槍を振るう。その一撃をアーチャーはいつの間にか両手に持った剣で受け止めた。

「この奥だな」

洞窟の一本道の先、明らかに感じ取れる魔力の量と質が上がった。入り口からしても驚異的だったというのにだ。

「覚悟はできたかしら、マシユ、衛宮？」

「ああ。マシユは？」

「大丈夫です」

頷きあい道の先、ひらけた空間へ足を踏み入れた。山の中にこんなに広い空間があったのかと思うほどに、高く広い場所だった。真正面、少し高いところに一つの影が立っていた。黒い甲冑に黒い剣、くすんだ色の髪を持つ影。サーヴァント、セイバーはそこに立っ

た。ゆつくりとその瞳が開かれる。金色のそれは士郎たちを捉えた。

「ほう。盾のサーヴァントか。面白い」

「あれがセイバー、なんて威圧感なの」

息を飲む所長。サーヴァントと顔を合わせるといつも何か大きな存在感を感じるが、彼女のそれは桁違いだった。恐ろしいまでの魔力と、鋭い殺気。それを受けてなお、士郎の表情は恐怖を感じさせず、むしろどこか寂しげに見えた。

セイバーが地面に突き刺していた剣を抜く。反転し、性質まで変わってしまった光を呑みこむ黒き聖剣。

「こい。貴様の守り、まことのものかを試してやろう」

「セイバー・・・マシユ、頼む」

「はい、先輩。戦闘に入ります」

爆発的な魔力放出を推進力に、セイバーがマシユへ接近し剣を振り下ろした。鉄同士がぶつかり合うような音が洞窟内に響いた。

理想の先へ

「おら、よっとー！」

キャスターが巧みな技量で槍を振るう。クラスがランサーではな
いたため素早さはその時と比べたら落ちるが、それでも並大抵の強者で
は防ぐことなど不可能だ。しかしアーチャーは両手の剣を使い、確実
な守りで攻撃をさばっていた。

一旦距離を取り弓を持つアーチャー。そのまま何発か矢が打ち出
されたが、キャスターは同数の魔力弾を打ち出すことで相殺した。さ
らに距離を取るためにアーチャーが下がろうとすると、ルーンで作ら
れた壁に弾かれた。いつの間にか、まるで一つのケージのように、周
囲をルーンの壁が囲っていたのだ。

「遠距離からチンタラやっててもらちがあかねえからな。師匠の真似
して、舞台を整えさせてもらったぜ。これなら思う存分、お前とやり
合えるしな」

「やれやれ。少しはキャスターらしい戦い方にしたらどうかね？近接
格闘をしたがるキャスターなど、邪道にも程があるだろう」

「お前にだけは言われたくねえ、よー！」

再び激突する二人。両者共に相手を仕留める気でぶつかり合い、剣
と槍が激しく火花を散らす。勢いよく繰り出された攻撃により、アー
チャーの剣の片方が弾き飛ばされる。

「これで、どうだー！」

「ぐっ！」

片手のみの剣でなんとか持ち堪えるアーチャー。しかし先ほどと
比べても守りの隙が多くなった。罅迫り合いの状態になる二人。

「なんだあ？セイバーについてから腕が鈍ったんじゃねえか？」

「さて、それはどうかな？私からすれば、君の勘が鈍ったようにも見え
るが」

「あん？っ!？」

間一髪で身を引いたキャスター。先ほど弾き飛ばされた白い方の
剣が、彼の首のあった場所を通った。その剣を掴んだアーチャーは体

勢が崩れ、槍を構えることもできなかつたキャスターの体に、両の刃を突き立てた。

「ふっ。こんなものか。ん?」

アーチャーが勝利を確信したその時、キャスターの身体がまるで植物のように変わり、彼の両腕を固定した。そのキャスターの身体の人形の中からキャスター本人が現れた。

「森の賢者を舐めるんじゃないやねえよ。こいつで、終いだ!」

身動きの取れないアーチャーへ、槍ではなく杖を振るキャスター。アーチャーの足元から巨大な木の腕が現れ彼を捉えた。握りしめられる圧迫感ののち、アーチャーは熱を感じた。一瞬でその木の腕は燃え上がり、彼を大地に叩きつけた。

炎と煙が消え、木の腕もなくなつた。倒れていたアーチャーが立ち上がる。しかしその輪郭から粒子になり始めていた。

「俺の勝ちだな、アーチャー」

「そうだな。まさか君に負けることとなるとはな。だがあの盾の少女はともかく、あの小僧と戦つたとしても、どの道勝てはしなかつただろうな」

「なんだそりゃ? 仮にも英霊のお前があ坊主に負けるつてのか?」

「奴は既に先を見据えている。その理想の先にいるのはもはや別人と言つてもいい」

「理想? 別人? 急になんの話してんだ、お前?」

「常にイメージするのは最強の自分。奴のそれはとうに先を行っている。それもこれも全て彼女のおかげということだろうか。その先に得られる答えは、きつと間違いではないのだろう。ならばもはや何も言うまいし、何もしまい。衛宮士郎に伝えろ、キャスター。その思いは、もはや本物だとな」

そう言い残し、アーチャーは消えていった。

「本物だあ? 何いつてやがるあいつ。それに最後に満足そうな顔しやがって」

疑問や愚痴は尽きないが、ゆっくりしている暇はあまりない。セイバーとの戦いで助太刀すべく、キャスターは士郎たちの元へ急いで向

かった。

時を遡ること少し、洞窟内でも激しい戦闘が行われていた。

剣が振るわれるたびに、まるで空気がそのものが切りつけてくるかのような激しい振動が伝わってくる。離れていてもこの重み。直に受け止めるとなると、その重みは想像もつかない。

「くうっ」

しかしマシユは倒れない。彼女の持つ盾は、あのセイバーの攻撃にも耐えていた。ただ、マシユ本人はその攻撃の重みに押されっぱなしだった。

「どうした？攻めては来ないのか？」

なお休まることのない攻撃。セイバーが大きく剣を横に払う。その際に生じた衝撃に耐えることができず、マシユは盾ごと後ろに弾き飛ばされた。

「お願いマシユ、耐えるのよ」

ギユツと拳を握りしめ、祈るようにオルガマリーは言葉を絞り出す。ふとマスターである士郎の様子を見ると、真剣な表情をしているものの、驚くほど冷静に戦況を見ていた。

「あなた、不安とかないの？流石に動揺しっぱなしというのはマスターとしてどうかと思うけど、マシユのことが心配ではないの？」

「信じてるから。俺のサーヴァントのことを、マシユのことを」

そう答える彼からは嘘偽りなんて感じ取れなかった。目をそらすこともなく、彼はずっと二人のサーヴァントの戦いを見守っていた。

黒き聖剣

「ほう、まだ立つというのか?」

感嘆の声をセイバーが漏らす。反撃することもできず、マシユはただひたすらに攻撃を防ぎ続けることしかできていない。それでもその心までは折れてはいなかった。敵わないと知りながらも倒れるわけにはいかない。その決意で彼女はまた立ち上がる。

「マシユ・・・」

士郎の口から眩きが漏れる。それでも彼は拳を強く握り見守るだけだった。その様子には彼は魔術はからつきしでもマスターとしての覚悟を持っていることをオルガマリーは感じ取った。しかしその後、彼女は視線を前に引き戻された。セイバーの持つ剣、そこへ溢れんばかりの魔力が集まっていた。

「答えよう、その瞳に。その覚悟に。この一撃、生半可な覚悟で受けきれれると思うな」

「まずいわ、あれは間違いなく宝具を使うつもりね。これを耐えられなかったら、ってちよつと待ちなさい!衛宮!」

先ほどまで彼女の隣に立っていたはずの士郎が、マシユの元へ駆けて行った。どう見ても自殺行為にしか見えないその行動にオルガマリーは眼を見張る。

「卑王鉄槌。極光は反転する。光を呑め!」

「約束された勝利の剣!」

振り下ろされた剣から、竜の息吹の如き一撃がマシユへと襲いかかる。盾に直撃したそれはマシユには届かない。が、その威力はマシユが盾を手放してしまいそうなほどだった。ただでさえ先程までの攻撃を防ぐので精一杯だったマシユの体には盾をまともに構える力はほとんど残っていないかった。

「このまま、では」

盾から離れそうになったその手をそつと、しかししつかりと握ってくれる手があった。意識を失いかけたマシユがハツとする。その手の暖かき、優しさを知っている。彼女の背中にもう片方の手が添えら

れる。

「諦めるな、マシユ」

「先、輩・・・」

彼女の背中を支えてくれたのは、マスターである衛宮士郎だった。どうして自分の隣にいるのかとも、危険だから離れるようにとも言えなかった。

嬉しかった、手を握ってくれたことが。

嬉しかった、隣に立ってくれてることが。

嬉しかった、支えてくれてることが。

そして嬉しかった。何よりも。

「信じてるから」

そう言って笑顔をくれたことが。

「先輩っ」

それだけでなんだか力が湧いてくる気がした。

—————

マシユの体に力が入ったのを感じて士郎は正面に視線を向ける。マシユの手に重ねた自分の手にも少し力を込める。

「いいか、マシユ。キャスターの言ってたこと、思い出すんだ」

「えっ?」

「宝具を使うのは本能、気の持ちようだって言ってただろ? マシユの想いが強ければ強いほど、宝具もそれに応えてくれるはずだ」

「私の、想いに・・・」

「俺もそうだった。俺にできたのは、自分の心を形にすることだけ。けど、それこそが俺の力だったんだ。常に自分の中で最も強い自分を、最も望む結果を。自分を、自分の想いを信じろ、マシユ!」

「・・・はい!」

自分はどうしたい? この力を持って、この盾を持って、何を成し遂げたい?

先輩を守るようになりたい。信じてるといふその言葉に応えたい。どんな危険があつたとしても、こうして隣にいてくれる先輩を守るようになりたい。また一緒に笑えるように、守り抜きたい。自分

が盾となつて、あらゆるものからこの人を、

「先輩を、守りたいんです！」

マシユの言葉に、覚悟に、心に呼応するように盾が輝き始める。盾が広がり始め、やがて大きな壁のようになる。その防御力は今までの比ではなく、徐々にはあるが確実に、聖剣の一撃を押し返し始めた。「なんて強固な守りなの。あれが、マシユの宝具？」

「これはっ」

「マシユ、行け！」

「はああああ！」

その盾は押し寄せる攻撃をセイバーへとそのまま返したのだった。激しい爆発が起こり、セイバーの攻撃がやむ。マシユの盾の輝きもまた微弱になり始め、壁も消えていった。

剣の舞

「か、勝ったの?」

「はあっ、はあっ、はあっ」

慌てて駆け寄るオルガマリィ。盾を支えにし、肩で息をするマシユ。先ほどの盾の発動で大きく疲弊してしまったようだ。無理もないと士郎は思った。自分も初めて自分の力を使った時にはボロボロになったと思ひ出す。それでも出来たのは、あの時守りたいと思つた、守らなきゃいけないと思つた人がいたから。やっぱりどこか自分と似ていると感じる。

「やるな」

「っ!」

「そんなん!」

士郎がマシユに労いの言葉をかけようとした時、先ほどの爆発の中心から声が聞こえて来る。煙が晴れると、そこにまだ彼女はいた。全くの無傷ではなく鎧の所々はかけている。それでも消える気配はなく、彼女は剣を構えた。

「だが果たしてその守り、次は持つか?」

「くっ、あうっ」

既にマシユの体は限界に近かった。サーヴァントの力を得て、その肉体が人間のそれよりも強化されたとはいえ、その力はまだマシユの手には余るものだった。加えて先ほどの無意識による宝具の解放、それにより精神的にも限界になっていた。それでもなお立ち上がるうとするのは今セイバーと戦えるのが自分しかないから。せめてキャスターが来るまでの時間稼ぎをと。

立ち上がろうとする彼女を肩に置かれた手が制した。士郎がセイバーを見据えながらマシユと立ち位置を入れ替えるようにしてセイバーと対峙した。

「先輩?」

「よくやったな、マシユ。少し休んでくれ」

「ちよっと、あなた何をするつもり?」

二人に笑顔を向け、士郎はさらに前に出る。セイバーと対峙するかのよう。

「まさか貴様が私の相手をするつもりか？」

「ああ。そのつもりだ」

「魔術師ではサーヴァントには勝てぬ。それを理解してなお挑むというのか」

「ああ」

「何を言ってるの!?!あなたがどんな魔術で武器を持ってきてるのは知らないけど、勝ち目なんてあるはずがないでしょ!」

「それでも、誰かがやらなきゃいけない。だったら、今動けるのが俺だけなら、俺がやらなきゃいけない」

「迷いなく即答か。フツ、ならば私も貴様の覚悟に応えよう。来るがいい、そこなマスターよ」

「トレース・オン 投影、開始」

両手に干将・莫耶を握り、士郎は駆け出した。士郎の剣とセイバーの剣が激突する。技術とパワーで言えばセイバーの方が圧倒的に上だ。魔力解放によるブーストもかかり一撃一撃が重い。しかしそれでも士郎は倒れない。双剣を操り、セイバーの攻撃を防ぎ、受け流し、躲す。ほぼ防戦ではあったが時には自ら攻めることもする。かつて幾度も見せてもらったその剣技から、次の動きを予測して動く。これも彼が身体強化を習得したからこそこのことではあるが。

師匠から教わり自身で昇華させた身体強化。より速く、より強く、より鋭く。常にイメージし続ける最強の自分。それを再現するためには強化される。この身は剣、無限の剣。であれば、衛宮士郎にそれを底上げすることなど、造作もない。

何度目かの撃ち合いののち、両者一旦距離をとった。

「流石はセイバーだな。攻めきれぬ気がしない」

「貴様こそ。私の知る限り、ただの人間の中では貴様が一番強いかもしれぬ」

「それは褒めてくれてるととってもいいのか?そいつはありがとう。ついでに聞くけど、話し合いの余地はないのか?」

「ふん、言葉で何を理解しようとする。語るならばこちらの方が早い」
再び剣を構え駆けるセイバー。士郎もまた迎え撃たんと駆け出す。
洞窟内に激しく打ち合いの音が響き渡る。

—————
士郎の戦いに三者三様に想いを馳せていた。

オルガマリーは驚愕。基本中の基本すら使いこなせない彼がどうして聖杯戦争を生き延びられたのかが不思議だった。サーヴァントが優秀だったのかとも思ったがそれだけでは説明がつかない。どんなに強い英霊でも、マスターがへっぽこなら力を出すこともままならないのだから。しかし目の前の彼はどうだろうか。人の身でありながらも双剣を使い、あのアーサー王と渡り合っているのだ。驚きとともに納得してしまう。この実力ならば、聖杯戦争に勝ち残ってもおかしくはないと。そして彼の魔術。武器を転移させているわけではなさそうだ。今ここで作り出しているかのような。そんなことはありえないというのに。

マシユが抱いたのは羨望。サーヴァントとなった自分のマスターである彼は本来前線で戦うはずのない人だ。自分が守らなければならぬ相手だ。その彼が今、自分を守るために戦ってくれている。サーヴァントである自分でも苦戦した相手に、彼は食らいついていた。その姿に、マシユは憧れた。その強さに近づきたいと思った。この人に、着いていきたいと。戦いにおいても、人としてもやはり彼以上に先輩らしい人はそうそういないだろう。グツと盾の持ち手を握りしめる。徐々に体に力が入るようになってきた。もう少ししたら、自分も動けるかもしれない。

そして3人目は感嘆。決して才能があったわけではなかった。それでも彼は何度も向かってきた。回を重ねるごとに学習し、激しい戦いの中でさらに技術を身につけた。あれから時が経ったが、きつとその間も自分を高め続けてきたのだろう。一体どれほどの努力を重ね

て来たのだろうか。磨き上げられた彼の技と本気で戦えることに、喜びを感じずにはいられなかった。ぶつかり合うその一撃一撃から彼の努力の結果が伝わってくる。

セイバーの大振りの一撃で吹き飛ばされる士郎。本人にダメージはないが、受け止めた衝撃で干将・莫耶が砕けた。既に幾度か砕かれながらも、士郎はまたその剣を投影し備える。その様子を見て、セイバーが小さな笑みを浮かべぼそりと何か呟く。その呟きは誰の耳に届くこともなかった。

「本当に、強くなったのだな」

――
両手に干将・莫耶を持ち構える士郎。流石にずっと打ち合っていたため、その息は上がってきている。

「貴様に敬意を払おう。我が剣の一撃によって、葬ろう」

再び魔力が渦巻き始める。聖剣が黒い光をまとい始める。先ほどの巨大な一撃が、再び放たれようとしていた。

「衛宮！」

「先輩！」

後方からの悲鳴に士郎は振り返らなかった。避けるわけにはいかない。あの二人が後ろにいるということは、自分が避ければ二人がやられてしまうということだ。ならば正面から受け止めるほかない。

「約束された勝利の剣！」

「投影、開始」

「I am the bone of my sword」
「熾天覆う七つの円環！」

かざされた士郎の右手の正面に6つの花卉を持つ花が開く。現れるのは彼の最強の守り。トロイヤ戦争において大英雄の投擲さえも凌いだ鉄壁の盾。そこへセイバーの宝具が激突した。一瞬盾が持ち

こたえたかのようにだった。しかし一枚、また一枚と、押し寄せる膨大な攻撃に花卉が散っていく。次々に散った花卉は残すところあと一つのみとなった。その最後の1つですらヒビが入り、余波で士郎の体に傷がつき始めた。

「くっ、このお！」

「ふん、よく足掻いた方だが、これで終わりだな」

「ああ。終わりだ、お前がな！」

突如として士郎の隣に現れたのはキャスターだった。驚く周囲をよそにキャスターはセイバーに向けてその杖を振るう。

「我が魔術は炎の檻、茨の如き緑の巨人」

「因果応報、人事の厄を清める社」

「焼き尽くす炎の檻！」

攻撃に専念していたセイバーの足元から炎を纏った木の巨人が現れた。その腕がセイバーを捉え、腹部の籠へ閉じ込める。そのまま巨人は倒れ伏し、セイバーごと燃え上がった。

急変する事態

「ありがとう、キャスター。お陰で助かった」

「いや、気にすんな。俺の方も予想してたよりも時間をくっちゃまったしな」

ガラリと、セイバーが崩れた地面から立ち上がる。しかし今度こそ決定打が入ったようで、その身は徐々に粒子となっていくた。

「見事、貴様たちの勝ちだな。護る力の方が優ったか。穢れを知らぬあの者らしいのかもしれないな」

「セイバー……」

「そのような顔をするな。聖杯を巡る戦いはまだ始まったばかりだ。そう、グランドオーダーは」

セイバーの発したその言葉にオルガマリーはひどく驚いた。何故その名をこのサーヴァントが知っているのか。

「いづれ分かるだろう。そのマスターよ」

「なんだ、セイバー？」

「そう身構えるな。最後に一言言い残してやろうと思ってな」

「遺言、いや辞世の句って奴か？坊主、聞いてやったらどうだ？」

「ああ。構わないけど」

「ふむ、では一つだけ。誇るがいい、貴様の力は本物だ。本当に、本当に、」

「強くなりましたね、シロウ」

「っ!?セイバー!」

先程までのような威圧は消え、彼女は笑顔を見せたのだ。今までの冷たさを含む笑みではなく、優しい笑顔を。そつと伸ばされたセイバーの手に士郎は触れた。暖かい何かが自分の中に流れてくるのを感じる。同時に、手の中の感触もどんどん薄くなる。視界がぼやける。彼女の顔をちゃんと見たいのに、滲む視界ではままならない。

「シロウ」

「セイバー！セイバー、俺、俺は！」

「わかってます。ですからシロウ、」

「ああ。わかってる。心配しなくてもいい。もう、大丈夫だから」
「武運を」

そう言つて彼女は消えていった。身体の中に流れる暖かいものは、それでもなお残っている。物思いに耽る士郎をキャスターが現実に戻し戻した。

「坊主。アーチャーの野郎から伝言だ」

「伝言？」

「お前の思いはもはや本物、だとよ」

「あいつ・・・やっぱりそうか」

「まあ、ちゃんと伝えたぜ。といつてももう俺もここまでみてえだけだな。無事に聖杯戦争を終わらせることができたらしい」

見ると、キャスターの身体も少しずつ粒子状になっていた。

「坊主、お前と組むのも悪くなかったぜ。お前みたいなマスターだったから、この戦争にもやりがいを感じた。それから、こいつは返しくぞ」

投影品の槍をキャスターから受け取った士郎はそれをしまった。差し出されたキャスターの手をしっかりと士郎は握った。

「また呼ぶことがあれば、今度はそいつに相応しいランサークラスで呼んでくれよな」

「ああ。そうするよ」

「じゃあ、またな」

軽く手を挙げて、キャスターは消滅した。今度こそ、この戦争はちゃんと終わったようだ。

「いろいろと言いたいことがあるけど、まずはお疲れ様、マシユ。衛宮も。良くやったわ」

「ありがとうございます」

「それで、マシユ？あなたの英霊か宝具の真名がわかったの？」

「いえ、その。ただ無我夢中で」

「そう。想いの力だけで発動させたのね。けど、名前が無いと不便よね。そうね、ロイド仮想宝具、カナル疑似展開／デア人理の礎とでも名付けましょう。あなたにとっても、意味のある名でしょうし」

「ロイド・カルデアス・・・ありますがどうございます、所長」

嬉しそうな顔でマシユは盾を撫でた。宝具は英霊の持つ最強の武器。それを使えなかったことを負い目に感じていたマシユだったが、今回限定的とはいえ発動できたのだ。それも、あのアーサー王の宝具さえも防ぎきったのだ。

「良かったな、マシユ」

「はい、先輩が隣にいてくれたおかげです」

「俺は何もしてないさ。マシユの想いが形になった結果だ」

手を伸ばして優しくマシユの頭を撫でる土郎。少しくすぐったいけど心地いいその感触にふわりとした笑顔を浮かべるマシユ。微笑ましいその光景に、

『もしもし土郎くん、所長？ああようやく通った。さっきまで激しい魔力の渦のせいで全然繋がらなくて・・・ってあれ？』

・・・邪魔が入るのはもやお約束だろう。突然の声に驚いたマシユが慌てて土郎から離れてしまう。苦笑する土郎と少し残念そうな顔のマシユ。自分から離れてしまったからお願いしくそうにしているマシユを見て、土郎は、また今度労ってあげるときにしてあげよう、なんてことを考えていた。

『ええと、なんだか邪魔しちゃったかな？』

「いいわよ、ロマニ。そろそろ話を進めようと思っていたところだから。それで、衛宮。あなたの使う魔術について、詳しく聞かせてもらえないかしら？」

「俺は昔からある特定の魔術のみに長けていたんだ。一つは解析、特に剣に関してなら、宝具レベルのものの解析もできる」

『ちよつと待ってくれ！宝具の解析ってどういうことだい？』

「俺は見ただけでその剣の構造や材質、特性や用途、その剣の経てきた歴史などを情報として読み取ることができるんだ。それは宝具も例外じゃない」

オルガマリーとDr. ロマンの空いた口が塞がらなかった。解析魔術は魔術の中でも割と初歩中の初歩だ。しかしそれをどれほど極めたとしても宝具の解析ができるものなど聞いたこともなかった。

「続けるけど、もう一つだけ俺に使える魔術がある。魔力を用いて物質を形作る。さっきまでの槍や剣もそれだ」

『魔力で物質を？まさか、それって、投影魔術？』

「ありえないわ！投影魔術で作り出されるものは中身のないガラクタだけよ。それだってこの世界にとどまる時間は短い。けどあなたの剣はこの世にとどまるだけじゃなく、あのセイバーの剣とも渡り合える強度があった。いくら強化の魔術をかけても、投影品の剣が持つはずもないわ」

そもそも投影魔術は本来儀式などに用いられる触媒などの代用品を一時的に用意するためにはしか使われないのだ。その強度はもろく、とても戦闘で使えるものではない。

「俺の解析が他と違うように、投影も特殊なんだ。俺の投影品は俺が消すか、壊されるかのどちらかでない限りは、半永久的にこの世に存在し続ける。そして相応の魔力があれば宝具さえも投影が可能になる」

今度こそ二人の口が本当に塞がらなかった。故に反応したのは彼ら2人以外の人物だった。

「ほお、奇妙な魔術だとは思ったが、まさか投影魔術だったとは。今回最大の予想外はやはり君か、衛宮士郎。君は本当に想像外で、私の寛容の許容外だ」

最初にセイバーが立っていた場所、そこには新しい影が立っていた。きつちりとした服装にシルクハット。その顔には笑顔が浮かんでいた。

「あんたは、確か、レフ・ライノール」

アニメスファイアの思い

初めてマシユと出会ったあの時、マシユと士郎を作戦会議室へ呼びに来たのがレフ・ライノールだった。彼はカルデアの魔術師の一人で、カルデアの要でもある近未来観測レンズ「シバ」の開発者だ。

「どう、して?」

「レフ、ああレフ!」

『レフ教授だつて!?!爆発の際に行方不明になったはずの彼が、何故そこに!?!』

驚くマシユとDr. ロマンをよそに、オルガマリーはレフの元へ駆け寄った。その姿はもはや依存しているようにも見えた。ただ一人、士郎だけは気をぬくことができなかつた。何か胸騒ぎがしたのだ。

「レフ!」

「やあオルガ、大変だったね」

「ええ、そうなの!予想外のことばかりで、でもあなたがいれば大丈夫よね?」

「ああ、そうだと。本当に、」

「予想外のことばかりで、頭にくる」

突然豹変するレフの雰囲気は流石のオルガマリーも止まる。細められた目こそ変わらないが、その口調は吐き捨てるかのようにだった。

「ロマニ、君には管制室に来るように言ったはずだが。君もだ、オルガ。確実に死ぬように爆弾は君の足元に置いたというのに、生きてるとはなあ」

オルガマリーの表情が凍りつく。そんな様子に目もくれず、レフの話は続く。

「いや、生きているのとは違うな。正確に言えば君はもう死んでいるのさ。肉体的にはね」

「レフ?な、何を言ってるの?」

「あの爆発で君の肉体は間違いなく死んだ。今ここにいる君は、無自覚のままに精神のみがレイシフトしたものだ。全く、生前あれほど渴

望していたレイシフト適性が、まさか死後に与えられるとは。笑ってしまう」

そう言うレフの目は狂気に満ち、口元は歪んだ笑みを浮かべていた。今までのレフとは違う、別人のように歪んだ笑顔だった。

「私が、死んでるって、そんな、」

「哀れだ。実に哀れだ。だからせめて今、君が生涯を捧げたカルデアスがどうなってるのか、見せてあげよう」

セイバーの消滅した場所に光り輝く物質があったのに、ようやく士郎たちは気づいた。それは宙に浮かび上がり、レフの元へ向かった。その物質を手にとったレフが指を鳴らすと、空間に穴が空き、真っ赤に燃えるカルデアスが現れた。

「何よ、それ？ただの虚像でしょ？そうよね、レフ！」

「いいや実物だよ。君のためにわざわざ時空をつなげてあげたんだ。聖杯があればたやすいことだからね。さあ、アニメスフィアの末裔よ。お前たちの愚行の末路を知れ」

レフが手をかざすとオルガマリーの体が宙に浮かび、レフの元へゆっくりと飛んで行った。

「な、何をする気!？」

「最後に君の望みを叶えてあげようと思っただけ。君の宝物に触れさせてあげようじゃないか」

「な、何を、あなたわかってるの!?!カルデアスよ!?!」

「そう。ブラックホールと何ら遜色ないものだ。いや、この場合は太陽かな?どちらにせよ、人間の体は間違いなく分子レベルに分解されるだろう」

ゆっくりとカルデアスに近づくオルガマリー。それを止める術を持たないマシユやロマニは固まってしまった。ただ、一人だけ動いた人がいた。

「投影、開始!」

かつて彼の出会ったライダーが使用していた長い鎖の付いた剣を投影した彼は、その鎖をオルガマリーの体に巻きつけ、引き戻そうとしていた。

『士郎君!』

「先輩!」

「やれやれまた君か。本当にこう何度も邪魔をされると、さすがの私も本気で怒ることになるぞ」

「ぐっ、目の前で誰かが死にそうになってるのを、見捨てられるわけないだろ!」

「私も手伝います」

鎖を掴みともに引つ張る士郎とマシユ。その様子を心底つまらなさそうに眺めるレフ。オルガマリーは依存レベルで信頼していたレフに裏切られた衝撃から立ち直れていないようだ。

「どうしてこんなことばかりなの!?!まだ、何もしていないのよ!誰にも、褒めてさえもらえなかったのに!」

「しっかりしろ、所長!」

「えっ?」

泣き叫ぶ彼女は、鋭く響いたその声に止まった。鎖を腕に絡ませ、固定させた士郎が、力の限り引つ張りながら声をあげた。

「このカルデアと、レイシフトのシステムがあったから、俺たちはここにいる。あのままだったら、間違いなく死んでいた!」

腕に食い込む鎖の痛みに堪えながらも、士郎はオルガマリーに語りかけ続けた。

「それに、この特異点に俺たちが来れたから、あのサーヴァントたちを倒して、聖杯戦争を終わらせることができた!あんたのして来たことは、何も間違っちゃいない!」

一筋の涙がオルガマリーの頬を伝った。それは先ほどまでの恐怖による涙ではなかった。静かに、オルガマリーは泣いた。それは絶望でも恐怖でもなく、もっと温かい気持ちだった。

「ぐうっ、があっ」

「先輩ダメです!このままだと、先輩の腕が!」

一発の黒い弾丸が士郎の足元に被弾し、吹き飛ばした。その衝撃で鎖が腕から離れる。

「何が、っ!?!」

士郎の視線の先にいたのはオルガマリーだった。右手をピストルのように構えた彼女の様子から見ても、士郎を攻撃したのは彼女に間違いはない。

「何で!?!」

「このままだと、あなたまで巻き込まれる。そうでなくとも、その腕がなくなる。それはダメよ。あなたは、今カルデアに必要な人間だから」

「けど!」

「私のカルデアでの目的は、人類史の消滅の阻止。そのために、これは必要なの」

「所長!」

「だから、あなたが証明しなさい。私たちのして来たことが間違っ
てなかったことを。私の目的を、あなたが叶えなさい。頼めるかしら、
衛宮?」

「っ、ああ。任せろ」

「そう。なら、安心ね」

彼女の体がカルデアスに触れたのはその直後だった。激しい痛みがあるだろうに、彼女は最後まで笑っていた。そして完全に姿がカルデアスの中へと消えていったのだ。

彼らの敵

「所長……っ！」

消えた所長のことを考えている暇もなく、士郎とマシユは臨戦態勢に入った。それ程までに、レフという男が危険だと、本能的にわかったのだ。

「48人目のマスター適性者、衛宮士郎。お粗末な魔術の持ち主だから見逃してみれば、まさかここまで厄介な存在とはな」

「あんたも、初見じゃ普通の魔術師って感じだったけどな。何か隠してる気はしてたけど、まさかこんなことをするとはな。見当違いはお互い様ってことだな」

「ふむ、では改めて自己紹介を。私は、レフ・ライノール・フラウロス。君たち人類を焼却するために遣わされた、この時代の担当者だ」

「じゃあ俺も一応しておくよ。衛宮士郎、ただの魔術使いだ」

「魔術師ではなく、魔術使いと来たか。なるほど。さて、今も聞いているな、ロマニ？」

『……レフ教授』

「そう警戒するな。かつて同じ魔導の道を学んだものとして忠告してやろうと思っただけだ。私自身の仕事は終わったのでね、何も今ここで彼らを攻撃するつもりはないさ」

嘘をついている様子はないが、彼らは警戒心を解かなかった。やろうと思えば、彼は確かに自分たちを殺すことはできるだろう。

「未来は消失したのではない。焼却されたのだ。カルデアスの形成する磁場のおかげでそこは無事だろうが、外はこの冬木と同じ末路を迎えているだろう」

『つまり、外界と連絡が取れないのは通信の故障なんかじゃない。受け取る相手が誰一人としていなくなっているから、そういうことですか?』

「その通り。流石に理解が早くて助かるよ。お前たちが滅びるのは進化の衰退でも、交戦でも、災害でもない。その無意味さゆえに、無能さゆえに、我らが王の寵愛を失ったがゆえに、紙くず同然に、燃え尽

きるのだ！」

レフのその言葉に反応したのか、周囲が崩れ始めた。天井から瓦礫が降り注ぎ、大地はひび割れていく。

「この特異点も限界のようだな。セイバーめ、聖杯を与えられながらこの時代を維持しようなどと。そういえば君と知った仲のようだったな、衛宮士郎」

「セイバーが、この時代を？じゃあやっぱり、あいつ」

「ふん、まあいい。私はそろそろ帰るとしよう。こう見えても私は忙しい身だからね。さらばだロマニ、マシユ、そして衛宮士郎よ」

「な、待て！」

レフの体が宙に浮かぶ。同時にカルデアとの時空の穴も小さくなっていく。穴が完全に塞がると同時に、レフは姿を消した。

『まずい！その特異点が崩壊しそうだ！』

「ドクター、急いでレイシフトを！」

『わかってる！でもごめん、そっちの崩壊の方が早いかもしれない！意識だけはしっかり持つておけばあとで、サルベージが・・・』

通信が途絶え、あたりの崩壊が激しさを増す。突然跳ね上がった地面に、士郎とマシユは宙に投げ出されてしまう。瓦礫が降り注ぐ中、士郎は手を伸ばしマシユの手を握った。

—————

目覚めると、そこは見たことのあるような天井だった。背中を感じから、自分がベットのの上に寝かされているのがわかる。蛍光灯の光が眩しい。と、ここで士郎の思考が覚醒し始めた。

蛍光灯の光、つまり電気の通っている建物の中だということ。そしてそれは文明が存在している証拠。ここはおそらく、カルデア。

「戻ってこれたのか？」

「そうだね、体に異常は何もなし。五体満足でしっかり戻って来てるよ」

眩きに対する返事を予想していなかった士郎はガバツと上半身を起こす。隣には一人の女性とリスのような生き物がいた。

後者は知っている。マシユと出会った時も、レイシフト先にもいた

からだ。通称フオウ、カルデア内を自由に駆け巡る謎の生き物だ。普段人には懐かないらしく、マッシュ以外の前に現れることすら稀らしい。しかし、初対面の士郎にやたらと懐いていたのは何故なのだろうか。今も女性の膝から飛び降り、士郎の膝の上で丸くなっている。とりあえず撫でながら女性の方へ目を向けた。

どこかで見たことがありそうな顔立ち。しかしこんな人に会っていたら忘れそうもないような服装。そして何より、人間ではなさそうだ。

「えつと、あんたは？」

「ん？私かい？私はダヴィンチちゃん、カルデアの召喚成功例3番目さ。まあ、改めての自己紹介はまた今度にしよう。今の君には、会いに行くべき人がいるからね」

「そうだ、マッシュは!?マッシュは無事ですか？それに、遠坂や他のマスター適性者たちは？」

「どうどう、落ち着きたまえよ。残りの47人のマスター適性者たちならコールドスリープ状態だ。傷が治るわけじゃないけど、生命維持はできている」

「そうですか」

「それからマッシュに関しては、直接本人に会うといいよ。ほら、あの子もそう言ってる」

いつの間にか扉のところにフオウは移動していた。ついて来るようにと言わんばかりに士郎の方を見ている。カルデアで支給された服に着替えた士郎はフオウの後を追いかけて、部屋を飛び出した。

「衛宮士郎君、ここからは君が物語を紡ぐんだ」

「他の誰でもない、英雄でもない、君が」

—————

フオウに連れられた士郎がやって来たのは管制室だった。そこにはロマニとマッシュが立っていた。

「先輩！」

「おはよう、マシユ。無事でよかった」

「先輩こそ。元気そうで何よりです」

「Dr. ロマンも、ありがとう」

「いやいや、むしろお礼を言うのは僕たちの方だ。さて、ここでお疲れ様会をしたいところではあるけど、先に話さなければいけないことがあるからね」

真剣そんな表情になるロマニにつられて士郎とマシユも表情を引き締める。

「まずは生還おめでとう。士郎君のおかげでマシユもカルデアも救われた」

「所長は？」

「残念だけど、所長が生存している可能性は限りなくゼロだ」
「そうか」

期待はしていなかった。けれども改めてもうあの人はいないと思いき知らされる。最後の最後に見せたあの笑顔。もしかしたら、あれが彼女の本当の素だったのかもしれない。

「それから報告がある。確かに冬木の特異点は消滅した。これも君たちのおかげだ。だが、新たに7つの特異点が発見されたんだ。冬木のそれとは比べ物にならない時空の歪みだ。おそらく、その全てに聖杯がある」

依然として赤く燃えるカルデアスの中、7つの光り輝く部分が見て取れた。それらがおそらく、特異点の地理的な場所。それがどんな時代かはまだ想像もつかない。

「7つの、特異点・・・」

「この7つの特異点へレイシフトし、時空の歪みを直す。それが人類を救済する、唯一の方法だ。だが、マスター適性は君以外は眠っていて、所持してるサーヴァントは現時点ではマシユだけ。この状況でこの話をするのは、強制にも近いとわかってる」

一呼吸開けて、ロマニは士郎の目を見てこう言った。

「君に、君のサーヴァントとともに人類の未来を背負う覚悟はあるか

い？」

その言葉を受け止め、一度目を伏せる士郎。思い出すのは二つの顔。雲ひとつない月の夜、一人の男が笑顔を見せた。とても安心しきった笑顔だった。赤く燃える太陽のようなものを背に、一人の女性が笑顔を見せた。あんな状況なのに、とても嬉しそうだった。

『ああ、安心した』

『そう。なら、安心ね』

続いて浮かぶのは二人の少女。一人は自分の剣として戦うことを誓ってくれ、自分との戦いを見届けてくれた。もう一人は自分の夢を知りながら、それを助けようとしてくれ、多くを教えてくれた。

『シロウ』

『士郎！』

最後に隣にいる少女を見る。自分をマスターと呼び、命懸けの戦いをともに潜り抜けた彼女。きつと彼女は戦おうとするのだろう。それを見ただけができるか？そんなの聞くまでもない。

「任されたんだ」

「えっ？」

「先輩？」

「親父に、所長に。応援されたんだ。セイバーに、遠坂に。そして何より、俺はマシユのマスターだ。俺がやるべきことが何かはわかってる。なら、それを全力でやるだけだ」

その言葉にロマニは安堵したような表情をし、マシユは嬉しそうに微笑んだ。

「君たちの敵は、歴史そのものになる。きつと多くの英雄達が、立ちはだかることになる。とても辛い戦いになるだろうけど、それしかないんだ。作戦名は、人理守護指定、"グラントオーダー冠位指定"」

衛宮士郎の長い間成し遂げたかったこと、全人類の救済。強大な敵に新しいサーヴァント。今の彼らでは勝ち目は薄いだろう。しかしそれでも、士郎は諦めるつもりはなかった。

「これから長い付き合いになりそうだな」

「はい。一緒に頑張りましょう。先輩！」

第一特異点 邪竜百年戦争オルレアン 召喚の儀

遠い、どこかとても遠いところで、誰かの声がした気がする。楽しそうな笑い声が響く。

いやこれは嗤い声だ。

美しくも激しいその嗤い声は、楽しげでありながらも、何かがおかしかった。まるでひどい狂気や怒りに支配されているかのような残酷で、残忍で、壊れている。それは、聞いていて痛ましかった。

「フオウ？キユー、フオウ」

目が覚めたら、顔の上に重みを感じた。このモフモフとした感触。間違いない。

「おはよう、フオウ。悪いんだけど、降りてくれないか？起き上がれない」

「キユー？」

とりあえず退いてくれたので体を起こす。背伸びをして体を軽くほぐす。その間もフオウは律儀に床に座り士郎を待っていた。

「よし、行くか」

「フオウ！」

最初の特異点へ向かう前に少し準備をしたいことがあるとロマニとダヴィンチに言われた士郎とマシユは東の間の休息を与えられた。そして今日はレイシフト予定日当日だ。これからの戦いのことを考えながらも、士郎はついてくるフオウとともに日課のトレーニングをこなしていた。

腕立てや腹筋などの筋トレ、軽いジョギング、そして魔術。朝昼晩と彼はメニューをこなした。そして時間になると厨房に入る。

「おはよう衛宮君、今日も元気だね」

「ああ。とはいえ少し緊張はするけどな。ちなみに言うけど今日は和

食だ」

「おおつ、ありがとう！俺も和食は好きなんだよね〜」

食堂にくるカルデアの職員。数にして20名にも満たないが、ともに戦う仲間であることに変わりはない。そんな彼らが朝食で食べているのはやはりというか、士郎の手料理だった。ずっと料理し続けてきた彼は、和洋中なんでもござれ、たまにどこかの国の伝統料理まで作るほどになった。世界を旅したのはそういう面でも彼に影響を与えたらしい。

「おはようございます、先輩」

「おはよう、マシユ、ドクターも」

「おふあよう」

少し賑わう食堂に彼のサーヴァントのマシユがロマニとともに訪れる。彼女も彼女で模擬戦闘訓練を積んできたのだ。士郎も自分の分の食事を用意し、3人で食べ始める。

「今日がレイシフト当日です。最初の特異点は15世紀のフランスです」

「確か、1000年戦争の頃だったな。まさか戦争が続いているとかか？」

「むしろその程度で済めばいいけどね。7つの中では異常が小さいとはいえ、冬木とは比べものにもならない。心してかかって欲しい」

「ああ」

「はい」

食事を終えた士郎はマシユたちとは別れ、マスター適性者たちが凍結されている部屋へと一人で向かった。

「先輩は何故マスター適性者の部屋へ？」

「あれ？マシユは知らないんだっけ？あの爆発に巻き込まれたマスターの一人、遠坂凜は彼の魔術の師匠なんだって」

「師匠、ですか？」

「士郎君をカルデアに連れてきたのも彼女だ。確か聖杯戦争で協力関係にあったらしいよ」

「そう、ですか」

何故だか少し羨ましいと思った。士郎がわざわざ会いに行くほどに、凜は彼にとつて大切なのだろう。冬木で出会ったセイバーとの最後の会話も、とても親しい仲の者同士のようにだった。自分も、そんな関係になれるのだろうか。なんてことを思ってしまう。

「どうして、こんな気持ちに・・・」

「マシユ、どうかした？」

「いえ、何でもありません。いつ頃先輩をお呼びしたらいいでしょうか？」

「そうだね、とりあえず後一時間ほどかな。管制室に連れてきてくれ」「了解しました」

マシユに呼び出された士郎は召喚サークルの前に立っていた。その側でマシユとロマニが固唾を飲んで見守っている。

「士郎君、準備はいいかい？」

「ああ。いつでもいけるぞ」

「じゃあ早速、英霊召喚の儀式を始めようか。やり方は覚えてるよね？」

「ああ」

「前にも言ったけど、触媒がないからどんなサーヴァントが来るかは予想できない。それでも君と相性のいいサーヴァントが呼ばれるはずだ。きつと力になってくれる。よし、始めてくれ」

「トレース・オン
投影、開始」

手に握る聖晶石に魔力を少し流し込む。その石と士郎の魔力を触媒の代わりにサーヴァントを呼び出すのだ。少し色が変わったそれを、3つサークルの中へ放り込んだ。サークルから光が溢れ始める。

「これが、英霊の召喚なのです。実際に見るのは初めてですが、凄い魔力の渦です！」

「大きな魔力を確認できた。来るぞ！」

光がまるで柱のように上がる。その光が薄まると先に1つの影が確認できた。

「あつ、あなたが私のマスターですか？」

士郎とマシユが顔を見合わせてから同時に声の主を見た。その声に聞き覚えがあつたからだ。サークルから現れた影。その声、金色の髪、エメラルドのような瞳、そこにいたのは間違いなく、

「あの、私アルトリア・ペンドラゴンです！王になるための修行中の身ですが、あなたの剣として恥ずかしくない戦いをしてみせます！よろしく願いますね、マスター」

髪をリボンで後ろにまとめ、全体的に白百合をイメージさせるドレスに近い服装をし、純真な笑顔を向け、ぴよこんと頭を下げるセイバーがそこにいた。

「・・・」

「先輩？」

士郎の動きが完全に固まってしまっていた。不思議に思ったマシユやロマニが声をかけても反応がない。

「わ、私、何か間違えてしまったのでしょうか？」

「いえ、おそらくひどく驚いているだけかと。えっと、あなたはアーサー王で間違いないのですか？」

「あ、いえ、私は修行中なので、まだ王と呼ばれる身ではありませんよ。騎士としてもまだ未熟ですし」

あの時戦ったセイバーことアルトリアのような威圧感はなく、かといって最期の瞬間に見せた落ち着いた雰囲気でもなく、どこか少女らしい雰囲気を持ち主だったため、流石のマシユも戸惑った。

以前直接あつたことのないロマニのみが驚きが小さかったため、今セイバーと会話している。

「はっ！俺は何を」

どうやら士郎が回復したようだ。マシユが早速士郎の様子を確認しに行く。

「先輩、大丈夫ですか？」

「マシユか、大丈夫だ。ちよつと幻を見ちやっただけで、!？」

マシユの後にいつの間に来ていたのか、先ほどのセイバーが士郎の前に来ていた。

「あなたが私のマスターなのです。私はアルトリアです。でも、ま

わりからリリイというあだ名をつけていただいていたので、マスターも良ければそう呼んでください」

「あ、ああ。俺は士郎、衛宮士郎だ」

「シロウ、ですか？なんだかとってもいい響きですね」

少女らしい笑顔を見せるセイバーに、流石の士郎も戸惑ってしまった。

「よろしくお願いしますね、シロウ」

眩しいその笑顔を向けられた彼はなんとかよろしくと返した後一旦部屋の外へ出た。そこで漏れたのは久方振りに使う言葉。

「なんでさー」

リリイを仲間に加えた士郎たち。人理修復のための第一歩、最初の特異点への旅はもうすぐ始まろうとしていた。

フランスの大地

召喚時のバタバタが落ち着いたのを見て、士郎は改めてリリイに協力を仰いだ。当然のように彼女は断ることはせず、彼らはそのまますぐにレイシフトで最初の特異点へ飛んだ。

目を開くと、広がるのは一面の草原だった。どうやら無事に到着したらしい。爽やかな風が吹き付ける。久しぶりのその感じに、士郎は笑みを浮かべた。ポスンと頭に衝撃を感じる。この感触、どうやらまたフォウが付いて来てしまったようだ。と、真上を見上げたところで、士郎は異常に気づいた。

「先輩？どうかしたんですか？」

「マシユ、空を見ろ」

「空、ですか？えっ！」

「これは、一体なんですか!？」

『おっ、ちゃんと回線が繋がった。三人とも、無事かい？って、何で三人して空を見上げてるの?』

「ドクター、映像を送ります。あれは何でしょうか？」

『?あれって一体、ってこれは!光の輪、いやなんらかの魔術式か?こんな大きなものがあるなんて、間違いなく人理焼却に関わってるはずだ。これは僕たちの方で解析する。三人は霊脈を探してくれ』

「サークルを設置するのですね?」

『そうだ。そこでならこちらからの物資の補給もできる』

「わかった。行こう、マシユ、リリイ」

「はい、先輩」

遠くに砦らしきものが見えたため、三人はまずそこへ向かい、正確な位置を把握することにした。

砦にたどり着いた三人が見たのは、外壁だけなんとか形を保っている砦だったものと、たくさんの負傷兵だった。

「これは、一体何があったのですか？」

「どういうことでしょう、先輩。この時期のフランスなら休戦中のは

「ずです」

「とにかく助けよう。話は後で聞かせて貰えばいいさ」

「了解です。言葉は通じるでしょうか」

「大丈夫。俺は世界を巡ったからな。ちゃんとフランス語も使えるさ」

結果としてフランス語を使わなくても意思疎通は可能だったためマシユはホツとした。近くにいる兵から順に、士郎は治療魔術をかける。最初は警戒していた兵士たちも、士郎たちに敵意がないことを知ると気を緩めた。

「これで目立つ外傷は全てだな。内部の傷までは俺の腕じゃ完全には治せないから、後で診てもらったほうがいい。ごめんな」

「いや、ありがとう。見ず知らずの我々を助けてくれるとは。あんたたちは？」

「旅のものです。何があったのか聞いてもいいですか？シャルル王は休戦条約を結ばなかったのですか？」

「知らないのか？王は焼き殺されたのさ。魔女の炎にね」

「魔女？」

突然飛び出た単語に首をかしげた。マシユとリリイもピンと来ていないようだ。確かに宗教的な面から見ても、異端者を魔女として処刑するという時代ではあるが、王を殺した魔女なんて存在はいなかったはずだ。

「その魔女っていうのは、一体何者なんだ？」

「ジャンヌ・ダルクだ。あの方は蘇ったんだ。竜の魔女として」

「ジャンヌ・ダルクが!?!」

あまりにも有名なその名前に士郎が驚愕の声を上げる。フランスを救ったとされる聖女、わずか2年ほどの活躍でその名を世界中に知られることとなった人だ。魔女の汚名を着せられ殺されたが、今では名誉も挽回され、英霊の中でも最高峰の中にはいるだろう。そのジャンヌ・ダルクが魔女として復活したということは信じがたい。

「イングランド兵は既に撤退したが、俺たちはどうすればいい？」

途方にくれる兵に、三人は掛ける言葉が思いつかなかった。

「先輩、これもやはり人類史の焼却に関わってるのでしょうか？」

「多分そうだと思う。聖杯の願いで蘇ったのか？」

「でも、それなら何故かって自分が救おうとした国を滅ぼそうとしてるのでしょーう」

「来た！また敵が来たぞー！」

見張りの兵が声を上げる。砦の壁上へ移動した士郎とマシユが見たのは、竜牙兵がこちらに向かって来ているところだった。

「あれはっ」

「明らかに魔術で作り出されてます。先輩」

「ああ。マシユ、リリィ頼む。俺はここから援護する」

「了解です。戦闘に入ります」

「お任せください」

壁上から飛び降りたマシユたちは、砦の門の前へ降り立った。唯一の出入り口を守ることで、敵を外に食い止めることに専念する。

一方士郎はその手に弓を持ち構えた。あのアーチャーが使うものと全く同じ、黒い弓。名もなき剣をいくつか投影する。それを弓につがえた彼は次々に竜牙兵へと矢を浴びせる。矢一つにつき一体のみであれば間に合わない。だが彼が射たのは彼の作りし投影品。無銘であれど、神秘を内包する。故にそれで終わることはなく、

フロークン・ファンタズム
「壊れた幻想」

一斉に大爆発を起こし周りの兵を巻き込む。取りこぼした兵はマシユが倒し、数分で戦いは終わった。

救国の聖女

「お疲れ様でした、先輩」

「マシユたちこそ、お疲れ」

労いの言葉をかけ、士郎はマシユの頭を優しく撫でる。嬉しそうに目を細める様子に後輩というよりも妹みたいな感じだな、なんて少し思ってしまう。

ひと段落したところで、先ほどのフランス兵がおずおずと話しかけてきた。

「あんたたち、強いんだな」

「色々あつてさ。こういうのに慣れてる。それで、ジャンヌ・ダルクが蘇ったのは本当なのか？」

「ああ、間違いない。髪と肌の色は変わってしまったが、あれは間違いないあの聖女様だった。彼女は蘇った、それも悪魔と契約して」「悪魔、ですか？それは先ほどの竜牙兵のことですか？」

「いや違う、あれは」

「ガアアアア！」

突然咆哮が響く。今まで聞いたことがない何かの音が近づいてくるのを知ろうとマシユは感じた。外の様子を見ると、空に何かがいいた。鱗を持ち、翼は生え、きわめつけは鋭い牙と爪。

『大変だ！君たちの近くに、大型の生命反応がある。これはまさか』

「はい、そのまさかです。あれはワイバーン、竜の亜種です！間違っても、絶対に、15世紀のフランスに存在するはずのない生物です」

「行くぞ！今度は俺も戦う」

「了解です、マスター」

「はい！」

「兵士たちよ、水を被りなさい！一瞬だけですが、彼らの炎を防げます！」

外へ出た三人の耳に、女性の声が聞こえた。声の主は一人の少女だった。大きな旗を持ち、綺麗な金色の髪を持つ彼女は兵士たちに指

示を与え、自らもワイバーンへ立ち向かっていた。

「マシユ、あれって」

「はい、間違いなくサーヴァントです」

『マシユの言う通りだ。でも前にあったサーヴァントたちより反応が小さいな。弱体化してるのか?』

少女は旗をまるで槍のように振るい、ワイバーンをなぎ倒していた。明らかに人間のそれとは違う。

「とりあえず手伝おう!」

「はい!」

駆け出した三人は少女とは違う方向からくるワイバーンの討伐へ向かった。マシユの盾と士郎の干将・莫耶による攻撃で、ワイバーンは徐々に数を減らしていく。リリイもカリバーンを振るい、着実に敵の数を減らしていた。ただ一つ、リリイの戦いを見て、士郎が気になったことがあった。そして最後の一体を士郎が仕留めると、あたりは静かになった。

—————

「どうやら、もう次は来ないみたいですね」

「みたいだな」

無事にワイバーンを全て倒した士郎は少女の方を見た。疲れた様子もあまりなく、一人でワイバーン相手に戦った彼女は、なんだか自分の知っているセイバーに似ている気がした。姿ではなく、もっと別の何か。と、彼女を見るフランス兵の目に恐怖があるのに気づく。それは助けてくれた相手を見る目ではなく、何か恐ろしい、そう、化け物を見るような目。

「ま、魔女だ! 竜の魔女が来た!」

そう叫び、兵は皆へかけていく。魔女と呼ばれた少女が、一瞬だけ悲しげな表情をしたように見えた。士郎はマシユたちとともにその少女へ近づく。

「こんにちは、初めまして」

「初めまして。あなた方は、サーヴァントとそのマスターですね?」

「ああ。俺は衛宮士郎。一応二人のマスターだ」

「アルトリアと言います！みんなにはリリイと呼ばれてますから、そう呼んでください」

「マシユ・キリエライトと言います。私は正確にはデミ・サーヴァントですが。あなたもサーヴァントなのですよね？」

「ルーラー。私のサーヴァントとしてのクラスはルーラー、真名をジャンヌ・ダルクと申します。」

「ジャンヌ・ダルク、ですか？」

それは先程から兵たちが魔女と呼んでいた者の名前だった。しかし目の前にいる彼女はとてもそんなことをするように見えなかった。マシユは戸惑った声を上げる。一方士郎は、何か考え込んでいた。

「とりあえず話が聞きたいんだけどいいかな？と、その前にここから移動しよう。サークルを設置しなくちゃいけないしな。君も、それでいいかな？」

「はい。ではこちらへ」

—————

ジャンヌに連れられ、三人は森の中で腰を下ろした。あたりに軽く気を張りながらもある程度安全であることを確認した士郎は切り出した。

「それで、君は一体？」

「そうですね、まずはつきりさせておきます。私はルーラーのクラスですが、本来聖杯から得られるはずの知識がほとんどありません。ステータス面でもランクが落ちていきます。対サーヴァント用令呪も持っていませんし、真名看破すらできません。サーヴァントの感知も、他のサーヴァントのようにある程度の距離にいなければできません」

「ちよつと待ってください。そもそもルーラーってどんなクラスなんだ？俺が知ってるのはセイバーからバーサーカーまでの7つだけなんだけど」

「そうですね。ルーラーは裁定者、聖杯戦争が成立するかどうかを監視する中立の審判、といったところでしょうか」

「そんなクラスがあつたのか」

「余程のことがなければ召喚されることはないので、知らなくても不思議はありませんよ」

自分の知識不足を実感している士郎に、ジャンヌは微笑みかけた。かつての士郎ならセイバーにも劣らない容貌のジャンヌの笑顔に、ここで少し照れるところだったかもしれないが、そこは色々と成長しただけあり、笑顔を返した。

「それで次なんだけど、ジャンヌ・ダルクが竜の魔女として蘇ったという話についてだ」

「それについてですが、私もつい数時間前に現界したばかりで詳細は分かりません。ですが、どうやらもう一人、別のジャンヌ・ダルクが存在しているようです」

「それが、竜の魔女ってことか」

「はい。聞いた話によると、シャルル王を焼き殺し、オルレアンにて大虐殺をしたとか」

「同じ時代に同じサーヴァントが二体召喚された、ということでしょうか？先輩はどう思いますか？」

「そうだな。完全に不可能とは言い切れない、としか言えないかな」

サーヴァントとは英霊の座から呼ばれた、いわば分身であり、英霊の本体ではない。確かにそう考えれば同じ時代に同じサーヴァントがいてもおかしくはない。ただ、同じにしてはあまりにも違う気がした。まるで別の人格、そう。あの時のセイバーのように。

「あなた方は、この異常な聖杯戦争の関係者なのですか？」

「いや、俺たちは聖杯戦争とは関係ないんだ。そもそも、これが聖杯戦争と言っているのかどうか」

「それは、どういう意味ですか？」

「私たちはカルデアという組織に所属しています。その目的は、歪んだ歴史の修正です」

「歴史の？」

「少し長くなるけど、いいかな？」

「はい」

そして士郎とマシユはこれまでのことを話した。最初にマスター適性者が集められたこと、ファーストオーダー前の事件のこと、特異点Fと呼称される冬木での戦いのこと、そしてレフの話した人理焼却のこと。長いその話をジャンヌは真剣な顔で聞いていた。

未完の彼女

「と、いうわけで、私たちはこのフランスに来ました」

「なるほど。状況は概ね理解しました」

「それで、ジャンヌさんはこの後どうするつもりなんだ？」

「決まっています。オルレアンを奪還し、もう一人のジャンヌを倒します。例え、一人でも、私が本当にもう一人いるのなら、それは私が止めるべきでしょう」

「それについてなんだが、俺たちにも協力させてくれないか？」

驚いた表情のジャンヌ。マシユとリリイは士郎がそう言いだすのをわかっていたのか、笑顔で頷いた。

「それはとても嬉しい提案なのですが、いいのですか？」

「もう一人のジャンヌはワイバーンを操ってる。それもあんな数だ。そんなこと、普通の魔術でできるはずがない。つまり、」

「聖杯が関わってる可能性が高い、ということですね、先輩」

「そう考えるべきだろうな。この時代の魔術でも、竜種の召喚は不可能に近い。でも、聖杯の力があれば話は別だ。つまり、俺たちの目的は一致してると思う。だから一緒に戦わせてほしい」

そう言いながら士郎は手を差し出した。驚いた表情のジャンヌだったが、本当に嬉しそうな笑顔を浮かべ士郎の手を握った。

「ありがとうございます。こちらこそ、お願いします」

「よろしくジャンヌさん」

「ジャンヌでいいですよ。この戦いの間は、あなたは私のマスターですから」

「マスターはやめてくれ。士郎でいいよ」

「ではシロウ、改めてお願いしますね」

その後、作戦を練るべく、サークルの設置のためにジャンヌを加えた四人は移動した。途中で魔物やワイバーンを倒しながら、彼らは霊脈の場所へと移動し、サークルの設置を完了した。

—————

サーヴァントである他の三人はともかく、人間である士郎は体が疲

れを訴える。定期的な休息が必要なため、一旦彼らはサークルを設置した所をベースとして休憩していた。

「はあっ！」

「ふっ！」

ぶつかり合う剣と剣。片方は干将・莫耶、もう片方は選定の剣、カリバーン。士郎とリリイによる模擬戦闘が行われていた。

「そこだ！」

士郎が剣を振るう。思わぬ一撃に構えた剣が弾かれる。体勢の崩れたリリイに向けて剣先が突きつけられる。

「そこまで！」

ジャンヌの声で剣を下ろしてしまう士郎。リリイも強張っていた体の力を抜く。ふう、と一息つくると士郎に笑顔を向けた。

「ありがとうございます、シロウ。私もまだまだみたいです」

「いや、修行中でこれだけできるのはすごいと思うぞ。俺なんて師匠からは何度ボコボコにされたか」

「やはりシロウは剣の道も目指していたのですか？」

「いや、そんな大層なものじゃないさ。そもそも、俺の場合は才能はなかったしな。ただ、追いつきたかった人がいた。それだけだよ。それじゃあちよつとやりたいことがあるから、ここで終わろう」

「わかりました。またお手合わせ、お願いします！」

リリイが頭を下げるのを見てから士郎はその場から立ち去った。

「リリイさん。次は私の相手、お願いできますか？」

「はい、よろしくお願いしますね」

—————

一人、食事の準備をしながら、士郎は少し考え事をしていた。リリイは彼のよく知るセイバーの修行時代の頃の姿らしい。しかし、恐らくは別の世界から来たのだろう。少なくとも、かつて自分が見た彼女の過去に、あんなに少女らしく振舞っていた時期はなかった。つまりは、自分とアーチャーのように、同一の存在ではあるが同一の個体ではない、別の可能性。

「セイバーであってセイバーでない。いや、セイバーでないようでセ

イバーであるって感じかな。周りからしたら、俺とアーチャーもこうなんだよなあ」

かつて自分とともに戦ってくれたあの誉れ高き騎士王。まだ修行中なことあつて、力、技、速さ、そのどれもが自分の知っているそれよりも劣っているのを、先ほど打ち合つて実感した。けれども、まっすぐなその姿勢はマシユとも通じるところがあり、必死で技術を吸収しようとしているのがわかった。そのひたむきなところは素直に好感を持てた。

「セイバー、お前もこんな気持ちだったのかな」

かつて自分の剣の師であつた彼女。そして今は自分が彼女の別の可能性に剣を教えている。そのことがなんだかおかしくて、少し笑つてしまう士郎だった。

士郎の用意した手料理にジャンヌとリリイは顔を綻ばせた。美味しそうに食べるその姿に、どこぞの懐かしい思い出に浸つたのは内緒だ。しかもジャンヌの食べる量も同じなのではないかと思つてしまう。少なくともリリイには負けていない。

「ご馳走様でした、シロウは料理がお得意なんですね」

「まあ小さい頃から作る機会があつたからな。必然的に身についた」
「先輩がお上手なのは知っていましたが、それにしてもお二人はよく食べますね」

「修行の旅では、その、あまり美味しい料理がなくて、それで、その」
「しかし、サーヴァントにとつて食事とは嗜好品でしかない筈なのに、なんだか元気が出てきた気がします」

「それは良かった」

腹も膨れた士郎たちは一旦野宿するための準備を始めた。といっても基本的に眠りが必要なのは士郎だけではあるが。危険に備えてマシユとジャンヌ、リリイは士郎の側にとどまつた。

「彼は面白い人ですね。こちらをまるで人間のようには扱っています」

「先輩は以前にも聖杯戦争を経験したらしいのですが、おそらくその時からそうなのでしょう」

「聖杯戦争を経験していたのですか?ということは勝者だったのでしょうか?」

「そこまで詳しくは聞いてません。ですが、先輩はその時の自分を未熟者と言っていました」

「未熟者?」

「わたしも全部知ってるわけではないのですが、」

マシユは士郎から聞いた話を二人へ伝えた。彼が魔術師としては三流であるということ。聖杯戦争に巻き込まれ、セイバーのマスターとなったこと。そしてその中で経験した戦いについて。ただ、そのセイバーがリリーの未来の可能性であることについては話さなかった。士郎に止められていたからだ。

『リリーにはリリーの未来がある。それを作るのはリリーだ。変に未来の情報を与えて選択肢を減らしてしまうより、彼女自身で選ぶとっていったほうがいい』

そう彼が言っていたからだ。

「その戦いに生き残った後に今の強さを手に入れたと言っています。当時の自分はよく生き延びたなども」

「すごい戦いを経験してたのですね、シロウは」

正直、ジャンヌは驚くどころではなかった。修行中の身と本人が認めているとはいえ、セイバーのサーヴァントと互角以上に剣で渡り合える人間など、普通に考えたらありえないのだ。それでも彼はそれを成し遂げた。一体どれほど努力を重ねたのだろうか。どれほどの戦いを経験したのだろうか。なんのためにそこまで。

「私は先輩のお役に立ちたいです。先輩のことを、守れるようになりたい」

「私もです。シロウとともに戦います。そうこの剣に誓いましたから」

笑い合うマシユとリリー。二人の共通点としてあげられることは英霊として完成してはいないということだ。それはつまり、戦うことになったらどうしても他のサーヴァントに遅れをとることが多いということ。しかし、士郎はそんなことは気にしない。二人を信頼し、

ともに戦う仲間として接している。

ジャンヌは士郎のいる方をちらりと見た。彼から協力の申し出があった時は嬉しくて、ありがたくその提案を受けた。しかし、自分はサーヴァントとしてのランクが落ちてしまっている。自分が彼らの足を引つ張ってしまうのではないかと、そう思っていた。でも、それも彼にとつては大したことではないのだろう。

「不思議な人なのですね」

その眩きは誰にも聞かれなかった。

竜の魔女

翌日、早めの時間に起きた士郎に合わせて、四人は移動を開始した。まず近くの町で情報を集めることにしたのだ。

「今すぐにオルレアンに攻め込むのは難しいでしょう」

「そうだな。敵の戦力がわからないから、下手に動くわけにもいかな
いしな」

「地道に情報を集めることから始めましょう、先輩」

歩くことしばし、突然ロマニから通信が入った。

『みんな、ちよつと待ってくれ！君たちの今向かってる町から、サー
ヴァントの反応があった』

「サーヴァントの、ですか？」

「ドクター、今そいつはどこに？」

『ダメだ、すごい速さで町から離れて行ってしまったよ』

顔を見合わせる四人。もしも今のがもう一人のジャンヌだったのだとしたら、この先の町がどうなってしまったのだろうか。急いで走り出した彼らの目に入ってきたのは、燃え尽きた町だった。建物は崩れ、未だ燃え続ける炎。生きている人なんてとてもいなかった。

「なんてこと。町が、こんなことが」

「町の様子からしても、生存者はいなさそうです。シロウ？」

「先輩？」

黙り込んでしまった士郎の様子に、リリイとマシユが声をかける。

なんでもないと笑顔を見せ、士郎は首を横に振った。

「ちよつと、考え事をしてた」

この場所を見ていると思ひ出す。あたりに広がる煙と死の匂い。生存者のいない崩れた町。それはどこか、彼の原点に似ていた。あの惨劇に。違うのはこれが何者かによる虐殺行為だということ、そして生存者は無く。

「これは、動く死体？」

「生ける屍です！さらにはワイバーンまで」

「あれって」

ワイバーンの口からなにやら不快な音がする。硬い何かが砕ける音、ブチブチツと何かが切れる音、そして液体のようなものが滴る音。ワイバーンたちは喰らっていた。この町の人を、その死体を。

気づいたら士郎は強く拳を握りしめていた。殺された人たちの体を喰らい、操り、利用する。彼らに対して、それはあんまりな仕打ちだろう。しっかりと吊ってもらうことも、見送ってもらうこともされず、死してなお誰かの勝手な都合で使われる。そんなこと、許されるはずがない。

かつて目の前で、一人の少女が殺された。そして、その身体の一部は殺した男によって利用された。助けられなかった。死んでなお、利用されることとなってしまった。今、それをまた目の前で繰り返されている。

「トレース・オン
投影、開始」

「ロールアウト、バレット、クリア
工程完了。全投影、待機」

「フリーズアウト、ソードパレルフルオーバーン
停止解凍、全投影連続層写！」

空中に突如として現れた無数の剣は、雨のようにワイバーンやリビングデッド生ける屍に降り注ぐ。その数はあつという間に減り、残った数体も士郎の振るう干将・莫耶に斬り伏せられる。最後の一体を切り裂く前に、士郎は一言呟いた。

「ごめんな」

突然士郎の見せた激しい攻撃に、ジャンヌたちはあつけにとられていた。剣を手に敵を斬る士郎の表情には強い怒りが現れていた。声を上げること、勢いに任せて行動することもなかった。ただ、静かに燃える炎のような怒りだった。

「悪い。先走った」

「いえ。お疲れ様です、先輩」

「ありがとう、マシユ」

なんて声をかけて良いのかわからなかった。しばらく沈黙してしまふ四人。そこへ、ロマニからの通信が入った。

『まずいぞ！先ほどのサーヴァントが反転した。君たちに気づいて引

き返してるみたいだ。それも、数にして5騎もいる!」

「つてことは、もう一人のジャンヌ以外にもサーヴァントが?」

「シロウ、どうしましょう」

「戦力的に考えると、撤退したほうがいいかと思います。完全なサーヴァントが5騎もいては、今の私たちでは」

「ジャンヌはどう思う?」

「私は、逃げません。真意を確かめたいのです。どれほど人を憎めばこんなことができるのか。それがわからない。だから、聞きたいのです」

ジャンヌの意思は強そうだった。マシユとリリイは少し不安げに顔を見合わせる。彼女一人置いて行くわけにもいかないし、かといって戦いになれば勝機はほぼない。彼女たちの不安を払うかのように士郎は二人の頭を撫でる。

「し、シロウ?」

「あの、先輩?」

「二人とも、俺も残ろうと思う。この被害をもたらした本人を、この目で確かめたい。でもこれは俺の我儘だ。二人に強制することまではできない。けど、一緒に戦ってくれるか」

「・・・当たり前です。私は、先輩のサーヴァントですから」

「騎士として、主人の言葉に反するわけにはいきませんからね。私も、ご一緒させていただきます」

『もうすぐ君たちのところに来る。いいね、戦うよりも、逃げることを第一にするんだよ!』

ロマニからの通信が切れる。それとともに上空に数体の竜が現れる。その背には5つの影。そのうち一人は黒い鎧に身を包み、竜の描かれた旗を持った少女。くすんだ金髪はまるで銀色、その瞳はあのセイバーと同じ金色。竜の魔女は彼らを見下ろし、笑った。

ヴェルサイユの花

「ああ、なんてこと。こんなことがあり得るだなんて。ねえ誰か私の頬をつねって頂戴。やばいの。おかし過ぎて、どうにかなってしまいたいようなの」

空から士郎たちを見下ろしながら、彼女は笑う。微笑みではなく、皮肉げで、楽しげな笑みを浮かべる。

「ねえ、ご覧なさいよジル、ってそうだったわ。ジルは連れてきてなかったわね。まあいいでしょう」

「あなたは、一体誰なのですか？」

少し震える声でジャンヌが問いかける。その瞳はしっかりと黒い少女に固定されている。一方士郎は、その少女の周りにいる4つの影を確認していた。槍のようなものを持った男、十字架を持つ女性、剣を構えた少女らしき騎士、そして仮面を被った女性だ。一騎一騎が間違えずにサーヴァント、そして彼女たちを乗せてきた竜。状況は明らかに良くない。

「それはこちらの質問ですが、まあ答えて差し上げましょうか。私はジャンヌ・ダルク、蘇った救国の聖女です」

「何故この町を襲ったのですか？」
「何故？簡単ですよ。フランスというこの国を、滅ぼすために決まってるでしょう」

「こともなげに彼女はそう言った。まるでそれが当たり前のことだと言わんばかりに。」

「まあ、あなたには理解できはしないでしょう。憎しみや怒りも、喜びも何もかも見ないで来て、人間として成長してこなかった、聖処女には、ね。あなたには存在する意味さえありません。バーサーク・ランサー、バーサーク・アサシン、バーサーク・セイバー、始末なさい」
長髪の男と仮面の女性が降りてくる。そのすぐ後に騎士も降りてきた。3人の目はジャンヌを捉えていた。

「王様、私はあの子の血が欲しいですわ。私より美しいものの血、どれほど私を美しくしてくれるのかしら」

「よかろう。では魂と器はいただく。貴様はどうだ、セイバーよ」

「そんなことには興味ない。僕は、サーヴァントとして与えられた仕事をこなすだけだ」

「マシユ、リリイ、構えろ！やるしかない」

「はい」

「ジャンヌ、行くぞー！」

「っ、あ、はい！」

—————

バーサーク・アサシンの杖から放たれる魔力の塊をマシユは盾で防いだ。その隙にリリイが斬りかかるも、バーサーク・セイバーがその剣で攻撃を受け止める。

「聖女の血もいいけど、あなたたちのもいいわね。特に盾の子。まだ何色にも染まっていない透明なものみたい。その血は私をさらに美しくしてくれるわ」

「悪趣味だな。味方じゃなければ僕が斬っていただろうな」

「くっ、やはりサーヴァントとの戦いは厳しいですね」

「それでも、頑張るしかありません。シロウのためにも」

「はい」

同じ二人ずつとはいえ、彼女たちはまだまだ未熟。その上、狂化の呪いを付与されているセイバーとアサシンは、ステータスが上がっているのだ。遠距離からの魔力攻撃と剣による物理攻撃を使い分け、マシユたちを攻め立てていた。

一方ジャンヌはバーサーク・ランサーと戦っている。振るわれた槍を受け止めたジャンヌは、そのパワーにより後退させられた。

「くうっ」

「さすがに救国の聖女、そう簡単には仕留められぬか、ぬっ!？」

とつさに手に持つ槍を振るうバーサーク・ランサー。槍と刃がぶつかり合い、火花が散る。

「ほお。マスターが自ら戦うか。マスターは基本後方支援だけかと思っただが」

「まあな。何事にも例外はつきもの、ってことだよ！」

二刀を操り、士郎はバーサーク・ランサーへと攻撃を仕掛ける。その手数之多さに、先ほどもまで笑顔だった相手の表情が変わる。焦りと驚きが現れたバーサーク・ランサーへと士郎の蹴りが決まる。

「ぐうっ」

「ジャンヌはあつちを頼む。こいつは俺が相手をする」

「ですが、」

「大丈夫だ。なんとかする」

「っ、ご武運を」

そう言つてジャンヌはマシユたちの方へ加勢しに行つた。再び向き合う士郎とバーサーク・ランサー。

「よもやマスターの身でここまでできるものがあるとはな。決めたぞ、貴様の血、必ず手に入れよう。さて、どんな味がすることやら」
「生憎だが、鉄の味しかしないと思うぞ。なにせ、俺の場合、血潮は鉄で心は硝子だから、なあっ！」

走り出した士郎とバーサーク・ランサーは激しい攻防を繰り広げる。勢いを乗せて両手の剣を振り下ろす士郎。その一撃は槍によつて防がれたが、相手の体を踏み台として宙へ攻撃を回避する。剣をバーサーク・ランサーの足元へ落とし、士郎は弓へと持ちかえる。そのまま無銘の剣を多く打ち出す。その攻撃もバーサーク・ランサーの槍によつて全て撃ち落とされたが、士郎は笑みを浮かべた。

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想」

瞬間、バーサーク・ランサーの足元に落ちていた夫婦剣が爆発した。全く予想外の攻撃だったが、仕留めきれなかったようだった。それでも相手が大きなダメージを受けたことは明らかで、バーサーク・ランサーは膝をつき、衣もボロボロだった。

「おのれ」

「あらあら、随分な様子ね王様。まさか手加減でもしているかしら？
ドラックル悪魔とまで呼ばれてたのではありませんか？」

バーサーク・ランサーの窮地だったのを見たのか、バーサーク・アサシンとバーサーク・セイバーがその横に並んだ。ジャンヌたちも対峙するように士郎の元へ並ぶ。

「ドラクル？ということは、あのランサーは」

「ルーマニア最大級の英霊、ヴラド三世だな。道理で血にこだわっていると買った」

「勝手に我が真名を明かすとは、不愉快だな」

「そんな状態で凄まれてもね。けど、あのマスター、思ったよりもやるみたいじゃないか」

「男の血はいらないわね。私が殺して差し上げましょうか、ヴラド三世？」

「ぬかせ、カーミラ。我が身をこのようにしたものに、貴様が相手になるとしても？」

「やめなさい。戦うのが好きなものだとは思いましたが、相手を間違えないくらいは、狂化しててもできるでしょう」

静かな怒りを含むその声に、ヴラド三世もカーミラも動きを止める。黒いジャンヌは射抜くような視線で士郎を見ていた。

「あなた、何者ですか？兵士でもないただの人間の魔術師が、なぜサーヴァントと渡り合えるのですか？そして何より、あなたを見ていると何故か反吐が出そうなくらいの嫌悪感が湧いてくる。あなたはそこ
の出来損ないの聖女に、どこかよく似ている！」

「魔術師だつて場合によっちゃあ武器を取つて戦うさ。その中にサーヴァントと戦える奴がいてもおかしくないかもしれないだろ。それから、俺はあんたのして来たことを、許せないな」

ジャンヌの時よりもより興味を持ってしているような黒いジャンヌ。しばらく彼女と士郎はにらみ合った。

「ふん、まあいいでしょう。ヴラド三世、あなたは反省なさい。血を求めぬあまりに手加減をするなど、何を考えてるのですか。その結果が今のあなたの状態。身に染みみましたか？さて、バーサーク・ライダー。あなたも参戦なさい。今ここで、聖女たちを仕留めます」

「先輩、このままでは、」

「シロウ、あなたたちは逃げてください。ここは私が食い止めます」

「駄目だ！ここは一点突破を狙うしかない」

「ですが！」

「さあ、仕留めましょう。愚かな聖女とその仲間たちを。それが私の救国への大いなる一歩。っ!」

「これは?」

気づけば、黒いジャンヌたちと士郎たちの間に、キラキラ輝くものが舞っていた。一つ一つが何かの形になっている。

「バラの、花びら?」

「硝子でできてるのか?」

「サーヴァントの仕業、ですね」

「ええ、そうよ。これがいわゆる正義の味方として名乗りをあげるということなのかしら?」

現れたのは赤いドレスに綺麗な髪を持つ一人の少女。戦場に立っている中で、その華やかさはある種異質だった。誰もが彼女に注目していた。

「あな、たは」

反応するバーサーク・セイバー。生前の知り合いなのか、大きく動揺している。

「彼女は?」

「ヴェルサイユの花とも呼ばれた、かの王妃。狂化しているはずの僕でも、その輝きを感じ取れる。あの人は、マリー・アントワネット」
「ええ、ええ。私は私の愛するこの国がただ滅ぼされるのを見ているわけにはいかないわ。だから、どんなに怖くても、どんなに強くても。竜の魔女さん、あなたの前に立つわ」

「邪魔をするつもりなら、あなたも殺してあげましょう。革命を止められなかった愚かな王妃様」

「ええ、いずれ戦うことになるわ。でも、それはまだ今じゃない。さあ、アマデウス、機械みたいになつちやつて!」

「任せたまえ。宝具、『死神のための葬送曲』」

突然現れたもう一人のサーヴァントが曲を奏でる。その曲が重圧を作り出し、黒いジャンヌたちの動きが目に見えて鈍くなった。

「今の内だ、撤退するぞ!二人も一緒に来てくれ!」

「わかったよ」
「ええ、それではみなさん、オルヴオワールド」

もう一人の聖女

無事にジャンヌ・オルタたちから逃げ切ることができた士郎たちは、ひとまず近くの霊脈へと向かい、そこにサークルを設置し、休憩していた。士郎が用意した料理を全員でいただく。

「まあ、とても美味しいわ！あなた、とつても料理がお上手なのね」

「喜んでもらえたならよかった。俺なんかの料理で王妃様の口に合うか、ちよつと心配だった」

「本当に美味しいわ。お城の料理長の作つてたものよりも美味しいかもしれない。ね、アマデウス」

「僕はその料理長の料理の味を知らないからなんとも。でも、確かに君の作る料理はうまいな」

マリー・アントワネットとヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。新しく仲間に加わつたサーヴァントたちにも好評のようだ。食事をして一息ついたところで、改めて自己紹介をしあつた。特にジャンヌとマリーはお互いにただの一人の少女として友達になれたことに喜んでいた。

「これからよろしく、モーツァルトに王妃様」

「まあ、王妃様だなんて余所余所しい呼び方。私はサーヴァントで、あなたはマスターでしょ？マリーと呼んでくださらない？」

「ええと。じゃあ、マリーさん、つていうのはどうかな？」

「マリーさん。その呼び方、とても嬉しいわ。とても可愛らしくて、愛らしい。よろしくね、マスターさん」

「マスターはやめてくれ。普通に士郎で良いよ」

「そうねえ、それならシェロくんでもいいかしら？」
「なんでさ」

自分の名前は案外発音にくい名前なのだろうか？そんなことを一瞬思う士郎。しかし特に文句があるわけでもないし、その呼ばれ方もされたことがあるから反応できる。訂正の必要は特にないと感じ、そのままにすることにした。

「モーツァルトも、よろしく」

「マリアが君について行くって言うんだ。僕にも断る理由がないしね。よろしく頼むよ、シロウ。それから、アマデウスと呼んでくれ。そちらの方が個人的には気楽だ」

「わかった。それじゃあ、現状の確認をさせてくれ」

「そう、これも一つの聖杯戦争なのね」

「どうするマリア?」

「もちろん一緒に戦います。私が愛した国のためだもの。それに、ジャンヌを、友達を助けるのは当たり前のことでしょう?」

「マリー、ありがとうございます」

「マリアがそう言うなら、僕も付き合おう」

「と言うことは、今の戦力は俺、マシユ、リリイ、ジャンヌ、マリーさんとアマデウスの合計6人か」

「相手は7人揃っていると考えてもいいと思います。他にも竜や竜牙兵もいますし」

「今の所わかっているのはルーラーの黒いジャンヌ、ランサーのヴラド三世、アサシンのカーミラ、そして名前が出たのはジル。おそらく、ジャンヌ・ダルクに仕えていた、ジル・ド・レエのことだろうね」

「あのセイバーは私のことを知っていました。おそらく、シユヴァリエ・デオンね。全盛期は私とはすれ違っていたけれど、あの気品ある顔立ちは変わらないわ」

「そしてまだ名前のわからないサーヴァントが一人。私の目には、あの方はとても気品があるように見えました。狂化される前は、さぞ清らかな方だったのではないのでしょうか」

「そう言ってもらえるなんて、光栄なことね。でも、今そうあれないのは少し残念だわ」

突然聞こえた新しい声に、全員が一斉に戦闘態勢に入った。そこへロマニからの通信が入る。

『みんな、そこにサーヴァントが来てる! それと、何か大きな反応もある。気をつけてくれ!』

現れたのはまさしく先ほどのサーヴァント。真名がわからないた

だ一人の女性。

士郎の正直な感想は、綺麗だ、というだけだった。他のサーヴァント達同様、狂化の呪いをかけられているというのに、彼女は美しかった。その姿も、魂も。

ドラゴンライダー

「あなたは、何者ですか？」

「そうね、私は何者なのかしら。聖女たらんと己を戒めてきたのに、まさか壊れた聖女の使いっ走りだなんて。今も衝動を抑え込むので精一杯、理性が奪われるなんて、全く困ったものね」

「では何故私たちの前に現れたのですか？不意打ちで攻撃することもできたはずですよ」

「そうね。私に与えられた命令は監視だけだったのだけれど、わずかに残った理性が私に告げてるの。あなた達を試さなければならぬと。特にそう、そこにいる、たった一人のマスターを」

視線を向けられた本人はそれを正面から受け止める。まっすぐなその瞳に何か感じ取ったのか、小さな笑みを浮かべたのち、ライダーはその表情を変える。

「さあ、かかってくるなさい。あなた達が戦うのは竜の魔女。最強の竜種に騎乗する、この国に降りた災厄。私を乗り越えられなければ、あなた達には万が一の勝ち目もない！」

ライダーの声に呼応するように、咆哮が響き渡る。何か大きな生き物が、彼女の後ろに控えているようだ。

「倒してみなさい、この私を。我らにあだなす唯一のマスターよ。我が名はマルタ。行くわよ、大鉄甲竜タラスク！」

『聖女マルタか？土郎くん、気をつけて！彼女はかつて、祈りだけで竜を屈服させた聖女、その彼女が乗るのは竜。つまり彼女は、ライダークラスでも特異中の特異、』

『ドラゴンライダーだ！』

「シロウ、指示を！」

「ジャンヌ、マッシュ達と一緒に竜を頼む。俺は彼女と戦う」

「一人でですか？」

「俺を見極めたって言った。なら、俺が相手をするしかないだろ」
「先輩！」

「マシユ、そつちは頼むぞ」

「つ、はい。先輩こそ、お気をつけて」

ジャンヌ、マシユ、リレイ、マリイ、そしてアマデウス。5人のサーヴァントがいながらも、士郎は一人でマルタと向かい合った。

「あなた一人かしら？」

「ああ。俺を確かめるんなら、一騎打ちの方がわかりやすいだろうと思っただけだ。それに、この方がみんなが先に竜を倒してこっちに來れるかもしれないしな」

「勇敢なのね。それに、とても優しい。あなた、かなりのお人好しみた
いね」

「よく言われる」

「そう。優しいのは美德だわ。今の私からしてもとても好ましいわね。でも、その優しさが原因で負けるようじゃ、話にならないわよ！」

予告なく打ち出された魔力弾を士郎は投影した双剣で切り払った。走り出した士郎は双剣をマルタめがけて横薙ぎに振るう。その攻撃をマルタは手に持った十字架を杖のように振るい受け止める。

「女性相手でも手加減しないのね」

「生憎と、俺の周りには手加減しようがない女性で溢れてたからな」

「そう。一つ安心したわ。そんなことでためらうような人なら、呆気なくここで終わってしまふもの」

一旦距離を取った両者は再び戦い始めた。少しでも距離が開けばマルタは魔力弾で士郎を狙う。それを防ぎ、躲し接近したら、剣と杖がぶつかり合う。クラスから考えると決して近距離戦闘が得意なわけではないはずだが、マルタは杖と、時に小手を巻いた腕を使い士郎へと攻撃を仕掛ける。何度目かわからない激突ののち、二人は互いに距離を取る。

「これならどう？」

複数の魔力弾を同時に打ち出すマルタ。打ち出されたそれを堅実にさばいた士郎は双剣を放り投げ、弓を手に取る。マルタが特大の魔力弾を作り出す間に、士郎は左手で弓を構える。

トレース・フラクタクル
「投影、重装」

投影するのは一つの剣。無銘の剣と違い、神話に語られる名を持つ剣。先端は捻れ、神秘は高く。打ちやすいようにチューニングされた、一振りの剣。それを矢へと変え、弓につがえる。

「I am the bone of my sword」

魔力が収束し、吹き荒れる。士郎が狙いを定めた時、マルタが今までのよりも大きく、強力な魔力弾を発射した。

「『カロードボルグ』！
偽・螺旋剣！」

打ち出されたその矢は回転しながら目標へ迫る。貫通力を高めたその矢は、魔力弾を貫き、打ち消す。しかしその威力は衰えることなく、まっすぐにマルタへと向かった。

「甘いー」

その矢をマルタは十字架で受け止める。もともと強い神秘を持つその十字架に魔力を集め、偽・螺旋剣からの攻撃を受け止める。拮抗する矢と十字架。しかし士郎はすでに他に手を打っていたのだ。

「防ぎきれ、っ!？」

突然、背中から胸にかけて二つの刃が貫通していた。先ほど投げ捨てられたはずの黒と白の剣だ。マルタは知らなかったが、干将・莫耶は夫婦剣。互いにひかれ合うのだ。それを利用し、士郎は剣の軌道がマルタの元で交わるように投げていたのだ。

その攻撃で魔力が途絶えた。十字架は貫通され、矢はマルタの心臓のあたりを貫いた。それを見た士郎は投影品を全て消した。

—————

「先輩、ご無事ですか!？」

マシユたちが駆け寄ってくる。みな疲れているようにも見えるが、どうやら無事にタラスクを倒すことができたらしい。

「タラスクも負けてしまったのね。どうやら、あなた達なら勝てるかもしれないわね、竜の魔女に」

「マルタさん」

「ほら、そんな顔しないの。これでいいのだから。まったく、聖女に虐殺なんて似合わないもの」

「聖女マルタ様、あなたは」

「手なんか抜いてないわよ、白いジャンヌ・ダルクさん。彼は私の期待以上ね。いいマスターを得ましたね、あなた達は」

「はい」

「そんなあなた達に教えてあげましょう。あの竜の魔女の使役する最強の竜には、あなた達だけではおそらく勝ち目は薄い。だから、リヨンへ行きなさい」

「リヨン、ですか？」

「そう。そこにあなた達にとって、最高の希望が待っているはずよ。竜を倒すのは、いつだって『ドラゴンスレイヤー竜殺し』と決まっているのだから」

「竜殺しのサーヴァントがいるってことかしら？」

「行けばわかりますよ、マリー・アントワネット王妃。さて、私ももう現界していられなさそうね。タラスク、次はちゃんとした形で召喚されたいわね。そうだ、あなた」

「えっ?」

「最後に名前だけ聞いてもいいかしら、強きマスターさん？」

「士郎、衛宮士郎だ」

「シロウ、ね。ふふっ。あなた、中々いい男でもあるのね。次に召喚されるなら、あなたみたいなのマスターに呼ばれたいだなんて、聖女としてはしたないかしら」

「えっ?」

「あら、意外と鈍いのかしらね。そういうところは直さないとダメよ。そうしないと、大変なことになるもの」

「なんでさ」

「ふふっ」

最後に笑いながら、バーサーク・ライダー、聖女マルタは消えていった。

「じゃあみんな、次に向かうべきところは決まったな」

「ええ。次の目的地はリヨンですね、シロウ」

「何があるのかしら? 誰に会えるのかしら? 楽しみだわ。ね、ジャンヌ」

「はい。最大の希望と言っていましたし、大きな力になってくれると

いいですね」

「それじゃあシロウ、少し休んだら移動しよう。善は急げと言うしね」

「先輩、疲れてはいませんか？」

「ありがとうマシユ。少し休めば大丈夫さ。それが終わったら行く
う、リヨンへ！」

竜殺しを探しに

マリーとリリイが近くの町で仕入れてきた情報によると、リオンは既に滅んでしまったらしい。ただ、そこには剣を背負った騎士がいて、しばらくの間その町を守っていたらしい。彼は複数のサーヴァントの襲撃を受け、現在行方不明となっている。

「そうか、ありがとうリリイ、マリーさん」

「はい」

「どういたしまして。それで、シエロくんはどう思うかしら?」

「まず間違いない、その騎士がマルタさんの言っていた竜殺しなんだろうな。行方不明ってのが気になるけど」

「ですが、おそらくまだ消えてはいないのでしよう。そうであればマルタ様もそこに行くことを勧めないと思いますし」

「そうですね。やはり行つて探すしかないかと」

「まあ当然だね。そもそもリオンが滅ぼされたなら、僕たちがいかなければそこにいる魔物はどうすることもできないだろうし」

「そうだな。とりあえず急ごう。先にあの黒いジャンヌに見つかるわけにもいかないからな。それに、もしいかなかったらいなかったで、その町を開放できれば、この国の人のためにもなる」

「まあっ!この国のために本当に頑張つてくれるのね。シエロくんは本当にいい人ね。ご褒美をあげちゃうわ」

そう言つてマリーは士郎の頬にベージュをした。わかりやすく言うと、キスをした。それはもうあつさり。士郎が反応する間も無く。

「えっ?」

「なっ」

「な、マリー!?!」

「やれやれ」

サーヴァントたちの反応は様々だった。ポカンとするリリイ、驚愕するマシユ、赤面し声を上げるジャンヌに呆れ気味のアマデウス。一方士郎は僅かに目を開いただけだった。

「すまないね、シロウ。それはマリーの悪い癖のようなものだ。あま

り気にしないでくれたまえ」

「えっ？みんなはしないの、ベーゼ？ハートがグーツときたら、ついしちゃうものでしょう？ね、ジャンヌ？」

「し、しません！そんなことしません！そういうのはもっとうごう、ちゃんと好き合ってる相手とか、」

「まあ、では今好きな人はいるのかしら？とつても気になるわ。もちろん、マシユやリリイのこともね」

「えっ」

「好きな人、ですか？」

何やら話が逸れ始めている。やれやれと首を振ったアマデウスは、その光景を笑みを浮かべて眺める士郎に少し疑問を抱いた。

「随分と冷静だね。もつと驚くかと思っただけど」

「ああ、あれは挨拶みたいなものだろ？旅してる時にも何度かあったし」

「何度か？」

「いろんな場所巡って、いろんな人の力になりたくて。そうしたら国によつては何人かにされたことがあつただけだよ。挨拶とはいえ、少し恥ずかしくはあつただけど」

「……なるほど。聖女マルタの言いたかつたことがわかつた気がするよ。確かに直さないといけないみたいだ」

「何がだよ」

「さあ、なんだろうね」

さてあまりよくわかつていないらしいリリイやマシユはともかく、そろそろジャンヌが相当困り始めていたため、アマデウスがマリーを止め、少しペースを上げた彼らはリヨンの町を目指した。

—————

移動し続けた彼らはリヨンに、正確にはリヨンだった町に、辿り着いた。話聞いた通り、その町は滅ぼされてしまったようだ。しかし、竜殺しがここにいるかもしれない。彼らはその滅んだ町を搜索し始めた。途中生ける屍や竜牙兵などに遭遇したが、その都度撃破しながら進んだ。

「いませんね」

「どこかへ移動してしまつたのでしょうか」

『た、大変だ、みんな!』

突然慌てた声が響く。ロマニが恐ろしく慌てた様子で通信を繋いだのだ。ただ事ではないその慌てように、士郎たちは周囲を警戒し始める。

「どうしたんだ、ドクター?」

『君たちの方へ、サーヴァントを超える超大型の生命反応が向かっている!さらにサーヴァントが3騎同行している。すぐにそこから撤退するんだ!』

「恐らく、もう一人の私でしょうね」

「ですが、もしここに竜殺しがあるとすれば、撤退するわけにはいきません。そんなことをしたら、やられてしまうかも」

「ドクター、サーヴァントの反応は他にはありませんか?」

『待ってくれ。今サーチを、よし!その先の城から僅かな反応がある』
その言葉を聞いて撤退の二文字は選択肢から消えた。ここにそのサーヴァントを置いて行ったら、恐らくこの先に勝ち目はない。つまりその竜殺しを助け出すことが最優先しなければならなくなった。

「先輩、指示を」

「マシユ、リリイ。2人は俺と城へ向かつて竜殺しを探してくれ。マリーさん、アマデウス。2人にはジャンヌとともに、俺たちが先に戻らなかつた場合には、やってくる敵の迎撃を頼みたい。やってもらえるか?」

「ええ、それがシエロくんの頼みならやってみせるわ。サーヴァントとして、マスターの期待には答えなくちゃ。アマデウス、一緒に戦つてくれる?」

「僕は君に付き合うだけさ。まあヤバくなつたら1人で逃げるかもしれないけどね」

「ふふっ、アマデウスらしいわね。というわけで、よろしくお願いするわね、ジャンヌ」

「ありがとうございます、マリー。シロウ、ここは任せてください。必

ず竜殺しを」

「ああ」

領きあい、士郎とジャンヌはそれぞれ反対の方向へ駆け出した。この戦いに勝つために、ここで出来る最善を尽くすために。

竜殺しの英雄

城の奥へと進んだ士郎たちはそこで1人の男を発見した。反応から見て、彼が例のサーヴァントなのは間違いないだろう。彼の持つ剣を解析した士郎はその正体に思い当たり、驚いていた。しかし彼の反応が弱かった理由がよくわかった。

「先輩、あの人」

「なんて負傷でしょう。シロウ、早く彼を」

「くっ、次から次へと」

傷を負っていないながらも、そのサーヴァントは手に握った剣で傷を見て無防備だったマシユに斬りかかった。間一髪のところその剣を士郎が止めに入る。鏢迫り合いの状態のまま、士郎は語りかけた。

「待ってくれ、俺たちは敵じゃない。あんたを助けに来た！」

「俺を、助けに？」

「俺は衛宮士郎。彼女たちのマスターで、竜の魔女と戦っている。今竜種がここに向かって来ている。勝つためにはあんたの力が必要なんだ」

「竜か・・・なるほどな。だからこそ俺がこの地に呼ばれた、というわけか」

何かに納得したように男がつぶやき、その体から力が抜ける。慌てて剣をしまった士郎が倒れる前に肩を貸した。

「すまない。この傷ではロクに動くこともままならない」

「仕方ないさ。マシユ、リリイ。先導頼む」

「わかりました。私が先頭を、マシユさんはシロウの側でフォローしてください」

「お願いします、リリイさん」

四人はリリイを先頭に、急いで城の外へと出た。

外に出た彼らを待ち構えていたのは巨大な影だった。ワイバーンはおろか、タラスクまでもが比べ物にもならない、真正正銘、本当の竜種。その背には竜の魔女が載っていた。

「何を探していたのかと思えば、瀕死のサーヴァント一騎ですか。ふつ、そんなものがなんの役に立つのやら。みんな纏めて滅びなさい！ さあ、焼き払うのです、ファヴニール！」

雄叫びをあげ口を開くファヴニール。そこに膨大な魔力が集まるのを感じる。その一撃は生半可なものでは防ぐことなど不可能。

「先輩、私が行きます！」

「な、マシユ!？」

「私も一緒に！」

マシユとジャンヌが他を庇うように前に出る。二人は同時に宝具を展開した。

「宝具、展開します！ 仮想宝具 疑似展開／人理の礎！」

「我が神はここにありて！」

二人の守りが重なり合う。その守りはファヴニールの炎をなんとか防いでいた。しかし、それも長くは持ちそうにない。

「あなたの宝具、今すぐ使うことはできるか？」

「すまない。まだ魔力が足りない。あと少し、時間を稼いでくれば、必ず」

「わかった、任せろ！」

士郎は駆け出し両手をそれぞれマシユとジャンヌの背中に添える。時間を稼ぐためにはこの守りが続かなければならない。今持ちこたえるのが困難なら、この守りを強化すればいい。

「投影、開始！」

マシユとジャンヌの前に7つの花卉が開く。カルデアからの魔力により完全となった士郎の盾、「熾天覆う七つの円環」のおかげで補強された守りはファヴニールの炎を寄せ付けない。

「何をしているのです、ファヴニール！ 早くあいつらを焼き払いなさい！」

「いや、そうはいかないさ。彼らのおかげで魔力を少し回復できた。ファヴニール、貴様が蘇ったのならば、もう一度殺してみせるまでだ！」

その男、セイバーのサーヴァントは立ち上がり、握りしめた大剣へ

と魔力を集めた。その様に、ファヴニールが動揺した。まるでセイバーに怯えているかのようだ。

「邪悪なる竜は失墜し、世界は今、落陽に至る」

「我が真名^なは、ジークフリート！この一撃を受けるがいい」

「幻想大剣^{パルム}・天魔失墜^ク！」

「なっ、あのサーヴァント、まさかっ！上昇しなさい、ファヴニール！」

慌てて指示を出した竜の魔女。直撃こそ避けられたが、確実にダメージを与えることができた。それを見届けたセイバー、ジークフリートは剣を支えにしながらも、その場に屈み込んでしまった。

「うっ、すまない。今のままではこれが限界のようだ。今のうちに逃げなければ、まずい」

「助かったよ、ジークフリート。ジャンヌ！」

「はい！みなさん、今のうちに撤退しましょう」

士郎がジークフリートに肩を貸し、彼らは急いで町から離れていった。しかしそのすぐ後を2騎のサーヴァントが追跡していた。

二つの因縁

『みんな、気をつけて！すぐ後ろから、サーヴァントが迫ってる！』
「ですが、これ以上早くは、」

「すまない。君たちの足を引っ張ることになってしまった。いざとなったら、俺を置いてでも、」

「それはできない。ここは迎撃しよう。サーヴァントの数ではこっちの方が有利だ。ここで相手の戦力を減らすチャンスでもある」

「待ってください、前方にフランス軍が。それも、ワイバーンに襲われていきます！そこにもサーヴァントが」

「くっ、アマデウス、ジークフリートを頼む。俺とジャンヌでフランス兵を助ける。マシユ、リリイにマリーは後ろから来る奴らの迎撃を頼めるか？」

「任されたよ」

「任せてください！」

「頼んだ。ジャンヌ！」

「はい！」

走り出しながら弓を投影する士郎。今にもフランス兵に襲いかからんとしていたワイバーンを数匹放った矢で仕留めた。それによりワイバーンの注目がこちらへと向けられる。かたや双剣、かたや旗を振るい、二人はワイバーンの群れへと斬りかかった。

—————

マシユたちは先行してきたワイバーンや生ける屍を倒し終えた。しかしそこで終わりではなく、2騎のサーヴァントが彼女たちの前に立った。一騎は完全な狂戦士、黒い霧のようなものを纏い、兜から覗く目に当たる部分は、赤く光っている。もう一騎は銀髪の青年、黒い服を纏い、大きな刃をその手に持っていた。

「A a r r r r———！」

「っ、この人は、一体」

「まあ、奇遇ね。私、あなたの顔を忘れたことは一度もなかったわ」

「それは嬉しいな。僕の方こそ、忘れたことはない。忘れられるはず

もないさ、白雪のようななじを持つ貴女を」

「貴様、死してなおマリアを狙うのかい？」

「ああ、君か。全く、人間の屑が、僕と彼女の会話に割り込まないで欲しいものだね。今回こうして出会って確信した。やはり僕たちは運命付けられているのだと。だってそうだろ？ 処刑人として、2度も同じ人を処刑することになるなんて」

「やれやれ、本当に狂ったようだね。シャルル・アンリ・サンソン」

「ふっ、君は引っ込んでいたまえ。さあ、マリー、始めようか。僕たちだけの処刑^{時間}を。大丈夫、あの時よりも上手くしてあげられるさ。君と
いう花を散らすのは、僕以外に考えられない。君の最後を、美しく看
取ってあげよう」

「A a a a a r r r r t h u u u r r r r r ——！」

「くあっ」

「リレイさん、大丈夫ですか？」

「はい。マシユさん。ですがこのバーサーカー、今までのどのサー
ヴァントよりも、まっすぐで、正直、怖いです」

「リレイさん、あの人、さつきからアーサーって言っているようなので
すが、」

「今の私は彼を知りません。ですが、きつとどこか未来で出会うこと
になるのでしょうか。マシユさん、ここは私に任せて、貴女はマリーさ
んを」

「ですが、」

「あちらのサーヴァントも剣を持っている。接近戦ではマリーさんが
危ないです。大丈夫ですよ。こう見えても、私はブリテンの王様に
なる予定ですから」

「マシユ、マリアを頼むよ。僕もできるだけリレイを援護するから」

「わかりました。お願いしますー！」

「A a a a a r r r r r t h u u u r r r r r ——！！！！！！」

マシユ、マリー対サンソン、リレイ、アマデウス対バーサーカー。二
組のサーヴァント達の戦いが始まった。

未来への決意

「うわあああ!?! 助けてくれえ!」

「はああああ!」

ワイバーンに襲われるフランス兵を助けるべく、士郎とジャンヌは全力で戦っていた。しかし、

「早く逃げるのです!」

「逃げるな、奴が竜の魔女だ! 我らの国の仇を取るのだ!」

戦況はどう見ても分が悪い。特にジャンヌにとっては。ワイバーンも兵士も、彼女を狙っているのだから。

「くっ」

「魔女め、これでもくら、がつ!?!」

ジャンヌの背後から斬りかかろうとした兵士が意識を失い倒れる。士郎が刀の柄を使い、首元を殴り気絶させたのだ。

「なんだ、あいつは?」

「あいつも竜の魔女の仲間なのか?」

「きつと魔女がたらし込んだに違いない」

「すみません、シロウ。こんな風に、守るべき人たちとも戦うことになっちゃって」

「謝るなよ。ジャンヌは何も悪くないんだから。それに、俺はジャンヌの正しさを知ってるし、ジャンヌも俺たちのするべきことをわかってくれている。それだけでもいいさ」

「シロウ?」

かつて、地獄を見た。自分が歩んだかもしれない、地獄を見た。争いを止めるために戦い、最後には争いの張本人として処刑された。ただの一度も理解されない、その生き方の果てを見た。けれども、今の自分は違う。こうして並んで戦える誰かがいる。それだけで、大きく救われる。

「まだまだ行くぞ、ジャンヌ」

「はい!」

剣を握り直し、士郎とジャンヌは再び戦いに身を投じた。

「A a a a a r r r r r r——！」

「やああつー！」

横薙ぎに払われた一撃をカリバーンで防ぐリリイ。目の前のバーサーカーは狂化しているはずだというのに、何処か高潔ささえ感じられる技量でリリイを攻め立てる。また、その武器も異常だった。長い棒状の武器、しかしそれは明らかに瓦礫の山から拾ってきたようなものだった。それが宝具として使われている。信じられないことに、このバーサーカーは手に取ったものをなんでも宝具にすることができようだ。

「くっ、やっぱり私はまだまだみたいです。隙を見つけることができませぬ」

「リリイ、奴をもうしばらく引き受けられるかい？そうすれば僕が隙を作ろう」

「アマデウスさん？わかりました」

攻撃をやめ、リリイはバーサーカーの攻撃を防ぐことに専念する。士郎から守りの剣を教わったリリイは、それをいかし、バーサーカーの怒涛の攻撃を凌いだ。

「よし、行くぞ！『死神のための葬送曲』」

発動したアマデウスの宝具により、バーサーカーに重圧がかかる。目に見えて動きが鈍くなり、大きな隙ができる。

「リリイ、今だよ」

「はい！」

カリバーンを祈るように構えるリリイ。その剣先へと魔力が集う。

「選定の剣よ、力を！邪悪を断ち、我らに勝利を！」

「勝利すべき黄金の剣！」

選定の剣から放たれた黄金の輝きは、避けることができなかつたバーサーカーを包み込んだ。それは彼女の未来の可能性が放つ星の輝きと比べると小さな光かもしれない。しかし、それはまるで彼女の未来への希望を示すかのような暖かさを持つ、彼女自身の輝きにも見

える。その光を浴びたバーサーカーの体は少しずつ粒子へとなくなっていった。

「私たちの勝ちです。素晴らしい剣技でした。私もいつかあなたにも負けないくらいに騎士になって見せます！その時は、また戦ってくださいね、高潔な騎士さん」

「王よ、私は、あなたに、」

そう言い残し、バーサーカーは消えていった。最後の最後に狂化が解けたのか、赤く光る目元はリリイの方を見つめ、明確な言葉を残していった。その仮面の下の表情は何えない。

「お疲れ様、リリイ」

「アマデウスさん、ありがとうございます」

「彼、君のことを王と呼んでたね」

「はい。いつかの未来で、私は彼と共に戦ったのでしよう。君主として」

「そうだね」

「何故あれほどの腕を持つ騎士が、狂気に身を落としてしまったのでしょうか。私には、とてもわかりません」

「それは仕方がないさ。この先何が起ころかなんて、わからないものだからね。それに、もしかしたらそうならないかもしれないだろ？そんなことを気にしても、仕方がないんじゃないか」

「そうかもしれないね。でも出来ることなら、救ってあげたかったです」

「それはこの先の未来ですといいさ。それよりも、マリアたちの方へ行こうか。あのいかれた処刑人をどうにかしないと」

「はいー」

心の迷い

「ワイバーン、先に兵士たちを片付けなさい」

ワイバーンの群れを率いて現れたカーミラ。その命令で逃げようとするフランス兵に襲いかかるワイバーンたち。しかしその牙が届く前に、降り注ぐ剣の雨によってことごとく撃ち落とされた。

「またあなた？しつこい男は嫌われますよ」

「どっちかというと、しつこいのはそっちだと思うけどな」

「やああつー」

近くのワイバーンを斬り伏せ、士郎の隣に立つジャンヌ。戦闘がそこそこ長引いたためか、少し疲弊しているようだ。しかも、それは身体面だけでなく、精神的にもだ。

「おい、あれって竜の魔女だろ？なんで竜どもと戦ってるんだ？」

「知るかよ。けどちようどいい。このまま共倒れしてくれればいいさ」

遠巻きに眺めている兵士たちの心無い言葉が聞こえて来る。一瞬ジャンヌの顔が悲しげに伏せられたのをカーミラは見逃さなかった。

「随分な言われようではないですか、聖女様？どう、今の気持ちを聞かせてくださらない？誰にも理解されず、誰からも感謝されず、この戦いの元凶として責任を押し付けられた気分を？」

「っ、特に語ることはありません」

「そうかしら？後悔してるのではなくて？自分が間違っていたのではないかと。全く、あなたも愚かね。そんな自分よりも他人が大事、みたいな生き方が理解されるはずもないでしょうに」

「それは、」

「あなたの人生は、偽りだらけのものだったのではなくて？」

ジャンヌの心を揺さぶるかのように、カーミラの言葉は彼女の頭で響く。自分は間違っていたのだろうか。自分の本心はなんなのだろうか。あの時、苦しむ人々を救いたいというその想いが、最終的に裏切られ、自分は死んだ。後悔なんてしてない、はずなのに。楽天的なはずの自分が、負の考えに押しつぶされそうになる。思わず膝をつく

ジャンヌ。自分に向けられる、守りたいと思った人たちの刺すような視線に、カーミラの見透かしたかのような言葉に、体より前に、心がかけそうになる。

「勝手なことを言うな」

そう言ったのは彼女の隣に立つ土郎だった。土郎はジャンヌを庇うかのように前に進み、カーミラを睨みつける。

「あら、何かしら？ 私は何も間違ったことを言ったつもりはないのですけど。あなただっけて理解できはしないでしょう？ 自分より他人が大切なんで考え方、どう考えてもおかしいんですもの。自分を救わず、誰もを救いたいなんて、偽善者そのものね」

「確かにそうだな。自分より他人が大切、誰もを救いたい。裏切られ、殺されて、それでなお誰も恨まない。その考え方は、在り方は、人間として見たら、破綻しているかもしれない」

「けど、美しいと感じたんだ」

「なんですって？」

「シロウ？」

先ほどまでの土郎の相手を肯定する言葉に、伏せていた顔を上げる。目に入るのは彼のその背中だけ。表情までは伺えない。ただ、その背中が、とても大きく感じた。

「自分より他人が大切だなんて考え方は偽善だ。それはよくわかってる。でも。それでも、そう生きられたのなら、どれほどいいだろうと思う。たとえその人生が紛い物でも、誰もが幸福であってほしいという願いは、美しいものはずだ」

言葉が響く。頭の中ではなく、心に。彼の言葉が、カーミラという言葉打ち消していく。自分を押しつぶそうとしていた迷いが、彼の言葉で晴れて行く。何故だろう。どうして彼の言葉は、ここまで自分に届くのだろう。

「大丈夫だ、ジャンヌ。誰からも理解されないなんてことはない。例え周囲がそう言ったとしても、俺がお前を肯定してやる。だから諦め

るな。その想いは決して、例え偽善にまみれた願いだとしても、決して、間違いなにかじやないんだから！」

その言葉にジャンヌはもう一度立ち上がった。彼は、本当に自分を理解してくれているように思った。まるで、今の自分と同じことを経験したかのような。そうだとしたら、あの黒いジャンヌが言っていたように、自分たちは本当によく似ているのかもしれない、そう思った。晴れ晴れとした、悩みのなくなった顔で、士郎の隣に並び立つ。

「ありがとう、シロウ」

「行けるか、ジャンヌ？」

「ええ。見ていてくださいね、シロウ」

士郎より前に進み出るジャンヌ。士郎もそれを見守るようで、手を出そうとしない。大きく息を吸って吐く。旗を握り直したジャンヌは、勢いよくカーミラへと向かっていった。

—————

一方、マシユたちの方でも戦いが激化していた。サンソンの振るう刃をマシユは盾を使い防ぎきつてはいた。しかし、なかなか攻撃に転ずることができない。マリーの援護でなんとか反撃しているが、サンソンはそのほとんどを躲すことに成功している。

「ふっ」

「うっ、くっ」

「ちっ、なんだあのサーヴァントの守りは。固すぎる」

「大丈夫、マシユ？」

「はい、なんとか。ですが、このままではジリ貧です。何か決定打を与えられれば」

「いい加減に、っ!？」

自身目掛けて振り下ろされた刃を躲すサンソン。バーサーカーを倒したリリイが攻撃を仕掛けたのだった。

「リリイさん！」

「お待たせしました」

「アマデウス、そっちは終わったの？」

「なんとかね」

「ちっ、次から次へと」

舌打ちするサンソンの隣にカーミラが後退してきた。それを追うようにジャンヌと士郎がやってくる。

「引くわよ、サンソン。これ以上は分が悪いわ」

「ああ。次こそ、必ず王妃の首を」

撤退して行く彼らの時間を稼ぐために、ワイバーンが一斉に襲いかかる。それを全て倒した時、彼らは既にいなくなっていた。

聖人を探しに

しばらく歩き続けた彼らは、放棄された砦へとたどり着き、ジークフリートの様子を確認した。

「ジャンヌ、どうだ？」

「複数の呪いがかけられています。これを解くには聖人が必要です。それも二人。私を入れてもあともう一人、聖人のサーヴァントを探さなければなりません」

「つてことは、フランス中を探してみる必要がありそうだな」

「幸い、フランス領は既に半減しています。そこまで時間はかからないかと」

「危険かもしれないのだけど、二手に別れた方が良くないかしら？くじを引いてみましょう！」

「マリア、それは君がくじを引きたいだけだろう」

「でも、確かに二手に別れた方が早く見つかるかもしれないな。よし、やろうか、くじ引き」

即興でくじを作る士郎。みんなで一斉にくじを引く。その組み合わせの結果は、

「俺、マシユ、マリーさんが西側、ジャンヌ、アマデウス、リリイが東

側か。ジークフリートは俺たちと来てくれ」

「わかった。戦闘以外の行為は問題ない」

「それじゃあ、また後で。気を付けてな」

「シロウたちも、お気をつけて」

こうして彼らは聖人のサーヴァントを探しに、二手に別れたのだった。

—————

ややスキップ気味なマリーに続く士郎たち。こうして見ると、王妃という言葉から来る威厳や高潔なイメージよりも、一人の少女としての可愛らしさの方が良く感じられる。周りにあるのは草原ばかりで、所々に花が見える。敵の襲撃がない今は、ピクニックにでも来たと言っても、不思議じゃないかもしれない。

「マリーさん、楽しそうですね」

「まあ、明るいことはいいことじゃないか。場が和むっていうかさ」
「すまない、戦闘どころか、普段からあんなふうには振舞うこともできずにすまない」

「いや、そういう意味じゃないんだけど」

度々ネガティブになるジークフリート。どうやら相当戦力として戦うことができないことがもどかしいみたいだ。これは一刻も早く治してもらわなければならない、と苦笑する士郎。

「ほら、マシユ見て！とつても綺麗な花が咲いてるわ。あなたに似合
いそうなのはあるかしら？」

「あ、ええと、私に花が似合うでしょうか？」

「もちろんよ、だって女の子ですもの。花が似合わないわけないわ。
ね、シエロ君？」

「えっ、そうだな。マシユはそうだな、青い花、こんな感じの花なんか
似合いそうだな」

草原の中にあつた細い花びらをたくさん持つ、青い花。それを一つ
だけ摘み取り、マシユに手渡す士郎。直感ではあつたが、なんとなく
似合う気がしたのだ。

「あ、はい。ありがとうございます」

「あら、シエロ君つてばなかなかいいセンスをしてるのね」

「そうなのかな？」

「その花はコーンフラワーと言って、私のお気に入りの花の一つでも
あるの。花言葉は『繊細』、『優美』、『教育』、そして『信頼』よ。シエ
ロ君からのマシユちゃんへの信頼の高さは凄いもの。本当に似合っ
てるわね」

楽しげに笑うマリーと静かに見守るジークフリート。マシユはと
ても嬉しそうな顔で手の中にある花を見つめていた。

—————

せつかくだからと、ここでしばらく休憩することにした士郎たち。
マシユはジークフリートと近接での戦闘方法について話していた。
その様子を確認した士郎は草原に腰を下ろし、空を見上げた。青く広

がる空と、自由に浮かぶ白い雲を眺める。何かと普通じやない空とは縁があつた彼は、時々こうして空を眺めることも好きだった。残念ながら今は光の輪が見えるわけだが。

「どうかしたの、シエロ君？」

少し散歩をしていたマリイが戻つて来て、士郎の隣に座つた。ずっと空を見上げていたから心配されたのだろうか。

「いや、ちよつと空を見てただけだ」

「そう？ 疲れてるのなら言つてね。私たちサーヴァントは身体的な疲労はないから」

「大丈夫だ。今だって、ちゃんと休めてる」

「ならいいのだけど」

実際移動に続く移動ばかりではあるが、いざという時のために体力をつけておいた士郎にしてみると、少しの疲れはあるものの、基本的には問題なかった。

「そうだわ。お話ししましょう、シエロ君。せつかくこうして時間があるのだから、お互いのもつとよく知る、いい機会だと思うの」「そうだな、いいかもしれない。それで、どんなことを話すんだ？」

「そうね、シエロ君は私のことをどのくらい知ってるの？」

「そこまで詳しくはないかな。7歳の時にアマデウスにプロポーズされたとか、14歳で結婚したとか。あとは、まあその、その最期について、とか」

「そう」

少しマリイの表情が曇る。士郎本人も、最後の部分は余計だったと反省した。まだ経験したわけではない。ただ、あつたかもしれない自分の最後を、彼は知っている。そしてその結末は、驚くほど彼女の終わりとも似ていたのだ。決して気持ちのいい話ではないだろう。

「私の最後は私が愛した国に殺されることだった。後悔はないし、そのことで恨んでもいないわ。ただ、そうね。私の子を殺した人たちのことをほんの少しだけ、1割、ううん。もつと小さなところで憎んでいたのかもしれない」

「そんな感じは全然ないけどな」

「そうかしら？でも、私は自信がないわ。もしジャンヌのように別の私が見れて、同じようなことをしていたとしたら、きつとそれはもう一人の自分の側面なんだって、受け入れてしまうかも」

普段の楽しいげな様子はなく、マリーの顔はどこか悲しそうだった。自分が愛した国を、民を、最期に憎んでいたかもしれないということに、彼女は悲しんでいるのだ。

「俺は、マリーさんもすごいと思うけどな」

「えっ？」

「だって、こんなにも自分の国の人々を愛している。今この特異点の人たちは、マリーさんの生きた頃の人たちじゃないけど、本当に愛しているのが伝わってくる。こんなに誰かを愛せるなんて、多分、俺にはできない。そんな人が、復讐なんて絶対にしない。だから、マリーさんが気に病むことなんてない」

「そう、思うかしら？」

「そう信じてる」

かつて、誰にも理解されず守ろうとした人たちに殺された男がいた。その男はどこまでいっても孤独だった。けれども彼女は違う。今では彼女の汚名は返上され、人々の彼女に対する見方も変わってきている。理解され始めているのだ。士郎も詳しくはその生涯を知らなくても、こうして出会ったことで確信できる。彼女が復讐に身を落とすような人ではないと。

「ありがとう、シエロ君。とても。ええ、とっても嬉しいわ」

王妃として

『士郎君、その先の町からサーヴァントの反応だ。複数の生命反応もある』

「敵か？」

『いや、この反応からすると、まともなサーヴァントだと思うよ。探し求めていた聖人だといいいんだけど』

「行きましよう、先輩」

「ああ」

駆け足でたどり着いたその町は、滅んだ様子はなかった。それはつまり、ここには彼らの味方となってくれるかもしれないサーヴァントがいるということだ。

「さてと、後はどうやってここから探すかだけど、」

「マスター、考え事の邪魔をすまないが、今こちらに向かってくる彼がそうなのではないだろうか」

「そうね。間違いなく、サーヴァントですもの」

鎧を着た長い髪の男性が、剣をその手に近づいてきていた。その剣を解析してみる士郎。いかなる敵からも持ち主を守り抜く、完全無欠の無敵の剣。その逸話はあまりにも有名だ。間違いない、彼が探していたサーヴァントだ。

「その者たちよ。申し訳ないが止まってもらえるか？できないのであれば戦うまでだが」

「そのために俺たちは来たわけじゃない。そう警戒しないでくれ」

「むっ、サーヴァントではない。人間がサーヴァントと行動を共にしているということは、あなたはマスターですね」

「ああ、衛宮士郎だ。あんたに頼みがあつてここに来た。竜の魔女を倒すために、あんたの力が必要なんだ」

「では、話を聞きましょう」

「なるほど、呪いですか」

「だから早くジャンヌと合流したい。ジークフリートの呪いを解くこ

とができれば、ファヴニールを倒し、竜の魔女を打ち倒すことができるかもしれない」

「なるほど、確かにそうですね。ですが、もうしばらく待つてもらいたい。この町の人たちの避難が始まったところで、できれば皆を安全に届けたい」

「それなら私たちもお手伝いしましょう？ね、シエロ君」

「そうだな。マシユとジークフリートも手伝ってくれるか？」

「はい、先輩」

「戦闘行為以外なら支障もない。手伝おう」

手分けして町の人の避難を手伝う彼ら。人出が増えて、着実に避難のペースが上がった。しかし、もう後少しで終わるところで、ロマニからの通信が入った。

『士郎君、まずいぞ！そこへ大きな反応が迫っている。恐らく、黒いジャンヌだ！早くそこから離れないと』

「だめだ、ここの人たちを見捨てることはできないだろ」

『でも危険だ！このままそこに残れば、間違いなく死んでしまうぞ！』
「けど！」

「はいはい、落ち着いて、ね？」

ピトリと士郎の口に指を当てるマリー。この状況で突然何を、という気持ちにもなったが、一周回って一旦冷静になる士郎とロマニ。

「シエロ君、ゲオルギウスさんを連れて退避しましょう。ジャンヌと合流すれば、なんとかなるもの」

「しかし、それではここを守る者が、」

「ええそうですね。だから、あなたが宜しければだけど、私にその役目を譲ってくださいらない？」

笑顔で言ったその言葉の意味を、士郎は正確に捉えていた。彼女、マリー・アントワネットは、この戦いに勝利する希望を守るために、自らを犠牲にしようとしているのだ。

「マリーさん、それはつまり、自分が犠牲になるという意味でしょうか」

同じく言葉の意味を理解したマシユが問いかける。その表情もそ

うであって欲しくないとやっているようなものだった。しかし彼女も士郎もわかっている。マリーの意思が、どうあるのかを。

「私はフランスの王妃。この国と民を守るのが私の使命です。そう、こうして呼ばれたのは、この時のためなのね」

「マリーさん」

「そんな顔しないで、マシユ。私は私のために戦いたいのよ。私が愛したこの国を、終わらせるわけにはいかないもの。それに、あなたたちの力になれるのなら、それってとても素晴らしいことじゃない？だから、ゲオルギウスさん。あなたにはあなたにしかできないことがある。私には私にしかできないことがあるの。それを果たさせてくれるかしら?」

「・・・あなたがそれで良いのであれば」

「感謝します。さあ、シエロ君」

うつむき気味な士郎。その手はきつく握り締められている。確かに、それが最善。いや、それどころか、状況からしてもそれしかないだろう。この町の人を見捨てるという選択肢はない。マスターである自分が残ることはできない。マシユは他のサーヴァントと違って座に戻るのではなく、本当に死んでしまうだろう。ジークフリートとゲオルギウスは竜の魔女を倒すためには必要不可欠だ。消去法で、彼女が残るしかない。けれども、

「頭では理解できてる。けど、」

「いいのよ、これで。これでいいの。私、とっても楽しかったわ。また今度、もっと楽しいこと、一緒にしましょう」

「ああ。絶対」

「約束よ」

「ああ、約束だ」

「じゃあ約束の証に。少し屈んでもらえるかしら?座ってる時ならまだしも、立っていると届かないんですもの」

「わかったよ。これでいいか、っ!」

流石の士郎も照れは少しあるが、しようがないなあ、という感じに思っていた。しかし今回は士郎の思考さえもを一瞬奪った。目の前

には王妃の美しい顔、花のような香り、そして口を塞ぐ暖かい感触。少して離れるマリー。その頬には少し赤みがさしている。込められたのは、感謝の念と、少しの愛情。心をそっと暖かくする程度の、優しい気持ち。初めては7歳の時。次は14歳の時。そして、死サイヴァント後という現在いまにおいて。

「ありがとう、シエロ君。楽しみにしてるわ。ジャンヌと、アマデウスによろしくね」

そう言って彼女は満面の笑みを見せた。その笑顔は士郎たちを見送っていた最後の時まで、崩れることはなかった。

決戦の前

ゲオルギウスを連れ戻した士郎たちはなんとかジャンヌたちと合流することができた。

「シロウ、ご無事でしたか」

「ああ、リリイも」

「マリアは？」

アマデウスのその問いかけに、士郎は言葉が詰まった。そこから全てを察したのか、アマデウスは首をすくめた。

「そうか。彼女がそう選んだんだろ？なら仕方がないさ。なにせ一度決めたら頑なに譲らないところもあるからね」

「アマデウスさん、その」

「いいんだ。さて、少し散歩でもしてくるよ。ジークフリートの解呪までもう少しかかるだろうし。終わった頃には戻るよ。いいかな、シロウ？」

「ああ・・・ごめん」

士郎の最後の言葉には何の反応も示さず、アマデウスはどこかへ向かった。心配そうに眺めるマッシュとリリイだったが、追いかけてようとした二人を、また別の二人組が止めた。ジャンヌたちと共にいた二人の少女。共に角を生やしているところからして、この二人もサーヴァントのようだ。

「ええと、二人はいったい？」

「あら、もしかしてあなたがジャンヌたちのマスターなのかしら？」

「あ、ああ」

「これはこれは、ご挨拶が遅れました。私バーサーカーのクラスで現界しました、清姫と申します」

「ランサークラスのエリザベート・バートリーよ。よろしくね、子イヌ」

「エリザベートさん、私たちのマスターにもなるお方ですよ。それは少し失礼なのでは？」

「いや、いいよ。俺はそんな大層な人間じゃないさ。マスターって呼

ばれ方も、そんなに好きじゃない。好きに呼んでくれて構わないよ」「ほーら見なさい。そもそも私はもつと私にふさわしい、素敵なマスターといつか出会うんだから」

「あらあら、妄想もその辺にしてくださいまし。それはともかくとして。あなた、とても正直なお方ですね。自分を卑下しているのではなく、本気でそう思っているのがわかりますもの」

「ええと?」

「ですから、是非私のますたあ旦那様になつてくださいますませ」

ぶつ飛んだ告白にマシユが呆然とし、リリイが顔を赤くしてあわあわし、エリザベートが白い目で清姫を見るといことがあったが、とりあえず二人ともサーヴァントとして士郎たちに協力してくれるらしい。

新たに3人のサーヴァントを仲間に加えた士郎たち。ただ一人、士郎は解呪が終わった3人が呼びにくるまで深く考え込んでいた。

—————

明日が決戦。それに備える為に、彼らはその夜はゆつくりと休むことにした。ベースを設置し、士郎の作った料理をみんなで食べる。意外や意外にバーサーカーであるはずの清姫が士郎の手伝いをしてくれた為、人数がだいぶ増えた今でもそんなに大変ではなかった。

「いよいよ明日、オルレアンに攻め込む時だな」

「はい。マリーの仇も必ず取ります」

「とりあえず、ジークフリートがファヴニールの、ジャンヌが黒いジャンヌの相手をする事になるだろうな。みんなにはその周りの敵を任せたい」

「子イヌ、私もどうしてもぶつ飛ばさなきゃ気が済まない奴がいるの。そいつは私に任せてもらえる?」

「それってもしかして、」

「カーミラよ。あいつだけはどうしても私が倒したいの」

「わかった。任せるよ」

「ありがとう」

サーヴァントの数で言えば互角、いや上回っているかもしれない。

しかし相手には竜の軍団、そしてファヴニールがいる。ジークフリートがこちらにいたとはいえ、最強の竜種は間違いなく手強い相手となるだろう。

「この場合取るべき行動は二つ。隠密行動で不意をつくか、正面突破するかだ。もつとも、俺たちの居場所は既に知られている。不意をつく意味もないだろう。つまり、実質一択なわけだ」

ジークフリートの言葉に全員が頷いた。オルレアン奪還のためには城の中に入り、その奥にいるであろう黒いジャンヌを倒さなければならぬのだ。それが出来てようやくこの特異点の修復が終わる。

「それじゃあ、あとは各自備えてくれ。明日、絶対勝とう」

士郎の言葉で最後の作戦会議は解散となった。普段なら寝る準備を始めていた士郎がベースから離れようとしているのを見て、ジャンヌはそっとその後をつけた。

決意を新たに

手頃な切り株の上に座り込む士郎。空を見上げると、僅かな星と雲が見えた。しばらくそのままできるとつい数時間前に一緒に空を見ていた相手のことを思い出す。

あの後、彼女が後から来ることはなかった。それはつまり、そういうことなのだろう。ジークフリートは無事に解呪できた。これで明日の決戦の勝機は大きくなっただろう。この戦いに勝つためには、最善を尽くした、はずだ。けれども、

『誰も死なせないようにと願いながら、多くを救うために、一人に死んでもらった』か。あいつの言ってた通りになっちまったな、俺」

かつてある人物が自分にそう言った。いずれ自分が自己矛盾に押しつぶされ、絶望すると。自分はその言葉を受け、その現実を見せられ、それでもなお後悔しないと、そう言い放った。後悔はしていない、してはいけない。それは、彼女の覚悟を、約束を、蔑ろにしてしまう行為だから。でも、

「あいつは、これを何度も経験したんだろうな」

その果てに彼は、自分の理想に絶望したのだ。心が摩耗し、大切なものを忘れてしまい、彼は自らを「過ち」と称した。それ故に自らの存在を消そうとした。自分は、本当にあいつに追いつくことはない、そう言い切れる自信が、ほんの少しだけ、揺らいでいた。

「シロウ、どうかしたのですか？」

「ジャンヌか」

士郎の隣に腰を下ろすジャンヌ。ジャンヌもまた、マリーと特に親しかった。何があったか聞いた時、一瞬悲しそうな顔をしたものの、彼女は士郎に笑顔で「お疲れ様でした」と言った。友達になれてあんなに喜んでいたので、泣いても、士郎を責めても文句は言えない。それでも、彼女はそうしなかった。

「少し、考え事をしていただけだよ。ジャンヌは？」

「私も明日のことを。それから、士郎のことが気になったので。あなたは、マリーを置いてくるしかなかったことを、悔いているのですか

？」

「・・・あの時、竜の魔女に勝つための最善の方法がなんなのか、いっぱい考えた。けど、あれしか思いつかなかったんだ。もっと何かあったんじゃないかって、少しは思う」

あれはマリリーが自分で決めたことだ。その決断は確かに尊重しなければならぬだろう。けれども、

「多くを救うために一人を切り捨てる。前に俺にそう言った奴がいてさ、その時の俺はそれを受け入れることができなかつた。だって誰も悲しまなくていいようにする、俺が目指していた正義の味方つてのは、みんなを救う存在だったから。俺の手の届く範囲の中で、誰にも泣いて欲しくはなかつた。けど、マリリーさんを犠牲にすること、ジークフリート、そこからフランスを助ける。これは、俺の否定したことと、どう違うんだらうな」

例えば、彼は直接手を下していなかつたこと。例えば、彼女が自ら進んでその役割を買って出たこと。些細なことをあげてみたら、それは多くあるかもしれない。でも、果たしてそれは、あの男が言っていたことと、どう違う？無力なままだった頃の俺と、どう違う？

「マリリーは、泣いていたのですか？」

「えっ？」

空を見つめたまま、ジャンヌは士郎に問いかけた。士郎の視線を感じ、ジャンヌは士郎へと視線を向け、また問いかける。

「あの時、マリリーは泣いていましたか？」

「・・・いや。最後まで、笑っていたよ」

「そうですか。何か言っていましたか？」

「とても楽しかった、ってさ。後、また楽しいことを一緒にしようって言うってたな」

「そう、ですか」

「だったら、大丈夫ですよ」

「えっ？」

「あなたは、あなたの手の届く範囲で、誰も泣かせていないじゃないですか」

彼にもらった勇氣と、立ち上がるための強い心。今度は自分が、彼に立ち上がる力を分け与えたい。そんな気持ちを込めて、ジャンヌは言葉を続ける。

「あなたはマリーにとって、希望だったんだと思います。だからあなたに任せることにしたんです、彼女の愛した国を。私は見ていなかったのでわかりませんが、マリーの笑顔は無理して作ったものでしたか？」

「・・・いや、違ったと思う。あれは、そう、心から笑ってた感じがする」

「なら、きつとそれは正しい選択だったのでしよう。だって、その選択から、マリーの笑顔が生まれたのですから」

「そう、だな」

マリーの笑顔を思い出してみる。そう、本当に綺麗な笑顔だった。それは養父や所長と同じく、希望を見つけたような、悲しみなんてないような、そんな笑顔。全く、こんなことじゃ、アーチャーのやつになんて言われるか。それ見たことかとバカにされるかもしれない。それに、マリーの約束も、こんな様では守れなくなってしまう。ふつ、と笑みが漏れる。迷いはない。今度は自分が助けられてしまった。

「ありがとう、ジャンヌ。もう大丈夫だ。迷いはないよ」

「いえ、私も助けてもらいましたから、おあいこですよ」

「あ、そういえばジャンヌによろしくって、最後に・・・」

「シロウ？」

ふと思いついてしまったのは、別れの言葉の前のこと。あの時、確かに自分はマリーに、

「どうかしましたか？」

「えっ？」

無意識のうちに、口元へ手を持っていつてしまっていた。思わず顔が赤くなる。その様子に疑問を持ったジャンヌから洗いざらい話させられ、ジャンヌの機嫌が少し悪くなったり、それを直してもらうのに士郎が苦勞したりと大変なこともあったとか。

時を同じくして、マシユはアマデウスと共にいた。どうしても気になつていたことがあつたのだ。

「それで、どうしたんだい？」

「いえ、その。マリーさんのことなのですが、その、すみません」

「何を謝るんだ？」

「いえ、だって、私たちはマリーさんを置いて」

「そうするように彼女に言われたんだろ？心配ないよ。彼女のしそうなことくらいわかつてるさ」

「その、悲しくはないんですか？」

「悲しいは悲しいさ。けど、それ以上にマリアとまた会えてよかつたと思つてる。もう2度と会えないとしても、僕としても楽しい時間を過ごさせてもらったからね」

「ですが、サーヴァントならまたどこかで会えるのでは？」

「英霊だけで星の数もいるんだ。仮に運良く召喚されたとしてもお互いに殺し合わなければなくなるしね。今回みたいなのは、そうだね、奇跡みたいなものだよ」

強がつている様子もなく、アマデウスは淡々と話す。マシユには、理解できない。アマデウスにとつてマリーは、きつと特別だった。その相手を失つても今まで通りだ。

「マシユ、君は人間をどう思う？」

「人間、ですか？私は、とても素晴らしい生き物、だと思います。特に、先輩のような方はなおさら」

「まあ確かに彼は普通の人と比べると確実に違うね。良くも悪くもだけど」

「アマデウスさんは、確か人間は醜いものだと言つてました。私にはわかりません」

「人間が醜いのは当然さ。そこがまた、人間のいいところな時もあるんだけどね。君はそうだね、無色な感じだね。まだ多くを見てない」

「はい、お恥ずかしながら」

「いろんなものを見ることから始めるといい。シロウに連れて行つてもらいたまえ」

「先輩に、ですか？」

「ああ。彼から色々教わるといい。彼は君によく似ているからね」

「・・・はい」

「さて、そのためにもこの戦いは負けられないな」

「はい。私も精一杯頑張ります！だって私は、先輩のサーヴァントですから」

夜は更け、士郎が眠りにつく。サーヴァントたちは決戦のために士気を高め、あたりは風の音しかなくなった。決戦の時は、近い。

オルレアン奪還開始

オルレアン城を取り囲むのは無数のワイバーンたち。決戦を予期していたのか、黒いジャンヌもまた、フランス中に放っていた全ての竜を集めたのだろう。

「あまり時間をかけてると、ワイバーンたちに包囲されるからな。一点突破で、城を目指そう」

「ええ。あの私との戦いも、ここで終わらせませす」

領きあう士郎たち。様子を伺いながらタイミングを計る。

「よし、行くぞー！」

士郎の合図で一斉に走り出す。気がついたワイバーンたちはそのままの勢いで斬り、燃やし、薙ぎ払う。邪魔が入る前に城を目指す。そこへどこからか歌声が聞こえた。

「これは、なんだ？」

「またサーヴァント？」

戸惑う彼らへと大量の矢が降り注ぐ。一撃一撃は大したことがなさそうだが、その数はあまりにも多く、避けることも、弾くこともできそうにない。

「マシユー！」

「はいー！」

咄嗟に士郎とマシユが宝具で矢の雨を防ぐことができたが、彼らの足は止まってしまった。そこへ二人のサーヴァントが歩み寄る。

「殺してやろう、一人残らず。私の弓で、仕留めてやろう」

「愛しい君へと私は歌おう。ああ、クリスティヌ、クリスティヌ」

「先輩っ」

「やるしかありません。シロウ、私がここで食い止めます。他の方は先へ進んでください」

「でも、ゲオルギウス！」

「シロウはみなど一緒に。ここは任せてください」

「っ、頼むー！」

周りの竜を斬りはらいながら、士郎たちは城へと進み続けた。対峙

するサーヴァントたち。アーチャーの矢をゲオルギウスがはじき、剣と仮面のアサシンの爪がぶつかり合う。

「マリー王妃のおかげで私はここにいる。その彼女が託した彼らを勝利させることこそ私の使命。いぎ受けてみよ、我が剣、アスカロンの切れ味を！」

『士郎くん、超大型の反応が城から現れた。間違いなく、ファヴニールだ。更にサーヴァント5体、ここが正念場だ！』

通信の直後、空を覆う巨大な影が現れた。竜の魔女の操る最強の竜種が、配下の竜たちを連れて戦場に來たのだった。だが、

「先輩、あのファヴニール、怪我をしませんか？」

「ああ。けどおかし。ジークフリートにあの時つけられた傷なら、もう既に回復してもおかしくないのに」

「だが、これはこちらにとつては好都合だ。全快時のファヴニールを相手取るとしたら、正直言うと、勝ち目は小さかっただろう。あれとの戦いは、無数の敗北の中から、勝ちを掬い上げたようなものだ。だが、今のやつならば勝率は僅かながらも高くなっている。マスター、俺が奴を」

「ああ、頼んだ！他のサーヴァントたちは、俺たちでやるぞ」

一人、ファヴニールの前に立つジークフリート。相手もまた、こうなることはわかっていたようで、ジークフリートのみを見据えていた。

「よもや三度目顔を合わせる事になるとはな。すまない、そちらは手負いのようだが、俺は死力を尽くしてお前を倒そう。それこそが、俺のここにいる理由、俺に望まれた使命だから」

背中に背負っていた剣を抜き構えるジークフリート。ファヴニールが吠えて、ジークフリートが大地を蹴る。かつて行われた激しい戦いが、今再び始まった。

領地の支配

戦闘は激しさを極めた。デオンとリリイが踊るように剣を振るい、エリザベートとカーミラの得物が火花を散らす中、清姫の火炎弾が魔力弾を相殺する。アマデウスとマシユはサンソンと戦い、白と黒のジャンヌが死闘を繰り広げた。それだけならまだしも、ワイバーンたちの攻撃も捌かなければならないこちらのほうが状況的にも不利だ。士郎はというと、ヴラド三世と再び一騎打ちを繰り広げている。前回と比べてヴラド三世がより手強くなったと感じた士郎。つばぜり合いの状態になる二人。ヴラド三世の顔に笑みが浮かぶ。

「以前のようにはいかんど。今回は殺してでもその血を奪うつもりなのだからな」

「望むところだ」

ヴラド三世の槍を押し返し、追撃する士郎。ヴラド三世はその攻撃を槍で防ぎながら後退する。逃さないように一歩踏み込む士郎。と、突然士郎目掛けて地面から杭が出現し、刺そうとした。とつさに躲したものの、士郎の服に切り傷がつく。ひとまず距離を取る士郎。

「貴様はすでに我が領土に入っている。ここで戦う限り、貴様に勝ち目はないぞ、人間のマスター」

「領土・・・キヤスターがやってたみたいなものか？一定範囲内に限定して能力が上がってるわけか。なら、その領土を奪えば、」

ふっ、と一息吐き、士郎は迫り来るヴラド三世へと切り掛かった。

撃ち合いの中で、言葉を紡ぐ。

「I am the bone of my sword.」

「なんだ？遺言か、命乞いか？それは聞けんぞ」

振るわれる槍や飛び出す杭をかわし、紡ぎ続ける。

「Steel is my body, and fire is my blood」

剣が碎かれるもまたその手に握られる。時間を稼ぐために防御に徹する。この守りはそうやすやすと突破はできない。

「I have created over a thousand blades
サーヴァント以外のワイバーンも更に多く向かってきている。な
らば招く対象の範囲を広げよう。ワイバーンたちは認識済みだ、でき
ないことではない。」

「Unaware of loss.」
「Not aware of gain.」

「まさか、これは呪文か？何をするつもりか知らぬが、無駄な足掻き
を」

「Withstood pain to create weapons,」

「waiting for one's arrival.」

戦況をひっくり返すべく、士郎は数歩下がり干将・莫耶を投げつけ
る。防ぎきるヴラド三世だったがそれで数秒の時間が稼げた。その
数秒があったからこそ、反撃が始められる。

「I have no regrets. This is the only p

「My whole life was
”unlimited blade works”！」

士郎を中心に地面に亀裂が入る。炎が湧き、光が溢れる。眩しさに
敵味方問わずに目を閉じた。マッシュが目を開くと、あれだけいたワイ
バーンも、ヴラド三世も、そしてマスターの士郎も忽然と姿を消して
いた。

青空と雲、光の帯が広がっていたはずの空は赤くなり、草原と城は
見当たらなくなり、あたりは荒野へと変わっていた。そこに存在して
いたのはヴラド三世と士郎、ワイバーンの群れ、そして形は違えど同
じもののみ。剣が。ありとあらゆる剣が突き立てられた大地が広
がっていた。

「ここは、何だ」

驚くヴラド三世。いや、その顔は驚きだけではなく、また別の感情もあるように見える。その世界に対し恐怖を感じていたのだ。それもそのはず、だってそこは既に彼の領土ではなく、ましてフランスでもなかった。

「お前が自身の領地を作って戦おうとしてたからな。俺もそれに倣ってみただよ。確か、お前は無限に杭を生み出すことができたんだっただか？それなら、お前の生み出せる杭は果たして無限の剣相手に、どれほど持つんだろうな」

片腕を上げる士郎。それに応えるように周りの剣がいくつも浮かび上がり、ヴラド三世とワイバーンたちに狙いを定めた。この時、ヴラド三世は悟った。このマスター、人間でありながらも、自分では倒せない相手だと。狂化の呪いがなければわからないが、少なくとも今は、自分の完全な敗北を悟った。

「神秘も薄れた時代から来ているただの人間のマスターだというのに、これほどまでとはな」

その言葉を呟いた直後、剣の雨がヴラド三世を含むワイバーンの群れに向かって降り注いだ。

戦いは激化し

士郎のことは気がかりだったが、マシユたちも気を緩めるわけにはいかなかった。少なくとも、自分と士郎との間のパスが切断されていないことから考えるに、生きているのだろう。だったら、自分にできることは、

「やああつー！」

「ぐっ」

体重を乗せた盾による一撃は、サンソンを大きく後退させる。以前よりもサンソンの狂化が上がり、動きが単調になっているのもあるが、マシユの強い意志が彼女の力をさらに引き出していた。よろけたサンソンに重圧がかかる。アマデウスの宝具で動きを止めたのだ。

「マシユー！」

「これで、倒れてー！」

大きく飛び上がり盾を振り下ろす。その一撃はサンソンの体を地面にめり込ませるほどだった。体が粒子に変わり始めるサンソン。そこから彼は姿を消した。

「マシユ、お疲れ様」

「いえ、アマデウスさんの援護があつたおかげです。ありがとうございます、います、っ!?!」

息をつく間も無く、城からさらに現れたワイバーンがマシユに襲いかかる。突然のことにマシユもアマデウスも反応が遅れた。

肉が裂ける音がする。しかしそれはマシユでも、アマデウスのものでもなかった。目の前のワイバーンを一閃したのは、白と黒の刃。それを振るつた人物がマシユの方を向いた。

「無事か、マシユ?」

「先輩ー！」

「やあ、シロウ。助かったよ、ところで今までどこへ?」

「ちよつとな。とりあえずヴラド三世は倒した。こっちは?」

「たった今、サンソンを倒したところだよ」

「そうか。なら、アマデウス。悪いんだけど、ゲオルギウスの元へ行つてもらえるか？やっぱり一人だと心配だから」

「了解したよ。マシユ、シロウのことをしっかりと守るんだよ」

「アマデウスさんも、気をつけてください」

ニッコリと笑顔を向けてから行くアマデウス。士郎とマシユは最も激しい戦鬪を繰り広げていた、ジークフリートの元へ向かった。

—————

剣と剣が激しくぶつかり合う。一つは白百合の騎士、もう一つは百合の渾名を持つ騎士。奇しくも同じセイバーにして、女でありながらも男としてもあることとなる二人の戦いは、激しくも美しいものだった。

「はあっ」

「ふっ」

攻勢なのはデオンではあるが、リリイは確実にその攻撃を防いでいた。そして攻撃の隙を見つけては反撃するが、デオンはそれらの攻撃を捌いた。

「やるじゃないか。君はサーヴァントとしては不完全だって主人からジャンヌ聞いていたけど」

「こう見えてもれっきとした騎士、それも騎士の王様になるんです。それにシロウに鍛えてもらったんです。そうそう負けていられません」

「なら、見せてもらおうかな。未来の騎士王様の實力」

そう言つて再び剣と剣が激突する。少し離れたところではカーミラとエリザベート、清姫が戦っていた。

「この、この、このー！」

「ええい、忌々しいわね。なぜあなたがサーヴァントなんかになれたのかしら？私の方こそが血の伯爵夫人の完成系だというのに」

「うっさいわね。私からしたらあんたの方が嫌な存在よ。私はあんたみたいにはなりたくない。あんたは私の、どうあつても変えられない未来、罪の塊なのだから。でも、それでも、私はあんたにはなりたく

ない！」

「その私と戦って否定するのは、ただの自己満足の欺瞞よ。罪から目を背けているだけのこと。嘘をつき続けているだけね」

「やれやれ、何を言い出すかと思えば。私はそうは思いませんが」

二人の会話に口を挟む清姫。その目はカーミラを見据えている。

「エリザベートさんの今の言葉、確かに自己満足かもしれないね」

「あら？ 賛同してくれているじゃない。なら何がそうは思わないのかしら？」

「それでもそこには嘘はありません。今ここにいる彼女の想いには欺瞞などありません」

「何を根拠に」

「あらあら、それはもちろん。この私が嘘を見逃すはずがありませんもの」

ニツコリ笑顔でそういう清姫だったが、カーミラにはその背後に火を吐く竜が見えた。

黒いジャンヌを追え

初めから、どこことなく違和感があった。セイバーと同じように別の側面が現れたにしては、本人からは微塵もそんな思いも、可能性も感じなかったからだ。そもそも、共通点さえ思いつきもしなかった。

今も白と黒の彼女たちは戦っている。その様子を見ながら、解析してしまった、その身体を。そして気づいてしまった、その正体に。思ってしまった。

彼女を、救うことはできないのかと

—————

防戦一方ながらも、リリイはデオンを確実に誘導していた。一方エリザベートは連続攻撃でカーミラを後退させる。両者が近づいた時に、リリイとエリザベートは同時に距離をとった。

「あら、何のつもり？そんなことではっ!？」

突然カーミラとデオンの周りを炎が囲った。清姫の宝具、『転身火生三昧』。飽くなき執念のみで竜へと昇華した彼女自身の逸話が宝具となったもの。その炎によって二人の動きを止めたのだ。

「エリザベートさん、今です！」

「リリイさん、耳をふさいだほうがいいですよ」

「えっ？あ、はい」

「まっかせて！サーヴァント界最高のヒットナンバーを、聴かせてあげる！鮮血魔嬢！」
パーティ・エルジエーベト

響いたのはそれはそれはもう、地獄と形容しても甘いんじゃないだろうか、という音色だった。耳を塞いでいたはずなのにこの目眩、正直、耳を塞いでいなかったら自分たちも危なかったのではないかと、リリイは思った。純粋な攻撃力をも持つその音楽は、カーミラとデオンを襲う。歌が終わった時には、二人とも粒子になり始めていた。

「やれやれ、こんな幕引きとはね。王女にも怒られてしまうじゃないか」

「あなたの剣、とても気品のある美しい剣でした。勝手にですけど、勉強させていただきました。また、今度は真つ当な場で剣を交えましょう」

「そうだね。君とは色々決着をつけないと行けない気もするし、そうしようか」

「ええ。必ず」

「全く、過去が未来を否定するだなんて、本当に我ながらデタラメね、あなた」

「何よ！勝ったのは私なんだから、さつさと帰りなさいよ」

「本当に、無知で幼稚で愚かな子。でも、そういうところは眩しいわね。私はずっと一人だけど、あなたは、どうかしらね」

それぞれが相手と言葉を交わし、カーミラとデオンは消えていった。どちらも、笑顔だった。どこことなく、安心したような、ほっとしたような、そんな笑顔。

「さて、私たちはワイバーン退治と行くわよ！」

「慌ただしいですね。良妻としてはもつと余裕を持って行動するべきなのですが、今はそうも言っていられませんか。早くます旦那様あと合流しませんと」

「はい！行きましょう」

—————

巨体から繰り出される爪による一撃は、人はおろか、並のサーヴァントであればやられていただろう。しかしジークフリートはその一撃を剣で受け止め、素早く駆け寄り反撃する。手応えはあるものの、致命的なダメージには至っていない。

突然ジークフリートの体が吹き飛ばされる。長い尾を鞭のように使い、ジークフリートの体を弾いたのだった。悪竜アーチャー・オブ・ファヴニールの血鎧により、高い防御力を持っているジークフリートだったが、衝撃により体内に与えられたダメージが予想より大きく、動きが一瞬止まってしまった。それを見逃すファヴニールではなく、炎が勢いよく放たれる。

「させません！」

ジークフリートの目の前に飛び出したマシユが宝具を展開、炎を一時的に食い止める。その隙に士郎がファヴニールに弓矢を向ける。放たれた偽・螺旋剣には空間ごと抉る力がある。それはファヴニールの片足をたやすく貫き、その痛みで炎が止まる。

「ジークフリート！」

「わかってる。ファヴニールよ、受けるがいい。幻想大剣・天魔失墜！」

振り下ろされた剣から発せられた斬撃は、真つ直ぐにファヴニールに吸い込まれた。激しい咆哮をあげ、倒れる邪竜。しかしまだ消える気配がない。

「くっ、これでは倒すには至らないのか？」

どうやらファヴニールは何らかしらの強化を施されていたようだ。もう一度宝具を使用するには魔力がたまりきっていない。ジークフリートが膝をつく。しかしファヴニールが立ち上がる前に、士郎が駆け出していた。

「マスター、無茶をするな！」

「先輩！」

「投影、開始」

その手に握られるのはゲオルギウスの愛剣。害意や悪意から遠ざける無敵の剣、そして竜殺しとしても名の通っている剣を手に、勢いよく振り下ろす。

「力屠る祝福の剣！」

その一撃はファヴニールの強固な皮膚も物ともせず、容易く切り裂いた。断末魔の悲鳴をあげたファヴニールは、地にその頭が落ち、ピクリとも動かなくなった。やがて体は徐々に粒子状に変わって行く。それと同時に、ワイバーンたちの統率されていた行動が崩れ始めた。

「やったか」

「反応消滅確認。ファヴニールは完全に倒されました」

「それだけじゃないな。纏め上げていた存在がいなくなり、竜のコントロールがうまくいかなくなっているみたいだ。それに、数の面でも

一気にこちらが有利になったぞ、マスター」

ワイバーンの統率が崩れただけでなく、フランス軍もまた共に戦ってくれていたのだ。一人の騎士により導かれているフランス軍の援護により、ワイバーンの数は徐々に減り始める。

「一気に攻めるぞ、二人とも」

地を蹴り、3人は戦いへと身を投じる。近くのワイバーンを斬り伏せながらも、視線の端で、士郎は黒いジャンヌが謎の男に連れられ、城へと撤退するのが見えた。ジャンヌの周りには謎のヒトデのような生き物が大量に発生していた。急いで駆け寄った3人はジャンヌの周りの敵を一掃した。

「大丈夫か、ジャンヌ?」

「はい、ありがとうございます。ですが急いでもう一人の私を追わなければ。また新たにサーヴァントを呼ぶつもりですよ」

サーヴァントたちとの戦いを終えた他のみんなも集まってきた。ワイバーンのほとんどは倒されたものの、今度は大量の海魔が発生していた。

「ここは俺たちに任せろ。マスターたちは城へ向かえ」

「やれやれ、やっと終わったと思ったけど、もうしばらく頑張るとするか」

「シロウ、ここは我々三人に任せ、行ってください」

「頼むぞ、ジークフリート、アマデウス、ゲオルギウス」

「ああ。だからそちらも、決着をつけてこい」

その場はジークフリートたちに任せ、士郎たちは城内へと入り、黒いジャンヌ又たちを追いかけた。

狂気の男

城内にも大量にいた海魔たちと戦いながら、士郎たちは城の奥へと進んだ。と、一人の男、明らかにサーヴァントがやや開けた通路に立っていた。先ほど黒いジャンヌを呼び戻したその男、

「ジル……」

「まさか、ファヴニールを倒し、ここまでくるとは。正直申しますと、感服しました、ジャンヌ、そして人間のマスターよ。しかし、なぜ私の邪魔をする！何故またジャンヌを殺そうとするのですか！」

怒りに顔を歪め、声を上げるジル。その姿にジャンヌは悲しそうな表情を浮かべた。かつて共に戦った戦友、フランスの兵を束ねた誇り高き騎士、その未来が自分を原因として狂気に吞まれ、多くの子供達の死につながった。そして今、このフランスを滅ぼそうとしたものの中にも彼がいる。その事を悲しく思ったのだ。ジャンヌのその様子を見て、士郎は一步前へ出た。

「ジル・ド・レエ。あんたに、聞きたいことがある」

「何ですか？……ここまで来たことに対する敬意を払って、一つだけなら答えて差し上げよう」

「ならはつきりと聞こう。あんたが忠誠を誓ってるあの黒い方のジャンヌ、あれは本当に本物のジャンヌ・ダルクなのか？」

その質問に疑問符を浮かべるマシュたち。士郎の質問の意味がよくわかっていないようだ。唯一ジャンヌだけは思うところがあつたのか、士郎と同じようにジルを見ていた。

「何を言うかと思えば。聖女とて怒り、憎みもしましょう。あれこそはまさしく、ジャンヌの秘めたる側面そのもの！」

「……そうか」

「では、私は自分の行いを止めなくてはいいけませんね」

「いくらそちらのジャンヌでも、彼女の邪魔はさせませんぞ。さあ我が盟友プレラータイ、今ここで彼らを倒すための力を」

手に持っている本をかざし、海魔を召喚するジル。もう一人のジャンヌのための時間を稼ぐつもりでいるようだった。

「うえ、こんなにいっぱいいると気持ち悪いわね」

「汚らしいですね。ます旦那様たあ、私の身を守ってくださいませ」

「なんでさ!？」

「先輩、来ます!」

二人して自分を盾にするサーヴァントたちに、状況も忘れて思わずツツコミをしてしまった士郎は、マシユの言葉にハツとする。海魔たちが一斉に襲いかかって来たのだった。

—————

「くつ、数が多すぎる」

「それだけじゃないよね、これ。倒せば倒すほど数は増えてるし」

「アマデウス殿、宝具で動きを拘束することは」

「んーできるにはできるけど、この数を長時間抑えるのは流石に無理だね」

城の外、ジークフリートたちもフランス兵を守りながら海魔たちと戦っていた。しかしこの海魔たちは、ブレイク・スベルブック螺旋城教本に召喚され、本人を倒す、あるいは本を壊すかのどちらかをしなければ消えない。さらに倒された血肉から再召喚が可能という厄介極まりない性質を持っている。

「このままでは、こちらが消耗するだけだな」

「しかし、戦い続けるしかないでしょう。シロウたちが決着をつけるまでは、何としても持ちこたえなければ」

草原を二種類の足音が駆け抜ける。一つは人のもの、一つは馬のもの。目指す先には城が見えた。

「まあ、あれは何かしら? ヒトデ?」

「どうやら厄介なものが召喚されているようだな。君は城の中を目指したまえ。外のあれは私が対処しよう」

「ええ。きつとここでお別れだから改めてお礼を。助けてくれて、あ

りがとう。前までだったらベーゼの一つでもするところだったんだけど、」

「いや、それはこちらとしても辞退したい。私のようなものには、君ほどの者から与えられるのは、その言葉だけで十分だ。王族の騎士のような事を経験することになるとは、思ってもいかなかったがね」

「そう？それじゃあ私の感謝の言葉を受け取ってくださいる？」

「ああ。それでは、始めるとしよう！」

二手に別れる彼ら。片方はジークフリートたちのいる方向へ、もう片方は城へと向かった。

「さて、掃除屋は掃除屋らしく働くとするかね」

宙に現れるのは複数の剣。それらが一気に海魔の群れへと発射され、その場で爆発した。両手に白と黒の剣を持ち、男は自らも戦いに加わった。

再会と共闘

海魔と戦いながらも、士郎は敵を分析していた。ジル・ド・レエが生前に魔術を使用していたという話は聞いたことがない。つまり、これらの海魔を召喚する能力は、ジル本人の能力ではないはずだ。

「あの本か」

実際、その本をかぎした時からこの辺りに海魔が現れ始めた。さらにこの尋常じやない数。あの本が宝具で、それ自体が何らかしらの魔力を持っていると予想できる。

「隙を作って一気に近づくか、それとも狙撃するか」

「先輩、後ろです！」

「っ、しまっ!？」

ジルに気を取られすぎた士郎の背後に大きめの海魔が現れていた。その海魔の牙のようなものが士郎を狙った。

が、その海魔は歌とともに飛んで来た魔力弾によって弾かれた。その声に士郎は心当たりがあった。信じられないというような表情で魔力弾が飛んで来た方向、歌が聞こえて来た方向へ目を向ける。

「遅れてしまってごめんなさい。今こそ正義の味方として名乗るべきときよね。フランス国王妃、マリー・アントワネット、ただいま参上！こんな感じかしら？」

「マリーさん!？」

「マリー、なのですか？」

「忘れてしまったの？せっかくジャンヌと友達になったのに。それにシェロ君も、あんなことまでしておいて忘れられたら、私もさすがに悲しいわ」

ゲオルギウスと自分たちを逃がすために、一人竜の魔女に立ち向かったフランスの王妃、マリー・アントワネットに間違いなかった。あの時、どうやって生き残ったのかはわからない。けれども、生きていてくれた。それが嬉しかった。

「本当に、マリーなのですわね」

「ええ。またあなたと会えて嬉しいわ、ジャンヌ」

「私もです。でも、どうやって生き延びたのですか」

「ふふっ。とても不器用で、でもとっても優しい騎士ナイトに助けもらったの。彼も外の援護に行ってるわ」

—————

ジークフリートたち三人はその男と対峙していた。睨みつけるような視線を受けてなお、その男は不敵な笑みを崩さなかった。

「君は誰だ？」

突如現れた新しいサーヴァントにジークフリートたちは警戒した。海魔を倒していたものの、自分たちの味方と決まったわけではなかったからだ。そして何より気になるのは、

「何故その剣を君が持っている？」

男の手に握り締められているのは、白と黒の夫婦剣。彼らからすれば、士郎のよく使う愛用の武器のはずだった。しかし、この男が持っているそれは、寸分違わずに同じものだった。

「そう警戒するな。君たちと戦うつもりはない。私は、この事態の解決のために動くだけだ。そしてこの剣についてはだが、これは私の作り出した贋作にすぎないということだ。それよりも、こいつらを何とかするとしよう。少なくとも、城内の敵さえ何とかできれば問題はなはずだ。それまで、時間を稼ぐとしよう」

そう言い、男は再び海魔の群れへと切り掛かった。敵意がないのであれば、ひとまずは大丈夫だろう。そう判断したジークフリートたちは男の後を追ひ、戦いを再開した。

竜の魔女の元へ

「騎士^{ナイト}、ですか？」

「ええ。本人が名前を覚えてくれなかったんだもの、そう呼ぶしかなかったの」

再会を喜ぶ2人。しかし状況はあまりよろしくはなかった。既に海魔の数は増え、ジルの姿を確認することさえも大変になっていた。分厚い海魔の壁で道が封鎖されている。

「シロウ、どうしますか？」

「流石にこの数を突破するには骨が折れますわね。焼こうにも、室内ですと難しいですし」

「これが全員私のファンなら嬉しいんだけど、そうじゃないから困りものよね」

「それに、切っても切っても再生するばかりです。このままでは、」

「いや、こいつらはいいつが持っている本の力で召喚、維持されている。多分、あれには独立した魔術回路のようなものがあるんだと思う。つまり、ジル本人の力じゃなくて、あの本の力なんだ」

「つまり、あの本からの魔力を断つことができれば、この海魔が一斉に消えるよ？」

「俺の予想が正しければな。あとは、この壁をどう突破するかだ」

「何をしようとも無駄ですぞ。このジル・ド・レエ、あらゆる手を尽くしてでも、ジャンヌに勝利をもたらすのです！」

狂気、むしろ狂喜に満ちた声をあげるジル。自身の海魔たちの召喚能力に絶対の自信を持っているようだった。しかし士郎には策があった。

「あの海魔たちはいわば使い魔に近い。つまり、あの本と契約しているみたいなものだ。なら、それを断ち切れればいい。それに最適の武器を、俺は知ってる。あとは、あいつに近づぐ方法なんだが、聞いてくれ」

作戦を伝え終わった彼らが改めて自分たちに向き合うのを見て、ジルは声を上げて笑った。

「何をしようとも、ここは通しませんぞ」

「リリー！」

「選定の剣よ、力を！勝利すべき黄金の剣！」

リリーの放った閃光は、海魔の壁を貫き、大きな穴を開けた。

「ふははっ、その程度では「清姫！」何!?!」

「はい。燃やし尽くします！」

再生が始まろうとしたその瞬間、清姫の炎がその穴が塞がるのを炎で食い止めた。その穴へとマリーの宝具、硝子の馬、『百合の王冠に栄光あれ』が通ろうとするのが見えた。

「させませんぞ！」

「こちらの台詞です！」

マリー目掛けて打ち出された魔力弾をマシュが前に飛び出し盾で防いだ。その上を飛び越えて馬がジルへと向かった。その上から飛び出したのはエリザベート、その槍でジルの首元を狙った。しかし堕ちても元は騎士、危機一髪でその槍を躲した。

「ふははっ、惜しかったですな。ですが、私にはその程度では届かないのです」

「あら、まだ終わりじゃないわよ。ねえ、ジャンヌ、子イヌ！」

いつの間に来ていたのか、エリザベートと前後を入れ替えるようにジャンヌが前へ踏み出した。その旗を振るい、ジルの手の中の本を宙へ弾き飛ばした。

「シロウ、お願いします！」

「ああ！」

マリーの馬に乗っていたのは、エリザベートだけではなかったのだ。ジルの後ろに回ったその馬には、士郎が乗っていたのだ。飛び上がる士郎の手には、稲妻のような形に捻れた短剣。それはあらゆる魔術を無へと返し、契約さえもを無効にする。

「破戒すべき全ての符！」

刃が本に刺さった瞬間、海魔たちは一斉に弾け飛んだ。ただの一体

も残らず、あれだけ再生を繰り返していた奴らは、もう蘇る気配もなかった。しかしこの本には自己修復機能もあるため、あくまで一時的に海魔の召喚を封じたに過ぎない。

「子イヌ、その子たち連れて先に行きなさい！」

「ますたあ、^{旦那様}ここは私どもで食い止めますので」

「ジャンヌ、シエロ君たちと一緒に行って。あなたも、ちゃんと伝えたいことを伝えて来たらいいわ」

「マリー、みなさん・・・はい！」

仲間の声を受けて奥へと進む士郎たち。その先に大きな扉を見つけた。気配からしても、その向こう側にいるのだろう。黒いジャンヌが。頷きあい、彼らはその部屋へと足を進めた。

聖女と魔女

扉の向こうはの部屋は大広間なのだろうか、天井も高く、幅も広い。その部屋の中央、魔法陣のそばに、竜の魔女は立って居た。その傍らには、彼女が呼び出したらしきシャドウサーヴァントが数体佇んでいた。彼女と対峙するように、ジャンヌが前に出た。

「もう来ましたか。思っていたよりも早かったですね。さすがに真つ当なサーヴァントを呼び出す時間はありませんでしたが、この程度ならばいくらでも量産できます。さあ、決着をつけましょう、愚かな聖女よ」

「その前に、一つだけ確認したいことがあります」

「何かしら？今更問うこともないでしょう？」

「いいえ。簡単な問いかけが一つ。貴方は、貴方の家族を覚えていますか？」

「・・・え？」

投げかけられたその問いに、竜の魔女の表情が固まった。その反応に対しマシユとリリイは困惑し、ジャンヌと士郎は何かには納得したようだった。

「私は確かに戦場にいました。その記憶は鮮明に残るでしょう。ですが私の人生では、ただの村娘としての期間の方が圧倒的に長いのです。その記憶を忘れられるはずもありません。だからこそ、貴方は怒り、恨み、怨んだのですから」

「私、は」

「覚えていないのですね」

「っ、それがどうした！私がジャンヌ・ダルクであることに変わりはない！」

「そうですね。確かにその通りです。ですが、これで覚悟が決まりました。シロウ、私はこれから怒りではなく、憐れみを持って竜の魔女と戦います」

「ああ。マシユ、リリイ。俺たちはあのサーヴァントたちの相手をする。ジャンヌ、竜の魔女は頼んだぞ」

シャドウサーヴァントたちが戦闘態勢に入った。その先頭には激しい憎悪と怒りの表情の竜の魔女。その表情の中にわずかな恐怖があるのに、ジャンヌと士郎だけが気づいていた。武器を握り直すリイ、旗を構えるジャンヌ。敵を見据える士郎の隣にマシユが並び立った。

「行きましょう、先輩」

「ああ。行くぞー！」

—————

竜の魔女はジャンヌが1人で挑み、士郎たちはシャドウサーヴァントの相手をしていた。本来と比べて大幅に弱体化しているとはいえず、仮にもサーヴァント。その数の多さはなかなか厄介だった。一体を切り裂き、次の相手へを繰り返しながら、士郎はジャンヌたちの戦いも見ていた。

「はあっ！」

「ふっ！」

激突する白と黒の旗。二人のジャンヌのぶつかり合いは激しさを増していった。ステータスが下がっていたジャンヌと、聖杯を所持している竜の魔女。スペックの差は絶望的。そのはずだというのに、「何故ついてこれる!? 私の方が、はるかに強いというのに! それに、ステータスまで以前よりも上がっている? 何があったというの!」
「シロウのおかげですよ。彼とともに戦えたことは、とても幸運でした」

この戦いの前、士郎はジャンヌに宝石を渡していた。それは師である遠坂凜が彼に渡していた、魔力を込めたもの。カルデアからのバツクアップがあるとはいえず、いっどこで何があってもおかしくはないから、念の為に渡されたものだ。魔術師としても破格の力を持つ遠坂の魔力。それを使うことによって、ジャンヌは本来のスペックを取り戻していたのだ。

しかしそれだけじゃない。あの時、カーミラによって心に迷いを与えられ、心が折れそうになってしまった時も、彼の言葉に救われた。今もまだ、その言葉が心に残っている。そこから温かい気持ちと、そ

して力が湧いてくる。今までどの戦友にも感じたことのないこの気持ちは、とても尊いものだと思えた。

「くっ」

「彼や仲間たちに助けられ、ここまで来ました。竜の魔女、貴方を止めます！」

次第に押され始める竜の魔女。彼女の心が揺らいでいるのがわかる。スペックではまだ彼女の方が上だろう。けれども心に迷いや恐れがあるが故に、その力を使いこなすことができていない。

ジャンヌの攻撃を必死になって防いでいる様子が、必死に心の隙を取り繕おうとしているその姿が、何かを必死に否定し続けようとしているように燃える姿が、どうしようもないくらいに、かつての自分に、そしてあの時のあいつに、重なって見えた。

最後のシャドウサーヴァントを切り払い、士郎たちはジャンヌのもとに向かった。

救国の剣

二つの影が交わり、旗が振るわれる。一閃の後、膝をついたのは竜の魔女だった。その正面から突きつけられる白い旗。

「くうつ、そんな、バカな。私はまだ、フランスを滅ぼせていないのに。願いを果たせていないのに！」

「その口ぶりからすると、気づいていたのですね。貴方も」

物憂げな表情で話しかけるジャンヌ。士郎もまた、どこか苦しそうな顔で竜の魔女を見ていた。

「ジャンヌさん？先輩？」

「どうかしたのですか？」

「黒いジャンヌ、竜の魔女は、本来あり得ないサーヴァントなんだ。何故なら、あいつはジャンヌ・ダルクの別側面なんかじゃなかったんだから」

「どういうことですか？」

「聖杯が与えられたのは彼女ではなかったのです。別の者が聖杯を与えられ、願ったのです。このジャンヌ^わ・ダルク^たの存在を、竜の魔女の誕生を」

「その通り！」

ふと響いた声に反応したジャンヌはその場を飛び退いた。彼女が立っていた場所に魔力の塊が打ち込まれた。

「無事ですか、ジャンヌ!？」

突如現れたジルが、竜の魔女を庇うように士郎たちと対峙した。少し遅れてマリーたちがやって来た。倒されたのではなく、振り切られただけのようだった。

「あ、いた！」

「まさか逃げ出すとは思いませんでした。あの本も気づいたら再生してましたし」

「ジャンヌ、シエロ君。竜の魔女に勝てたみたいね」

「はい、なんとか。あとは聖杯を回収するだけです」

「ジル」

「おおジャンヌよ、なんと痛ましいお姿に。ここは一旦、このジルに任せて、ゆつくりと休まれてはいかがですか？」

「でも、まだ戦いは、終わっていない。願いは、まだ、」

「それはこの私めが引き受けましょう。ジャンヌは私の勝利を望み、待っていてくれればいいのですよ。目が覚めたら、全てが終わっていることでしょう」

「そうね、ジル。貴方に、任せるわ」

ジルの手を握り、倒れこむ竜の魔女。彼女から莫大な魔力がジルへと渡された。

「さあ、始めるとしますかな。この国への復讐を！」

「ジル、貴方は、」

「ジャンヌよ、確かに貴方はこの国を恨まなかった。裏切られ嘲られてもなお。しかし私は絶望したのです！この国に、その民に、そして神にさえも！邪魔をするというのであれば、貴方とて容赦はしませんぞ」

「そうですね。なら、私は貴方を止めます。聖杯戦争における裁定者、ルーラーのサーヴァント、ジャンヌ・ダルクとして！」

「いいでしょう、ならば私は貴方を倒しましょう」

「シロウ、お願いします。ここでな決着をつけましょう」

「ああ」

「あなた方への敬意を示して、お見せしましょう。このジル・ド・レエによる、最高の Cooooooooo を！」

ジルの周りに魔力が溢れ、その周りに何かが現れ始めた。それは徐々にその体を飲み込み、巨大な怪物へと変貌した。海魔の集合体とも言えるその姿はおぞましく、同時に恐ろしい。

「来ます、先輩！」

邪竜百年戦争、その最後の戦いの火蓋が切って落とされた。

—————

パツタリと海魔たちが現れなくなったことに戸惑いつつも、ジークフリートたちはしばらく周囲を警戒した。しかしもう海魔が現れる

様子はなかった。

「終わったのか？」

「いや、どうやら魔力を一箇所に集中しているようだ。城の方で最終決戦が始まったのだろう」

白と黒の夫婦剣をしまい、城をじつと見ていた男の言葉に、ジークフリートも城へと目を向けた。外からはわからないが、そこで最後の戦いが始まっているのであれば、加勢しに行くべきだろう。しかし無尽蔵に湧き出る海魔との戦いで、今は戦うための魔力はない。

「託すしかないでしょう、シロウたちに」

「そうだね。流石に疲れたかな」

「ああ、そうだ。ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト、君に伝言がある」

「伝言？」

「無事だったから助けに行く、だそうだ。もっとも、その本人はこちらではなく城の方へ行ったわけなのだが」

「そうかい。それはまた、彼女らしいな。君が助けてくれてたのかい？」

「なに、事態の收拾のためにも、彼女にいてくれた方がいいと思っただけのことだ」

「それはありがとう。ところで君の名前を聞いてもいいかい？ マリアの恩人のことは知っておきたい」

「名乗るような名はないさ。敢えていうならサーヴァントとしてのクラス名のアーチャーか、或いは贗作者^{フェイカー}か。本来王妃を守る騎士の役など分不相応な、そんな存在だよ、私は」

そう言つて男は消えて行った。

—————

激しい連続攻撃で攻め立てる士郎たち。しかし状況的には、彼らの方が圧倒的に不利だった。ジルを取り込んだその怪物の体は、いくら切っても、焼いても、潰しても、すぐに修復されてしまうのだ。

「ぐっ！」

「先輩！」

伸ばされた触手の一撃で後退する士郎。防いでいても、そのパワーは脅威だった。

「大丈夫だ。けど、早くなんとかしないと、このままじゃ」

「おそらく、ジル・ド・レエを見つけ出して本を破壊するか、相手を一撃で消滅させなければなりません。ですがそのためには、対城宝具が必要で、」

「それは今の俺たちが持っていないわけか」

「はい」

大きなダメージを与えるに至る宝具はある。清姫やエリザベート、リリーの宝具を使えば大抵の相手ならば倒せるだろう。しかし、この大きさの敵を一撃で葬ることができるとすれば、それは

「やってみるしかないな。マシユ、みんな！しばらく時間を稼いでくれ！」

「わかりました」

「了解です！」

一旦距離を取り、深呼吸する。まずは舞台を整えよう。剣製の真髓、その先を手にするために。自身の力を最大限に発揮できる場所を。そして成功した時に、周りに被害を出さずに済む場所を。

「I am the bone of my sword.」

士郎めがけて迫る触手を盾でマシユが防ぐ。

Steel is my body, and fire is my blood

炎と魔力を合わせてを放つ王妃マリーと姫の名を持つ清姫。

I have created over a thousand blades

槍で何度も切りつける自称アイドルサーヴァント、エリザベート。

外で兵を守ってるであろう聖人、ゲオルギウス。

Nor aware of gain.」

音楽家でありながらも、最後まで戦ってくれたアマデウス。

Withstood pain to create weapons,」
あれほどの大英雄でありながらも、自分をマスターと認め力を貸し

てくれたジークフリート。

「waiting for one's arrival」

舞うように剣を振るうリリイ。

「I have no regrets. This is the only p

そして今、自分の前で旗を振るい、守ってくれているジャンヌ

「My whole life was

みんなのためにも、必ず勝利を掴む、掴んでみせる！

”unlimited blade works”!

大地が裂け、炎が溢れた。その後、眩しい光に包まれて、彼らは無数の剣が突き立つ荒野に立っていた。

「先輩、これは」

「まさか、固有結界」

「バカな！現代において、神秘の薄れた時代において、このような大禁呪を使えるものがあるはずがない！」

その光景に驚愕したジルが、怪物の中から叫ぶのが聞こえた。怪物の動きも止まっている。そのチャンスを生かすべく、士郎は言葉を紡ぐ。

「投影、開始！」

記憶を辿り、魔力を巡らす。この身が再現しようとしているのは星の輝き、王の剣。絞り出せ、しがみつけ、足掻きもがいてたぐりよせろ。それしか、この状況を打破することができないのであれば、力の限りを尽くしてやってのける。

身体が軋み、頭が焼けそうだ。体内を巡る魔力も熱い。膝をつきそうになる、気が遠くなる。それでも、やらなければならぬ。

突然身体の奥、どこか深いところから暖かさを感じる。ほんの僅かに痛みが引く。頭が冴える。魔力が剣を形作っていく。その手に完成した剣が握られる。光り輝く一振りの剣。

「みんな離れろ！」

その声に反応し、マッシュたちが彼の後ろに立つ。その手に握られた剣に、リリイは釘付けになった。

「その、剣は」

両手で握りしめたその剣を、天に向けて高く掲げる。軽く息を吐き力を込める。星の聖剣には遠く及ばないものの、その剣は限りなく近づけたもの。今の自分の作り出せる最高にして、最良。最強にして、最上の輝き。故にその名、

「エクスカリバー・イマージュ永久に遥か黄金の剣！」

振り下ろされた剣から放たれた光、それは怪物を丸ごと包み込んだ。その奥でジルは感じた。その光の清らかさと暖かさを。最後に狂った彼は思い出した。ジャンヌと共に戦った日々と、その中に確かにあった希望を。涙を流しながら消えゆく彼は、それでも笑顔だった。

終戦の喜び

「ジル・ド・レエの霊基の消滅、及び聖杯の現出を確認。聖杯の回収、無事に完了しました」

「やりましたね、シロウ！この特異点も修復されるはずです」
「ああ」

マシユとリリイの嬉しそうな声に笑顔で応える士郎。激しい戦いだったが、誰一人欠けることなくやり遂げたのだ。

『もしもし士郎君？そちらに聖杯の反応が現れたから連絡してみたけど、無事に戦いは終わったのかい？』

「ドクター、随分今更な連絡ですが、はい。無事に聖杯を回収しました」

「フオウ、キューフオウ」

「フオウさん、いつの間に。戦いの時はいつもどこかへ消えるのは、どこへ行ってるのでしょうか。ねえ、シロウ」

「まあこうしてちゃんと来てくれたんだからいいじゃないか」

戦いを終えて、なんとなく団欒していた彼らのもとへジークフリートたちもやって来た。

「あら、アマデウス！」

「やあマリア。無事で何よりだよ」

「ええ、貴方もね」

「どうやら戦いは終わったらしいな。すまない、その時共に戦えなくて」

「マリーから聞きました。外にいたフランス軍を守っていてくれたのですよね。ありがとうございます」

「何、礼には及ばないさ。そういえばもう一人いたのだが、こちらの戦闘が終わったらすぐにどこかへ消えてしまった」

「彼がいなければ我々も危なかったでしょうから、御礼をしたかったです。こちらにも来ていませんでしたか」

「ところでマスター、一つ聞いてもいいか」

「何だ、ジークフリート？」

「君が背中に背負っているのは」

「色々あつてさ。思うところもあるから、なんとかしたいと思つた。簡潔に言うと、それだけかな」

「そうか。まあ戦いも終わったようだし、マスターの決めたことならば口出しはしないさ」

『士郎君、マシユ、リリイ。そろそろこちらへ戻ってくる時間だ。名残惜しいとは思うけどね』

「はい、わかりました」

—————

士郎たちと、共に戦つたサーヴァントたち。向かい合うように並んだ両者は、別れを実感していた。サーヴァントたちの体も、聖杯を巡る戦いが終わったためか、徐々に粒子状になっていた。

「マスター。君と共に戦えたことを誇りに思う。故に誓おう。また会つたその時も君と共に戦うと。例え君が俺の背に刃を突き立てようとも、俺はそれを許そう」

「ありがとう、ジークフリート。光栄なのは俺の方だ。お前ほどの大英雄にそこまで言ってもらえるなんてな。けど、俺はお前の背中を刺すなんてことはしないさ」

「ああ、わかっているとも。それでは、また」

「シロウ、正直言うと楽しかつたよ。人間は醜い生き物だけど、君たちは、そうだね、綺麗にも思えたかな。それから、マシユに色々教えてあげたまえ。彼女には君が必要だからね」

「アマデウスさん」

「わかっている。俺はマシユのマスターだからな」

「いや全然わかかってないじゃないか。そういう意味だけじゃないんだけどなあ」

「もう、アマデウス。そういうのを野暮というらしいわ。シエロ君、最後まで一緒にとっても戦えて嬉しかったわ。2度目のお別れになつちやうけど、まだどこかで会いましょう」
チュツ

「先輩？」

「あらあら且那様ますたあ」

「いや待てマシユ、清姫。何でそんな不機嫌なんだ？」

「他の女性にそんなことまでされておいて、知らないとは言わせませんよ」

「先輩、デレデレし過ぎです」

「なんでさ!?!」

「これは重症だね、本当に。まあ頑張ってくれたまえ」

「マリー。あなたはまたそんな軽々しく」

「あら？軽々しくはないわよ。もうシエロ君以外にはしないもの」

「えっ、それって」

「貴方はどうなの、ジャンヌ？」

「わ、私は、」

「あら、もう時間みたいね。ごめんなさい、先に戻ります。シエロ君、忘れないでね、いつだって、ヴィヴ・ラ・フランス！」

「子イヌ。あんた思ったたよりもやるわね。私の理想にはちよーっと足りないけど、子イヌならマネージャーとしては合格よ」

「それは光栄だな」

「そうよ、なんてったってこの私が認めてあげたんだから。だから、しっかりとやりなさいよ」

「わかつてるよ」

「それじゃ、今度会う時は私の歌、聴いて行きなさいよー」

「ますたあ、あのドラ娘の最後の発言は無視してもよろしいですよ。むしろそうしないと大変なことになりますので」

「そ、そうなのか？」

「はい、それはもう。ますたあ、暫しのお別れですが、これだけは覚えておいてくださいいね。私、執念深い女性ですのぞ」

「それは、どういう、」

「さあ、なんでございませうね。それではまたお会いする時まで」

「シロウ、お疲れ様です」

「ゲオルギウスこそ。ありがとな」

「それはこちらの台詞です。あの時、シロウたちと出会っていなければ、この戦い、勝ち目はなかったでしょう。あの時、町の人を見捨て

たくないという私の個人的な意見を聞いてくれたために、辛い決断をさせてしまった」

「それは違う。あれは俺の我儘でもあったんだ。結果的にマリーさんも無事だったから、それで良かったってことにしよう」

「貴方は、とてもまっすぐだ。そしてとても正直だ。その言葉を受け止めましょう。そして共に戦えた事に感謝を」

「こちらこそありがとう。本当に助かった」

「またどこかの戦場で会うことがあれば、その時も共に戦いましょう」

—————

一人また一人とサーヴァントたちが帰っていく。涙はない。この戦いで、彼らの間には確実に縁ができたのだ。ならば、士郎たちが戦い続ける限り、またいつか会うこともあるだろう。最後に残ったのは、

「ジャンヌさん」

「マシユさん、リリイさん、そしてシロウ。本当に、ありがとうございました。三人とあの時出会っていなければ、きっと私は一人で戦い、そして敗北していたでしょう。マリーたちとも会うことはなく、みんなバラバラに戦い、竜の魔女によって滅ぼされていたかもしれせん。貴方たちがいてくれたから、この国を救えました」

「こちらこそ、ジャンヌさんがいてくれて頼もしかったです。ここに来たばかりの時は、右も左もわからなかったのですから」

「はいーそれに共に戦えたこと、とっても誇りに思います」

「マシユさん、リリイさん。ありがとうございます」

最後に士郎と向き合うジャンヌ。ちらりと、士郎の背に視線を向けた後、ジャンヌは士郎を見つめた。

「シロウ、どうかお願いしますね」

「ああ。約束する」

「はい。私のマスターが、貴方のような人で良かったです。貴方のまっすぐな言葉や強い信念に、私は助けてもらいました。この先何があっても、貴方の言葉を心に、信じた道を進みます」

「それは俺も同じだ。あの時、ジャンヌの言葉のおかげで迷いが消え

た。だから、ありがとう」

ジャンヌの足元が粒子になり始める。同時にレイシフトも始まったようで、士郎たちの体も消え始める。

「またな、ジャンヌ」

「ええ。でも最後に、まっすぐな気持ちの一つだけ」

そつと士郎の頬に伸びる手。突然のことに驚いた士郎は、引っ張る僅かな力に抗うことができず、前へと屈むことになる。

強い衝撃はなかった。ただ、唇に押し付けられた感触は、マリーの時よりもやや強めに感じた。ギョツと閉じられた瞼が震えるのは、緊張故だろうか。残念ながら思考を奪われた士郎には分析しようもなかったが。

顔にかかる美しい髪や、頬に感じる吐息と柔らかい手。視界に広がる白く透き通るような肌は赤みがさし、やや熱くも感じる。僅かな息の音も聞こえ、まるで五感全てが奪われたかのようなうだ。

一瞬か、数秒か、時間の感覚はわからなかったが、ジャンヌの顔が離れた。その表情は戦っている時やマリーたちという時とも違う、初めて見たものだった。

「貴方のこれからに、どうか祝福がありますよう。そんな願いも込めました」

「あ、ああ」

「ありがとうございます、シロウ。私は貴方を愛しています」

その言葉を最後に、士郎の意識が沈み、ジャンヌの姿が見えなくなった。レイシフトによる移動が行われたのだ。フランスから、士郎たちは戻ったのだった。カルデアへ。

その後、何故か更に悪くなって、拗ねてしまったマシユの機嫌を士郎とリリイが直すのに苦労したり、いつの間にか増えていた同行者にスタッフがあたふたしたりしたのはまた別の話。

「先輩、不潔です」

「なんでさ!?!」

第二特異点 永続狂気帝国セプテム 自分の未来

一つ目の特異点での旅を終えた士郎たち。報告や回収した聖杯の受け渡しなどを済ませた彼らは、それぞれの部屋に戻り、しつかりと休憩を取ることにした。士郎もあれほど大きな戦いの後では、流石にくたびれたようで、翌日はいつもよりも遅い時間に目が覚めた。

「こんな疲れしてたのか。けど、特異点はまだあと6つもあるんだ。毎回こんなふうになるようじゃダメだよな。もつと体力をつけるべきかもしれないな」

実際のところ、訓練を続けてきた士郎の体力は既にアスリート並みかそれ以上なので体力がないわけではない。しかしそれでも、あの戦いは相当体に負担をかけたことは間違いない。かなり劣化させていたとはいえ、あの聖剣までもを投影しようとしたことも影響しているだろう。

「つとと、そろそろ行かないとな。みんなも頑張ってくれてたんだし、うまいもの食べてもらわないと」

いそいそと着替え、士郎は食堂へと向かった。

前と変わらぬ様子で職員が自分に接してくれることに、士郎は安堵を覚えた。固有結界という大禁呪を扱える自分は、封印指定待った無しだと遠坂から散々言われていたのだ。態度が変わっても仕方がないと思っていた。

けれども、正直に話したところ、驚きこそしたものの、誰一人として士郎への態度が変わることはなかった。ダヴィンチちゃんだけ目をキラキラさせながら手をわきわきさせていた気もするが、ロマニによつて止められ、他の職員は笑っていた。

そこにあつたものを守り、奪われたものを取り戻すと、士郎は決意を新たにした。

朝食後、士郎はリリイに呼ばれてトレーニングルームへと来てい

た。なんとなく、何を聞かれるのかは想像できた士郎だった。

「シロウ、フランスでの最終決戦のことで、聞きたいことがあります」
「あの剣について、だろ？」

「はい：私が今愛用している剣は、このカリバーンです。ですが、以前マーリンから聞いたことがあります。私がいずれ新しい剣を振るうことになる。その名は、エクスカリバー」

暫しの間の後、リリイは一度伏せた目をあげて、士郎をまっすぐと見つめた。

「シロウのあの剣。名前こそ違っていました。マーリンから聞いた特徴と似ていました。あれは一体？」

その真剣な問いかけに対して、士郎は正直に答えることにした。特に隠すことでもない上に、他ならぬ彼女は知る権利があると判断したからだ。

「俺が一度見た剣を複製出来るって話はしたよな？」

「はい。シロウの魔術は特殊だとも」

「あの剣は、本物のエクスカリバーのレプリカだよ。まあ、本物と比べると、威力とかは圧倒的に劣るけど」

「では、シロウは、エクスカリバーを見たことがあるのですか？」

「：実はさ、俺が昔聖杯戦争に参加した時、サーヴァントはセイバーだった。そのセイバーの真名は、アルトリア・ペンドラゴン」

「もしかして、」

「そうだ。アーサー王として、聖剣を振るっていた頃の姿。あいつと一緒に、俺は聖杯戦争を戦ったんだ」

あの時、結局話すことは出来なかった。戦いの後、既に彼女はいなくなっていたのだから。そしてここに来て、彼女に出会った。全力でぶつかり合い、刃を通して語り合った。

少しそのことを思い出していた士郎は、リリイが少し寂しそうな、それでいて悲しそうな表情をしていることに気づいた。

「リリイ？どうかしたのか？」

「あの、私はまだまだ未熟ですけど、きつとシロウの期待に応えられるような騎士になりますから！」

「へ？」

そう言ったりリリーの瞳に、若干の涙が浮かんでいたのに士郎は驚いた。自分は何かしてしまったのだろうか、そう思い慌てて考えるが何も思いつかない。

「リ、リリー。俺なんかしちゃったか？」

「いえ、その。知らなかったものですから」

「何を？」

「シロウのかつてのサーヴァントが、成長した私だったことをです。きつと今の私よりも素晴らしい騎士だったのだと思います。だから、まだ未熟な私に不満があっても、」

「待て待て！俺は不満なんて何もないぞ」

何やらネガティブになり始めていたリリーの肩を掴み、士郎はその顔を覗き込んだ。寂しさや悔しさのような感情が入り混じっているようだった。一先ず落ち着くように頭を撫でる。

「なんで俺が不満を持つてるなんて思ったんだ？」

「その、未来の私とお知り合いだということ伝えてくれなかったのは、私がシロウの期待に至らなかったからかと、少し思ってしまった。そう考えたら、実は私の訓練も本当は嫌々付き合ってくれてるのではないかと思ってる」

かつて自分が出会ったセイバーからはとても想像できない、しおらしい反応に、つつい笑みを浮かべてしまう士郎。優しくその身体を包むように抱きしめながら、自分の考えを話した。

「そんなことはないさ。リリーにはフランスでも助けられたし、一緒に訓練をするのは、すごく楽しい。それに、未来のことを話さなかったのは、その方がいいと思っただ」

「それは、何故ですか？」

「俺の知ってるアルトリアは、ずっと男として過ごして来た。リリーのような女の子っぽくしていたときはなかった。だから、リリーはきつと俺の知ってるアルトリアの平行世界の存在なんだ」

「平行世界の、」

「それはつまり、俺の出会ったセイバーとは違う未来を歩むのかもし

れない。全然違う未来を。変に未来の情報を与えて、リリーの可能性を狭めたくなかったんだ。けど、それで不安にさせたなら、ごめん」
頭を撫でながら語りかける。それは自分自身の経験からでもある。未来の自分のことを知り、自分はそれでもその道を進むと決めた。いや、それしかなかったからかもしれない。

でも、リリーはリリーだ。自分の知ってるセイバーと同じ道を進るかもしれないし、全然違う道になるかもしれない。けれど、それを決めるのはリリーだ。

「シロウは、私がサーヴァントで、良かったですか？」

「当たり前だろ」

「そうですか。ふふっ」

嬉しそうに笑うリリー。過去や未来がどうであれ、今ここにいるリリーこそが士郎のサーヴァントで、士郎こそがリリーのマスターなのだ。ならば今は、その中で一步一步歩めばいい。そう思い、二人は気持ちを切り替えて獲物を手に、剣を交えた。

マスターとサーヴァント

フランスから帰還して二日目の朝、初の大戦からの帰還ということもあり、次の特異点へのレイシフトは明日からの予定になっている。一分一秒さえ惜しいと士郎は思うものの、万全の体制でなければ特異点の修復がいかに無謀なことかは理解していたため、その時間を訓練などに活用していた。

「つてことがあったんだ。なんか、あいつが遠坂に自分の真名を教えなかったこととか、なんとなくわかる気がするな。遠坂も、リリイに会ったら驚くだろうしなあ」

眠り続ける遠坂に語りかける士郎。フランスでの激しい戦いのこと、出会ったサーヴァントたちのこと、ここの職員のこと。語ることは尽きなかった。

「遠坂。俺、頑張るからな。あいつは一緒にいてくれる奴がいなかったけど、俺には遠坂がいた。今はマシユやリリイもいてくれる。必ず、世界を救ってみせるよ」

その時の彼の笑顔は、あの弓兵が彼女に見せた最後の笑顔、それにそっくりだった。

—————

遠坂の眠る部屋から出た士郎は、もう一人会わなければならないと思っていた相手の部屋へと向かった。小さく息を吐き、気合いを入れる。部屋のドアをノックする。

「…誰？」

「あー、俺だ。入ってもいいか？」

「…好きにしたらどう？」

部屋の主の了承らしいものを得た彼は中に入った。自分の使っている部屋とほぼ同じその部屋。その部屋の中にあるベッドの上に彼女は腰掛けていた。

黒い装束はその髪と肌の色の白さを強調するかのようで、全体的に特異点の冬木で剣を交えた彼女とよく似ている気がした。酷いしか

めっ面でこちらを睨んで来ている。

「気がついたってダ・ヴィンチから聞いたから、様子を見に来た。体の調子はどうなんだ？」

「何をしに来たかと思えば。ええ、問題はありません。あなたの無茶によつてクラスが変わっていること以外はですが」

「そ、そうか」

ふんっ、と鼻で笑う彼女、竜の魔女ことジャンヌ・ダルク・オルタは歪んだような笑顔を見せていた。そのことから、この状況を理解はしていても、受け入れたわけではないことは明白だ。

「一応わかっているとは思うけど、今ジャンヌは俺のサーヴァントということになってる。基本的にここにいるということは、俺たちの人理修復に協力してもらおうことになる」

「まあ、そうなるでしょうね。はっ。マスターにとってはサーヴァントたる私の意志は、「けど俺はそうしなくてもいいと思う」は？」

皮肉げな笑みから、何を言ってるんだこいつ、と言わんばかりの表情に変わる。サーヴァントとしてこのカルデアにいるのであれば、マスターとともに人理修復に協力するのが使命。だというのに、士郎はそうしなくてもいいと言った。

「あなた、それはどういう意味で言ってるのかしら？」

「もし、ジャンヌが俺と一緒に戦いたくないっていうなら、それでもいいと思う。無理矢理従ってもらうってのは、嫌だしな」

「それは気遣いのつもり？それはどうも。サーヴァントにその役目を果たさせないだなんて、随分といいマスターね」

皮肉たっぷりな笑みに声。どこまでも士郎のことを嫌っていると態度で示している。アーチャーの何倍も上を行く皮肉っぷりで、捻くれっぷりを見せられながらも、士郎は表情を崩さない。

「それは正式に召喚に応じて、合意の上で契約した場合だろ？ジャンヌの場合は、俺が無理矢理契約しちゃったわけだから、」

「そもそも、私と契約したのも、戦力を増やそうとしたのでしょうか？戦うための駒が必要だったのでしょうか？なら、何を善人ぶっているのかしら？素直に従えと命じればいいものを」

「だって、サーヴァントとマスターって、そういう関係じゃないだろう？」

「はあ？」

「サーヴァントとマスターは、基本的には対等のはずだ。どちらかがいないと、戦うことはできない。いや、どちらかといえば、サーヴァントの方が格的には上なんだろうけど、それでも戦う時はパートナーだろ。なら、相手の意思を無視することはできない」

腹が立つ、そうジャンヌ・オルタは思った。何が腹立たしいって、士郎が本気でそう言っているのが見ていてわかったからだ。だからこそわからない。

「じゃあ、あなたは一体何のためにわざわざ私と契約したのかしら？あの聖女様の贗作であり、偽物であって、幾度となくあなた達を殺そうとした私と。消えゆく私に同情でもしたのかしら？ だったらいい迷惑、偽善ここに極まれりね」

「偽善、か。確かに、そんな風に思われるかもしれない。でも、俺はあの時、ジャンヌを助けたと思って思った」

空っぽの心に、借り物の信念。ただひたすらに、それを与えてくれた人の成そうとしたことを、成さなければならぬ。そう自身を駆り立て、戦ってきた。あいつも、そして目の前の彼女も。どちらも自分の過去とも言える相手と戦い、どちらも敗れた。ただ、その中であいつは答えを見つけたのに対し、彼女は答えを見失った。理由はどうであれ、その原因は自分にもある。だから、

「あの特異点でのことは確かに許せないと思った。けど、だからといって助けられない理由にはならないだろ。俺は竜の魔女としてだけじゃなく、ジャンヌ・ダルクの別側面というだけじゃなく、一人のサーヴァントとして、ジャンヌが答えを見つけられるように、協力したいんだ」

まるであの時の自分の心を見透かしていたかのようなその発言に、ジャンヌは黙り込んでしまった。馬鹿な男だと思った。少しでも体裁を取り繕うためだけに言っただけであれば何とでも切り返せる。だというのにこの男は、本気も本気、大真面目にそんな馬鹿みたいな

ことを言っているのだ。

「明日の10時から次の特異点へのレイシフトがある。もし力を貸してくれるなら、その時に管制室に来てくれ。それから、良かったら食堂にも来てくれ。口に合うかはわからないけど、ジャンヌの御飯も作るからさ」

「…そう…用はそれだけかしら？」

「ああ。じゃあまた明日な。後で部屋に食事は運んどくから、食べてみてくれ」

それだけ言って、士郎は部屋から出ていった。部屋に残されたジャンヌは、暫くの間、考え込んだまま動かなかった。

結局、その日のうちに士郎がジャンヌともう一度会うことはなかった。

ローマの大地

一晩明けた翌朝、時刻は9時53分。次の特異点の説明を一通り聞き終えた士郎たちはジャンヌが来るかどうかを待っていた。しかし一向にジャンヌが現れる気配はなかった。

「どうやら彼女は来ないみたいだね。士郎君、そろそろ君達は、レイシフトのための準備をしてくれるかい」

「わかった」

用意されたコフィンに入ろうとする士郎。と、その時管制室のドアが開いた。

「やっと見つけたわ。本当に広すぎるわよ、ここ。せめて、部屋の位置をもっとわかりやすくしてくれないかしら」

思いつきり悪態をつきながらしかめっ面で入って来たのは、ジャンヌ・オルタだった。

「ジャンヌ」

「何を嬉しそうにしているの？暇だったから来てあげただけ。精々退屈させないように気をつけなさいね、マスター」

「ああ。よろしく頼むよ」

ようやく四人が揃ってレイシフトの準備ができた。ジャンヌへの説明は士郎たちがすることとなり、ロマニの指揮の元、レイシフトが始まった。

西暦60年、繁栄の時代を迎えていた、古代ローマへ。

—————

目を開けると先ず目に入ったのは青い空だった。あたりを見てみると、どうやら都市などからは離れた場所、ローマ郊外に着いたらしい。マシユ、リリイ、ジャンヌの三人もちゃんと着いたみたいだ。ついでにフオウも。

「また着いて来てしまったようですね」

「そう言えば居たわね、こんなの」

「まあいいさ。危ない時はちゃんと離れててくれるか？」

「フオウ！」

「よしよし…マシユ？」

フオウのことを見ずに、目を閉じて深く深呼吸していたマシユ。不思議に思い声をかけた士郎の方に向き、笑顔を見せる。

「すみません。なんだか、気持ちが悪くて。青い空に、緑豊かな大地。映像では何度も見たことがあったのですが、改めて感じて見ると、やっぱり違いますね。フランスでは驚いてばかりだったので、なんだか改めて向き合っている気分です」

「マシユは、ずっとあそこにいたのか？」

「はい」

「そっか。なら、特異点の修復ついでに色々な景色を見れたらいいな。海や山、島や街。世界には本当にいろんな景色が溢れてる。俺も初めて旅した時は圧倒されたからなあ」

「先輩も…ですか？」

「ああ。だからマシユも、色々を見て、色々感じて欲しい」

「はいー」

会話がひと段落した彼らはこれからの方針を考えることにした。ともあれ、まずは情報を集める必要がある。フランスでの時のように、すぐに状況を理解しているサーヴァントと出会えるわけでもない。とりあえず人のいる町を探すために、四人は歩き出した。

「歩きだとやっぱり遅いわね。ワイバーンを呼べないのは残念だわ」

「竜ですか。馬とかなら乗りこなせる自信はありますけど、」

「流石にそれはやりすぎだと思うぞ。むしろ余計な混乱を起こしかねない」

「あの、先輩、皆さんも。何か聞こえませんか？」

マシユの言葉に全員が黙る。耳を澄ませると、どこからか音が聞こえる。たくさんの人の雄叫び、馬の□、鉄のぶつかり合う音、そして断末魔の悲鳴。

「これは、」

「どこかで戦闘が行われてるわね。それも多人数での」

「丘の向こうからのようです、シロウ」

リリイが指差す先、やや高めの丘が見える。戦闘はそこで行われて

いるらしい。しかしこの時代にそんな大規模な戦闘があったという記録はない。つまり、

「歴史の異常か」

「そのようです、先輩。急いで向かいましょう」

—————

丘を駆け上がった彼らが見たものは、二つの軍勢が戦うところだった。両方が真紅と黄金の意匠を持つものの、片方は少数部隊、もう一方は大隊だった。少数部隊を率いるのは一人の女性。一騎当千の活躍を見せる彼女からはサーヴァント反応はない。つまりは生身の人間なのだが、士郎たちはそれどころではなかった。その彼女の顔を見た瞬間、全員が全員、驚いたのだった。

何故ならそれは、士郎の隣に立つ白の姫騎士と、よく似た顔だったのだから。

異常事態の戦

特異点のローマにきた士郎たち。その先で起こっていた戦闘、そこで見かけた女性の姿に一同は驚き、固まってしまった。衝撃が最も小さかったジャンヌがいち早く持ち直す。

「それで、どうするのかしら？あなたの指示は？」

「はっ、そうだった。ありがとう、ジャンヌ」

「お礼などいりません。それで、どうしたらいいのかしら？」

「あの女性は、どうやら首都を守ろうとしているみたいですね」

「それでしたらシロウ、彼女を助けに参りましょう！」

「ああー」

駆け下りながら、士郎は両手に干将・莫耶を構える。リーダーの女性の背後から斬りかかろうとしていた男を切りはらった。その手応えからわかった。この兵は、真正銘、生身の人間だということが。魔力で作り出された敵と戦っているのではなく、人同士が争っているのだと。けれども、考えている場合ではない。

「ぬ？そなたらは何者か？」

「助けに来た。一緒に戦わせてくれ」

「首都からの援軍か？何はともあれ、助かる」

近くで見た女性は、彼の知る顔と似ているものの、別人であることはすぐにわかる。赤いドレスに燃えるような剣。その戦い方は騎士のそれとは異なるものの、優雅だと感じた。

—————
士郎たちの参加により、勝敗は決まったも同然だった。特にジャンヌの戦いは眼を見張るものがある。無数の槍や炎を操るその戦い方は、白い彼女とは違い、力強さに溢れていた。その様子にかなわないと悟ったのか、敵の軍勢は引き上げていった。

「剣を納めよ！そなたら、なかなかの腕ではないか。褒めてつかわす。身の丈もある得物を振り回す少女に、姫のごとく可憐な騎士、そして竜のように激しい騎士。うむ、三人とも実に美しいではないか」

「あ、ありがとうございます」

何やらマシユたちのことをえらく気に入ったような女性は、ニコニコしながら一人一人に向けて声をかけていた。マシユは萎縮、リリイは笑顔、ジャンヌはそっぽを向くと対応は異なるものの、みんな嬉しそうだと士郎は思った。

「そして何よりそなた。余の命を救ってくれたこと、感謝するぞ。その二刀を操る真つ直ぐな剣技、余も惚れ惚れしたぞ」

「あ、ありがとう」

腕を抱き寄せられながら満面の笑顔で、それもかなりの美貌の持ち主からストレートに褒められると、流石に士郎でも少し照れくさくなる。何やら柔らかい感触を腕に感じるが、一旦頭からシャツアウトして状況の確認をすることにした。

「えーと、俺たちは旅のものなんだけど、あんまり今の状況に詳しくないんだ。出来ればなんで戦ってたのか教えてもらいたんだけど、頼めるか?」

「む?そうであったか。であれば一度首都に戻り話をしようではないか。きちんと褒美を与えねばならんしの」

「ありがとう。みんなもそれで、ってあれ?」

三人の意見を確認しようと士郎がマシユたちの方も向くと、リリイ以外の二人が何やら酷く不機嫌そうな表情をしていた。

「あの、私は賛成ですよ。この特異点のことも知ることができると思っていますし、ね」

「そうですね。先輩もきつとその方とゆっくりとお話したいんでしょうし、いいのではないのでしょうか」

「ええそうね。文句なんてあるはずないでしょう?」

「そ、そうなのか?」

何か不機嫌にさせるようなことをしてしまったのだろうか。そういえばこの人にすぐ話しかけられていたから戦闘後に労うことをしていなかった気がする。いや、マスターとしてそれはダメだろ。

腕を一度離してもらい、士郎はマシユたちの方へ向かった。手を伸ばし、マシユとリリイの髪を撫でる。

「シロウ?」

「あ、あのつ、先輩？」

「ちやんと労いの言葉を言ってなかったと思つて。お疲れさま。いつもありがとうな」

「あ…はい」

「シロウこそ、お疲れさまです」

マシユの機嫌が直つたのを見て、次はジャンヌへと手を伸ばした。しかしその手が触れる前にジャンヌは身を引いて躲した。

「ジャンヌ？」

「軽々しく触れないで頂戴。確かにあなたは私のマスターだけど、気を許したわけではないの。あまり馴れ馴れしいと、焼くわよ」

「あ、そうか。確かに、まだお互いに信頼し合えるほど一緒の時間を過ごしていないからな。ごめん。それから、お疲れさま」

「ふんっ」

何故不機嫌になつていたのか、ジャンヌ自身もわからなかった。士郎たちを見ていたら、突然イラツときたのだ。憎しみとも怒りとも違う、小さな苛立ち。その理由がわからなかった。

「話をついたのか？」

「ああ、済まない。首都まで同行させてもらつてもいいだろうか？」

「うむ、許す！余の客人として迎え入れようぞ。しかしその前に、」

『大変だ、みんな！新たな軍勢が近づいてるぞ。サーヴァントの反応もある！』

ロマニからの通信の直後、新たな軍勢が吠えながらこちらに向かつて来ているのが見えた。

「ぬ？姿なき声があるが、まあ良い。此度の敵を退けることにも協力してもらえぬか？」

「もちろんだ！」

「では行くぞ。余と共に戦つてくれ！」

剣を手に取り、士郎と女性は走り出し、新たな軍勢へと飛び込んで行った。

狂気の皇帝

数は多いとはいえ、ほとんどがただの人間だった。それに対して士郎たちは数でこそ劣るものの、うち三人はサーヴァント、圧倒的な力で戦う彼らは敵の軍勢を減らしながら反応のあつた敵サーヴァントを探した。

「我が、愛しき、妹の子よ」

軍勢の中から現れた、途切れ途切れに言葉を紡ぐ男。間違いなく彼がサーヴァントだ。服装からしてもローマにゆかりのあるサーヴァントだろう。その様子から狂化されているのがわかったが、相手はただ一人、士郎の隣に立つ女性に向けられていた。

「伯父上、いや。今は連合に与し、ローマを脅かす愚か者、あえて名で呼ばせてもらおう。カリギユラよ！」

「今、カリギユラって言いましたか？」

「シロウ、この方、あのサーヴァントを伯父上と呼んでましたね」

「まあ別に驚くことではないでしょう。生前と近い時代に呼ばれたのなら私やあの聖女もそうだったのですし」

「つてことはこの人は、」

「捧げるのだ、愛し子よ、我が姪ネロよ！」

大きく吠え、カリギユラはその拳を握り突撃してきた。

—————

繰り出された拳は肉ではなく、鉄にぶち当たった。マシユがその盾を使い、正面からカリギユラの攻撃を防いだのだった。その後ろから飛び出したリリイとネロが斬りかかる。狂化のランクは高いものの、カリギユラはすぐさま身を引き攻撃をかわした。戦況は確実にこちらが優勢、この流れで仕留めるつもりで士郎たちだったが、突然カリギユラは霊体化し、その場から撤退したのだった。

あれ程に狂ったバーサーカーが、自らの判断で撤退するとは考えにくい。つまりそれは誰かの指示を受けたのではないか？疑問を抱く士郎たちをよそに、ネロの軍勢は勝鬨をあげていた。

「うむ。そなたら、見事な働き振りだ、余は感服したぞ」

「ありがとう。ところで、さっきの奴が呼んでた名前からも思ったんだが、あんたもしかして」

「ぬ？そういうえばまだ名乗っていないなかつたな。余こそ薔薇の皇帝、真のローマ。5代目皇帝にしてローマを束ねる者、ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクスである！」

ドドンツ！

という効果音が見えるのではないかと思うくらいに、自信満々に名乗る彼女。どこから取り出しているのか、薔薇の花びらが舞う演出付きだ。リリイだけ律儀に拍手をする中、士郎たちはそれぞれ別の思いを抱いた。

マシユやドクターは、あのネロ・クラウディウスが女性だったことに驚き、ジャンヌはあまりにも自信満々なその様子に驚き通り越して呆れていた。そして士郎は、少しばかり頭が痛くなっていた。またもや自分のよく知る人の顔に似ていて、彼女ならしないであろう仕草や表情をする人。もうここまで来ると、何か大きな意志を感じそうになる。

「ふふん。余のあまりの偉大さ故に、声も出ないか？そんなに気負わなくともよいのだぞ。既に背中を預け合った身、そなたらを余は歓迎する！」

会話をしながらも移動していた彼らは、目的地にたどり着いた。この時代で最大級の繁栄を見せる国、その首都。

「ようこそ、余のローマへ！」

正義の味方

古代の街並みを歩きながら、彼らは辺りを見渡した。活気が溢れるその様子は、本当に戦争中なのだろうかと一瞬思ってしまった。

「なんだか、フランスの時と違う感じですね。町の人も、なんだか笑顔が多い気がします」

「まあ、あっちだとこっちみたいなのに、全体の指揮をとって戦うリーダーみたいなのはいなかったみたいだしな」

「戦時中でも、基本的に戦闘時以外なんていつもとそう変わらないわよ。そうした方が兵のためになることもあるわけだし」

流石は繁栄している時のローマ、そんな感想を士郎たちが持つ中、彼らはネロの宮殿までたどり着いた。

「此度の戦い、余の右腕として働いてくれる男がおる。あやつもそなたらのように不思議なところもあるが、中々頼りになる」

「右腕、ですか？」

通された部屋で、士郎たちはネロと対面する形で座っていた。士郎たちに現状を説明し、知っていることや目的を詳しく聞きたいとネロが言ったのだ。まだ完全に状況をつかめていない士郎たちは特に断る理由もないため、話に応じた。

「おおつ、来たようだな」

ネロの隣に一人の男が立った。その姿に、マシユが驚きの声をあげ、ジャンヌが顔をしかめた。唯一リイだけが出会ったことがなかったもので、二人のそんな様子に首を傾げていた。士郎は立ち上がり、その男の前まで歩いた。

かたや日本人としては一般的な肌の色、かたや日に焼けたように褐色色の肌。

かたや赤みがかった茶髪の髪、かたや色素の抜け落ちたような白髪。

かたや美しい琥珀色の瞳、かたや鋼鉄を映すような白に近い銀色の瞳。

これほどまでに違うというのに、その二人は驚くほどよく似ていた。そう彼のサーヴァントたちは思った。それは、今こうして向かい合っているその表情までもだ。

「やれやれ、まさかこんな形で君たちと再会することになるとはな。全く、難儀な運命に生まれてしまったものだ。私も、お前も」

「確かにそうだな。けど、お前を見て安心する日が来るとは思わなかったよ、アーチャー」

—————

アーチャーと呼ばれた男の前に立っている士郎は、どこか嬉しそう
で、それでいて複雑そうな表情をしている。それはアーチャーも同じ
ことで、マシュはこの二人が冬木でも何か会話していたのを思い出し
た。

「そなた、アーチャーと知り合いなのか？」

突然言葉を交わした二人に驚いていたのはマシュたちだけではな
く、ネロも二人を交互に見やりながら質問した。

「ああ。色々あつて、共闘したことも、戦ったこともある。あえていう
なら、絶対に負けられないライバルって感じか？」

「言い得て妙だな。まあその辺りが妥当だろう」

衛宮士郎の戦いとは、常に己自身とのものだ。自らのイメージする
最強の自分。そこに辿り着く戦いなのだ。そういう意味では、士郎の
説明はかなり適切とも言えよう。

「ほう、好敵手とな？ではこの者たちも既に知っておるのか？」

「いや、ほとんど顔を知っている程度だ。私もこいつ以外については
あまり詳しくないのでね」

「まあとりあえず自己紹介をしておいた方がよさそうだな。今回は味
方なんだろ？」

「そういうことになるな」

「なら、ちゃんと知っておいてもらった方がいい。そうしないと、背中
を預け合うこともできないだろ」

士郎の提案により、ひとまず自己紹介と、現状と目的の確認を行っ
た。その時にアーチャーがリリーに動揺したり、ジャンヌと一悶着起

こしそうになって、フランスで密かに手助けしてしてくれたことがわかったりするのだが、それはまた別の話。

お互いの目的に共通することがあるのを確認しあつた彼らは、共に突如現れた異常国家、連合ローマ帝国と戦うことに決めたのだつた。

並び立つ二人

「ではこれからの作戦について話しながら、宴をしようではないか。シロウたちを歓迎せねばならぬからな。アーチャー、頼めるか？」

「了承した」

「あの、アーチャーさんは何を？」

「うむ。アーチャーの作る料理は実に美味であるぞ！戦いもでき、家事もこなす。アーチャーが居てくれるおかげで、我らの軍は士気が高いのだ」

肩をすくめるだけのアーチャー。ただ、満更でもないように見えたのは気のせいではないだろう。

「それでは早速、「失礼します。ご報告があります！」ぬ？」

「東の門付近に敵の軍勢が現れました。直に戦闘になるかと思われま
す」

「むう、休まる暇もないではないか。仕方がない。ここは余が、「いや、ネロ。君は休みたまえ」

立ち上がろうとしたネロを制したのは隣に立つて居たアーチャーだった。主人を気遣うその様子は相変わらずで、思わずニヤリとしてしまう土郎。

「君はずっと戦いつばなした。君の強さは十分理解しているが、万が一のことがあつては困る。ここは私に任せてもらおう」

「アーチャー……だが、「なら、俺も行く」

皆の視線を受けながら、土郎はアーチャーと並ぶようにたち、ネロを見た。

「俺とアーチャーの二人で行くよ。任せてくれ」

「先輩、なら私たちも」

「いや、今回はこいつとだけで戦いたいんだ。頼む」

頭を下げる土郎に、ネロは少し唸っていたが、最終的には許可を出すことにした。

「先輩、私たちは火山の近くにある霊脈へ、サークルを設置してきますね」

「ああ、頼んだ、マシユ」

門の方へ向かう二人の間に、会話は特になかった。するだけ無駄だと思っっているのか、するまでもないと思っっているのか。ただ、二人に共通していたのは、腹がたつことに、相手といることで、全くもって負ける気がしないということだった。

門に近づくとつれて、戦鬪の音が聞こえてきた。急いで向かうためにも、彼らはスピードを上げた。その直前に、先導するアーチャーは士郎の方へ一瞬だけ視線を送ると、また前を見据えた。そのまま正面を向きながら声かけられる。

「————ついて来れるか?」

おそらくそれはスピードを上げること、それだけの話ではないだろう。彼の戦いについてこれるのか、そう聞かれているのだろう。口元に笑みが浮かぶ。ついてこれるかだって?」

「当たり前だ」

—————

門にたどり着くと、既に敵の軍勢にローマ兵は苦戦を強いられているようだった。

「俺は右から、アーチャーは左からだ」

「よもやお前の指示に従うことになるとはな。だが、了解した」

「トレイス・オン投影、開始」

全く同時に紡がれる、全く同じ言葉。その手に握られるのは全く同じ白と黒の剣。双剣の使い手二人は反対の方向へ別れ、敵との交戦を始めた。

敵からすればたった二人増えただけのはず。しかしながら、たったそれだけで戦況はひっくり返されていたのだ。一人は世界と契約した守護者とはいえ英霊となった者、もう一人はそれと同一にして、それを超える可能性を持つ者。サーヴァントの伴わない軍勢では相手になるはずがなかった。

いつの間にか相手の近くまで攻め入っていた二人。すれ違い様に相手の背後にいた敵を互いに仕留める。

「流石に成長しているだけあるな。以前とは比べ物にならないほどに

様になっているな。特異点での戦いの経験も、糧になっているようだな」

「…そういうばまだ礼を言ってなかったな。ありがとう。あの時マリーさんを助けてくれて」

「ふんっ。お前に礼を言われても、嬉しくもないのだが」

「俺だってお前に礼なんか言いたくはないっての」

軽口とも取れる言い合いをしながらも、背中合わせで互いに目の前の敵を斬り伏せて行く。本人たちは認めないかもしれないが、お互いにお互いの力を信じているからこそそのことである。

「そう思うのなら、マスターとしてもっと優秀になるべきだな。どんな時も冷静さを失うな。己が手札をしっかりと確認しろ。あの時令呪を使えば、彼女の転移も可能だったはずだ。その選択肢は頭に浮かばなかったのか？」

「っ、確かにそうだったな」

「確かにお前はサーヴァントに匹敵する力を持つようになった。だが、それ以前にお前はマスターだ」

最後の敵を切り払ったアーチャーが士郎を正面から見据える。

「お前が最優先すべきことは、サーヴァントへの適切な指示出しと、どうすれば勝つことができるかを導くことだ。お前の判断一つが、サーヴァントの命運を左右することになる」

アーチャーの言葉はまっすぐで、その口調もかつてのそれのように、士郎を責めるようにも、諭すようにも聞こえる。ただ、そこにはかつてのような憎しみや怒りの感情はなかった。

「この戦い、お前に敗北は許されない。お前が世界の命運を担っているのだ。この先、もつと激しい戦いもあるだろう。より大きな理不尽にぶつかることになるだろう。だが、お前は勝たなければならぬ」
肩に手が置かれ、少しだけ力を入れられる。僅かな痛みと、言葉ではない思いが感じ取れた。

「ああ。必ず勝つき。お前はただの一度も負けなかったけれど、ただの一度も勝利しなかった。なら俺はそれを超えてみせる」

「ふっ。ならば、精々楽しませてもらうでしょう」

そう言って、アーチャーは宮殿の方へ歩き出した。士郎もその後
に続く。帰りに会話は無かったが、二人の顔は笑顔だった。

「ただいま戻った」

「ただいま、マシユ、リリイ、ジャンヌ、ネロ」

宮殿に戻った彼らをマシユたちが出迎えてくれた。アーチャーと
二人きりはやっぱり気まずかった士郎は、彼女たちの姿を確認した時
から少し落ち着いた気がした。

「お疲れ。みんなもう帰っていたのか」

「はい。特に敵との遭遇もなく、すぐに済みましたので。先輩の方
こそ、お疲れ様です」

「シロウ、どうでしたか？アーチャーさんとの共闘は」

「ああ。やっぱりあいつはライバルだって、再認識したよ」

「前に殺しあったことがあるのでしょうか？そんな相手とよく共闘なん
てできるわね。首を狙われることを一瞬でも考えなかったのかしら
？」

「あいつにそんなつもりは、今はもうないさ。心配してくれてありが
とな、ジャンヌ」

「はあ？誰があなたの心配などしますか。おめでたい考えも大概にし
なさい」

「ご苦労だったぞ、アーチャー。それで、敵は？」

「一般の兵士だけだった。皇帝たちも、敵側の魔術師の姿もなしだ」

「そうか。ところでアーチャー、そなたの目から見てシロウの腕はど
うだった？」

「戦力としては申し分ないだろう。私の知っていた頃よりも、力を使
いこなしているようだ」

「うむ。アーチャーのお墨付きとは、頼もしいではないか。その働き、
今後の戦いでも期待させてもらうとしようぞ。それでアーチャーよ。
帰ってきて早々に頼むのもなんなのだが、」

「わかっているさ。すぐに食事の支度をするとしよう。何、せっかく
だ。あの小僧の料理の腕前も見極めてやるとしよう」

その後、軽く事態の報告をし合う両者。突如現れた連合ローマとその魔術師。目的が一致していることを確認したネロと士郎が共闘を約束し、歓迎の宴となった。料理を作るのはやはりアーチャーと士郎の二人。張り合いながら作り出された料理を、皆目を輝かせながら食べた。特にリリイとジャンヌ・オルタはネロが見事な食べっぷりと称すほどに。

夜になり、あたりが暗くなったため、彼らは一度寝ることとなった。割り当てられた部屋で、天井を見つめながら士郎は手を伸ばし、拳を握った。翌日から始まるであろう、連合ローマとの激しい戦いに向けて、決意を固めた。

客将たちとの出会い

翌朝、朝早くに起きた士郎は日課のトレーニングを行い、宮殿の外へと出た。そこで彼が見たのは二つの影が剣を交える様子だった。一つはネロ、もう一つはアーチャーだろう。ネロの見惚れるほど華麗な剣技に対し、無骨ながらも堅実な剣技で迎え撃つアーチャー。サーヴァントであるはずのアーチャーと渡り合えているところを見ると、ネロが英霊となった時は、自分の知っているセイバーと同等の格を持つのではないだろうか。撃ち合いが一時中断され、呼吸を整えるネロ。あたりをざっと見渡した視線が、士郎をしつかりと捉えた。

「おおっ、シロウではないか。お主も早いのだな」

「ネロこそ。こんな朝からトレーニングをしていたのか？」

「うむ。敵である連合ローマは思っていたよりも手強い故な。アーチャーに協力してもらっているのだ」

「ネロ、そろそろ私は失礼しよう。朝食の用意をしなければならぬからな。続きはそいつに頼むといい」

そう言ってアーチャーは干将・莫耶をしまい、さっさと行ってしまった。一度共闘したとはいえ、やはり士郎にとっても、アーチャーにとっても、互いの存在はどこか気まぜくなる。もう戦う理由もないのにも関わらずだ。

「ではシロウよ。余の相手をせい。そなたの剣技、今一度示して見せよ！」

「仰せのままに、皇帝陛下」

クスリと笑ってからすぐに干将・莫耶を投影する。身体強化を施し、士郎は駆け出したネロを迎え撃つように走り出した。

互いに一步も引くことなく、二人の打ち合いは終了した。流石に二人とも疲れてしまったし、そろそろ朝食の用意もできているだろう時間にもなっていた。

「うむ。余は満足したぞー！」

「はあっ、はあっ。そりや良かった」

「しかしシロウ、そなたの剣技、アーチャーのものとよく似ている。扱
う双剣も、同じものであるか？ 同じ師を仰いだのか？」

「えっ……そうだな、確かにそんな感じだな」

二人が目指さんとした先にいるのは、同じ人、同じ彼女だ。どちら
も彼女に追いつこうとして、そして、そこから今の力を手に入れた。
同じ師を持つていたと言っても、間違いではないだろう。

「なるほど、故にライバルか。うむうむ。では、朝食にしようぞ。余も
話して起きたいことがあるのでな」

「わかった。急ぐう」

—————

「ガリア？」

朝食をとりながら士郎はネロの言葉を反芻する。どうやらそこに
いるローマ軍の様子を見に行きたいらしく、それに同伴してもらおうと
のことだった。ネロ曰く、

「そなたらにも会わせたい客将がおるのだ」

それぞれがアーチャーと同じく、一騎当千の活躍をしているとか。
現段階ではなんとも言えないが、フランスの時のように聖杯に呼ばれ
たサーヴァントである可能性が高い。早急に接触できることは、こち
らとしても望ましい。士郎たちに異論はなかった。

留守の間の守りを任されたアーチャーに見送られながら、ネロの率
いる小隊はガリアに向けて出発した。

「先輩、大丈夫ですか？」

「ああ、なんとかな。馬に乗るのって、結構難しいんだな」

移動手段としてネロは馬を用意してくれたので乗って見たが、騎乗
スキルを保有するサーヴァントたちと違い、士郎は苦戦していた。初
めて乗る馬に対する恐怖があつたのか、馬の方もなかなか言うことを
聞いてくれなかった。しかしそこは根を上げないことで有名な士郎。
馬の方もその精神力を感じ取ったのか、しばらくして士郎の言うこと
を素直に聞くようになった。

「シロウは筋が良さそうですね。おとなしい馬でも、いきなり長旅の

ために乗ることはあまりしないですよ」

「今は一刻も早く戦いを終わらせたいからな。俺のために移動速度を落とすたくないしな」

まあ、実際はそこに、アーチャーにバカにしたような笑い方をさせたくない、というのもあるのだが。大人になって余裕が生まれても、アーチャーに対してはムキになってしまいうあたり、変わらないところもある。

「うむ。そなた、やはりいいな。どうだ？この戦いが終わったら余の元で仕えないか？將軍として高待遇を約束するぞ？」

戦闘能力に、サーヴァントたちとの連携。家事スキルに適應力の高さ。ネロは士郎を高く評価していた。士郎だけでなく、マシユヤリイ、ジャンヌのことも気に入っているため、この提案をして見たのだ。

「…せっかくの提案なんだけど、それはできない。ここでの戦いが終わったなら、俺たちはまた別の戦場に向かうことになる。それは俺たちがやらなきゃならないことなんだ。だから、ごめん、ネロ」

「そうか。ならば仕方がないのう。余は寛大故許すぞ、シロウ。だが、せめてこの戦いの間は、余の客将として働いてもらうぞ」

「もちろんだ」

—————

「皇帝、ネロ・クラウディウスである！皆の者、働きご苦労であるぞ！」

ガリアに設置されていた野営地に辿り着いたネロの一声で、兵士たちから歓声が上がった。流石は皇帝。セイバーとはまた違うカリスマを持っているのだと感心する士郎。セイバーが人の羨望を集めるのに対して、ネロは人の心を集める。汚し難く、見上げるような存在のセイバーと、見上げはするものの共に歩もうと思える存在のネロ。どちらがより優れた統治者が、なんてことはわからないけれど。

出迎えてくれた兵の中に、一人赤い髪に白い服装の女性がいるのを見たネロが駆け寄り話しかける。

「やつ、ネロ公。ここまでの長旅、大丈夫だった？」

「おおつ、ブーディカ。うむ、余は何も問題はない。そなたこそ、ここ

の守りは大変ではなかったか？」

「大変じゃないと言ったら嘘になるけど。まあなんとかやってるよ。スパルタクスも一緒だしね」

「シロウ、あの方」

「ああ。サーヴァントだな。いや、それよりも、」

「はい。確かに今、ネロさんはあの人をブーディカと呼んでいました」

「それで、その子達がネロ公の言つてた客将かい？」

「うむ。シロウ、マシユ、リリイ、そしてジャンヌの四人だ。皆中々の腕を持つておる。なんでも連合ローマ帝国の魔術師を倒したいというので、協力してもらおうことにしたのだ」

「そっか。初めまして、私はブーディカ。気軽にブーディカさんって呼んでくれていいよ」

「ブーディカ、さん？」

「うんうん。中々いい子みたいだね」

ネロの隣で優しげに笑う彼女。サーヴァントクラスライダー、ブーディカ。彼女はブリタニアの勝利の女王として有名だ。が、その彼女がいること、それ自体が士郎には驚きだった。何故なら、彼女が最も憎んでいたであろう相手こそ、今彼女が守ろうとしている、ローマなのだから。

「では、ブーディカよ。余は他の兵たちの様子を見てくる。その間、シロウたちを頼むぞ」

「はいよ」

去って行くネロを見送るブーティカ。その瞳には恨みや怒りの色は見えない。視線を士郎たちへと戻した後、場所を変えようと提案してきたブーティカに連れられ、士郎たちは少し開けた場所にたどり着いた。

「さてと、じゃあ来てもらって早々悪いんだけど、少し手合わせしてもらえるかな？ 君たちの力を知っておきたいしね」

「それはいいけど、ブーディカさん一人ですか？ 俺たちは四人もいるし、

なんか卑怯っぽくて気がひけるんだけど」

「ああ、それなら心配ないよ。私も一人じゃないしね。おっと、そろそろ来る頃かな？」

ブーディカその言葉のすぐ後、何か地響きにも似たものが聞こえた。まるで何か大きなものが勢いよく走っているような。音がどんどん近づいて来る。そして姿を現したのは、

「おお、圧政者よー！ 汝を抱擁せん！」

とてつもない筋肉の塊だった。

その男、筋肉（マッスル）につき

前回までのあらすじ。ガリアに行ったら、そこにいたのは、筋肉だった。

「な、な、何よこれえ!？」

「さ、サーヴァントには間違いないみたいですけど」

士郎たちの前に現れたのは岩のような男だった。笑顔で士郎たちを見る男。しかしその笑みに深い狂気と恐怖を感じずにはいられなかった。

「驚かせちゃったかな。彼はスパルタクス。私と同じ、叛逆者にして、ネロ公の客将だよ」

「スパルタクスって、必ず逆転による勝利をもたらすっていう伝承がある、あの?」

「そうだよ。まあ今は連合ローマを敵と見据えたみたいだから、私の相手として戦ってるんだけどね」

「戦場に招かれた闘士がまた一人。喜ぶがいい。ここではあまねく強者との戦いにその身を投じられるであろう。比類なき圧政者に抗うものよ、叛逆の時は今来たり!」

「?」

「?」

「…」

「フォウウウ」

「ええ、と。とりあえずよろしく、つてことでいいのかな?」

男の発した言葉に対し、マシユとリリイは首を傾げ、フォウは士郎の頭の上で声をあげ、ジャンヌは頭が痛いのか、こめかみを指で押さえている。唯一士郎だけは戸惑いつつもコミュニケーションを図ろうとしている。

「へえ、珍しいね。スパルタクスが他人を見て喜んでるのに襲わないこともだけど、君みたいに気圧されずにコミュニケーションを取ろうとしている人もね」

「ドクター。この男性は、」

『うん。間違いなくサーヴァントだ。というか、是非そうであって欲しい。そうでなかったら耐えられない』

「これ、間違いなくバーサーカーよね。話しているけど、全く通じないもの」

『バーサーカーで筋肉マッスルかあ。一応敵ではないみたいだけど、なんだかなあ』

通信越しに様子を確認していたロマニも、スパルタクスの圧倒的存在感に、何処か現実逃避をはじめそうだった。

「叛逆の勇士達よ。その名を私に示す時だ。その名を叫び、共に自由を求め、叛逆の狼煙をあげようぞ」

「はあ?」

「?」

「??」

やはり会話が噛み合わないどころか、理解することに苦しむサーヴァントトリオ。リイとマシユは顔を困った表情で見合わせていたが、ジャンヌに至っては呆れと苛立ちの半々の表情をしている。どうやらスパルタクスとの相性はあまり良くなさそうだ。

「あ、えっと、俺は衛宮士郎。三人のマスターだ。右からマシユ、リイ、そしてジャンヌだ。よろしくな」

「「わかったんですか!?!」」

『流石士郎くん……色々と規格外なのかな』

「というか、今の名前を聞かれていたわけ?意味わかんないわよ」

「そうだよ。よくわかったね、えっと、私もシロウでいいかな?」

「ああ。ブーディカさんも、よろしく」

—————

なんとか意思疎通を完了した士郎とスパルタクスたち。とりあえず手合わせ前に、味方であること、本気の殺し合いではないことをスパルタクスに理解してもらうために、ブーディカと士郎が主に説明していた。完全に理解してくれたかどうかはわからないが、いざとなればブーディカが止められるとのことらしく、始めることにした。

「さてと、思ってたよりも遅いスタートになっちゃったわけだけど、」
「ああ。行くぞ」

剣を抜くブーディカを見据え、士郎は両手に干将・莫耶を投影する。どこからともなく武器を取り出した士郎に対し、ブーディカは一瞬めを見開いたものの、すぐに戦闘態勢に入った。

「それじゃあ、行くよ、スパルタクス！」

「了解した。これより叛逆の声をあげ、圧政者に鉄槌を下そう！」

「マシユ、リリイ、ジャンヌ、頼むぞ！」

「はい」

「お任せください」

「ふんっ」

先陣を切って突撃してくるスパルタクス。マスターを圧政者としたのか、士郎へと真っ直ぐ進む。その巨体を止められるものは、士郎達のメンバーには居まい。そう思ったブーディカだった。しかし、

「ぬおっ!？」

突如、スパルタクスの目の前に黒い刃がいくつも突き刺さる。驚いた拍子に止まってしまおうスパルタクス。その周囲に更に同じような剣が刺さり、完全に取り囲まれてしまう。

「全く、これだから狂戦士は。そんな分かり易すぎる攻撃、くらうはずもないでしょう」

そう言っただけで士郎の前には、旗を手にし、剣を抜き、笑みを浮かべたジャンヌ・オルタだ。先ほどの剣も、ジャンヌが降らしたものの。ルーラーからクラスチェンジし、復讐者、アヴェンジャーとなり、手にした能力。攻撃力の上がこのクラスは、彼女の性格も相まって、より適しているように見える。

「サンキュー、ジャンヌ」

「礼なんていらないわよ。それよりも、仮にもこの私のマスターなのですから、もっとしっかりしなさい。貴方がヘマをしたら、私までダメなサーヴァントと思われるでしょう」

「ああ、そうだな……悪い」

あまりにも素直に謝られるため、むしろジャンヌの方が調子が狂いそう。咳払いをした彼女は視線をスパルタクスに戻す。丁度剣を叩き折り、脱出したところのようで、次の獲物としてジャンヌに狙いを定めていた。

「よし、マシユ、リリイはブーデイカさんを頼む。こっちは俺とジャンヌでやる」

「了解です。行きましよう、リリイさん」

「はいー」

左右に走り、スパルタクスの周りを迂回する二人。ジャンヌ目掛けて走り出したスパルタクスの目には、二人は映っていない。そのまま通り過ぎた二人は、ブーデイカ目掛けて走った。

「おやおや、分断されちゃったか。シロウも案外策士だね」

「行きますー！」

「やああつー！」

振り下ろされる盾と剣。しかしブーデイカは焦らずに攻撃を回避し、続けて振り上げられた剣を自身の盾で防ぐ。

「それじゃあ、二人の力も見せてもらおうとしますか」

—————

手合わせが始まって少し、士郎とジャンヌはスパルタクス相手になり攻めあぐねていた。どうもスパルタクスは攻撃されてから反撃することしかしないようだ。ならば攻め続ければいいと思っただけが、そうもいかないらしい。

どれほど傷をつけたところで、回復してしまうのだ。更に言えば、普通なら回復のためにそれなりの魔力を使うもののだが、保有しているスキルなのか、ほとんど魔力が使われていないのだ。

「くっ、トレス、スオン 投影、開始ー！」

通常よりも一回りも二回りも大きい剣をいくつか投影し、スパルタクス目掛けて射出する士郎。その剣は容易く肉を裂き、地面に突き刺さる。

「ははははは。この身は満身創痍にして、強き圧政者が二人。これでこそ、勝利の凱歌は叫びがあるというものー！」

それでもスパルタクスは笑う。痛みなどないかのよう。裂けた肉は、傷は、たちまち塞がっていく。

「ほんつと、狂ってるわね。私もオルレアンじゃいろんなサーヴァントを狂わせていたけど、ここまでのはいなかったわ」

「いや、こう言っちゃ悪いが、あのジル・ド・レエも相当狂ってたと思うぞ。あれでクラス的にはキャスターだもんなあ」

余裕があるんだかないんだか、なんだか緊張感に欠けるやりとりをするジャンヌと士郎。しかしその瞳はスパルタクスから逸らされない。

「ジャンヌ、俺が奴の攻撃を防ぐ。その隙に攻撃してくれ」

「いいわよ。けど、しくじらないように」

「ああ」

一方、マシュ・リレイペア対ブーディカ。第一特異点での旅が終わった後、より強い敵と戦えるように、二人はコンビネーションを磨いていたのだ。攻めと守りを交互に入れ替える二人に、ブーディカも押されている。反撃してきたブーディカの剣を防ぐマシュ。

「今ですー！」

「はいー！」

肩を蹴り、跳び上がるリレイ。マシュと盾、ブーディカの上さえも飛び越え、背後に回り込みながら剣を振り下ろす。なんとか左手に持つ盾で防ぐブーディカ。攻撃の力が緩んだ隙に、マシュは全力を込めて盾でブーディカの剣を跳ね上げた。

「おっと、これは参ったな。私の負けみたいだね」

次の行動へと移ろうとしたブーディカの背中にカリバーンが突きつけられる。両手を挙げ、降参の意思を示すブーディカ。剣を下ろすリレイ。

「リレイさんー！」

「マシュさん、やりましたよー！」

「はい。特訓の成果がちゃんと出せましたね。タイミングもバツチリでした」

駆け寄ってくるマシユと顔を見合わせ笑顔を浮かべるリリイ。特訓の成果がしっかりと出せたことが嬉しそうだ。その様子を見ながら優しいな笑みを浮かべるブーディカ。

「うーん、これでもブリタニアの勝利の女王って呼ばれてたのになあ。でもまあ、頼もしい後輩がいるって思うと、私も安心、かな？」

今の打ち合いの中で、ブーディカは二人の真名に思い当たったのだ。そして納得していた。成る程、あの剣を振るうことになる彼女が相手では、約束されざる自分が負けるのも、仕方のないことなのかもしれない。

そして、その隣にいる彼女もまた、自身以上の守りを可能としている。まだ完全に使いこなせているわけではなさそうだが、期待できそうだとブーディカは感じていた。誰よりも白く、まっすぐな心を持つ彼女。その純粋さ故に、その守りは強固となる。

まるで娘の成長を心待ちにする、母のような、そんな優しい思いを込めて、ブーディカは二人を見つめていた。

トレース・フラクタクル
「投影、重装！」

干将・莫耶をしまい、弓を手取る士郎。ジャンヌ共々、距離を取り構える。何が来るのかを期待しているのか、スパルタクスの瞳が士郎を捉える。

手に持ったのは偽・螺旋剣とは異なり少し長めの剣。デザインとしてはシンプルで、装飾もほとんどない。しかしそれもまた紛れもなく宝具。リリイの愛用する剣、その原点にして「選定の剣」の起源。

喰らえ、メロダック「原罪」！

矢へと形を変え、放たれた剣は途中で輝き出し加速する。光の弾丸のごとくになったそれは、剣を振るうスパルタクスの右腕を貫いた。ガクツ、とスパルタクスの右腕から力が抜ける。手に持つ剣も音を立てて落ちる。

「お、お、おとおおお——！！」

利き腕を奪われるもスパルタクスは雄叫びをあげ、走り出した。武器を持たぬまま、腕の傷が回復を始める。その腕は士郎目掛けて伸ば

されている。

「投影、開始」

「熾天覆う七つの円環！」

7枚の花弁を持つ盾が士郎の目の前に現れる。スパルタクスの突撃を受けてなお、その盾が動じることはない。むしろ仕掛け、弾かれたスパルタクスのダメージの方が大きい。カウンターしかないというスパルタクスが、カウンターを喰らってしまったのだ。

「ジャンヌ！」

「ええ。これでどう？」

剣を抜いたジャンヌ。その剣を振るうとともに、スパルタクスの周囲に炎が溢れ出した。炎の壁に囲まれ、完全に動きを封じられたスパルタクス。

「そこまで！」

突然響いた声。ジャンヌは剣をしまい、炎も消えた。

「うむ。なかなかの戦いであつたぞ。双方見事」

いつの間に来ていたのか、ネロが賞賛の言葉を並べながら近づいて来た。ちらりと視線を戻すと、ブーディカがスパルタクスを宥めているところのようだ。一安心した士郎は小さく息を吐いた。

母親（ブーデイカ）

「とまあ、大体の事情はこんな感じだ」

「なるほどねー。異境の地から。そっかあ、そういうこともあるのかあ。なんだか、思ってたよりも大変なことになってるっぽいね。君の話を聞いた限りだと、君って相当巻き込まれ体質なのかな？」

「んー、なんだろう。なんだか否定したいけどできない気がする」

ガリアの野営地、その中のテントの一つで、士郎とブーデイカが並んで会話をしていた。その前には様々な食材。夕飯を希望したネロに伝えるべく、二人で食事の準備をすることとなったのだ。

「ブーデイカさんは、その、どうしてローマの将軍に？」

「まあ、そうだよ。女王ブーデイカの話を知ってるなら、その疑問も当然か。それに、あたしはもう死んだはずの存在だからね」

料理の手を止めることなく、二人は話を続ける。士郎の手際の良さに感心しながらも、ブーデイカは彼の疑問に答えるべく口を開く。

「ネロとローマを許さない。ケルトの神々にまで誓ったあたしが、まさか自分が死んだ直後の時代に召喚されるとは、思ってもなかったよ」

「復讐しようとか、考えなかったのか？」

「考えたよ。でも、蹂躪されている此処ローマの人々を見たら、身体が勝手に動いてたんだ。あたしは、守るために戦うのが、合っているからなのかもね」

「守るために、か……それは、ネロのことも？」

「……かもね」

手を止めるブーデイカ。士郎もまた、料理の手を止め、ブーデイカを見つめる。複雑そうな笑みを浮かべながら、ブーデイカは答えた。

「ネロ公はさ、あたしのことを「生きている好敵手」だと、勘違いしているみたいでさ。余計な気遣いをさせたくないしね。あいつったら、あたしに会って最初に謝ってきてさ、力を貸して欲しいって頼みこんできたんだ。その姿を見たら、なんかね、応えてあげたくなくなっちゃったんだ」

「……ブーディカさんは凄いな。人を守る存在、まさしく英霊の体現者って感じがする。少し、憧れるな」

「嬉しいこと言ってくれるね。あたしって結構地味な英霊なんだけどなあ」

はにかんだ笑顔を見せるブーディカ。自分の周りにはあまりいなかったタイプ的年上系オーラに、士郎も思わず顔が赤くなった。

「あ、んん！早く仕上げないとな。ネロもリリイも楽しみにしてたっぼいし」

「そうだね。よしっ、最後の一踏ん張りで行こうか」

その後、二人の合作料理を目を輝かせながら食べるリリイや満足そうにするネロを見ながら、ブーディカはなんだか温かい気持ちになったのだった。

「それにしても驚いたよ。シロウって逸材だね。戦闘能力も高く、戦闘時の頭もキレる。おまけに家事スキルまで高いときた。君一人がいるだけで、多くの戦争の結果が変わってたかもね」

「俺はそんな大した存在じゃないよ。ただ、誰かを幸せにしたいって思ってたただけだから。料理は親父がまともにはできなかったから身につけたし、魔術も剣術も、才能がないって散々言われてたしな」

「ですが、先輩はやはり凄い方だと思います。私も、戦闘面や生活面でたくさんのお話を学ぶことができますし」

「それに、シロウは私に剣の指導もしてくれています。お陰で私ももっと上達できていると感じてますし」

「ふむふむ、サーヴァントとの関係も良好。サーヴァントとマスターというよりも、一人一人の個人として、見ているのかな？」

「?いや、個人として見てるって、マシユはマシユ、リリイはリリイだろ?」

「あはは、その通りだね。うん、成る程ね。いいマスターだね、君は」

食事後、今日のところは一先ず休むということで、士郎たちはブーディカと話していた。ネロは兵たちと話しこんでおり、ジャンヌは一

足先に風呂に入るといい、さっさと行ってしまった。

「それにしても、うん。うんうん。(じーっ)」

マシユとリリイを優しく見つめるブーディカ。理由がよく分からない二人は首をかしげる。

「あの、ブーディカさん？」

「うん。やっぱり、二人とも可愛いなあ。よしよし」

「えっと、あの、ブーディっ」

立ち上がり、二人の元まで歩いたブーディカはその頭を優しく撫でたかと思うと、抱きしめた。

「こういう感じ、久しぶりだなあ。二人はあたしの後輩みたいなものだし、なんだか甘やかしたくなっちゃうよ」

「あ、あの、ブーディカさん、その顔に」

「わわっ、わわわっ」

顔を赤らめ、何やら話にくそうにしているマシユ。リリイも恥ずかしそうにしている。そんな光景を見た士郎はというと、

「ん、どうしたのシロウ？急にそっぽ向いちやって」

「いや、なんでもないよ」

顔を背けたのは、なんだか見ている気恥ずかしかった……というだけではない。むしろ光景自体は微笑ましく思えた。ただ……

「母親……か」

今の自分の全てが始まったあの事件。あの日以来、自分には縁のなかった母親という存在。二人の娘がいたブーディカにとって、マシユとリリイは娘のように思えるのだろう。

自分には父と呼べる人男がいた。姉と呼べる人女性もいた。そこには確かに家族がいた。その後も、通つてくるようになった後輩ができ、人がよく来るようになって、賑やかな時期もたくさんあった。寂しいと感じたことは、思い返してもなかったような気がする。

けれども、自分には母と呼べる存在はいなかった。

産みの母はいたはずだが、その記憶も既がない。

ブーデイカの母性溢れる行動を見て、母親の記憶がないことを少し寂しく思ってしまったとはとても言えない。

「んん〜？何々、シロウは仲間外れにされて寂しいのかな？」

「え？いや、そういうわけではなくて、わぷっ」

「先輩!？」

「シロウ!？」

振り返った士郎の視界が何かに埋もれた。頬に感じるのは、何やら暖かくて柔らかい物。自身の髪を誰かの手が優しく撫でてくれて、とても心地よい。そしてふわりと、なんだか気持ちが悪く落ち着くような香りが……

「まだいたの？私もネロも上がっちゃったわ……よ？」

風呂から上がってきたジャンヌが丁度戻ってきて、目の前の光景に固まった。椅子に座ったままの士郎の頭をブーデイカが抱え込むように抱きしめ、頭を撫でているのだ。丁度位置的に、士郎の顔がブーデイカの胸に埋もれる形になっている。

「……」

「……」

「……」

「って、何してんのよあんたはあっ!？」

沈黙することしばし、ダッシュで士郎たちの元へ駆け寄ったジャンヌは思いつきり士郎の首根っこを引っ掴み、ブーデイカから引き離れた。

「ぐえっ、ちよっ。ジャンヌ待て！これには深い訳が……」

「あら、どんな訳なのかしらね？今日会ったばかりの女性の胸に顔を埋めるなんて、一体どれほど重要な理由があるのかしら？」

「いや、それはなんていうか、今のは不可抗力というか。ほ、ほら！マシユたちも、説明してくれ」

恐ろしいほどの笑顔で肩を掴んでくるジャンヌ。何故ここまで怒っているのか分かっていない土郎だったが、取り敢えず宥める必要があると思ひ、マシユたちに助けを求める。が、

「先輩、不潔です」

「えっ!？」

やや不機嫌そうなマシユには見捨てられ、

「わ、私もいつかブーディカさんくらいに育つのでしょうか」

なんだか悩ましげなりリイには聞こえていないらしく、

「あはは、こりや大変だ」

実行した張本人のブーディカには見守られるだけだった。

「ふふっ。さあて説明してもらおうじゃない」

ジャンヌの笑顔がさらに凄みを増す。どうやら逃げ場はないらしい。そんな時、土郎に言えることは一つだけ。

「なんでさああああっ!？」

竜の息吹

「うう、昨日は酷い目にあつた…」

「だ、大丈夫ですか、シロウ？」

「ああ、リリイ、おはよう。まあ、何とか大丈夫だな」

ドタバタした合流した夜、ジャンヌにこつてり怒られた士郎は、翌朝になつてもやや疲れた顔をしていた。少しばかりバツの悪そうな顔をするマシユとジャンヌ。

「ほら、シロウも座つて。朝食ならもうできてるからさ」

「ごめん、ブーディカさん。俺も手伝おうと思つてたのに」

「気にしないでいいよ。シロウは昨日疲れちゃつたみたいだつたしね。それに私はサーヴァント。睡眠もいらなし、疲労もないしね」
「それでも、全員分は大変だつただろ？ありがとう」

「ふふつ、シロウはいい子だね、よしよし」

「なつ、ちよつ、ブーディカさん!？」

席についた士郎の側に行き、頭を撫でるブーディカ。なんだか小さい子扱いされているようで慌てる士郎。ジャンヌとマシユの視線が少しばかり痛い。ついでにローマ兵のも。

「ほほお。えらくシロウが気に入つたようだな、ブーディカ」

「まあね。あたしに息子はいなかつたけど、彼みたいな子ならいいなあ、つて思つてさ」

「ぬ、そうか……」

「ネロ公、一応言つとくけど、別に責めてる訳じゃないからね？それに、シロウは何だか見ていて危ういからね。気にかけてくなつちやうんだよ。あの子、無意識の内に甘えられる人がいないっぽいしさ」

「む？それはどういう……」

「あたしの勘なんだけどね。彼、母親を知らないで育つたのかも。名前とかじゃなくて、どんな存在なのか、つて奴」

「そうか……お主が言うなら、そうなのかもしれないな」

「だからかな……後輩たちは当然だけど、彼はもつと心配。無茶しないといいんだけど」

「うゝむ……」

少し慌ただしい朝食となつてしまつたが、無理もない。まさしくその後、ガリア奪還作戦が行われようとしているのだから。

「……………」

「じゃあ手筈通りに行くよ。あたしとスパルタクスが露払いをするから、ネロ公はガリアを直接叩く。シロウ、護衛は任せたよ」

「ああ」

戦闘前の最後の確認を行う。今回の敵の中には、サーヴァントの反応も確認されている。おそらくは連合の皇帝の一人だろう。サーヴァントの相手はサーヴァントにしか務まらない。詰まる所、士郎たちがそいつを倒さなければ、ガリア奪還はできないのだ。

「うむ、用意はいいな。では、行くぞー！」

ネロが刀を掲げ声を上げる。呼応するように兵たちも続き、ガリア奪還作戦は開始された。

「ふは、はははっ！なんたることだ！溢れる……圧政者で溢れるぞ！私に続け、叛逆者たちよ！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

陽動役でもあるブーディカとスパルタクスの率いる兵と別れ、士郎とネロの隊はガリアへと突き進んだ。途中に連合の兵士が立ちはだかるものの、サーヴァント三人に敵うはずもなく、特に大きな障害もなく攻め込むことができた。

しかし、戦いはまだここからが本番だった。

「ぬ？」

『みんな、前方に魔力反応だ。サーヴァントや竜種のそれとは違う。これは、ゴーレムだ！』

ロマニからの通信が終わる頃に、士郎たちの前にいくつもの巨体を持つ怪物が立ちふさがった。サーヴァントや竜種とまではいかないものの、巨体を誇る怪物は、人間の兵士には到底太刀打ちできるものではなかった。

魔力によつて動かされているだけの人形とはいえ、そこその強度を持つ体を持ち、人間の数倍の力を振るう。加えて、材料が土であるため、魔力がある限りいくらでも作り出すことが可能となる。もともと数では劣る作戦、ゴーレムたちの登場は大きな痛手となった。

今まさに兵士を拳で殴ろうとしていたゴーレムの一体を切り裂きながらも、士郎は軽くあたりの状況を確認する。マシユ、リリイ、ジャンヌ、ネロ、そして自分。この5人以外はゴーレムに大いに苦戦を強いられている。ネロの周囲をとり囲もうとするゴーレムを破壊する士郎。気づけばマシユや他の兵たちも集まっており、ゴーレムによつて取り囲まれていた。

「ぐう、これでは皇帝の元まで辿り着くのも骨が折れそうではないか」「大きな火力で道を開いて、そこから突破するしかないな」

自分ならこの周囲の敵を一掃することもできるにはできる。しかしそれは一気に膨大な魔力を使うこととなる。カルデアからの魔力の供給があるとはいえ、どこまで押し切れるか。それに、この先に皇帝の一人がいる。ここで力を使いすぎるわけにもいかない。

どうする？ ジャンヌの宝具も強力だけど、この数を相手にするのは難しいな。マシユの宝具は防御としては最高だが、今必要なのは火力だ。リリイのカリバーンなら……けど、この数を突破するには相当威力を高めなければならない。

チラリと左手を見る。三画ある令呪、その一つを使えばリリイの力を底上げできる。しかし、こんな序盤で使うわけにもいかない。補充できるとはいえ、この先どれほど必要になるのかがわからないのだ。『二画作るのにも結構時間と魔力が必要なんだ。なにせ通常ではあり

えないことを起こせるほどのものだからね。一つ作るのにも数ヶ月はかかるかな。今は動けなくなつたマスターたちの分もあるから補充は効くけど、使いすぎないようにね』

「ダヴィンチからの説明が脳裏をよぎる。今が使うべき時なのだろうか。」

「リリイ、あんたの宝具で突破するわよ」

「えっ?」

意外なことに指示を出したのはジャンヌだった。士郎やマシユが驚く中、片手をリリイに差し出す。

「あの、ジャンヌさん?」

「いいから、さっさと手を出す」

「は、はい!」

差し出された手に恐る恐る自分の手を重ねるリリイ。途端にリリイは、自身の力が格段に強化されるのを感じた。強力なブーストがかけられたかのようなうだ。

「これは、一体……?」

「ほら、さっさとやる!」

「はい!選定の剣よ、力を。邪悪を絶て!」

「勝利すべき黄金の剣!」

剣を前へと突き出すリリイ。その切っ先から放たれた光は、フランスで見せたそれよりも一回りも二回りも巨大なものだった。一気にゴーレムを粉碎していく光。まるで強烈な竜の息吹のごとく、その一撃が止まるなことなど考えられない。気づけばガリアの中心へと一本の道が出来上がっていた。

「道が開けました。ネロさん、先輩!」

「うむ。今のうちに行くぞ!狙うは連合ローマの皇帝ただ一人!ここで勝てば、我らのローマを取り戻す時も近いぞ!」

「シロウ、先に行つててください。ここは私が食い止めますから」

「リリイ、一人で大丈夫か?」

「私も残ります。皇帝なんかには興味がないもの。それに、私がいた方がこちら都合がいいでしょう」

現在ジャンヌ保有するスキルの一つ、竜の魔女。その効果は、竜の属性を持つ存在の能力を飛躍的に向上させること。そしてアルトリア・ペンドラゴンは別名ブリテンの赤き竜。竜の因子をその身体に持っている。故に、ジャンヌがいることで、リリイは通常よりも遙かにステータスが向上する。残念ながら常時発動型ではないため、使うタイミングを見極めることも重要になるが、意外にもこの二人は相性が良いようだ。

残念ながら、そのことを士郎が教えられるのは大分先のことになるのだが。

「そうか。ジャンヌ、リリイ、ここは頼む」

「お任せください」

「ふんっ」

二人に後方を任せ、士郎はネロとマシユを追い、ガリアの中心へと進んで行った。

『士郎君、サーヴァントの反応が近くなっている。気をつけるんだよ』
「わかつてるよ、ドクター」

迫り来る敵を斬りはらいながら駆け抜ける。敵は皇帝の一人、つまりこの特異点の異常の原因の一つだ。それ以外にももう一つ、宮廷魔術師について何か知っているかもしれない。

「ここに来ているのか、レフ・ライノール」

あの時自分たちを見逃したあの男。奴がいるのであれば、会わなければならぬ。奴のために、カルデアも、マスター候補者たちも、そして所長も。

「今度は、倒す！」

先輩のサーヴァント

「来たか」

その男は士郎たちを見るなり、退屈そうに座っていた椅子から立ち上がった。右手に持っているのは金色の剣。その特徴から、近接戦闘においてはかなりの脅威なのがわかる。幸運の判定で成功した分だけさらに連続攻撃を行う。アーチャーの幸運値を考えると、自分にとってかなり面倒な相手かもしれない。

男が立ち上がると同時に、その傍に黒い体を持つゴーレムが現れる。先ほどのゴーレムのグレードアップされたものようで、ひとまわりは大きくなっている。

「しかし、退屈しすぎたかとも思ったが、待った甲斐はあったようだ。美しいな。そう、美しい。実に美しい。ローマを統べる者にふさわしき美しさだ。愛しきローマを継ぐものよ、名はなんという?」

ネロだけを見つめ、語りかける男。

「それとも、名を名乗ることもせずに私を斬るか?ローマの皇帝を名乗り、我らが土地を治める者が?」

「ふむ。貴様の言う通りだな。我が名はネロ。ローマの5代目皇帝、ネロ・クラウディウスである!」

「ネロ。良い名乗りだ。そう、良い。実に良い。そうでなくては面白いくない。異国の客将、貴様らも名乗るがいい」

「士郎。衛宮士郎だ」

「マシユ・キリエライト。マスターである士郎先輩のサーヴァントです」

「そうか。それがサーヴァントとマスターというものか……まあいい。いずれにせよ、私の敵だな。この黄金の剣、クローケア、モース黄の死を喰らうがいい」

剣を抜き構える男。しかし士郎は構える様子がない。

「どうした?今更怖気付いたとでもいうか?」

「……で、あんたは?」

「むっ」

「こつちは全員名乗った。なら、あんたも名乗るのが筋だろう？」

「ふむ……確かにそうだな。そうだ。その通りだ。我が名は皇帝の起源、ユリウス・カエサルだ。覚えておくが良い」

胸……もとい腹を張って答えるカエサル。その答えを受けて、士郎とマシユの目が点になっている。

「?なんだ?どうかしたのか?」

「えっ、あっ、いえ。ただ少し、驚いただけで……」

「いや、まあ、伝承と違ってどう間違ってるかなんて、もう予想もつかないしな……男が女だったとか……な。カエサルが実際は、こう、ふくよかでもおかしくはないか」

「何やら不愉快な納得をしているようにも聞こえたが、まあいいだろう。来るがいい、既に賽は投げられた。貴様らの探しているもの、求める答え、よく戦えば答えてやらんこともないぞ」

カエサルが戦闘態勢に入ると、ゴーレムも動き出し始めた。

「シロウ、マシユ。あの岩の怪物は頼むぞ。余は皇帝を名乗るあの男を！」

「気をつけろよ、ネロ」

「戦闘、入ります！」

巨体から繰り出された拳を士郎は双剣で、マシユは盾で受け止める。しかし、やはりグレードアップされているようで、容易く後退させられる。

「先輩、気をつけてください。並みのサーヴァント以上の腕力はあるかと」

「ああ。それに、身体を形成しているのも土じゃなくて、硬化させられている岩だ。多分、防御面でも、かなり強くなっているな。気を抜かずに行こう、マシユ」

「そうですね……あ……ふふっ」

「?マシユ?」

突然嬉しそうに笑うマシユに、士郎は疑問符を浮かべる。何か楽しいことでも思い出したのだろうか。

「いえ……その、こうして先輩と二人でというのも、なんだかずいぶん久しぶりな気がして」

「そういえば、リリイやジャンヌ、それに特異点で出会ったサーヴァントが基本は一緒だったもんな。冬木での戦い以来か？」

「そうかもしれない。そんなに前ではないはずなのに、もう既に懐かしく感じてしまいます」

「そうだな。じゃあ久しぶりのタツグだ、頼りにしてるぞ、マシユ」

「はい。行きましよう、マスター」

二人並んで強化ゴーレムを相手取る。通常の間人よりも強いとはいえ、サーヴァントほどの戦闘力はまだない。二人の敵ではない。ゴーレムの動きを上回る速度で二人は獲物を振るい、攻撃を叩き込む。しかし、

「先輩っ。攻撃を当てることはできますが、防御力がかなり高いです！これでは、決定打を与えられません」

「ああ。しかも、地面からの砂利や土を使って、削れた部分を再構築してるみたいだな。これは、再生力を上回るダメージを与えないとダメってことか」

干将・莫耶やマシユの盾は、確かにダメージを与えることには成功している。だが、その攻撃はせいぜい体表のごく一部分を削り取ることはできても、大きなダメージを与えているようには見えない。

次第に防戦に回る二人。いくらダメージを与えても、再生してしまいうのでは、こちらの体力を消耗するだけ。策を考える間、二人はゴーレムの攻撃をしのぐことに徹していた。

「ゴーレムの再生力を上回るには、強力な一撃を一点に集中させることが有効かと思います。それなら、あの強固な身体を貫くことも可能になるのではないだろうか」

「一点に……よしっ、マシユ。数秒間、あいつを引きつけてくれ。あいつの防御を切り崩す！」

「了解です」

バックステップし距離を取る土郎と、前に出てゴーレムの攻撃を迎

え撃つマシユ。一切の迷いなしに、マシユは士郎の頼みを実行する。それは士郎に対する、絶対ともいえる信頼。そしてその期待に応えるべく、士郎は魔力を集中させる。

「投影、開始」

「——鶴翼、欠落ヲ不ラズ」

両手の干将・莫耶を握り、二刀を投げる士郎。ゴーレムの体表で弾かれるだけのなんの変哲も無い攻撃。攻撃の出どころである士郎へと向かおうとしたゴーレムの前に、マシユが立ち塞がり、再び自分へと意識を向けさせる。

「——心技、泰山ニ至リ」

「——心技、黄河ヲ渡ル」

すぐ様同じ剣を投影する士郎。先ほどと同様に、二刀をゴーレムに向けて投げつける。交差するように、先ほどの二刀と合わせた合計四刀がゴーレムに当たり、また弾かれる。

もはやその攻撃を気にもかけずにマシユを攻撃するゴーレムに対し、マシユは堅実な守りでダメージを受けずにいる。士郎が策を発動させるまで、自分のすべきことは彼を守ること。必ず成し遂げてみせる。

そして士郎の手に握られる三対目の夫婦剣。これは投げずに、士郎は更に魔力を込める。

「——投影、重装」

夫婦剣が変化する。より長く、より鋭く。まるで広げられた翼のように、二刀は進化を遂げる。これで、準備は全て整った。

「——唯名別天ニ納メ」

「——両雄、共ニ命ヲ別ツ……」

「マシユー！」

「はー！」

名前を呼ばれたマシユは、盾でゴーレムの攻撃を弾く。その反動で後退するゴーレム。止まった場所は、丁度士郎の真正面に当たる。士郎との間には他に何もなく、まさしく絶好のポイント。

「うおおおおおおつ！」

駆け出しながら、士郎が吠える。夫婦剣を握る腕を振りかぶりながら、狙いを定める。士郎をターゲットと認識したゴーレムが近づいてくる。巨体が腕を士郎へと伸ばす。

けれども、届きはしない。届くはずもない。その程度の速度では、追いつけやしない。

一刀一刀が必中、それが合わせて6つ。

近接戦における、彼とあの英雄の絶技。

更に、その強化版。

故に、その技は、止められはしない。

「——鶴翼三連——」

全く同時にゴーレムの体を、6つの刃が切り裂いた。1つ1つでは無理だったこと、その強固な鎧のような体を、この技は容易く切り裂いたのだ。

しかし、これで終わったわけではなかった。

僅かな岩で繋がっている胴体。しかし、それだけでもゴーレムは活動を停止することがなかった。ボロボロになりつつある腕を高く上げ、士郎に振り下ろそうとする。

「マシユー！」

「やあああつー！」

士郎の呼びかける前に、マシユは既にゴーレムのすぐ後ろに回っていた。横薙ぎに振られる盾は、ゴーレムの体を両断し、完全に砕いた。崩れ落ちる岩は、二人の足元で動かなくなった。

「ナイスフオロー、マシユ」

「いえ、先輩こそ、お疲れ様です」

「それにしても、よくあのタイミングでゴーレムの後ろに回ってたな」
「先輩の言っていたことを思い返したら、どうするのかがわかったんです。先輩は防御を切り崩すと言いました。それはつまり完全に倒しきるのではない。だからとどめは私が、という意味だったんですね？」

「正解。って、今思うと、よくわかったな、マシユ。自分で言うのみな

「のだが、あれだけじや結構わかりにくかっただろ？」

「いえ。私は、先輩のサーヴァントですから。今はまだ無理でも、将来的にはアイコンタクトだけでどんな指示も理解してみせます」

「……そっか。頼もしいな」

「あ、ありがとうございます」

お疲れ様の意を込めて、マシユの頭を撫でる土郎。くすぐったそうに、でも嬉しそうに、マシユはその手を受け入れる。呼吸を整えた二人は、直ぐさまネロの戦っている方へと向かった。

高速の剣技

二人の皇帝の戦いは、激しさを増していた。見た目と裏腹に、なかなか素早い動きをするカエサル。その剣技も見事なもので、なるほど皇帝と呼ばれるだけのことはある。

一方ネロもまた負けず劣らず、舞っている様にも見える剣技で攻める。気持ちの高ぶりに呼応しているのか、その剣の輝きもいつも以上になっている。

「貴様、ふくよかな割にはよく動く。流石の余も驚いたぞ」

「仮にも最優のサーヴァント、セイバーであるぞ。これしきのこと、当然だ。寧ろそちらこそ、人の身でありながらもサーヴァントと渡り合うとは。良いぞ、実に良い、益々良い！」

幾十回と繰り返しぶつかり合う二つの剣。徐々にネロの方に疲れが見え始める。人間とサーヴァントの差が出始める。

「ぬうっ」

「ふむ、そろそろ終わりにするとしよう」

「私は来た！私は見た！ならば次は勝つだけのこと！」

黄金の剣が輝き始める。発動されるのは宝具、カエサルの至高の技。高速で剣が振られ、ネロ目掛けて襲いかかる。

「黄の死！」
クロケア・モース

幾たびも連続して切りつけるカエサル。しかしその手応えは硬かった。響くのは肉の裂ける音ではなく、鉄と鉄が打ち合う音。飛び散るのは真つ赤な血ではなく、激しく飛び散る火花。黒く、巨大な盾が、彼の高速の剣技を受け止めている。

「ネロさん、大丈夫ですか？」

「マシユか、助かる」

「ほう、向こうは片付いたということか……ぬおっ!？」

感心したようにつぶやくカエサルが頭を下げる。丁度額のあった位置を鋭い矢が通り過ぎていく。双剣ではなく、黒い弓を手に、駆けつける士郎。ネロを庇うように前に立つ。

「やれやれ。マスターとは、サーヴァントと互角の力を持つものなの

か？」

「互角だなんてとんでもない。俺なんかじゃまだまだだし、本来魔術師であるマスターが、サーヴァントと戦って勝てるはずがない」

「ふむ。貴様はどうにも例外のようにも見えるが、今度は貴様が私と斬り結ぶか？」

「遠慮しておくよ。それに……必要ないしな」

「？何を……!？」

ほとんどずっと余裕の表情を保っていたカエサルカエサルの顔に、初めて驚愕の表情が現れた。見下ろすは自身の左腕。そこには長い矢が、膝側から正面にかけて、彼を貫いていた。

「これは……」

「その矢は、一度捉えた獲物を、決して逃しはしない概念が込められている。最初の軌道をかませたとしても、その矢は自動でお前を狩るまで追い続ける」

本来は血の匂いを嗅ぎつけ、最適な攻撃を自ら行うという剣。その特性を矢として活かすべく、改良を施された魔剣。その名はフルンディング赤原獵犬、射手が健在であれば獲物を追い続ける追尾型の矢。その特性を見切ることができなかったカエサルは、まんまとその牙に喰らい付かれたのだ。

「ふむ……想像以上にできる……シロウとか言ったな。強いな。強い。実に強い。であればこちらも本気で相手をしなければならぬというもの」

「本気だと？」

みるみるうちにカエサルカエサルの魔力量が増えていく、まるで今まで抑え込んでいたものを解放するように。その左腕は、巨大なゴーレムのそれに酷似したものとなり、胴体にも防具のように、所々が覆われる。先ほどの矢による怪我もなかったかのように、軽々と腕を振るうカエサル。

「では、これをどう突破する？」

「マシユー！」

「はい！ネロさんは下がっててください。ここは私たちが」

「ぬう、すまぬ。余は少し休ませてもらう」

頭痛がするののか、頭を抑えているネ口を背に、士郎とマシユが力エサルと対峙する。カエサルが左腕を振るい、戦闘が開始される。

激しい激突音が響く。巨大な腕は見た目に違わぬ強固さと、見た目に反する素早さで、士郎やマシユに襲いかかる。使い手が使い手なら武器も武器。見た目の詐欺感が半端じゃない。

「うっ」

「くっ」

横薙ぎに払われた腕を受け止めきれず、交代させられる二人。パワーは先ほどのゴーレム以上。スピードは比べ物にならない。中々に厄介な相手である。

「本気のカエサルさん、かなり手強いですね」

「私も聖杯を手に入れたいのだ。許せ」

「聖杯を？手に入れてどうするつもりだ」

「なに、そんな大層な願いではない。なんでも叶うというのであれば、使いたいというだけのことだ」

「……悪いがそれはできないな」

「何？」

「聖杯は、俺たちが手に入れる。俺たちが、手に入れなきゃいけないんだ」

膝をついていた状態から立ち上がる士郎。ひび割れていた干将・莫耶を補強し、構える。少し息は上がっているものの、その眼光は衰えるどころか、鋭さを増している。

「ならば、試してみるとするか？貴様と私、どちらが聖杯を手に入れるに値するのかわ」

「何？」

「なに、簡単なことだ。どちらの剣が先に相手を捉えるか、それを競い合うだけのものだ」

所謂居合の試合のようなものをしようということのようだ。確かに手っ取り早く、一見イーブンな風にも思える。しかしカエサルの宝

具が士郎の不利を告げている。自動で連続攻撃を高速で叩き込むという剣。いくら士郎が守りの剣が得意といっても、不利すぎる。そうマシユは判断した。

「先輩、ダメです。この勝負に乗るべきではありません。相手の宝具を考えると、危険すぎます」

『マシユの言う通りだ。あの連続攻撃はとてもじゃないけど見切れるものじゃない』

ロマニもマシユの意見に賛成する。しかし士郎は特に反応を示すことなく、カエサルのことを見ている。戸惑うマシユ。暫しの間の後、士郎が一步前に進み出る。

「わかった」

「先輩!？」

『士郎君?!何を言ってるんだい?この勝負は危険すぎる』

驚愕し、引き留めようとする二人の声を受けながらも、士郎はカエサルの方へと歩いていく。感心したような表情のカエサル。

「ふむ、逃げぬのか?」

「逃げる理由がないしな。それに、負ける気もない」

「ふははっ、面白いな。面白い。実に面白い。では、始めるとするか。この石が地面に落ちた時が合図だ」

「わかった」

一呼吸して、士郎は干将・莫耶をしまう。そのまま右手を宙にかざした。

「獲物をしまうのか……なるほど、他のものを使うか。ならば、新しいものを出すまで待ってやろう。なんなら弓矢でも良いぞ」

「いや、いいさ。始めてくれ」

士郎の返事を受け、驚いた顔をした後、カエサルは肩をすくめる。大きめの石を手に取り、それを軽くトスする。石が落ちるまでの間に、カエサルは剣を構え、士郎は呪文を唱える。

「――トリス・オン
投影、開始」

何も無い空中を右手が握る。魔力がそこに集中し、徐々に形作っていく。足に力を入れ、重みに備える。

「――トリガー・オフ
投影、装填」

「全行程投影完了」

咄くと同時に石が地面に落ちる。カエサルが士郎目掛け駆け出し、剣を振るう。高速の剣を持って、士郎を仕留めるために。

「――
是、射殺す百頭」

交わるのは一瞬。響いたのは剣の落ちる音。信じられないという表情を浮かべるカエサルの手から黄金の剣が零れ落ちた。何が起きたのかわからないマシユにネロ。振り返った士郎の手の中には既に獲物はない。認識する間も無く、決着はついていたので。高速の剣を振るうはずのカエサル。それを士郎は、速さで上回った。

「な、んだ……今のは」

「俺の勝ちだな、カエサル」

崩れ落ちるように倒れるカエサル。その体は粒子状になり始めている。なんとか体勢を立て直すカエサル。その顔はまたしても余裕のある笑顔に戻っている。

「うむむむ。まさかこれ程までとはな……当代の正き皇帝、良い将を得たものだな。そもこの私を一兵卒として扱うこと自体が間違っているのだ。あのお方の考えはわからん」

「あのお方？」

「そうだ。連合首都にて、あのお方は貴様を待っているだろう。いかなる皇帝でさえ逆らうことのできぬ存在。私は厳密には違うがな。あのお方を見た時、貴様がどのような顔をするのか、楽しみだ。見られぬことが残念であるな……」

気になる情報を残し、カエサルは消滅した。驚くネロに、マシユが説明する間、士郎は自身の右腕を見下ろした。ゆっくりと顔の前まで腕を持ち上げ、拳を握り、開く。左手で指に触れてみて、士郎は右腕をそつと下ろした。その指先は、僅かに痙攣していた。

それはどこか危うくて……

「皆の者、ご苦勞であった。ガリアを取り戻し、我らの正きローマを取り戻すことに一步近づいた！ローマに帰る前に、しばし休むが良い」
ガリアでの戦闘が終わり、ローマ軍は小さな宴会を開いていた。
カエサルを倒し、無事にガリア奪還作戦は成功した。敵国の将を一人倒したことで、ローマ軍は喜び、士気も高まっている。中でもサーヴァント組は、その一騎当千のごとき戦いぶりから、兵たちの尊敬の念を集めている。

「勇士達よ……これによつて、圧制者は一人減つた！この地で得た勝利を広めよ！叛逆の狼煙を各地であげよ！今こそ時は、極まれり！」
「！！！！」

何故か特にスパルタクスが慕われているのは謎ではあるが……一方、ガールズサーヴァントは四人で集まっている。

「マシユもリリイも、ジャンヌもお疲れ様。聞いたよ、特に二人の活躍。黒と白の戦姫とか、無双の騎士コンビとか、ね」

「ふんっ、それがどうしたというのですか？自分たちの国を取り戻すための戦いなのでしょう？ならば、死ぬ気で私たちについて来るべきです。兵達にそう伝えなさい」

「ジャンヌさん、そんな言い方しなくても……私はシロウと共に戦うと決めたので。ローマを取り戻すためにも、精一杯努めさせていただきます」

「うんうん、頼もしいね」

三人が会話している間に、マシユは軽く会場を見渡す。しかしお目当の人物の姿がない。

「先輩、どこに行ってしまったのでしょうか？」

—————

会場の外、少し開けた場所で、士郎は両手に干将・莫耶を握り、素振りをしていた。いや、正確にはしようとしていた。

「っ！」

顔をしかめる土郎。右手の剣があらぬ方向へと飛んでしまう。何かに当たる前に、慌てて消す土郎。既に何度か同じことを繰り返していたようで、近くの木の枝が切られた跡が幾つもある。

「……やつぱり、駄目か」

カエサルとの一戦の後から、右腕の感覚がほとんどなくなっている。心当たりはある。あの戦い、最後にしてみせた投影が原因だろう。ただ武器の技量を模倣するだけならば、ここまでの負荷にはならなかったかもしれない。しかし、あの技を使うために、本来の使い手の筋力までもを強引に憑依経験させたことにより、右腕に相当な負担をかけてしまったのだ。

「これじゃ、暫くはまともに戦えないか……」

「先輩？どうかしたのですか？」

「えっ、マシユ？あ、ああいや、別に……」

気がつく、マシユがすぐ側に来ていた。ぼんやりと自身の右腕を眺めていた土郎を見て、首をかしげるマシユ。内緒にしようかと一瞬考えた土郎だったが、すぐに考え直す。

今の万全じゃない自分を隠すことはリスクが大きすぎる。この状態の自分を把握した上で今後の作戦を立てなければならぬのだ。でなければ、マシユやリレイ、ジャンヌ、ネロたちローマの兵を危険に晒すことになるかもしれない。それは駄目だ。自分が無茶するのは構わない。けど、それだけでは駄目だ。

「……マシユ、話しておかないといけないことがある」

「はい、何でしょう？」

「あー、けどよく考えたらネロにも相談した方がいいな。みんなが何処にいるかわかるか？」

「はい。先程私が先輩を探しに出る前に、ネロさんが私たち四人に合流したので。今も一緒にいるかと」

「そっか。なら、今のうちに話した方がいいな。みんなのところ案内してくれ」

「そうか……右腕が」

「ああ。だから悪い、暫く俺は今まで通りの戦力にはなれない」

大事な話があると、士郎たちは宴会とは別室に移った。士郎の状態を聞き、ネロは難しい表情をし、唸る。マシユとリリイは心配そうに士郎を見つめ、ジャンヌは何故かイライラしているようだ。一人、ブーティカは笑顔ではあったが、何だか怒っているような悲しんでいるような、感情を読むことができない。

「まあ、仕方がない。ならば、今後の作戦では、士郎はなるべく実戦からは外れてもらうことにする。できれば前線を離れてもらいたいが、」

「いや、全く戦えないわけじゃない。左手は何の問題はないし、こっちで剣を扱うこともできる。それに、俺はマシユたちのマスターだ。みんなが戦ってるのに、自分だけ見ているわけにもいかないしな」

「ですが先輩、無理をしてはいけません。そもそも、マスターの本来のあり方はサーヴァントに戦闘を任せ、後方支援に徹するのが定石です。むしろ今までの先輩のあり方が特別と言いますか、」

「そうです、シロウ。どんなに強くても、万全でない状態で戦うなんて、危険すぎます。」

「だからって、黙って見ていられるわけないだろ」

「はいはい、そこまでそこまで。取り敢えず、今後についてはまた後で話すことにしない？折角の勝利を噛み締めないと」

若干ヒートアップ仕掛けていた話し合いを、ブーティカがまとめ。優しげな話し方や言葉ではあったが、どこか逆らえず、全員も彼女の意見に賛成し、話し合いは一旦お開きとなる。

「シロウ、ちよつといいかな？」

「あ、ああ」

他のみんなと同じように会場に戻ろうとした士郎は、ブーティカに引き止められ、別室に残った。優しい笑顔で士郎を見ているブーティカ。しかし、空気からも真面目な話がしたいのだろうと、士郎も察す

る。一対一で尋問でもされるのだろうか。どんな質問が来ても大丈夫なように、士郎は心の中で身構えた。

「ね、シロウ」

「何だ？」

「シロウの両親って、どんな人だった？」

「……は？」

「……………」

「先輩……大丈夫でしょうか」

「さあ？料理は一応なんとかこなしていたみたいですし、私生活には支障はないんじゃないですか？」

「ジャンヌさん、なんだか不機嫌そうですね、何かあったんですか？」

「いいえ、特に何も」

明らかに苛立っているジャンヌ。原因はおそらく、今別室に残っている彼だろう。

「全く……本当にあの言葉を守る気があるのかしら」

もう確定的だ。とはいえ、ジャンヌの気持ちがわからないわけではないマシユとリリイ。苛立ちこそはないものの、不安な気持ちになってしまう。

「どうして先輩は、あんなに必死そうに前線で戦うことにこだわるのでしょうか」

今までは、少し特殊なだけに思っていた。実際、マスターとサーヴァントの関係は様々で、前線にマスター、後方支援にサーヴァントという通常とは真逆の組み合わせもある。士郎の場合は、並んで戦うのが、やりやすい関係なのだ、そう認識していた。けれども、負傷し、今まで通りの戦い方ができないのであれば、流石に支援に徹するだろうとばかり思っていた。

だが、実際は違った。

彼はあの状態でなお、前線で戦うつもりでいるのだ。状態を隠されるよりは何倍もまだだが、どう考えても前線に出るのは自殺行為としか思えない。自分たちに守らせて欲しい。そう思っているのに、彼は

それを良しとはしない。まるで、何かに駆り立てられるように、焦りにも見える必死さで、彼は戦おうとする。

「シロウは……何かを抱え込んでいるような気がします。私たちに、話して欲しいのですが……」

「まあ、話してくれるかしらね？」あの聖女「私」に似て、変に頑固そうだし。あれの意思を変えるのは、相当骨が折れるでしょうね」

「それでも、私たちは、先輩のサーヴァントです。最終的にどのような判断をしても、全力でお守りするだけです」

決意の表情を見せるマシユ。どこか盲目的に士郎に従っているようにも見えるその姿勢に、リリイとジャンヌは危うささえも覚えた。

頭が上がらない

「俺の、両親？」

「そ。なんだか聞いてみたくなって」

どんな話題が来るのかと身構えていた土郎は、その内容に拍子抜けする。肩の力を抜き、いざ話そうとしたが、

「あー、悪い。俺、父親はいたけど、母親はいなかったんだ。だから話すなら親父のことだけになるんだけど、いいか？」

「もちろん」

「え、と。そうだな。どこから話したもののか、わからないけど……」

土郎は語った。ある事故で、自分が今の養父ちちおやに出会ったことを。聖杯の泥の影響だと話さなかったのは、自分の知る聖杯と、特異点のそれが別物だと、ダヴィンチからの報告で知ったからだ。

病室で彼は土郎に話かけた。

『初めに言っておくとね、僕は魔法使いなんだ』

一緒に暮らし始めて思ったことは、自分がすっかりしないと、ということだった。養父は度々家を空けるし、食事にも気を使わない。自分の家事スキルは、最初は養父を支えるために磨かれてきたのだ。

彼と共に過ごす中で、土郎は魔術を教えて欲しいと願った。何度断られても折れない土郎に、養父はようやく魔術を教えてくれた。しかしながら、それは正しくはなかった。土郎に、魔術とは無縁であつて欲しいと、そう願っていたからだ。

そしてその夜、養父は縁側に座り、空を見上げていた。見事な満月を見つめながら、ただ静かに座るその姿は、どこか消えてしまいうようなほどこに弱々しく見えた。

『僕はね、正義の味方になりたかったんだ』

それは、土郎へと託された願いであり、希望であつた。あの日の安心した顔は、生涯忘れることのないものだ。あの時自分を助けてくれた時の表情、そして最後に全てを託した時の表情。どちらも幸せそう衛宮切嗣で、どちらも安堵していた。その時に彼の見せた顔が、養父の表情が、自分を動かしていた原動力だったのだ。

「そっか……なるほどね」

士郎の語りを聞き終え、ブーディカは何か納得したように頷いている。自分の話のどこに納得したのだろうか。わからない士郎はブーディカの言葉を待った。

と、気づけばブーディカに抱き寄せられていた。

「ちよつ、ブーディカ、さん？」

「シロウは、いい子だね」

10センチ以上の差があるため自然と自分は少し前かがみになる中、ブーディカの肩に頭を乗せさせられる。その頭をブーディカは片手で撫で、もう片方の手は背中を優しく叩く。何だか赤ん坊をあやすような感じになっていることに若干の恥ずかしさを感じながらも、何かしら理由があるのだろうと考え、士郎は特に何もしなかった。

「シロウは、本当にいい子に育ってるね」

「別に、普通じゃないか？」

「そんなことないよ。一人親で、しかも度々家を空けていたことを考えると、もつと捻くれてたり、荒れてたりしてもおかしくはないんじゃないかな。それでも、シロウはお父さんの夢を継ぐことを決めて、ひたすらに頑張ってきた。親としては、これほど嬉しいこともそうないと思うよ」

最後に養父が見せたあの顔は、弱々しくもあつたけど、嬉しそうにも見えた。あれだけ士郎に魔術とは無縁であつてほしいと願いながら育てていたけれども、あの日の士郎の言葉は、やはり嬉しかったのだろうか。

「でもね、シロウ。今のシロウは、喜んでもらえないかもしれないよ」

「……えっ？」

抱きしめられたままのため、ブーディカの表情は見えない。けれども、多分笑顔のままなのだろう。少し寂しげで、悲しげで、儂くも見える、そんな笑顔。

「シロウはさ、その事故で命を救われて、お父さんのように人を助ける正義の味方になりたいって、思うようになったんだよね？」

「……ああ」

「誰もが幸せでいられるように、誰もを救い出したい。それはきつと、とても綺麗で、尊くて、正しい願いなんだと思う。でもね、その願いを本当の意味で叶えるためには、その『誰も』に、シロウも入ってないといけないよ」

「俺自身……いや、そんなこと、俺には」

「確かに、助けてもらえた人たちは幸せかもしれない。でも、そこでシロウが怪我をしたり、最悪死んだりしたら、幸せになれない人もいるんだよ？」

「それは……」

「あたしだってそうだよ。とても悲しいし、とても苦しい。自分が傷つくことよりも、心が痛むんだ」

ブーデイカの言葉は、責めているわけでも、怒っているわけでもない。ただ、諭すように語りかけて来る。何故だかそれは、あの日、雪のような少女の墓の前で、師匠が言っていたことに重なる。

自分のために、涙を流しながら怒った彼女。憧れて、共闘して、師弟になって。恋人……とまではいかなかったものの、間違いなく一番近くにいてくれていた。その彼女の言っていたことを、やっぱり自分は理解できていなかったのかもしれない。

「シロウ、何もシロウだけが頑張る必要はないんだよ。今は、あたしたちが一緒にいるから。何も、シロウだけが背負わないといけないわけじゃない。だから、無理はしないでほしい。無理してるシロウを見るのは、マシユも、リリイも、ジャンヌも、ネロも、そしてあたしも辛いから」

ここで士郎の顔を離し、目を見るブーデイカ。時折、自分の姉貴分や、師匠が向けてくれた見守るような、けれどももつと優しさのこもった視線に、士郎は引き込まれた。

「もつともつとあたしたちのことを頼ってほしい。君はマスターで、あたしたちはサーヴァントなんだから。それで、ちゃんと回復したら、また一緒に並んで戦いたい。それじゃダメかな？」

その言葉に、思わず士郎は首を横に振った。何故だか知らないけ

ど、逆らう気も、反論する気も起こらなかったのだ。

「いや、わかったよ。むしろさつきまで意地張つてごめん。そうだよな、自分一人でやることじゃないんだよな。ありがとう、ブーデイカさん」

「うん、素直でよろしい。なら、今後なるべく無茶は控えるようにね」

「……俺、母さんってのがどういうのかは、わからなかったけど……なんか、こんな感じの人なのかって思うよ」

「何何？シロウも母親が欲しくなっちゃった？」

「いや、別にそういうわけじゃないって」

「なら、あたしがお母さん代わりになってあげよつか？娘は二人いたけど、息子はいなくて、欲しいって思ってたから丁度いいんじゃないかな？」

「へっ!?!」

「ふふっ、シロウの顔赤いぞ。熱でもあるのかなあ？」

「な、ちよっ、ブーデイカさん!?!」

「ふふっ」

士郎の頭を抱き寄せ、額を合わせるブーデイカ。至近距離で微笑む顔を見て、この人には敵わないと、思い知らされる士郎だった。

まあ、正確には敵わないのは「この系統^{母親属性}」の人であることを知るのだが、それはまた暫く先の未来の話のことだ。

ブーデイカにより説得された士郎が納得したことで、今後の戦略も決まり、十分な休息を得ることができたネロ率いるローマ軍は、首都へと戻ることにするのだった。

古き神

「では、余らはローマに戻る。ブーディカ、すまぬが、またここを頼む」
「わかつてるよ。ちゃんと、守っているから」

出発の前にネロは兵たちを集め、ブーディカにガリアの守りを委ねることを伝えていた。兵を外で待機させ、改めて言葉を交わすネロとブーティカ、その近くに士郎たちは立っている。

「じゃあね、マシユ、リリイ、それにジャンヌも。ネロ公のこと、頼んだよ」

「はい」

「任せてください」

「……ふんっ」

「でも、三人とも無茶だけはしないように。可愛い女の子なんだからさ。だから、気をつけてね」

「あ、ありがとうございます」

「ええ。気をつけます」

「ご忠告どうもありがとうございます。でも、私は平気なので」

一人一人順番に握手をし、抱きしめるブーディカ。流石にジャンヌは逃れたが、一応握手をしたところからして、嫌っているというわけではなさそうだ。少しほっとする士郎。何故かブーディカがいると、ジャンヌの機嫌が悪くなるから、もしかして嫌っているのかとも思ったが、違ってみたいだ。

最後に士郎の前に立つブーティカ。手を差し出して、優しげに微笑む。士郎もその握手をしっかりと受け、笑顔を返す。

「シロウ……気を付けてね」

「ああ」

「無茶はしないように」

「ああ」

「ちゃんとマシユたちを頼るように」

「……ああ」

「それから……」

ぐいっと腕を引つ張られ、前のめりになったところを、ブーディカに抱きとめられる士郎。その前髪を少しかき上げ、ブーディカは士郎の額にそつとキスをした。

「これはお守り……というよりも願掛けかな。シロウが、無事で入られますようにって、あたしの願いを込めた。だから、きつと神々が、君を守ってくれるよ」

「ブーディカ……さん」

「忘れないでね。あたしがいつでもシロウのことを心配しているって」

「……わかってる。ブーディカさんたちを悲しませることがないように、気をつけるよ……多分」

「多分……ね。うん、正直でよろしい」

士郎を放すブーディカ。今度は下から見上げながら、可愛らしく微笑んだ。

「あたしの教えたブリタニア料理、得意料理にしてね」

「ああ」

「マシユたちにも教えてあげてね」

「うん」

「じゃあ……いつてらっしやい」

ブーディカに見送られながら、ネロたちはローマに向かって出発したのだった。

ローマへの帰宅ルートの中で、士郎たちは奇妙な噂を聞くようになった。なんでも古代の神が現れたというのだ。サーヴァントという形で過去の英雄が現れるのは何度も経験していたものの、神という単語に引っかかりを覚える。

「シロウよ、果たして神もその、サーヴァントとやらとして現れることはあるのか?」

「無いとは言い切れないんだけど、正直普通に考えたらその可能性は低いと思う」

「先輩の言う通りです。そもそも、サーヴァントとはあくまで霊長の

最高峰の存在。半神のように人でも神でもある存在は確かにサーヴァントとして呼ぶことは可能です。ですが、神はそもそも存在からして別格です。本来サーヴァントの枠に収まることはありません。仮にサーヴァントとして現界するには、大幅な制約がかけられることになりました」

「だが、不可能ではないということだな」

「……そうなります」

そう、不可能ではないのだ。しかし自身の持つ多大なる権能に制約をかけてまで、サーヴァントとして現界したがる神が果たしているのだろうか。

（そういえばライダー、メドゥーサも元々は女神だったな……ってことはあいつも制約をかけられていたんだろうか……）

何はともあれ、可能性があるならば調べてみるべき、そう言い切ったネロの一存で、一行は船に乗り、噂の場所、地中海にある一つの島へと向かうのだった……船で。

「さあ、着いたぞ。む、どうかしたのか？」

操舵輪から手を離しながらネロが笑顔で振り向くと、同行者は皆倒れ伏していた。サーヴァント組や、士郎以外の兵たちに至っては、息をしているかどうかと思ってしまうほど、青白い顔をしている。

「つ、着きましたか……ようやく、陸に上がれますよ、先輩。立てますか？」

「ああ……な、なんとか」

「船とは、こんなにも恐ろしいものなのですね」

「もう嫌、無理。こんなの耐えられない。帰りは絶対別の人に操縦してもらいましょう、ええ、そうするべきです」

「む？何をしておるのだ？早く上陸するぞ」

無事に目的の島にたどり着けたのはいいが、もうなんというか、すごい旅だった。自信満々に船を出そうとネロが言った時は、酷くてもなんとかなるだろうと思っていた。けど甘かった。ドリフトして、空を飛んで、そこから落ちてと、どんな船旅だよ!?!と思わずツッコんで

しまいたくなるようなものだった。

結局、兵たちがみなグロッキー状態で動けないので、ネロと士郎、サーヴァントたちのみで島を探索することにしたのだった。

「ドクター、何かこの島にいるか？」

『確かに反応があるよ。ただ、妙なんだ』

「妙……と言いますと？」

『間違いなくサーヴァントの反応なんだけど、何か違う。マシユのよ
うなデミ・サーヴァントでもないし……』

「そいつが古き神ってことか」

反応に向かい、海岸を進む士郎たち。やはり、この島にはサーヴァ
ントがいるようだ。でも、通常のサーヴァントとは異なるもの……気
を引き締め、慎重に進んだ。

「ご機嫌よう。ようこそ、形ある島へ」

海岸で士郎たちをで迎えたのは一人の少女。だが一目見た瞬間か
ら、本能的に、士郎は危険を感じ取っていた。この笑みは、かつてあ
の白い少女が向けていたのと同じだ。純粹無垢で、恐ろしい。

「あんたが……古き神？ いや、女神か？」

「ええ、そうね。その呼ばれ方は不本意なのだけれど。私は女神――
名はステンノ、ゴルゴンの三姉妹が一柱よ」

そう彼女は艶やかな笑みを浮かべ、士郎を見つめた。誰もを魅了す
るような笑顔で。

女神の祝福？

「ゴルゴン三姉妹……ってことはライダーの？」

「ライダー？そう、あなた、愚妹メドゥーサに会ったことがあるのね……もしかして、あの子のマスターだったことがあるのかしら？」

わずかに士郎を見る目が細まる。値踏みしているような、獲物を狙う鷹のような、そんな目だ。思わずマシユが士郎とステンノの間に入る。

「あら？可愛いことするのね、その子。でも心配しないで。私には戦う力はないもの。どうやらその勇者様には、どういう訳か効いてないみたいだし」

空気が若干和らいだ……気がした。少なくとも、士郎の中で、この女神に対する警戒度は少し下がっていた。戦う力はない。そう本人が言うように、ゴルゴン三姉妹とはいえ、彼女は戦メドゥーサう者ではなく、あくまで女神ステンなのだから。

「それにしても、ステンノか……こんなところにギリシヤ神話の女神様が現れるなんて。特異点の異常は想像以上なのかもしれない」

「あら、遠い未来に生きる人間にしてはよく知ってるのね？別にあなたの生まれ故郷で有名というわけでも無いでしょ？」

「まあ、ライダー……メドゥーサの真名を知ってから、その辺りについてもそれなりに調べていたからな」

「そう。感心ね、壊れた英雄さん。……いいえ、もう大分修復はされてきているのかしらね」

「？それは、どういう……」

「さあ？何かしらね」

「あれが女神……ね。でも、どう見てもただの純白系ゴスロリ美少女にしか見えないんだけど」

「あの、ジャンヌさん……それは既に『ただの』は付かないような気が……」

他者からの評価はともかく、目の前の彼女が古き神、正真正銘の女神であることは確定した。ただ、敵とも味方ともいえない、中立的な

立場にあるようだ。ネロからローマに来ないかという誘いも断っている。

「でもそうね、折角ここまで来てくれた勇者様に、何か褒美をあげましょう。この海岸線を進んだ先に、洞窟があるわ。その中に宝物を用意しておいたの。女神の祝福というやつね」

「おおっ、それはありがたい。では余が、」

「待ちなさい。取りに行くのはその勇者様よ」

ステンノが指名したのは士郎だった。ステンノ曰く、

『女神の祝福や、その困難に立ち向かうのは決まって人間の勇者ですもの』

とのことらしい。しかし、右腕が未だに戦闘では使えない士郎、そのことを告げると、特別に一人だけ、同行者を連れて行ってもいいとのことだった。

で、結果……

「はあ〜。全く、何故私が護衛をしなければならぬのかしら？ めんど臭いわね」

「なら、じゃんけんに参加しなきゃ良かったらろ？」

「う、うるさいわね！ その辺りの事情くらい、察して見せたらどうなのです？」

「いや、察せって……何のことだ？」

「はあ〜」

「？」

出発した直後から言い合いというか、一方的に突つかかるジャンヌを連れて、士郎はステンノの言っていた洞窟を目指した。

—————

洞窟内は暗く、明かりらしきものはほとんどなかった。カルデアの支給品にあつた懐中電灯が役に立っている。

「それにしても、結構大きな洞窟だな。なんだか大聖杯のあつた大空洞への道を思い出すな」

「何よそれ？」

「あ、そうか。ジャンヌはその時はまだ会ってなかったんだよな」

洞窟を奥へと進みながら、士郎はジャンヌに一番最初のレイシフト、特異点となった冬木での戦いについて話し始めた。

マスター候補者の中で、自分だけが無事に残ったこと。燃え盛る街の中で戦ったサーヴァントたちのこと。今は味方のアーチャーのこと。黒い聖剣を振るつたセイバーのこと（何故かこの話の時、ジャンヌは不機嫌そうだったが）。黒幕との出会いと、所長から託された願いのこと。サーヴァント召喚で現れたリリイのこと。

「その後、グランドオーダー最初の特異点として、俺たちはフランスに向かった。後はまあ、何となく知ってるだろ？」

「ええ。あなたによって私の使命が打ち砕かれ、今こうしてその憎むべき相手に仕えている」

「憎むべき……か。無理はしなくてもいいんだぞ？前にも言ったけど、俺はジャンヌが自分自身の答えを見つけられるようにしたい。だから、「わかっていきます」……ならいいけど」

顔を背けているジャンヌの感情が読めない。怒っているのだろうか？なんて心配する士郎だったが、むしろ逆である。

久し振りに二人だけでじっくりと話ができ、あの時のことを忘れていくわけではないのが分かった。それだけで何故かにやけてしまいうそうになる。そんな顔を晒すわけにはいかない。そう思って、ジャンヌは必死に表情を引き締めようとしていた。

—————

やがて、洞窟は少し広めの空間に辿り着いた。ここがおそらく、ステンの言っていた場所なのだろう。ただ、そこにいたのは、宝物ではなく、

「ガルルー！」

「これって、キメラか!？」

「ちよつと、お宝どころか、化け物じゃない！まさかあの女神、騙したのかしら!？」

目の前にいるのは、キメラだった。いや、正しくはそうではない。これは魔術で様々な生き物を融合させたような、合成獣キメラなどではない。

そのルーツにして、語源。正真正銘、ギリシャの神話に語り継がれる怪物キマイラだった。

「とにかく、倒さないと！投影トレス、っ!」

右腕に感じる痛みを顔をしかめる土郎。やはり完全に回復していない状態では、魔術の行使も難しそうだ。少なくとも、右腕に魔力を流すこと、それさえも今は出来そうにない。

痛みに土郎が一瞬ひるんだ隙を、キメラは見逃さなかった。巨体に似合わぬスピードで、キメラは土郎めがけて飛びかかった。その鋭い爪が、土郎を狙う。

と、両者の間に、炎が走る。動物的な本能か、キメラは土郎と炎から距離をとった。片腕を押さえたままの土郎をかばうように、ジャンヌが前に立った。

「全く、あなたはバカなのですか？万全の状態じゃないのは知ってたでしょう？ブーデイカとの約束、忘れたわけではないでしょうね？」
「いや、悪い。もう癖みたいなものだ。けど、そうだな。今の俺は、まともには戦えないんだったな。悪いけど、ジャンヌ」

「ええ。任せました。我が憎悪の炎を、その場で見物してなさい」
標的をジャンヌに変え、睨みつけるキメラ。しかし、ジャンヌの笑みを浮かべた表情を見ると、途端に表情が変わった。それはまるで、何かに怯えているかのようだ。圧倒的強者を前にした時の、野生の本能にも近いかもしれない。

「ふふつ、あははは！この程度で怯えるだなんて、神話の怪物が呆れるわ」

そう彼女はわらう。破顔わらって、笑わらって、嗤わらう。実に楽しそうに、実に愉快そう。血の気が凍るような殺気を込めて、彼女は嗤う。

竜の魔女。あらゆる獣の中でも最高にして最強の種族。それを支配する存在として、フランスを恐怖で覆った存在。それを前にして、あのキマイラさえもが、恐れた。

「憐れな獣ね……その道は、既に途絶えました。私の前に現れた時点で、ね」

動かない獲物を見据え、つまらなさそうに吐き捨てる。それと同時に、複数の槍が降り注ぎ、キマイラの脚や胴体、尾などを貫き拘束する。そして、その足元から炎が溢れ、あつという間にキマイラを包み込んだ。炎が消えると、そこには何も残っていない。ただ、焦げたような匂いだけが、残った。

「ま、当然ですね」

なんでもないように、手に持っていた剣をしまっジャンヌ。そのまま士郎と向き合うと、相手が何やら驚いた表情をしていたため、顔をしかめて問いかける。

「何ですか、その間抜け面は？私の力を疑っていたのですか？」

「あ、いや。そういうわけじゃないんだけど……何というか、やっぱり凄いなって」

「……はい？」

「敵として戦った時も思ってたけど、迫力というかオーラというか……呑まれそうになる」

「下手なお世辞は結構です。あなた、かなりピンピンしてたじゃない」「あれは使命感とか色々とお上回ってたからだ。今改めて見ると、やっぱり凄いなって思う」

「……ふんっ」

そっぽを向くジャンヌの耳は赤かった。と、彼女の視線の先に、宝箱らしきものがあった。士郎とともに近づくジャンヌ。辺りを警戒し、深呼吸してから、彼女はその宝箱を開けた。

「待ちくたびれたわよ、仔犬！」

「ニヤハハハ。あたし、参上なのだワン！」

無言で宝箱を勢いよく閉めるジャンヌ。苦笑する士郎の前で、ギャンギャン騒ぐ箱（の中にいる人）と、それを閉めたままにしようとするジャンヌが、激しい取っ組み合いを始めてしまった。

ユニツト、結成!

「お帰りなさい、先ば、い?」

「た、ただいま」

笑顔で出迎えてくれたマシユの表情がひきつるのを見た士郎は、微妙な笑みを返すので精一杯だった。そのすぐ後ろには、

「だからいらないと云ってるでしょう! クーリングオフ? って奴よ! いいから、帰りなさいな、永遠のアイドル(笑)」

「(笑) って何よ!?! 私は真正銘、サーヴァント界のアイドルなんだから! それに、今回の私は自分の意思で来たんじゃないもの!」

「そう? なら尚更帰っても結構です。そもそもあなたの歌、あの時離れた場所から聞こえましたけど、何あれ? ファヴニールの咆哮よりも恐ろしかったわよ、流石ドラ娘という奴ね」

「ムキーツー! ドラ娘とか言うな! というか、なんであんたが、あのテケテケ女の付けた呼び方、知ってるのよ!」

「ニヤハハハ、ご主人。キャットは眠くなつて来たのだワン!」

何やら言い争ってるジャンヌとエリザベート。そして士郎の後ろを、トテトテついて来ているタマモキャット。いつの間にかサーヴァントが二人も増えていけば、そりゃ誰だつて驚くだろう。

「ん? あら、子ジカじゃない」

「あ、どうも、エリザベートさん。ええと、お久しぶり、です? あと、そちらは?」

「よくぞ聞いてくれたな! 我こそは、タマモナインが一角、野生の狐タマモキャット。よろしくだワン!」

「狐……? キャット……? ワン……?」

「すみません、リレイさん。私もよくわかりません」

「何だかスパルタクスさんとの会話を思い出しますね……」

「ぬ、新しい仲間というわけか? よい、余が歓迎するぞ」

「あら? あんた何でここに……? って、あれ? もしかして、生きてる? 生ネロ!?!」

「生……? 何のことだ?」

「ああうん、気にしないで。こっちの話だから」

完全に混乱しているマッシュとリレイ。まあ無理もないだろう。士郎も彼女と会話するのは流石に疲れるのだから。ただ、なんとなくではあるが、そう、雰囲気的に、どこかの街のトラに似ているような気がするため、なんとか会話が成立しているだけなのだ。

まあ、残念ながらこちらの方が、色々とハイスペックなわけだが……

—————

「あらあら、無事にクリアできたみたいね。どうだったかしら、女神の祝福は？」
与えた試練

「正直、今の俺が一人だったらと思うと、ぞつとしたよ。本気で殺しに来てたぞ」

「当然よ。そうでなければ、勇者への試練にならないもの」

「まあ、ジャンヌがいてくれて助かったよ。というか、改めてジャンヌのすごさを知ったよ。そのことについては、まあこの試練に感謝してるかな。それで？あの宝箱に入ってたあの二人は？」

「ああ、あの子たちね。私が現界するとき、一緒に引つ張って来たのよ。手頃な洞窟や、試練の難度とか、色々お手伝って貰う必要があったのよ」

自身の現界の際に、他のサーヴァントを引つ張ってくるなんて、普通に考えたらありえない。が、今の異常な状況や、神霊である彼女の現界のこともある。普通とは異なることが起きてても、不思議ではない。

「それで、これからどうするんだ？」

「どうするって、あなた達のやることなんて決まっているのでしょう？あの連合ローマを倒すこと。でしょう？もう試練も終わったし、あの子達を連れて行くならお好きにどうぞ」

「いや、俺たちのことじゃなくて、あんたのことだ」

「私の？」

「ああ」

「どうすると言われても、特に何もするつもりはないわよ。そうね。」

適当にこの島に辿り着いた人間で楽しむくらいかしらね」

特に関心がないのか、なんでもないかのようには話すステンノ。既に士郎で遊ぶという目的は果たしたし、士郎も古き神の正体を知ることができた。新しい仲間を得て、もうここに用はない。彼がこの後、この特異点で何をするのかなんて、自分には関係のないことだ。

いつだってそうだった。島へと立ち寄る人間は、女神の祝福を受けた後、それぞれのやるべきことのために、さっさと島を出て行く。あとは彼らがその運命にどう向かって行くのか、それを見て楽しむだけ。もうそれは、自分には、なんの意味も持たない物語なのだから。「でも、戦う力はないんだろ？あんたは女神で、あくまで守られる存在なんだから。なら、一人にできるわけないだろ」

何を言っているのだろう、この人間は。予想もしていなかった言葉に、初めてステンノが驚きの表情を見せた。

士郎の自分に向けているのは、女神の魅了にしてやられた者のそれではない。ここを離れることを面倒くさがっている者のそれでもない。ただ、純粹に、事実としてステンノのことを見て、それでいて案じているのだ。

「あら？一人になったとして何が起きるというのかしら？この島にいれば、余程のことがなければ襲われることもないのよ？」

「でも、連合の連中がこないとも限らないだろ？俺たちと一緒にいれば、あんたのことも守るから。だから一緒に、」

『士郎君、聞こえるかい!?サーヴァント反応だ』

「えっ？」 エリちゃん

「ぬ？」 キャット

「はい？」 リリイ

「はあ？」 オルタ

「あの、ドクター？」 デミ・サーヴァント

『いやそうじゃないよ！何その打ち合わせでもしたかのような綺麗な流れ!?じゃなくて、敵性サーヴァントだ。それもこの霊基パターンは、』

「美しい。そうだ、お前は美しい。女神よりも、何よりも。捧げよ、我が愛しき妹の子、ネロ。その清らかさ、美しさ。余の全身全霊で、無茶苦茶に蹂躪してやりたいッ！ネロオオオオ！」

「……」
いつの間にも上陸したのだろうか。以前取り逃がしたサーヴァント、バーサーカー、真名をカリギユラ。士郎たちを、否、正確にはネロただ一人を見つめ、迫ってくる。

「叔父上……」

「ネロさん、下がっててください。ここは私たちが、」

「いや、マシユこそ下がるのだ。これは皇帝の戦いにして、叔父上の姪である、余の務め。間違った道を歩むものを、正すべきは今を生きる皇帝である余だ！」

剣を手に、凜とした表情でカリギユラの前に立つネロ。その隣に一人、別の少女が並んだ。

「ぬ？」

「サーヴァント相手に生身の人間が一人で戦っていいわけないでしょ。私が手伝ってあげるわ」

「だが、これは余の、」

「わかっているわよ、その気持ち。それでも統治者だったこともあるんだから。でも、その役目を手伝うくらいさせてよ。私はあんとユニット組むの、割と楽しみにしてたんだから」

「ユニット……？」

「まあ、その話は後。ネロ、今この時からこの戦いが終わるまでは、私があるのサーヴァントで、あなたが私のマスターよ。だから、ここからはいつでも、二人で戦うわよ」

「……何だかよくわからん。そもそも、今会ったばかりの余に対して、何故こうも馴れ馴れしいのかもわからんが……余はお主が気に入ったぞ！」

ニッコリ笑顔で笑い合う二人。かたや人間、かたやサーヴァント。嘗ての記録を共有していなかったとしても、魂が惹かれ合うのだろうか。

「お主名前は？」

「エリザベートよ。よろしくね、マスター」

「うむ。では頼むぞ、我がサーヴァント！」

槍と刀をその手に持ち、士郎たちが見守る中、新コンビがカリギユラとの戦いに挑みかかった。

「ぐうっ」

顔を歪め、唸るカリギユラ。横薙ぎに払われる槍をかわしたかと思うと、頭上から炎の剣が振り下ろされる。

それを受け止めたら今度は、龍の尾が胴体を打ち付け、カリギユラを大きく後退させ、海岸の岩に激突させた。

「先輩、あのお二人、凄いですね」

「ああ。まるでお互いの考えてることがわかってるみたいだ」

初のタッグ、それもネロからしたら初めましてもいいところの相手とだと言うのに。二人の連携は見事としか言いようがなかった。

流れるような攻撃、それは二人の絶妙な攻守の入れ替えによって成り立っている。合図がなくとも、声に出さずとも、ネロはエリザベートが下がるタイミングに切り込んでいる。逆もまた然りだ。カリギユラが反撃しようとしたその時には、もう一人からの攻撃を捌かなくてはいけなくなる。バーサーカーとなり、狂化していることもあり、単調な動きしかしない、できないカリギユラに、二人のコンビネーションは崩せずに行った。

月でも気が合い、お互いに認め合う関係だった二人。その時は敵同士ではあった。しかし今は、共に戦う仲間である。ペアを組む時、相手との相性によって能力に大きな差が生じる。この二人に関していえば、

「今だ！」

「任せて！」

尾による攻撃によって体勢を崩したカリギユラの体を、二人の獲物が切り裂いた。膝をつき呻くカリギユラ。最後にネロを見て、笑みを向ける。

「ネロ……美しい、な。ああ、捧げよ、その命。その、体。すべてを……余が、愛し、て」

「もう良いであろう、叔父上……いや、連合ローマが皇帝の一人、カリギュラよ。余の、いや、余らの勝ちである。世は必ず、正きローマを取り戻す。もう休まれよ」

体を粒子に変え、消えていくカリギュラ。それをネロは静かに見つめていた。

「お疲れ様、ネロ」

「うむ……ご苦労であった、エリザベートよ。流石は余のサーヴァントだ。惚れ直したぞ！」

「当然でしよ。ネロこそ、流石は私のマスターね」

エリザベートが声をかけると、二人で和気藹々と話し始めた。エリザベートなりの気の使い方なのだろう。士郎たちは、二人が一旦落ち着くまで待つことに、

「そうだ、一曲歌わない？ スツキリするわよ」

「ぬ？ 歌か？ 良いぞ、余の声に惚れ直すが良い！」

「いけません、マスター。止めましょう！」

「えっ、止めるのか？」

「あなた聞いたことがなかったの!? 信じられないくらいにアレよ！ 地獄へとまっしぐらよ！」

焦るマシユに、かなり酷いことを言っているジャンヌ。リリイは苦笑しているが、概ね二人に同意のようだ。キヤットが笑いながら眺める中、3人は必死の説得を開始するのだった。

「全く……こんなに賑やかなの、いつ以来だったかしらね」

ローマに帰還せよ

「それで、ステンノ。どうする？一緒に来るなら、俺たちでしっかりと守るけど」

「そうね……なら、お願いしようかしらね。英雄ならざるサーヴァントも来てしまうのだし。それに、あなたといれば、退屈しなさそうなもの。しっかりと守って見せなさい」

なんてやりとりを経て、ステンノも彼らに同行することとなった。彼女が加わることは、単純にサーヴァントの数が増えるだけのことはなかった。

なんと彼女は、本物の女神の祝福^{褒美}として、連合ローマの首都本部の正確な位置を教えてくれたのだった。

「うむ。これで我らの方から攻めることができるな。一度首都ローマに戻って、戦の準備をしなくてはならぬ。シロウの回復も待たねばならぬ故」

「わかった。そうしよう」

途中何度か兵に襲われるものの、サーヴァントたちの活躍により、特に危険な状況とは言えないまま、彼らはローマを目指した。が、

「先輩、先ほどの兵士のことですが……」

「ああ。人間、とい言い切れない。サーヴァントだけどサーヴァントじゃない。なんというか、そんな感じだ」

『何らかのスキルか、あるいは宝具か。いずれにせよ、それを行なったサーヴァントはそう遠くは、つて、また敵の反応だ！うち一体はサーヴァント。そいつの仕業かもしれないよ』

「ネロー！」

「うむ、迎え撃とうぞ。余とエリザベートに続け！」

数百人の兵士が現れる。その中に一人、明らかに他とは異なる存在の者がいる。長い槍に手には盾、兜は顔を覆い、頭には赤いトサカのような飾り。そのほかの防具らしき防具はほとんどない、だというのに、その男を倒すのは一筋縄ではいかない。そう何かが告げている。「進軍する敵の全てを打ち砕く。攻撃よりも勇ましく、防御より堅く。」

それが我らスパルタの拠点防衛術、とくと味わっていただこう」

「スパルタ……拠点防衛の英霊。ということとは、あんたは、」

「サーヴァント、ランサー。真名をレオニダス」

「ぬ？あのレオニダス王だというのか？皇帝以外にも蘇っている者がおるとは……ぬ？では、ブーディカは、」

「ちよつと！考え事をしている場合ですか？守りを固めなさい。こいつさえ倒せば、他も消えるはずよ」

「ぬ、確かにそうであるな」

ジャンヌの言葉に内心、士郎たちはほつとしていた。ブーディカからも言われたことだが、ネロはブーディカを生前の相手だと勘違いしていた。それを訂正しなかったのは、ネロの考え込んでしまうことや、精神面での負担を考えた上での行動だった。

今、こうしてレオニダスという、皇帝以外の過去の存在が登場したことによって、ブーディカもそうなのかと思いついて始めている。だが、それは戦闘において、危険ともなり得る。無理矢理にでも意識を切り替えてくれたのは、良いことかもしれない。

「マスター、指示を！」

「マシユは兵たちの援護、みんなとステンノを守ってくれ。ネロ、エリザベートとキャットを連れて行ってくれ」

「うむ。余も我が兵たちを守りに行くぞ。こちらは任せる」

「ああ。リリイ、ジャンヌ。頼む！」

「はいー！」

「ええ」

幾度となく激突する槍と旗、剣と盾。二対一で攻め立てているのもかかわらず、目の前の男は倒れない。圧倒的とも言えるその防御力に、ジャンヌは大きく舌打ちをする。

「なんなのこいつ、硬すぎる」

「攻守の切り替えにも、全く隙が見当たりません」

「流石はテルモピュライの英雄だな。二対一じゃ、ハンデにもならぬのか……」

「でああああつー！」

「くうっ！」

強靱な肉体から繰り出された槍による突きは、防いだはずのリリイを大きく後退させる。先程会話していた時に感じた落ち着いた印象は既に消えている。雄々しく、猛々しく叫ぶレオニダスは攻撃の一撃一撃が重い。

伝説では、300人の兵を率い、何万もの軍勢に挑んだとされるテルモピュライの戦い。恐るべきスパルタの英雄たち。中でもレオニダスはその将。やはり一筋縄ではいかなさそうさ。

こちら側のダメージは殆どない。が、それは相手も同じこと。おそらく単純なサーヴアントのスペックでいえば、ジャンヌ単体の方が相手よりも優れている。だが、敵は圧倒的なまでに鍛え上げられた肉体と技術によつて、ジャンヌとリリイの二人と渡り合っているのだ。

その姿は、どこかアーチャーとも、かつてほんの僅かにだけ見たあの長刀のアサシンとも通じるところがある。

「時間はかけてられない、ジャンヌ！」

「ええ」

炎を巻き起こし、レオニダスの周囲を囲むジャンヌ。その隣にリリイが並び立つ。突然の炎に驚いたレオニダス目掛け、いくつかの剣が降り注ぐ。万全の時よりは少ないとはいえ、士郎の作り出した剣は、レオニダスの行動を封じること成功した。

ジャンヌがリリイの肩に手を置き、スキルを発動する。リリイの身体が淡い光に包まれる。ジャンヌが炎を解除するとともに、剣を手にも、駆け出したリリイは、全力で剣を振り下ろす。

「っー！」

今までのように受け止めようとして弾かれた。明らかに先程よりも力が上がっていた攻撃に、レオニダスは戸惑い、一瞬の隙を生んでしまう。体勢が完全に崩れるほどではない、ほんの僅かな隙だが、それを士郎の目が見落とすことはなかった。

「っー！」

レオニダスの懐近くまで接近した士郎。先ほど降らせた剣の一つを手に取り、左手で思いつき振り上げる。狙ったのは、レオニダスが持つ盾。金属音が響き、盾が弧を描くようにして弾き飛ばされた。そのまま剣を逆手に持ち替え、レオニダスの足ごと地面に突き刺し、固定する。

「ジャンヌー！」

「これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮…」

ラ・グロンドメント・デュヘイン
「吼え立てよ、我が憤怒！」

旗を開き、剣を抜く。その剣を敵に向けたジャンヌから、煉獄の炎が溢れ、敵に迫る。リリイが士郎を連れて離脱する。炎は瞬く間にレオニダスを包み、追い打ちをかけるように、地面から大量の槍が飛び出し、串刺しにする。

ジャンヌの最後。「紅蓮の聖女」とは違い、自己を犠牲とした炎ではなく、その最後が生んだ恨みや憎しみ、それらを炎とし、自らを殺した炎での復讐。まさしく、アヴェンジャーとして、この上ない程にピツタリな宝具。その威力、耐え切れるはずもなかった。

「ぬう、鍛え方が足りなかったか？ いや、守るべきもの無き戦いでは、これが限界なのだろう……」

レオニダスの体が消えると、その他の兵たちも消えて行く。やはり、レオニダスによって使役されていた兵なのだろう。この宝具は彼の伝承を基にしたもの。彼とともに、雄々しく戦った勇者たちを呼ぶもの。ただ、その戦いは、あくまで守るためのものだった。

「守るべきもの無き戦い、か……つまりこいつは、召喚されて使役されていただけ。皇帝たちとは扱いが違う。これは、」

『そうだね。彼の召喚には間違いなく、魔術師が絡んでいる。おそらく、レフ・ライノールだ』

レフ。未だに姿を現さないあの男のことを考えると、自然に士郎の拳が握られる。人理の焼却。そのために彼はカルデアを爆破したのだ。所長や、多くの職員、マスター適性者たち、多くの死傷者が出た。そして、マシユがデミ・サーヴァントとなり、戦わなくてはいけなくなつた原因でもある。

「あいつだけは、絶対に倒す」

「ご苦勞であったな、シロウ。リリイとジャンヌも、見事な働きだったぞ」

戦いを終え、周囲に敵がもういないことを確認し、彼らはローマに向かう前の最後の休憩を取っている。士郎たちのことを労うネロの表情は優れない。やはり、先ほどのレオニダスのこと、そして味方のブーティカのこと、色々と思うところがあるのだろう。

「シロウ、少し話がしたい。余に付き合ってくれぬか」

「……わかった」

二人きりで、真剣な話がしたいのだと士郎は察した。マシユたちを労った後、ネロに連れられた士郎は、ネロの使用していたテントへと入った。

「それで、話って？」

「シロウ、そなたは嘘はつかない男だと、余は思っておる」

「え？」

「そなたは正直者だ。だが、話さなくても良いと思つたこと、隠すべきと思つた事は話さないだけなのだろう」

「ネロ？」

「その正直者に、余は聞きたい。余の客将が一人、ブーティカは、既に死んでおるのか？」

あまりにもストレートで、正直な質問だった。しかしそれ故に、真剣さが伝わってくる。ネロの表情を見た士郎は、誤魔化すことはできないかと観念した。

もつとも、士郎は基本嘘がつけないから聞かれたら答えていた可能性も高いが……

「ああ。彼女、ブーティカさん、それにスパルタクスもサーヴァントだ」

「そうか……やはり、そうなのだな。しかし、ならば何故余に力を貸してくれるのだ？ 皇帝たちと同じであれば、余の敵として現れるもので

はないのか?」

「ブーデイカさんとスパルタクスは、皇帝たちとは少し違うんだ。皇帝たち、それにさっきのレオニダスは、誰かが使役するために召喚している可能性が高い」

「使役?」

「ああ」

人理焼却、その目的のために呼ばれ、聖杯を与えられ、本来の歴史とは異なる結果を作り出し、崩壊させる。オルレアンでは歴史にはないはずの百年戦争をもたらし、ローマではかつての皇帝たちの再来による分裂を招いている。

彼らを操り、使役し、自分の目的のために行動させる。そんな相手が、必ずいる。

「では、ブーデイカたちは違うのか?」

「詳しいことはわかってないんだけど、彼女たちは聖杯自体が世界のバランスを保つために、呼んでいるんじゃないかって考えてる。もちろん、それぞれに自由意志があるから、必ずしも味方になるとは限らないかもしれないけど……ネロ?」

何か思いつめているような、暗い表情を見せるネロ。どうかしたのかと土郎が聞くと、ゆっくりと首を横に振る。

「余は、やり直せる、そう思っていたのだ」

「ネロ?」

「生きていてくれたのであれば、新しくやり直せると。余の知らぬ所でとはいえ、余の部下がブーデイカたちにしたこと、そなたも知っておろう。余はそのことをちゃんと謝罪し、償い、ブーデイカと共に……」

ネロが言っているのは、ブリタニアに対するローマの行いのことだろう。それ故に彼女は女王となり、叛逆者となり、復讐者となったのだから。神々にまで誓った許さないという気持ち。その怒りの強さは想像もできない。

「残酷なことを、余は頼んでしまっていたのだな。よりによって、自分のことを殺した国を守るのに力を貸して欲しいなどと」

後悔しているのだろうか、ネロは本気で落ち込んでいるようだ。ただあの時、二人で料理をした時、ブーディカは確かに言った。

『守るために、か……それは、ネロのことも?』

『……かもね』

その時の表情は、確かに複雑そうで、時折考えてしまうことがあるのかもしれない。でも、彼女がネロのことを心配し、守るために戦おうとしていることは、十分に上に伝わってきた。

「話してみたら、いいんじゃないか?」

「む?」

「ブーディカさんと。サーヴァントだということを知った上で、改めてお互いの心の内を話してみたらいい」

「だが、余は……」

「大丈夫さ。俺の見た感じだと、ブーディカさんはネロのことを心の底から嫌ってるわけじゃない。しっかりと話し合えば、わだかまりも何もなく、ただの友達として、分かり合えるはずだ」

「本気で、そう思うか?」

こんなに不安げなネロは初めて見る。暴君と歴史では語られるが、こうして話していると、暴君というよりも子供っぽい気がしてくる。今だって、まるで仲直りの仕方をわかっていない子供みたいだ。そんなこと、歴史に名を残す英雄に対して、失礼かもしれないけれども。

「ああ」

ネロを安心させるため、精一杯背中を押そう。そう士郎は決め、笑顔で頷いた。と、何やらネロが驚いた顔をしている。

「ん?どうかしたのか?」

「いや、シロウもそんな優しい表情をするのだな、と思っただけ」

「は?」

「だが、感謝する。余も覚悟を決めたぞ!死から蘇り、余に力を貸してくれている客将たちに、改めて協力を仰ごう。そして、ブーディカとも……」

「そっか」

調子を取り戻したらしいネロ。取り敢えずは一安心だ。

しっかりと休憩した士郎達。既にローマもすぐ近く、もう間もなく辿り着ける。留守の間も襲撃があったらしいが、アーチャーの活躍によって退けられていたらしい。

暫くぶりに会う奴に、さてこの右腕の状態を見られたら、一体どんな小言を言われることになるのやら。内心げんなりする士郎以外は首都への帰還で大いに盛り上がっている。

決戦前

「……………」

「……………」

「あ、あの、アーチャーさん?」

「何かね、マシユ?」

「その、先輩は、ピンチの私たちを助けようとしてくれたわけで、」

「そんなことはわかっている。だが、これはそういう問題ではないのだよ」

ステンノとネロが連合の拠点などの確認を行う間、士郎はアーチャーに怪我を見てもらうようにと言い渡された。案の定、腕の不調のことをアーチャーが知った途端、眉間に深いしわを寄せ、無言で士郎を睨みつける。士郎の方も、動じることなく睨み返している。

その様子を眺めるマシユとリリイはオロオロとし、ジャンヌは無関心そうに見えるが、チラチラとこちらを見ている。

しかしこの二人、お互いに敵意は無くなったものの、やはりどうにも争わずにはいられないのだろうか。

「で、何を投影した?その負荷の様子からして、神造兵器ではないのだろうか?かといって普通の宝具程度なら、魔力供給がしつかりとしている今の貴様にそこまでの負荷はかかるまい」

「流石にそういうところはお前に隠し事はできないな……バーサーカー、ヘラクレスの宝具、というか剣技だ」

「なるほどな。その重すぎる武器を使えるようにするために、ヘラクレスの筋力まで再現しようとしたらそのザマ、と」

しばらく黙り込む両者。と、大きなため息をつき、片手で顔を覆うアーチャー。息を吸い込むと、

「たわけ!何を考えているのだ貴様は?!人間の身でサーヴァントの技量はまだしも、筋力を再現するだど?死に急いでるつもりなのか!」

マジモンの説教みたいなのが始まってしまった。当然、他のやつならともかく、アーチャーにだけは説教されたくない士郎も、ムツとした表情で声を荒げる。

「あいつの高速の剣はただ防げばいいってもんじゃないんだぞ！お前と俺が同じ幸運ランクだと仮定したら、どう考えてもこのやり方がベストだろ！」

「ふざけているのか貴様は？一人で無理だとわかっているならば、もつとマシユとの連携を取れば良かったではないか。なんのためのサーヴァントだ！」

「お前、それはあいつと戦ってないから言えることだぞ。太ってる癖にめちやくちや速いとか反則だろ。それに、生半可な攻撃じゃ、あのゴレムの体は突破できない！」

「ならばそれこそ距離をとって戦うべきではないか！弓を使ってもいいと言われたのならば、無尽蔵の魔力を活かし、連続で壊れた幻想を叩き込めばいいだろうが、この愚か者が！」

「はあ!?それじゃあフェアな勝負とは言えないだろ！それに、マシユやネロが側にいるのにそんなバカス力爆発を起こしてられるか、このバカ！」

ますますヒートアップして行く両者。剣を取り出して斬り合わなただけ平和に見えてしまうのは何故だろう。しかし、なんとというか、反抗期の息子と怒ると怖い母親の喧嘩みたいになっている……まあ、アーチャーは男なのだが。

「ど、どうしましょう。リリイさん、ジャンヌさん止めた方がいいでしょうか?」

「と、止めると言っても、どうすればいいのでしょうか」

「知らないわよ。ほっておきなさい。どうせすぐに解決するわよ」

「ならば令呪でも使え！以前も言ったと思うが、貴様の本分はマスターだ！死に行くような行動は控えろとあれほど言ったではないか！貴様は自分の命の重さを、此の期に及んでまだ理解していないか！」

「っ！」

命の重さ。その言葉をぶつけられ、士郎の脳裏にあの寂しげな笑顔が浮かぶ。わかっている。いや、わかっているつもりなのかもしれない

い。それでも、自分のせいで、あんな顔を誰かにして欲しくはない。人類の命運が、この命に託されているのだ。背負っているのは、その他大勢の命だけじゃない。

ルヴィア、一成、慎二、美綴。それに、藤ねえに桜、遠坂。必ず取り戻さなければならぬ。そのためにも、自分は、

「……わかっているさ。俺の命は、俺だけのものじゃない。人理の修復ができるのは、俺と、俺のサーヴァント達だけだ。それに……」

「それに、何だ？」

「それに、俺が死んだら、泣かせてしまう人もいる。それはダメだ。俺も、みんなも、一緒に笑い合えるように……だから、俺は死んじやいけない。死ぬわけには、いかない。そして、誰も死なせるわけにはいかない」

士郎のその言葉を聞いていたアーチャー。ふっ、と短く息を吐き、眉間に寄せていたシワを解く。

「どうやら、少しはマシな人間になっているようだな。誰かに諭されたのか？」

「まあ、あえていうなら、母親に叱られた、って感じだな」

「なるほど、^{ブレイカ}母親か」

何やら納得したように頷くアーチャー。とりあえずは二人の言い争いもおさまったようだ。安心したようにマシユとリリイが息を吐く。

—————

「さて、本来の話題であるべき、衛宮士郎の治療の話をするわけだが……それに関しては、手っ取り早くて、安心安全な方法があるぞ」

「それってまさか、人間の自然治癒力に任せる、とかそんなことじゃないよな」

「まさか。それは確かに安心安全だが、手っ取り早いとは言えないだろう。時間がかかりすぎる。いやなに、少しリリイの力を借りるだけだ」

「私の、ですか？」

突然自分の名前が出たことに、キョトンとした顔で目をパチクリさ

せるリリイ。

可愛い……ではなくて！

「そうだ。リリイ、まずは衛宮士郎の体に触れてくれ。場所は特に関係ないから、好きにしたまえ」

「は、はい。では、失礼しますねシロウ」

「あ、ああ」

そつと労わるように、リリイが士郎の右手を取り、両手で包み込む。しかし何も変化がない。

「やはり、まだリリイでは完全にはいかないか。だが、全く使えないというわけでもないようだな。リリイ、君の魔力を少しずつ衛宮士郎に流してくれるか」

「はい。いきますね」

握られた手から、温かいものが体の中に流れ込んでくるのを、士郎は感じた。これはあの時、特異点の冬木で戦った後に、セイバーから感じたものに、すごく似ている。心臓付近までリリイの魔力が届くと、急に体の奥が熱くなるのを感じる。

「っ!？」

「シロウ？大丈夫ですか？」

「あ、ああ」

「もう少しだ、我慢しろ……よし、もういいだろう」

アーチャーの合図で、リリイから流れる魔力が止まる。体に特に異常はなさそうだ。どころか、体の調子が良くなったようにも思える。右手で軽くリリイの手を握り返してみる。痛みはない。次に手を離し、両手に干将・莫耶を構える。馴染み深いこの感触に、握った時の感覚。どうやら本当に治っているみたいだ。

「これでいいだろう。今後衛宮士郎が何か怪我をした時には、同じようにしてあげるといい」

「あ、はい」

「ありがとう、リリイ。それから、一応アーチャーもな」

「ふん。礼には及ばん。私はこの事態の収束のために、最善を尽くしたまでのことだ」

治療が終わったのを見届けると、アーチャーはさっさと退散してしまふ。行き先からして、おそらく食事の準備をしに行くのだろう。相変わらず根は変わらずお人好しなその姿に、安心とともになんだか複雑な心境になる土郎だった。

「でも、これで俺もちゃんと戦える」

「そうですね。すぐに治って良かったです」

「でも、どうしてリリイさんの魔力を流したら治ったのでしょうか？」

首を傾げ疑問符を浮かべるマシュ。とはいえ、土郎にも、リリイ本人にも理屈はわかっていないため、答えることはできなかった。

「それにしてもあのアーチャー、何故その治療方法のことを知っていたのかしらね……リリイも、この男も知らなかったというのに」

休憩を言い渡されていた土郎たち。しかし、右腕をしつかりと試しておきたいと言う土郎に連れられ、広場で土郎とリリイの稽古を見ることになった。

「ジャンヌさんは参加しないのですか？」

「私はいいです。サーヴァントとしては十分に得物を使いこなせているので」

と、土郎とリリイの方も決着がついたようだ。リリイの首元に干将が向けられている。今回も土郎の勝ちだ。

「ありがとな、リリイ。付き合ってもらって」

「いえ。シロウとの稽古は、私にとっても勉強になりますから」

どうやら、右腕もしつかりと元どおりになっているみたいで、マシュも、内心ジャンヌも、安心した。

「これで、準備が出来次第、いつでも皇帝連合の本部を攻撃することができるな」

「はい。おそらく、聖杯と魔術師もそこに」

「それに、カエサルさんが言っていた彼の方についても気になります」
「考えていても仕方がないでしょう。とにかく、戦う時のために士気を高めておくことです。士気の無い者など、足手まといになるだけな

ので」

ジャンヌの皮肉っぽいアドバイスもすっかりと受け止めながら、士郎たち4人は今後についての話を、呼び戻されるまで続けていた。

食事のために集まると、いつの間にか仲間が増えていた。服装からしておそらく中国出身なのではないかと予想される2人のサーヴァント。彼らもまた、士郎たちが到着する以前にローマが迎え入れた客将で、今まで別の場所で連合と戦っていたとのことだ。

「サーヴァント、アサシン。荊軻という。よろしく頼むぞ」

「よろしく。しかし、皇帝の暗殺といえば、と言う人が出てくるなんて、驚きだな」

「何、あの時は失敗してしまっただけだから。その腹いせというわけではないが、皇帝どもと戦いたいと考えたので。こちらに協力することになっている」

聞くと士郎たちが到着した時点では、既に敵方のサーヴァントを3人も倒していたらしく、士郎たちは驚かされる。

そしてもう1人、中華風の鎧に身を包んだ大男。会話ができないことから、バーサーカーらしいことはわかったが、驚いたのはその真名だ。

三国志において最強の一角、武芸百般を極めた武人、呂布奉先。ただでさえ強い彼の力が、バーサーカーとなることでさらに引き上げられており、間違いなくローマ側最強戦力の1人だ。

「あれ、でも呂布って裏切ることで有名だったような……大丈夫なのか?」

「その心配は杞憂というものだ。バーサーカーとなり、理性を失っている彼には、殆ど自意識と呼べるものはない。そのため、単純すぎる行動パターンしか持たないが、少なくとも、我々の指示には従っている」

「なるほど……むしろバーサーカーで理性を失っているのが、こちらにとってプラスに働いた、ということですね」

着々と戦力が整えられている。今までは敵の居場所がわからな

かったから、守りに徹するしかなかったが、これからは反撃ができる。兵たちの士気も、だいぶ高まってきているようだ。

「いよいよだな」

この戦いを終わらせること、そして敵側の魔術師を見つけること。それが自分たちのすべきこと。違ったらそれでいい。だが、もしいるのがレフ・ライノールだとした時は、

「所長……」

あの時、目の前にいたのに、助けられなかった彼女のことを思い出し、士郎は拳を強く握った。

進軍が止まる

朝。早い時間に目が覚めた士郎は、ランニングをしに外へ出た。暫く走り、いざ休憩を取ろうと思ったところで、一つの人影が宮殿の隅に咲いている花を眺めているのを見かけた。

近寄り声をかける士郎。

「花、好きなのか？」

声をかけられた相手は士郎の方を向く。あらゆる男を魅了できるのではないかとまで思える微笑みを浮かべながら、ステンは立ち上がる。

「そうね。散ることが定められているというのに、今日を美しく咲き続けようとするその姿は、見ていて飽きないわね。無駄だというのに、運命に抗おうとしてもがく人間に似てるわ」

「……確かに花はいずれ散る。けど、散るまでの間に、きつと色々なことを残せる。誰かに想いを伝えることだったり、誰かへの祝福だったり。誰かの心を癒したり。それに、散ったとしても、それは次の花を咲かすことに繋がる。無駄なことはないさ」

「……それは人間もかしら？」

「ああ」

正真正銘の女神を相手にしているというのに、士郎は動じることなく、いつも通りだ。皇帝のように尊大な態度でもなく、マシユたちのように敬っているわけでもない。まるで自分がどこにでもいる少女であるかのように接してくる士郎に対し、ステンはますます興味をそそられる。

「そういえば貴方、前に駄妹メドウーサに会ったことがあると言ってたわね」

「ああ。今のとは違う、正式な聖杯戦争でな」

以前ステンノから、三姉妹で過ごしていた頃の話聞いた士郎。正直な感想、若干、いやかなりライダーに同情してしまった。聖杯戦争の時のイメージとかなり異なることから、あの戦いでは、彼女は無理をしていたのではないかとまで思う。

完全に化け物となる前のあの姿は、成長してしまうという彼女の個性の現れ。姉二人と違う、大人のような姿。しかし、そのことをコンプレックスに感じていると言われても、目元こそ隠していたが、間近で見たライダーの姿は、素直に美しいと感じるものだった。

「貴方があの子のマスターだったの?」

「いや、その時は敵同士だったよ」

「あら、そうなの?残念」

何が残念なのかよくわからない士郎。疑問符を浮かべているその様子に、クスリと笑いながら、ステンは士郎の手を取る。

「だって、貴方があの子のマスターなら、私の所有物も同然だもの」

「いや、それはどうなんだ?」

「だってそうでしょ?妹のものは姉のものでもあるのよ。逆はないのだけど、ね」

さらりとひどいことを言っている気がする。姉妹というのはこういうものなのだろうか。いや、そういえば自分の姉貴分も似たようなことを言っておやつを強奪してきたことがあったような……

「姉って怖いな」

思考の行き着いた先に、思わずポツリと呟いたその言葉に、今度は声を出して笑うステン。初めてみるその様子に、士郎は驚き、戸惑う。

「ごめんなさい。貴方が私が思っていたよりもずっと面白い子だったから、つい」

「なんだそれ、褒めてるのか?」

「ええ。褒めてるわ」

士郎の手を引きながら、庭を歩くステン。どこへ行くでもなく、ただ散歩をしているだけなのだろうか。いや、しかしそれだと、この状況……まるで散歩に連れていかれたペットのように見えてるのではないだろうか……

「それで、貴方はメドゥーサと殺し合った、ということなのね」

「えっ、ああ。まあ」

正確には一度だけ、ライダーの彼女と戦ったことがある程度ではあ

るが。あの時、迫力不足だと自分は言ったが、優しく殺すと言っていた通り、かなり手加減してくれていたのだろう。彼女があの子を使っていたら、自分は動くことすらままならないのだから。

まあ、その後目を取られそうになつたわけなのだが……

「貴方が殺したの？」

「いや……俺たちとは違うマスターが」

「そう。そのマスターは？」

「……そいつも脱落した」

アーチャーによつて、と心で付け加えておく。しかし、あの戦争でのライダーは、かなり運が悪かつたと言いか言いがたい。マスターの立ち回り方や、マスターたちが学校にやたらと集結していたこと。他にも最初に彼女の元に向かつたのが、葛木だつたこともそうだ。

ただ、彼女の雰囲気からは冷たさが感じられていたが、彼女自身は冷たいというわけではなさそうだ。少なくとも、ステンノの話聞く限りでは……

「でも、あの子もダメね。戦うことしかできないのに、負けてしまうなんて。何の為に呼ばれたのかしらね」

「そう悪く言うなよ。あんたの妹なんだろう？それに、話を聞いている限りだと、根は悪い奴じゃないみたいだしな」

「やけに庇うのね。あの子を好きにでもなつたのかしら？メドゥーサの癖に男を籠絡するなんて、生意気ね」

「え？」

イタズラを思いついたような笑みを浮かべるステンノ。好きになるも何も、そんな余裕自体がなかったのだが、彼女は面白がっているようだ。

「でも、覚悟しておくことね。あの子を貰うなら、もれなく私たちも付いてくるもの」

それは色々と大変そうだ。やや引きつった表情の士郎の腕を引いたまま、ステンノは宮殿の中まで戻っていった。

—————

それから私たち正規ローマ軍は、皇帝ネロの元、連合ローマ軍首都

への攻撃を開始しました。ステンノさんの示した場所へ荊軻さんが偵察に行くと、確かにそこに、ローマと似たような都市があったのです。

最後の戦いになるかもしれないので、ネロさんに協力している全てのサーヴァントが集められました。私を含め、11人のサーヴァントを加えた戦力。敵もまともな戦闘をしていては勝てるはずもありません。だと言うのに、連合側は、全くサーヴァントを戦闘に出してはきませんでした。

戦いは順調に進み、私たちは次から次へと土地を奪還してきています。順調すぎて、逆に怖くなってきます。それに、カエサルさんが彼の方と呼ぶ存在のこと、敵側の宮廷魔術師のこと。わからないことも多いまま、私たちは今日の戦を終えました。

「マシユ、何してるんだ？」

「先輩」

カルデアから持ってきていたのか、ノートにペンを走らせていたマシユが、声をかけられ顔を上げる。

「実は、この度の記録を伝記風に書いてくれないかとドクターに頼まれました」

『だって、古代ローマの皇帝の客将として戦うだなんて、滅多にできない経験だよ！それに、後でこちらの報告書とかの役にも経つと思うしね。マシユがどんなものを書き上げてくれるのか、楽しみだよ』

「こう言うものを書くこと自体初めてなのですが、やれるだけやってみます」

「そっか。でも、日記みたいなのをつける習慣があるのは、悪いことじゃないと思う。読み返した時に、あの時あんなこともあったっけな、なんてことを思い出すかもしれないしな」

とはいえ、昔はともかく、高校生頃からは日記なんて書いていなかった士郎。この期にやってみようか、なんて考える。

「他の皆さんは、どうしてるのですか？」

「スパルタクスと呂布は待機。ブーディカさんとアーチャーは料理。」

荊軻はネロと一緒に作戦を立てていて、ジャンヌとリリイは特訓中。ステンはそれを見に行つたぞ」

「みなさん、自分にできることをしているのですね」

「この戦いを終わらせる、そのためにも協力しなくちゃいけないからなあ。マシユ？」

ノートを閉じ、膝を抱えるように座り直すマシユ。浮かぬ表情を
して、どこか調子でも悪いのかと、士郎は心配する。

「私は、何ができるのでしようか」

「えっ？」

「みなさん、自分にできること、自分だからこそできる特技のようなものを、ちゃんと持っています。そしてそれが、誰かのために貢献しています。ですが私は、そう呼べるものも特にありません。今までだつて……」

士郎はマシユが、自分と出会う前に、どんな暮らしをしていたのかは知らない。そもそも聞いたことがなかったのだ。一度ロマニに聞いて見たら、

『それはちよつと僕の口からは言うべきじゃないと思うなあ。そのうちマシユから話してくれる時が来るよ。だから、待つてあげるといいよ』

と言われた。何か複雑な事情があるのかもしれない。カルデアから出たことのないと言うマシユは、どんな風に生きてきたのだろう。

「俺は知ってるぞ。マシユの特技みたいなもの」

「えっ？」

「マシユは、俺たちの誰よりも努力家だ」

「努力家、ですか？」

「どんな時でも諦めずに挑む所とか、何をするにもできないから無理と言っうんじゃなくて、自分のベストを尽くしてみる所とか。そんなマシユのまっすぐな姿に、俺はいつも励まされているよ」

それはかつて、自分が料理を教えていた頃の後輩にも重なる。最終的に、彼女はその分野においては、自分以上の料理の腕を身につけた。その姿勢と似ているものをマシユも持っている。であるならマシユ

は、もしかしたら大きく成長するのかもしれない。

「マシユの強さは、諦めないこと、その心の力だ。きっとそれが、マシユに大きな力をくれるはずだ」

「……はい」

しつかりと頷くマシユ。心なしか先ほどよりも表情が明るくなった気がする。

「マシユも色々と挑戦してみるといいかもしれないな。ブーデイカさんから料理を教わるとか、どうだ？」

「料理ですか……なるほど……」

こののち料理にチャレンジし始めることになるマシユ。その成長が少しばかり楽しみになる士郎だった。

—————

翌日、どうも何かがおかしい。敵の兵の動きが、何やら不穏というか、そう、

「順調すぎるな」

『ええ。明らかに敵に誘い込まれている気がします』

士郎の呟きに、前衛にいるジャンヌが念話で返す。与えられたものだったとはいえ、彼女の中には生前の戦いの記憶もある。兵法にも通じている彼女は、この事態に違和感を感じていた。

「報告します！我が軍の後方から敵兵が！」

「戦力は？」

「数自体は大したことはありません。敵は既に撤退を始めている模様」

「やられた！」

報告を聞いて、そう真つ先に思ったのは士郎とアーチャーだった。正規ローマ軍の陣形として、前衛にリリイ、ジャンヌ、荊軻が配置されている。右翼側はキャット、左翼側はエリザベートが守りにについている。皇帝ネロとステノの守護は士郎、アーチャーとマシユに任せられ、後衛としてスパルタクスと呂布、そしてブーデイカが配置されていたのだ。

バーサーカー組を後衛に配置したのは、彼らが敵を見つけると、作

戦や陣形を忘れ、ひたすら追いかけてしまうことを考慮していたのだ。一応ブーディカが二人のストツパー役として置かれているものの、バーサーカー組を完全に制御するのは難しい。

そのため、戦闘以外では後方に立たせることで、二人の先行を抑え、分断されることを避けようと考えていたのだが……

「報告します！ 呂布將軍、スパルタクス將軍、共に隊列を離れ、敵を追跡し始めました！」

「やはりな……」

「ぬ？ どうした、アーチャー？」

「どうやら我々は、敵の策にはまってしまったようだ。どうやら敵側には、相当戦上手な者がいるようだな」

「先輩、一体何が？」

「敵はわざと俺たちに進軍させてたつてことだな。陣形や戦力、それぞれの特徴。サーヴァントと人間の違いまでもをしっかりと理解した上で、作戦を立ててみたいだな」

順調すぎる進軍に、自分たちも警戒していたつもりだった。しかし、敵の方が作戦をしっかりと立てていたのだろう。まんまと術中にはまってしまい、バーサーカー組と分断させられてしまった。ということは、大きな懸念が一つ。

「ブーディカさんが危ない！」

言うが早いか、士郎は既に駆け出していた。後ろからマシユが追ってきている。焦りの表情を見せながら走る士郎の姿に、戸惑いながらも兵たちは道を開ける。息を切らし、士郎がブーディカ達の居たであろう場所に辿り着く。

「……くそっ！」

そこに残されているのは、倒れ伏しているローマの兵たち。分断されたらしい呂布とスパルタクスの姿は見当たらない。そして、ブーディカも。辺りを見渡すと、一本の細い木の下に、一人の兵士が座り込んでいる。肩が上下していることから、まだ生きているようだ。急いで士郎が駆け寄り治療する。

「大丈夫か？」

「はっ。っ、報告、申し上げます。突然現れた伏兵によって、襲撃を……敵側の将は二人、うち一人は少年です。我が軍の大半と、ブーディカ殿は、捕らわれました」

「なっ、捕らわれた!?!」

「士郎殿と皇帝陛下に伝えよとのこと、っ。彼女を救いたくば、自分たちのいる場所に来い、と。敵は、あちらの方向へ」

兵士が指差したのは今までの進路から外れた方向。向こうにも砦があるらしく、敵はそこに向かったと考えられるとのこと。兵士に肩を貸し、立ち上がる士郎。

「先輩!これは……!」

「ああ。ネロに報告しないといけないことがある。マシユ、衛生兵を探してくれ。彼を預けないと」

「わかりました」

まさかの邂逅

「ぬう……」

士郎からの話を聞き、ネロが唖る。

現在彼らは進軍を停止し、サーヴァントたちを集結させていた。

「なるほどな。おそらくただの戦上手というわけではなさそうだな。敵側には相当な策士、いやこの場合は軍師だな。少なくとも、此度の襲撃は、その両者が力を合わせた結果だろう」

「ふむ。戦力として呂布とスパルタクスを失うのは惜しいな。今からなら回収に間に合うかもしれん」

「私はブーディカさんを助けに行くべきだと思います。仲間を見捨てることなんて、できません」

「どうかしら？ 敵がわざわざ誘っているということは、罠の可能性が高いわね。そこでやられるくらいなら、先に進むべきかもしれないわよ」

「ここまで順調に進んでいたこと、その勢いを思わぬタイミングで止められてしまい、ローマ兵の間に不安が広がっているようだ。サーヴァント組も決して一丸とは言えない状況にある。」

「むう……シロウ。そなたはどう思う？」

「ここでネロが考え込んでいる士郎に意見を求める。他のサーヴァントたちの視線を受けながら、士郎が伏せていた顔を上げる。」

「俺は、今はスパルタクスと呂布を探すこと、そしてブーディカさんを助け出すこと。その両方をすべきだと思う。一緒に戦う仲間を、見捨てることなんてできない！」

「うむ。よく言ったな、シロウよ」

「先輩の言う通りですね。私も、賛成です」

「はい、私もです。騎士としても、仲間を見捨てたくはありません」

「はあく。まっ、そう言うとは思ってたわよ。そう言う男ですもの、ね」

「うふふ。それでこそ、勇者様ね。困難な道と知りながら進む。とても見守りがあるわ」

「何、かつて私も仲間裏切られ、それ故に失敗した。私個人としては、それを繰り返さないためにも、呂布たちを助けたいと思っていた」「なかなかいいこと言うじゃない、子イヌ。今はまだただけど、いつかマネージャーにしてあげてもいいわよ」

「キヤットはご主人に従うのみだワン」

士郎の言葉に、サーヴァントたちは皆頷いた。

「いいよな、アーチャー」

「ふん。ここままでまとまっている話を拗れさせるつもりなどないさ。それでいいだろう。では、これより三つの班に分けるとしよう。ブーディカを救出する班、呂布とスパルタクスを探す班、そしてこの場にて、今まで取り戻した領土を守る班だ」

アーチャーによってサーヴァントたちが振り分けられていく。こういう時、アーチャーは頼りになる。多くの戦場を経験した故の判断力や、サーヴァント一人一人の力量を正しく把握している観察力。こういう時に、彼ほど頼りになるものもそういない。

で、その結果……

「ではアーチャー、荊軻。任せたぞ」

「ああ。呂布とスパルタクスは私に任せてもらおう。何、呂布とはずっと一緒にいたのだから。心配はいらないさ」

「任されるとしよう。君たちが無事に戻ってくるまでは、私がここを死守しよう」

ブーディカ救出組がネロ、士郎、マシユ。呂布・スパルタクス搜索組が荊軻、リリイ、ジャンヌ。待機組がアーチャー、ステンノ、タマモキヤット、そしてエリザベートと分けられた。

「シロウ、ご武運を」

「リリイたちも、気をつけろよ」

「ふん、心配など、必要ありません」

「流石はジャンヌさん。すごい自信です」

こうして、進軍を続けていた正規ローマ軍は、一度その進軍の足を止めることとなり、三方向に分かれて向かうのだった……

「そろそろくる頃じゃないかなあ」

「そうだな。向こうの陣営に即断即決のできる者がいたとするなら、距離と時間から考えても、そろそろいい具合だろう。ブーディカは？」

「とりあえず兵たちが余計なことをしないように、僕たちのテントにいるように伝えてあるよ。今回はあくまでネロに用があるだけだからね」

「ふん。まあ奴も余計な抵抗をしているわけでもない。その判断には従うとしよう。私は、お前の願いを叶えるだけだからな」

森の中、とある砦にて、二人のサーヴァントが話をしている。一人は赤い髪の少年、もう一人は長髪の男。

「じゃあ、そろそろ準備をしないとね」

「配置は既に私から伝えてある。号令をかければ、すぐにでも動ける」
「頼もしいなあ。でも、なんだか不思議な感じ。君が僕の先生になるだなんて、ね」

「私とて驚いている。何故縁もゆかりもないサーヴァントの依り代に選ばれてしまったのか……が、こうなったからには、私は私のすべきと感じたことをするだけだ」

「でもいいのかい？君は僕と違って、聖杯に呼ばれたんだろう？彼らに協力しないのかい？」

「……私が仕えると決めているのは、一人だけだからな」

「……ふうん。まあ、僕としては頼もしいけどね。君も、そして彼も」
この奇妙な聖杯戦争、特異点という異常。それによって巡り会ったこの二人。それは運命的な者なのかもしれない。ただ、この二人が肩を並べることが、どれほど厄介なことなのか、まだ出会っていない士郎たちには想像もつかない。

そして少年が指差す先、彼らの近くに大きな影が立っている。バーサーカーとなり、理性を奪われた彼は、今はただ彼らの指示に従うだけの存在。しかしその男が少年と同じ側として戦うこと、それもまた

異常による奇跡と言えるのかもしれない。

「あの砦だな……」

兵が指差した方向、そこにあつた森を進んでいた土郎たち。ロマニからの通信を頼りに進んでいた彼らの前に、一つの砦が姿を現した。遠くから見ても、連合側の兵がたくさんいるのが見える。

「さて、ここからどうするか、だな」

「はい。理想は敵に気づかれないように接近することですが、この様子だと難しそうですね」

砦の入り口は見る限り一つ、それもしつかりと護衛が立っている。意表をついた奇襲を仕掛けようにも、結局入れる場所が一つだけなら、ルートも必然、限られてしまう。

「ぬう。せめて入口がもつと大きければ良いものを。あれではうまく攻め込めん」

「なら、入り口を大きくすればいいんだな？」

激しい爆発音に、砦の兵たち混乱する。予期せぬ大きな音に、流石のサーヴァント二人も驚きの表情を浮かべる。理性のない彼は相変わずほぼ無反応だが。

「いやあ、正面から来るしかないようにしてたけど、これは流石に予想できなかったよ」

「まさか、門そのものを破壊してくるとは。こちらの想定以上の火力を有したサーヴァントがいるようだな」

「今の、遠距離からの攻撃だよな。アーチャーかな？」

「それもただの攻撃ではないな。宝具によるもの、それも、宝具を自壊させることによる、壊れた幻想ブローケン・ファンタズムだな」

「随分無茶苦茶なことするなあ。宝具をこんな簡単に一つ犠牲にしちやうなんて。まさか、彼がいるのかな？」

「仮にいたとしても、奴はこんな使い方はしない。自分の至高の財を無駄にする男な訳がないからな」

「そうだね。なら、一体どんなサーヴァントの仕業なんだろうね」
「さて、どんな相手が来るのだろうか……」

兵たちがどんどん蹴散らされていく。いよいよ相手の顔を拝む時が来たようだ。目の前の兵を斬りはらいながら、一人の男が三人の前に立つ。

—————

『士郎くん、そのすぐ先に、サーヴァントが三人いる』

「ブーデイカさんか？」

『いや、霊基パターンが違う。恐らく敵将だろう』

干将・莫耶を握る士郎の手に力が入る。目の前に立っている兵を斬り払い、士郎が一步踏み出す。敵将三人の前に立った士郎は、強い視線で敵を睨みつけた。いや、睨もうとした。

「見つけたぞ！ブーデイカさんを返し……えっ？」

「なっ……」

士郎の表情が固まる。そして、長髪の男のもだ。追いついたマシユが首をかしげる。

「な、なんっ!? あんたはっ!？」

「これは……どういうことだ？」

「時計塔の先生!？」

「遠坂の弟子!？」

話をしよう

目の前にいるサーヴァント、そのうち一人から、士郎は目を離すことができなかった。だってその顔は、間違いなく自分の知っているものだったのだから。

ロンドンで遠坂凜の弟子として、自分もたまに会う機会があった相手、名前は確か……

「ロード・エルメロイ……だったか」

「ファック！Ⅱ世だ、Ⅱ世をつけてくれ」

確定だ。向こうもこちらを知っているらしいことから、まず間違いなく時計塔でも有名なあの講師だろう。だが、それはおかしい。確かにあの人は魔術師だった。が、今この男から出ている反応は紛れもなくサーヴァントのそれだ。

「あんた、サーヴァント、なのか？」

「ふん。そういうことになるな。まさか縁もゆかりもない英霊の依代として召喚されるとは、全くもって理解できない」

「依代……なるほど。マシユに近いけど、こっちは完全なサーヴァントになってるわけか」

「先輩、お知り合いですか？」

「ああ、まあ一応な。俺の師匠の先生ってところだ」

「でもなぜそんな人が？」

「わからない……」

「これは驚きだね。まさかこんな形で、こんな場所戦場で、知り合いに会うなんて、そうそうないんじゃないのかな」

「よく見て見るといい。お前の両隣はお前の知り合いだぞ」

「あ、ほんとだ。僕も人のことは言えないか」

両陣営緊張感があるんだかないんだか、どうにも締まらない。とここで空気を見事に変えてくれたのは、

「貴様らが連合の将であるな？余の客将のブーディカを返しにもらいに来たぞ！」

話しながらも、燃える剣の切っ先を相手に向けている。それに対

し、少年のサーヴァントは笑みを向け、エルメロイIII世は仏頂面で見つめ返す。

「へえ、君がネロ・クラウドイウス、でいいのかな？」

「いかにも。余が正当なるローマの皇帝、ネロ・クラウドイウス・カエサル・アウグストウス・ゲルマニクス！貴様らは何者か。許す、名乗ってみせよ！」

「名乗らせてくれるのかい？そうだなあ、どういう風に言おうか……二人合わせて、先生と僕、ってことには」

「できるわけないだろうが、馬鹿者。相手に名乗る時くらい真面目にやっておけ」

「だね。ここは、この名前かな。僕はアレキサンダー、アレキサンダー三世だ。そして彼は、」

「先ほどその日本人も言っていたが、ロード・エルメロイIII世だ。まあ、私は真つ当な英霊ではないがな。英霊としての名は別だが、所縁も何も無い名だ」

「あと、この大きいのはダレイオス三世。バーサーカーだから、話せないけどね」

「アレキサンダーにダレイオス……また、奇妙な組み合わせだな」

「眩きながらも士郎は油断せず、彼らの一挙手一投足を観察している。既に真正面から敵と出会い、互いにいつでも攻撃ができるほどの距離にいるのだ。加えて相手はサーヴァント三体、こちらはデミ・サーヴァントのマシユと、人間が二人。状況的にはかなり不利だ。」

「まあまあお兄さん。そんなに気を張らないでよ。僕はただ、ネロと話がしたかったんだ」

「話、だと？」

「そう。できればこうして、戦場でね。あれこれとちよっかいかけたのも、ここへ君たちを呼び出したのも、全部そのためにしたことだよ」
「お前たちは、敵の呼び出したサーヴァントじゃないのか？」

「私ははぐれだ。マスターなどいない。だが自身の仕えるべき相手は、今も昔もただ一人と決めていたからな」

「僕は一応召喚されたけどね、マスターとの相性が悪かったみたいだ。」

だから自分の意思でここにいる」

かたや仏頂面、かたや穏やかな笑顔。しかしどちらも嘘をついてい
るようには見えない。

「さて、じゃあネロ。僕の望み通り、こうして対面できたこと、嬉しく
思うよ。でも、話は少しお預けみたいだね」

溜息を吐くアレキサンダー。士郎たちの背後から連行ローマの兵
が押し寄せて来ている。

「安心してよ。僕たちは何もしないさ。でも、連合の兵士はもう止ま
らないみたいだ」

「暗示、というよりはもはや催眠の類だな。皇帝ネロを見れば、なかば
自動的に襲いかかるようになってる」

「マシユ、ネロの援護を！」

「はい！」

士郎たちの動きも素早かった。すぐさま戦闘態勢に入った二人は、
ネロを守るようにその前に進みでる。士郎の手には既に弓が握られ
ている。そして手に握った矢をつがえると、5本に分かれ魔力が走
る。突如として現れた武器に、エルメロイⅡ世の目が驚愕で開かれ
る中、士郎が狙いを定め、矢を放つ。

「行くぞ、ゴッド・フォース軍神五兵！」

放たれたのはネロの客将の一人、呂布の使う万能宝具による一撃。
三国志最強と謳われた男の宝具。その威力は強大で押し寄せていた
連合の兵士を瞬く間に散らす。

「マシユ！」

「任せてください！」

それでもその攻撃をかくぐって来た兵士の前に、巨大な壁が現
れ、道を塞ぐ。マシユの宝具、ロイド仮想宝具、カ疑似展開／デア人理の礎により、
兵たちが足止めされ、一箇所に集まる。

「悪いな」

そう呟いてから、士郎が大きな弧を描くように、矢を空に放つ。正
確無比なその腕で放たれた矢は、連合兵士を無力化していった。

「終わったみたいだね……それにしても、マスターは後方支援が普通だと思っていたけど、君は違ったみたいだね」

小さく笑みを浮かべるアレキサンダーの視線は、今度は士郎を捉えている。その隣にいるエルメロイⅠⅠ世も、険しい表情で士郎を見る。

「遠坂の弟子、今のはなんだ？」

「弓術、いや、弓道かな？」

「とぼけなくていい。お前の魔術、それが何かを聞いている」

来たか、というのが士郎の本音だった。時計塔では何度かあったことこそあれど、士郎はエルメロイⅠⅠ世の前では魔術を披露したことは一度たりともなかった。師匠である遠坂凜に耳にタコができるくらいにまで、何度もなんとも言われていたからだ。

『いい？たとえ相手が誰であれ、あなたの魔術は見せないこと。あんな大禁呪に加えてそのデタラメな投影を見たら、こぞってあなたを狙ってくるわ。ホルマリン漬けにされたくなければ、その魔術は隠し通すこと、いいわね？』

と、言われていたものの、この状況では誤魔化そうにも誤魔化せないだろう。魔術の知識に関しては一流でも舌を巻くと言われるロード・エルメロイⅠⅠ世だ。

「教えると思うのか？今のはあなたは、俺たちの敵なんだろう？」

「チツ。遠坂の弟子はただのお人好しという噂を聞いていたが、さすがに戦闘時において判断力がないというわけではないらしいな。そうでなければ、聖杯戦争を生き残ることなどできるはずもないか」

「まあ、君についてはまたいずれ……つてどこかな？さて、皇帝ネロ。話をしよう」

無垢な少年のような笑みを向けられるものの、ネロの警戒心は一切緩まない。すぐにでも攻撃に移れるように、剣をしっかりと握り、アレキサンダーを観察している。

「余と一体何を話すというのだ？」

「簡単な質問だよ……現ローマ皇帝ネロ・クラウディウス。君は何故戦うんだい？」

「何？」

訝しげな表情でアレキサンダーを見るネロ。一方アレキサンダーの方は変わらぬ微笑のままだ。

「取り敢えず僕たちが戦う必要は、そもそもないだろう？ 君が連合に名を連ねる皇帝として、その立場を受け入れれば、この戦いそのものが必要なくなる。君の前の皇帝たちとともに歩み、ともに支配することを求めれば、君の兵も、僕の兵も傷つかなくていいのに」

アレキサンダーの言葉にネロが言葉もなく俯く。その様子を見て、アレキサンダーがその手をネロの方へと差し出す。

「さあ、僕たちとともにおいでよ。そしてこの無用な戦いを終わらせよう」

「……無用、だと」

「ん？」

静かに言葉を紡ぐネロの肩は、震えている。それは恐怖や悲しみや絶望からではない。彼女は、皇帝ネロ・クラウディウスは、怒っている。

「その発言、許さぬぞ。例え蘇った血縁や過去の偉大な王であれども、今この時、皇帝として立つのはただ一人、余だ！ただ一人であるからこそその支配は星のように輝き、ただ一人であるからこそ全ての背負う傲慢が許される！」

キツと強い視線でネロがアレキサンダーを睨みつける。誰一人として動かず、誰もがネロの言葉に耳を傾ける。

「例えローマの神々が連合に下るように言えども、余は真つ向から立ち向かう！それこそが、余の生き方、余の運命だ！余は退かぬ！降臨し、君臨し、栄させてみせよう！余こそが、この世界である！」

ネロの覚悟の叫びを正面から受けて、アレキサンダーはその手を下ろした。しかしその笑みはより大きく、嬉しそうに見える。

「見事だ！そうだ、その言葉を君から聞きたかった！君は栄えるだろうね、王として、霸王として。いや、魔王にだってなれるかもしれない」

「黙れ！もう貴様と交わす言葉などない！マシユ、シロウ、余に力を貸

してくれ。ここでこやつを、倒す！」

「満足か？」

「ああ。それじゃあ、戦うとしようか」

「ふん。ダレイオスIII世、出番だ。存分に暴れろ」

狂戦士が吠え、アレキサンダーが剣を抜く。

「先輩！」

「ああ。投影、開始！」

両手に干将・莫耶を握り、士郎はマシユ、ネロとともに、三人のサーヴァントに挑み掛かる。

ブーデイカ奪還作戦、その戦いの火蓋が切って落とされた。

大王と皇帝

ダレイオスIII世の剛腕により振るわれる巨大な斧による一撃を、士郎は双剣を使い、軌道をそらす。地面にめり込んだその斧に全体重を乗せ、武器を振り上げられないようにする。

自分とは比べるまでもないパワー。圧倒的なまでの巨体。自分の記憶が確かなら、あのヘラクレスよりも大きいかもしれない。本当に元人間なのだろうかと疑ってしまう。

真正面から受け止めようものならいくら防いでもダメージを負いかねない。ならば防ぐのではなく逸らせばいい。

バーサーカーということもあり、敵の攻撃は読みやすい。何より、特異点での戦闘経験を積んで来た士郎の心眼は、サーヴァントのそれにも引けを取らない。

「っあっー」

攻撃を逸らされ、態勢を崩した相手に向けて、士郎が双剣を振るう。顔面めがけたその攻撃を、狂化されながらも、本能的に腕を振り上げて防ぐダレイオス。大きな音を立て、ダレイオスの武器が地面に落ちる。腕が裂け、鮮血が士郎の顔を濡らし、視界を奪う。

「しまっ、がっ!?!」

咄嗟に腕で血を拭おうとする士郎。その隙を逃さず、ダレイオスの反対の腕による拳が、士郎の腹部に決まり、その体を大きく弾く。士郎の手から白と黒の双剣が離れ、宙を舞う。

「っー」

口の中に鉄の味が広がる。どうやら口のどこかを切ってしまったようだ。あの時念のために体全体の硬度を高める強化をしていなければ、即死していたかもしれない。

立ち上がり、口の端から垂れる血を、士郎が手の甲で拭う。

「ゴオオオオー」

ダレイオスが吠えて突撃してくる。片腕は使えず、武器も手放した。それでもなお、この男は危険すぎる。士郎が、本気で、それも死ぬつもりで戦わなければならないほど。でも、

士郎は、一人で戦ってはいない。

「やあああつー！」

振り抜かれた拳が鳴らすのは鋼の音。ダレイオスと士郎との間に、マシユが飛び込んでくる。巨体から繰り出されたその一撃を、盾を地面に突き立てることで正面から受け止めることを、マシユはやつてのける。

動きが止まるダレイオスの背を駆け上り、盾の上を飛び越えて、片手剣を振り下ろしてくるアレキサンダー。それに対しマシユの隣に駆けつけたネロが、剣を振り上げるようにし攻撃を弾く。弾かれた反動で後退し、アレキサンダーがダレイオスの肩の上に乗る。

「へえ。まさかここまでサーヴァント相手に立ち回れるなんて。さすがは現代の皇帝に、人類最後のマスターってところかな」

アレキサンダーの背後から、先ほど士郎の手放していた干将・莫耶が迫る。今にも斬りかからんとする双剣を、空中から落下した岩が弾く。弾き飛ばされた双剣はそのまま士郎の両手に戻り、ダレイオスがアレキサンダーを乗せたまま距離を取る。

呼吸を整えるかのように対峙したまま動かない両チーム。アレキサンダーのさらに後方、エルメロイⅡ世が扇のようなものを手に、士郎を睨みつける。

「その剣、単なる剣ではないな。おそらく互いに引き寄せあう性質を持っていると見た。それにこの強度。宝具か？」

「流石は時計塔の名物教師だな。今で倒れてくれればこちらとしては楽だったんだけど」

「それを私がさせると思うか？私の役目はそいつを勝たせることだ。その障害になるのなら、それをどうにかするのが仕事だ。貴様の奇妙な剣の魔術、そう簡単に通ると思うな」

「参ったな。ただの後方支援型だと思ってたけど、あんたも大概だな」
「物理で殴るだけが戦いではない、そういうことだ」

「それにしても、酷くやられたみたいだね、ダレイオス。君、本当に人

間？」

アレキサンダーがダレイオスのだらりと垂れ下がった片腕を眺め、士郎に問いかける。笑顔のままであるため、どこまで本気で聞いているのかわからない。

「そういえば聞いていなかったね、君の戦う理由」
「何？」

「君はどうして戦うんだい？どうして身を削ってまででも、人類史の救済なんて、途方も無いことをしようと思ったんだい？別に君でなくても良かったんじゃないのかな？全てをサーヴァントに任せて、君は安全なところから見てもいい。なのに、どうしてわざわざ自ら戦うのか、聞かせてくれないかな？」

普通の少年のような笑みで問いかけるアレキサンダー。普通の少年が相手なら、気軽に答えることも出来ただろう。だが、彼を相手にしているのであれば、それは間違いだ。

見た目や言動こそ若く年相応なところがあるが、サーヴァントである以上、彼は自分の最後まで記憶を保有している。精神的には大人、かのアレキサンダー大王なのだ。故に士郎は言葉を選ぶ。

自分を試しているであろう大王に対し、自分の答えを示すために。

「そうだな……馬鹿げていると思うかもしれないけど、俺はなりたいたいんだ。誰もが幸せでいられるようにする、正義の味方ってやつに」

「正義の味方？」

「ああ。ある男が俺に言ったよ。その願いも、理想も、どうしようもなく偽物で、借り物で、偽善だって。それでも、俺はそう生きたいと思っ
た」

「どうして？どう聞いても君には分不相応な願い、子供の夢物語にか聞こえないけど？」

「そうかもしれない。でも、誰かが幸せであってほしいという願いは、決して間違いじゃ無いはずだ」

アレキサンダーの顔から笑みは消えている。それでも彼は士郎の言葉を一言一句、聴き漏らさぬように集中している。

「だから俺は、少しづつ始めようと思った。戦争を止め、苦しんでいる人に手を差し伸べ、誰もが幸福になれるようにって。そんな時に、人理焼却なんて、とてつもないほど大きな事件が起きた」

カルデアアスに守られているカルデア、そこ以外の全ての場所、全ての人類が、その存在を亡き者にされてしまった。

「師匠も、大切に思っている人たちみんなも、消えた。でも、この事件を解決すれば、あいつらだけじゃない、世界中の人たちを助けることができる。そして、今それができるのは、マスターの資格を持っている俺だけだ」

「それって、ただの使命感じゃないのかな？」

「……それもあるのは否定しない。正義の味方の夢を、人類史の救済を、俺は二人の人に託されたからな。でも、それだけじゃない」

正面からアレキサンダーを見据え、力のこもった眼差しを持ち、士郎は語りかける。

「俺自身が、そうしたいと思った。大切に思う人たちを、世界中の人たちを、この手で助けたいと。だから誰に止められようと、俺は進むのをやめない。みんなを救う、それが今の俺の、たった一つの願いだからー！」

「願ひ……か。叶えられるかどうかはわからないような、途方も無いものを、君は持っているね……馬鹿げているとまで思える。でも、どうやら僕が笑っているものでもなさそうだ」

ダレイオスの肩から降り、剣の切っ先を士郎たちに向けるアレキサンダー。

「なら、示してみてよ。君たちの願ひを、生き方を」

「言われるまでも無いさ。行くぞ、マシユ、ネロー！」

「はいー！」

「うむ」

—————

武器を構えながら、士郎は冷静に現状を確認する。

ダレイオスに殴られた部分がまだ少し痛むが、強化のおかげで動け

ないほどではなさそうだ。ネロとマシユも、まだまだ動けそうだ。

対する相手は、アレキサンダーとエルメロイⅠⅠ世が余裕がある。さらにダレイオスの片腕は既に治療されている。そのための魔力がどこから来ているのかがわかれば良かったのだが、残念ながらマスタールらしき影は近くにいない。頭を振り、士郎は意識を目の前の敵に向ける。

「それじゃあ、全力で行くとしようか。ね、先生？」

「ふん」

エルメロイが指を鳴らす。それを合図に何らかの魔術が発動したのか、アレキサンダーとダレイオスの体がわずかに光を帯びる。

「何だ？」

「私に力を渡した英霊のスキルだ。『軍師の忠言』に『軍師の指揮』。どちらも味方、正確には自軍を大幅に強化することができる、まさしく指揮官にとっては必要不可欠な力だ。極東でも有名なこの英霊にかかれば、どんな兵も一騎当千の力を持てる。果たしてお前に乗り越えられるか？」

大きく吠えながら接近するダレイオス。その拳を間一髪でかわす士郎は、その攻撃が地面に当たるのを見て、確信した。パワーもスピードも、そしておそらく耐久力も、先程とは比べものにならないと。現に拳の当たった地面は、まるで隕石が激突したかのように、クレーターが生じている。

先程まででほぼ互角、しかし今では敵がパワーアップしてしまっている。更に先ほどまでのダメージも癒えている。状況的に、かなり最悪な方向に向かっている。

「くっ！」

振り上げられた拳を転がることで何とか避ける士郎。追撃を飛び込んだマシユの盾が弾く。

「ネロさん！」

「はあああっ！」

攻撃を逸らされ、態勢を崩したダレイオスの首を狙い、ネロの剣が振るわれる。しかしその剣が届くより前に、別の剣が行く手を阻む。

「それじゃダメだよ。越えられない」

片手でネロの剣を防ぎながら、両手で振るわれるマシユの盾をもう片方の手で受け止める。不敵な笑みを浮かべるアレキサンダーに、マシユは少しばかりの焦りを感じる。

「こんなに強くなるなんて……」

「そりやそうだよ。何てったって、僕自慢の臣下だからね」

「避けるー！」

その声にハツとして飛び退くアレキサンダー。彼の頭のあったあたりを、赤い閃光とともに矢が通り抜け、背後の地面に突き刺さる。飛んできた方向を見ると、士郎が黒い弓を構え、新たな矢をつがえている。先とは違う捻れた矢。

アレキサンダーが見つめる中、士郎めがけてダレイオスが走る。先ほど拾った自身の武器を振りかざし、咆哮とともに振り下ろさんとする。その一撃をバックステップでかわす士郎。武器を踏み台にし、ダレイオスの顔の前まで飛び上がる。

「投影、重装」

「I am the bone of my sword」

ダレイオスが士郎に手を伸ばすが既に遅い。

「偽・螺旋剣」！

空間をもえぐり取るその矢は、ダレイオスの腕を粉碎し、その心臓を貫いた。体に大きな穴が空き、ダレイオスの動きが止まる。

着地した士郎がその姿を見上げると、ダレイオスがもう一方の手で士郎の頭を掴もうとして……

そのまま消えていった。

—————

「やられちゃったか……でも、まだ僕がいるし、なんとかかなるかな」

ダレイオスが消えたにも関わらず、アレキサンダーはまだ余裕の笑みを浮かべている。士郎の元へマシユとネロが辿り着く。

「形勢は逆転した。貴様らの方が不利だと言うのに、まだ笑うか」

「笑うよ。だってまだ、僕はとっておきを見せていないしね。ここま

で来たなら、出し惜しみする方が失礼みたいだし、やるとしますか」

アレキサンダーの背後の空間が揺らめく。聞こえてくるのは□と、強く大地を踏みしめる蹄の音。揺らめきの中から、見事な馬が飛び出し、アレキサンダーの隣に並ぶ。

「さあ、これをどう切り抜ける？ 僕の逸話の、その第一幕を！」

馬の背に飛び乗るアレキサンダー。大きな□をし、馬が全速力で駆けて来る。

「始まりの蹂躪制覇！」

通常の馬よりも一回りも大きいアレキサンダーの愛馬。その蹄による攻撃は、並みの相手であれば難なく踏み潰す。その後幾度となく行われた遠征、蹂躪。その始まりを名乗る逸話の宝具。

しかし侮ることなかれ。

ここにいるのは人間として規格外の存在。

「マシユー！」

「はい！ 宝具、展開します！」

真正面から受けて立つ姿勢のマシユ。地面に盾を打ち付け、アレキサンダーの攻撃に備える。大きく広がる壁としてではなく、壁としてではなく、一点に集中させたその守りは、ブケファラスの強力な蹄の一撃にも耐えている。

「投影、開始」

続いて動く士郎。手に持ったのは先ほどと同じ矢。拮抗状態にあるマシユとアレキサンダーに向かい、矢を向ける。

「赤原を走れ、緋色の獵犬！ 赤原獵犬！」

狙いすました一撃が、正確にアレキサンダーめがけて走る。高速で打ち出されたそれであったが、魔力の壁によって軌道が外れてしまふ。

「貴様が狙撃することぐらいお見通しだ。私が許すはずもないことを、学習しなかったのか？」

やや呆れたような視線をエルメロイィー世が士郎に向ける。対する士郎はフツと息を吐き、挑戦的な笑みを浮かべる。

「どうかな？」

「何だど？」

軌道を逸らされ、あとは地面に突き刺さるだけのはずの矢が、向きを変え、アレキサンダーの方へと向かっていく。途中で軌道が変わる矢など、普通の矢ではありえない。思わず動揺するエルメロイィー世だったが、すぐさまアレキサンダーを守るための魔力の壁を張る。

「これで、「そっちじゃないんだ。俺の狙いは」？つ、まさか！ライダー！」

気付いた時にはもう遅かった。響いたのは肉が裂ける音、そして獣のうめき声。ブケファラスの足が、獣に食いちぎられたかのように、士郎の矢によって抉り取られていた。

バランスを崩し、宝具の発動も終わる。マシユが盾で押し返すと、ブケファラスは地面に倒れ消えていく。投げ出されたアレキサンダーは、頭を打ったのか、しきりに頭を横に振り、意識を覚醒しようとしている。

「ぐうつ、まさかこんな風に僕の愛馬がやられるなんて……でも、まだ戦いは終わってないよ」

「否。もう終わりである」

振り返りながら立ち上がったアレキサンダーの前に、既に近づいていたネロ。振り下ろした炎の剣が、アレキサンダーの体を一閃する。

アレキサンダーが膝をついた。

「僕の負けかあ……思ってたよりもずっと悔しいなあ」

粒子になり始めている自分の体を見つめ、感慨深げにアレキサンダーが呟く。彼の正面に立ったネロが、その様子を見下ろしている。「頼もしい仲間だね。これも君の、唯一無二の皇帝のカリスマって奴なのかな？まあ、最後に一つだけ言い残すとしよう。咲き誇る花のような気高さと誇り高さ、それは間違いなく美しいものだ。でも、危険なものでもある。だから……でも、彼らがいるなら、大丈夫かな？」

そう言っつて、アレキサンダーの姿も消えていった。最後に残ったのはエルメロイィー世。

「で、あんたはどうする？戦うっていうなら、付き合うけど？」

「いや、私にはもう戦う理由はない。手を引くでしょう。来い。ブー
デイカの元に案内する」

踵を返し、砦の裏にあるテントへと向かうエルメロイⅠⅠ世。士郎
たちは顔を見合わせてから、周囲に気を張りながらもそのあとを追っ
た。

決戦の時は近い

「やあ、ネロとマシユ。それに士郎も。心配かけちゃったみたいだね」「気にするでない。余の客将を余が助けなくてどうするといふのだ」

一番大きなテントの中で、ブーディカは椅子に腰掛けていた。特に怪我もなく、本当に無事のようにだ。

「アレキサンダーは？」

「……倒したよ」

「そつか……そうなっちゃったかあ」

どこか残念そうな声を出すブーディカ。その気持ちはなんとなく士郎にはわかる。

あの時、アレキサンダーは確かに敵対していなかったのだ。きっとネロと話したかったというのは、本当のことだったのだろう。そしてもしかしたら、彼とともに戦える可能性もあったかもしれない。けれども、それは過ぎたこと。今はブーディカが無事だったことを素直に喜ぼう。

「……それで？あんたはこれからどうするつもりだ？」

士郎が入り口に立っている男、エルメロイII世に問いかける。まだ完全に警戒を解いていない視線に対し、エルメロイII世は肩をすくめる。

「さて、どうしたもののか。もうお前たちと戦う理由もないからな。かといって奴らの元に行くのもくだらん。唯一の主人を無くしたのだ、適当にこの辺りに居座るだけだ」

「……俺たちと来てくれないか」

「何？」

真剣な表情で自信を見る士郎に対し、エルメロイII世は訝しげな視線を向ける。

「どういうつもりだ？」

「あんたはあいつらに召喚されたわけじゃないんだろ？それにこつちと敵対する気もない。正直、連合に勝つためにも、1人でも多く人手

が欲しい」

「それで私を、か。ふん、くだらん。私にとってそこまで大きなメリツトがあるとも思えんが」

「俺の魔術について、知りたいと思わないのか？」
「！」

瞬間、エルメロイⅠⅠ世の目が細められる。食いついた、そう感じた士郎は、自分を餌としてエルメロイを勧誘することに決めた。確かに戦いが終わったら、自分の身を狙われることになるかもしれない。けれども、この戦いを勝ち抜くためには、彼の力が必要だと、士郎は確信していた。

「あんたが俺たちと一緒に来てくれるなら、俺の魔術の秘密を教えてもいい」

「ほお。そうやって取引の材料にするということは、貴様の魔術、相当特異なものということか」

「まあな。俺の師匠には例え後見人のあんたでも見せるなって言われてたほどだ」

「遠坂が、か。なるほど」

「で、どうする？」

「……ふん。いいだろう。元々人理を修復するという点では、私も諸葛孔明も、そしてお前たちも同じだからな。我が計略を持って、焼却の運命とやらを変えてみせよう」

「助かる。な、ネロ」

「うむ。詳しいことはわからんが、余の客将として入りたいのであれば歓迎するぞ。余は寛大故、敵であったものでも正しく評価する！では、アーチャーの元へ戻るとしよう。荊軻たちも合流しておるといいのだが」

ブーディカを奪還し、エルメロイⅠⅠ世を仲間に加えたネロたち。アーチャーが待っているであろう合流地点に向かい、戻り始める。「ドクター。アーチャー達の反応はまだ同じ場所か？」

『ああ。その場にいるサーヴァントの反応も、出発した時と変わらな

い。どうやら襲撃されることはなかったみたいだね』

「ということは、荊軻さんやジャンヌさん達はまだ戻っていない、という事でしようか」

『うん……やっぱり、心配だよね』

「……リリイ、ジャンヌ……」

少しの不安を感じながらも、士郎達は急いでアーチャー達と合流すべく、移動し続けた。

—————

「む、来たか」

合流地点にたどり着いた士郎達を出迎えたのは、見回りの途中だったらしいアーチャーだった。と、士郎達の後ろをついて来ているエルメロイIII世を見たアーチャーの顔が引きつる。

「ネロ……その後ろの男は？」

「うむ。余の新たな客将だ！なかなかの軍師にして、戦闘もこなす。最初は敵だったのを勧誘したのはシロウであったが、余は寛大故、迎え入れたのだ」

「ロード・エルメロイIII世だ。訳あって、諸葛孔明の依代として擬似サーヴァントになっている」

「う、うむ」

アーチャーの様子がおかしいのに皆が首をかしげる中、士郎は少し苦笑気味に見ている。

「お前は……いや、まさか、そういうことか……」

士郎とアーチャーを見比べていたエルメロイIII世が何かに納得したかのように頷く。

「どうかしたのですか？」

「いや、なんでもない。今は特に重要ではない。それより、これからどうするつもりなのかを聞かせてもらえるか？作戦を立てるにしても、情報が必要だ」

「うむ。では余のテントに来るがよい。そこで一旦作戦会議とする」

「連合ローマを攻めるに当たって、現状を確認させてもらおうとしよう」

作戦会議のために集った士郎、ネロ、そしてサーヴァント達。エルメロイIII世が手に持つライターをもてあそびながら口を開く。「戦力的に此方の方が、現状は有利だ。確かにあちらもサーヴァントの召喚は可能だが、本来のマスターのように支配できていない。それ故、アレキサンダーのように、味方にならないものが現れることも考えられる。対して此方は、10以上のサーヴァントによるチームとなっている。よほどの相手が来ない限り、そうそう負けはないだろう」

「敵の情報はどの程度知っておるのだ？」

「アレキサンダーから貰った情報としては、敵の主な将軍はカエサル、カリギユラの二人。その上に彼の方と呼ばれる存在がいるらしいが、詳しくは知らん。あとは兵として、シャドウサーヴァントを多数保有しているらしいな」

「敵の宮廷魔術師のことは聞いていないか？」

「ふむ……大きな帽子をかぶり、狂気的な笑みをする男、としか聞いていないな」

その言葉に、思わず士郎とマシュは顔を見合わせる。その特徴は、自分たちの探している相手のそれと一致する。やはりこの時代にいるのだろうか。レフ・ライノールが。

「荆軻はまだ戻らぬか……まさか連合に」

「いや、それはない。荆軻達というジャンヌとリリイとはパスが繋がっている。もし消滅していたら、俺が気づかないはずがない」

カルデアのシステムを経由してとはいえ、士郎と二人は紛れもなくマスターとサーヴァント。離れていても通じ合っている。何度か話を試してみたものの、遠すぎるのか余裕がないのか、どちらの反応もないが、少なくともこの特異点にはまだいるはずだ。

「複数のサーヴァントとの契約か……全く、カルデアの技術とは恐ろしいものだな」

感心したような呟きを漏らすエルメロイIII世。自分が聖杯戦争に参加した時からすれば、考えられないことだ。

「さて、私から言うことがあるとするならば、敵陣を攻めるならば、早いに越したことはない。先も言ったように、敵は次々にサーヴァントを召喚できる。全てが敵戦力になるとは限らないが、時間が経てば経つほど、敵は強力になる。やるならば、すぐに攻めた方がいい」

「今は荊軻、ジャンヌ、リリイ、スパルタクス、そして呂布が離脱しているから、こっちの戦力は少ない……それでもか?」

「そうだ。恐らく敵は聖杯を所持しているとみていい。それを使い何をするかまでは想像できないが、恐らくそれだけでこの戦いの勝敗を左右するとみていい」

その言葉にやや空気が重くなる。ここまで強く断言されると、何が待ち構えているのか、それが気になってしまう。だが、

「うむ。であるならば、余は明日にでも攻めるべきだと思う」

なんてことないかのように言い切るネロ。それに同意するように、士郎とアーチャーが頷く。

「スパルタクスと呂布が戻るかどうか不確定である以上、私もそれが最善だと思う。なに、今まで副官として首都にずっといたのだ。彼らのぶんまで、私が戦うとしよう」

「俺から念話を飛ばしておく。リリイ達ならきつと後から合流してくれるさ。それに、敵の宮廷魔術師には用がある。また何かする前に、絶対に止めてみせる」

他のサーヴァント達からも特に反対意見はなく、明日の朝、決戦へと向かうことが決まった。

「待つてろよ、レフ」

「ふん。アレキサンダーがやられたか。やはりサーヴァントも所詮人か」

魔法陣の前に立ち、苛立った様子の男。紳士的な服装はこの時代にはあまりにも不釣り合いだ。

「まあいい。間もなく準備が整う。そうすればこの時代の焼却など、容易いことだ」

部屋にはもう一人、大きな身体を持つ男がいる。特に返事をするでもなく、話を聞いている。

「所詮サーヴァント風情に、我らを止められんさ。なあ、神祖殿。つと、そちらも今はサーヴァントだったな」

ニヤリと口元を醜悪な笑みに歪めながら、男は魔法陣を眺める。

「人類最後のマスターよ。己が無力さを嘆きながら、滅ぶがいい」

神祖、降臨

響き渡るのは剣の激突、雄叫び、叫び、そして悲鳴。
充滿する血と鉄と土の匂い。

「うむ、要するに決戦である！」

敵兵を斬り伏せながら、ネロが声高々に胸を張る。

連合首都へと攻め込むことに決めたネロ達正規ローマ軍。最後の決戦ということもあり、兵もサーヴァントも戦いに気合がこもっている。

一刻も早く戦いに終止符を打つ為、そしてレフ・ライノールを倒す為、衛宮士郎もまた、剣を振るう。隣に並び立つマシユが、士郎への攻撃を防ぎ、その上から剣や矢が敵を仕留める。

「先輩、戦況はこちらが大分有利です」

「ああ。敵側ももうサーヴァントがそんなにいないようだな」

複数体送り込まれたシャドウサーヴァントも、正しく現界したサーヴァント達の敵ではなく、瞬く間に消滅させられていく。このまま一気に本拠地を叩ける。そう士郎達が確信したその時、その男は現れた。

遠くからでもわかる、あれはサーヴァントだと。それだけなら大して動じはしない。そう、ただのサーヴァントそれだけならば。士郎が驚愕したのは、そのステータス。全てにおいて高いステータスを誇っている。受肉して数年経っていたとはいえ、それはかつて対峙したあの英雄王と比較しても遜色のない、まさにトップクラスのサーヴァント。

「……勇ましき者よ」

彼は叫びはしない。怒鳴りもしない。ただそっと、呟くように口を開いただけ。だというのに、それなりの距離が開いているはずの士郎の耳にも、その声は届いた。

「それでこそ、当代のローマを統べる者……ネロ……勇ましく同時に愛らしく、そして美しい」

「ぬっ」

ネロが身構えるように剣を握るが、急にその腕から力が抜けるかの

ように、剣の切っ先が地面を向く。瞳は見開かれ、驚愕や不安、様々な感情が入り乱れている。

「ネロ?」

「いや、まさか……あり得ぬ。いや、あり得て欲しくなかった……」

「おいで。全てのローマがお前を愛している。私に帰るのだ」^{ローマ}

「あれは……あの御方こそ……ローマだ」

「ローマ?」

「いつもは自分こそローマと胸を張っていたネロさんが?」

「……まさか、そういうことなのか?」

「わかっているのだろう、愛子よ。連合帝国なるものの首魁、それは私^{ローマ}だ。許す、お前の全てを許してみせよう。お前も連なるのだ」

「先輩?何かわかったのですか?」

「カエサル、そしてネロ。ローマの皇帝である二人がああ御方とまで呼ぶ相手。そして奴がローマと言うなら、それは紛れも無い建国の王。つまり、」

「うむ……あれは我らの、ローマの父……神祖、ロムルス!」

――――
神祖ロムルス。

連合ローマ帝国の最後にして最高。

歴代皇帝の最初にして最上。

ただそこに立ち、ネロに向けて手を差し伸べているだけだというのに、まるで気を抜けない。今までのサーヴァントとは別格。士郎は今まで以上に警戒している。

「余は……でも、あの御方が、呼ぶというのか……余を」

ローマ皇帝であれば誰であれ、この男には頭が上がらない。

例えるならば、ネロ達は枝だ。ローマを統治し、発展させ、木を大きく育てていく。だが彼は違う。彼は木そのものだ。全てを築き、全てを包み、全てを支える巨大な木。

その相手を目の前に、ネロは戸惑い、戦意が見られない。

「さあ」

ロムルスの声がさらに響く。ローマ兵の中には、その様子や雰囲気

から、その男の言葉に不思議な強制力を感じている者もいる。

ネロが剣を握っていない震える手を、そつとロムルスの方向へ元あげようとして、

突如、ロムルスの周囲を激しい炎が取り囲んだ。

ハツとするネロ。見覚えのある炎、それが湧き出た方向を見ると、5つの影がそこに立っている。一際目につくのは一人の掲げる旗。黒い竜が描かれた旗は、彼女の別称を強く表している。

「少し遅れただけで置いてけぼりですか。全く、私の扱いがなっていないんじゃないかしら？」

「まあまあジャンヌさん。シロウ達にだって事情があつたのでしようし」

「何はともあれ、合流できたことを喜ぶとしようではないか。幸い、無駄足というわけではないらしいしな」

唇を歪めた、ある意味彼女らしい笑顔のジャンヌ。その隣にはリイと荊軻が立っている。5人で来たところを見ると、すっかりバーサーカー組を連れてくることには成功したらしい。もつとも、既にその二人は近くにいた敵兵めがけて攻撃を仕掛けに行ってしまったのだが。

「少し目を離したらこれか……私は二人につこう。そちらは任せる」

バーサーカー組を追いかける荊軻。ジャンヌとリイが改めてロムルスと向き合う。

「あなたが連合のリーダー、のようですね」

「いかにも。私こそ、ローマだ」

？とはてなマークがリイの頭に浮かんでいる。ジャンヌはとうと、

「またこの感じですか？ローマにはまともに喋るサーヴァントはいないのでしょうか？頭が痛くなってきましたね」

口調こそ丁寧っぽいが、もう士郎にはそれが爆発しそうな苛立ちをなんとか抑え、隠そうとしているのだとわかる。というか、青筋が浮かんでいることから見て、割と本気で苛立っているようだ。

「ネロを迎えに来たつもりだったが、まだ時間が必要なようだ。よい、

私は待つとしよう。決断したならば来るがいい、愛子ネロよ」

周囲を取り囲んでいた炎を打ち消すかのように、地面から城壁のようなものが湧き出る。炎が消え、城壁も役目を果たしたと言わんばかりに消えていくと、そこには既に、ロムルスの姿はなかった。

「なるほど。敵がローマ神祖とはな」

ネロ用の部屋にて、ネロが椅子に腰掛けている。隣に立っているのはアーチャー。士郎達の持つて来ていた紅茶を手早く用意し、ネロの前に差し出す。少し休みたいと士郎達に告げ、ネロは副将にして右腕のアーチャーだけを連れ、部屋にこもった。

「すまぬ」

「気にするな。私が勝手にしただけだ」

紅茶を一口飲んでから、小さく溜息をつくネロ。ローマ兵や他の客将の前では、とても見せられない疲れ果てたような姿。ただ、自分でもわからないが、アーチャーならば問題はない、そんな気がしていた。

ロムルスが一度撤退した後、連合ローマ帝国首都に最も近い町は、正規ローマ軍が攻め落とすことに成功した。敵の本拠地は既に目と鼻の先。本来喜ばしいことであるはずなのに、ネロの表情は明るいはとても言えない。

「わかつていると思うが、ネロ。彼もまたこの時代に存在してはならない、召喚されてしまった招かれざる客だ。この時代の修復、ひいては人理救済の為には、例え誰であろうと倒さなければならぬ」

「アーチャーよ、心配せずともよい。余も、それはわかつておる……ただ、尊敬、いや敬愛していた相手と戦わなければならないというのは、中々に難しいことであるな」

「……そうだな」

なんとなく、アーチャーにはその気持ちがかかる。

かつてともに戦い、その強さに憧れた彼女。その相手と、よもや聖杯戦争で、それも敵同士として出会うことになるとは、夢にも思っていなかった。

本来サーヴァント同士は敵同士。彼女もそうやって、自分に攻撃を

仕掛けて来た。皮肉にもあの少年が運命の出会いを果たしたその夜に、自分は運命の再会を、割と悪い方向で果たすこととなったのだ。

ただ……

「ネロ。私はこんなことを言えるほど大層な者では無いのだが、それでも君に言っておきたいことがある」

「む？……申してみよ」

「例えどれほどの者が君の前に敵として立とうと、今のローマを築いているのは君だ。例え君の叔父上だろうと、過去の大王だろうと、建国の皇帝だろうと。今の君を否定していいはずがない。自信を持って、ネロ・クラウディウス。今は君こそがローマなのだろう？」

「……アーチャー」

「何かね？」

「心が落ち着く。紅茶とやら、もう一杯もらえるか？」

「了解した」

「ネロさん、大丈夫でしょうか？」

大きめの部屋、士郎達客将達が集まっていた。因みに、バーサーカー組は別室で待機してもらっているが、それでも総勢10名もいると、どこか狭く感じてしまう。

リリイが心配げに口を開くと、ジャンヌが鼻で笑う。

「心配するだけ無駄よ。結局戦う相手というだけのことなのだから。彼女にその覚悟がないとしても、他の誰かが始末すればいいだけのことでしょう？」

「確かにジャンヌさんの言う通りです。でも、ネロさんの気持ちや想像すると、とても辛いと思います。例えば、私が先輩と戦わないといけない、なんてことになったら……」

「うーん。このまま調子が乗らないと兵に影響が出ちゃうし、ネロの話聞いてあげたいけど、」

「あの紅いアーチャーがいるんでしょう？なら大丈夫よ。あれはデリカシーないところもあるけど、タラシの気質があるから」

「ぐはっ!？」

「ぬ？どうしたのだご主人？もしや腹が減って動けないのか？」

「あ、いや、大丈夫だ。ちよつと思わぬ方向から飛び火して来ただけで」

「いずれにせよ、倒すしかないのであれば倒すだけ、そういうことなのだろう」

「うふふ。中々どうして、あの可愛い皇帝も見ていて飽きないわね。この運命に彼女がどう抗うのか、見ものね」

「あまり時間はないため、出来れば早く立ち直ってもらいたいものだな。でなければ、私の策も、早めに攻撃を仕掛けたことも、意味がなくなってしまう」

「うむ。ならば攻め続けるしか無いな！」

ドアをあげ放ち、ネロとアーチャーが部屋に入ってくる。先ほどまでの沈んだ様子と違い、いつもの、いやいつも以上に自信満々なネロからは、戦いへの不安や迷いは感じ取れない。

「ほら見なさい、あたしの言った通りでしょ？」

「先輩？どうかしましたか？」

「いや、なんでもない……うん」

「む、んん？」

乾いた笑みを浮かべている士郎に、何やら誇らしげなエリザベト。何やら自分のあずかり知らぬところで、酷い誤解を招かれているような気がするアーチャーだった。

決着の宮殿

「この道で間違い無いのだな、荊軻よ」

「無論だ。案ずることはない。私が皇帝の元へと送りとどけよう」

場内を進むのは荊軻、ネロ、士郎、マシユ、そしてエリザベートの5人。

立ち直ったネロの指揮のもと、正規ローマ軍は一気に連合ローマ首都へと攻め込んだ。將軍たちも戻り、完全な最高戦力を整えた上での進撃。もはや止められるものではなかった。

最後に残るは連合の宮殿。おそらく意図的にであろう、ネロの住んでいたそれとよく似ている。敵も最後の戦力、兵やゴーレム、キメラ、そして大量のシャドウサーヴァントまでもを待機させ、正規ローマ軍を迎えた打った。

戦いに終止符を打つべく、敵側の最後の皇帝を倒すべしとエルメロイII世が判断した。多すぎると目立つため、最小の人員での突入を提案したのだった。

そこで選ばれたのがアサシンの荊軻、決着を自分の手で行きたいというネロ、そのサーヴァントとして行くと決めていたエリザベート、そしてレフ・ライノールを見つけるチャンスと考えた士郎とマシユだった。

『敵の軍勢は我々が引きつけよう。何、数こそ多いが、サーヴァントの敵ではないさ。お前たちは神祖ロムルスを倒せ。それでこの戦争は終わる』

そう言つて、エルメロイII世は彼らを送り出した。

場内にわずかに残っていた敵軍の残りを倒しながら、士郎たちはどんどん奥へと進んで行く。通路の奥には大きめの扉、ゴクリと喉を鳴らしたのは誰か。

「行くぞ」

ネロの言葉に、皆が頷く。ドアを押し開け、彼らはその部屋の中に入ってしまった。

「……来たか、ローマの愛子よ」

男は玉座に座して彼らを出迎えた。まるで来ることを最初から予想していたかのように、驚く気配が全くない。

「神祖、ロムルス……」

「いい輝きだ。大きな迷いが晴れ、より純度の高く、強い輝きだ。答えは得たようだな。今一度問おう、皇帝よ。私の元ローマに來い。さすればお前は誰よりも愛される皇帝となろう」

立ち上がり、その両手を広げる。まるで子供に飛び込んで来いと誘う親のような動作で、ロムルスはネロを誘う。

神祖ロムルス。ローマの建国王にして、皇帝の中の皇帝。真のローマとして皇帝の上に君臨せし者。その者の誘いに対し、ネロは、

「行かぬ！例え過去の大王であろうと、肉親であろうと、ローマの起源であろうとも、今の皇帝は余只一人！過去、現在、未来であろうと、ローマ帝国五代目皇帝は、このネロ・クラウディウスに他ならぬ！例え何人であろうと、その余が統治するローマを乱すのであれば、余が許さん。故に神祖ロムルスよ、余はそなたと戦おう！」

真正面から誘いを断つてみせた。一切の迷いなく、揺るぎない決意を胸に、ネロは神祖、否、ローマの敵に刃を向ける。

「許すぞ、愛子よ。お前の思うローマのあり方、私ローマに示してみるがいい」

槍を手に取り、ロムルスが一步前に出る。それだけで圧力を感じる。圧倒的な存在感と、強烈なまでの威厳。その両脇には守護獣のように、他よりも一回りは大きいキメラが現れる。

「みな、余に力を貸せ。ここでローマを、余の正き統治を、取り戻す！」

「行くわよー」

「最後の皇帝の首、貰い受けるでしょう」

「先輩、戦闘開始します」

「ああ。投影、開始」

「ぐっ！」

キメラの一撃を受け流しながら、士郎が一步後ろに下がる。鋭い爪による一撃は、幾たびかの打ち合いを経ていたとはいえ、士郎の手に持つ干将・莫邪を砕くことに成功した。

「なんてやつらだ」

ジャンヌが圧倒した、あの島で出会った神代の怪物と比べると怪物としての質は劣っているものの、流石に強化されているだけあって、これまでのキメラよりもはるかに強力な相手になっている。体格が大きくなり、パワーが上がっているのは当然のこと。それに加えて今までとは比べ物にならないほど素早く動き回り、更には魔力弾という遠距離攻撃まで備わっている。

「先輩、大丈夫ですか？」

「ああ」

もう一体のキメラと戦っていたマシユが、相手の攻撃を受け止めた反動で士郎の元まで後退してくる。その隣に短剣を構えた荊軻が並び立つ。

「流石に連合のリーダー。そう簡単に突破させてはくれぬか」

「ネロさんとエリザベートさんの二人だけで大丈夫でしょうか？」

「ああ。でも、今はこいつらを倒すことを考えたほうがいいな」

牙をむきだし、キメラたちがうなり声をあげている。ギラギラ輝いてる瞳は、士郎たちをしつかりとらえている。こいつらにこれだけ苦戦を強いられているのだ。あの時ジャンヌがいなかったらと思うと、ぞつとする。

「さてマスター、どうする？真正面から戦うのでは些か分が悪いように見えるが」

「三人で連携しながら攻撃しよう。マシユ、負担がかかるかもしれないけど、前衛で敵を引き付けてくれ。俺は弓や剣を使って援護する。荊軻は隙を見つけて、とどめを刺してくれ」

「了解した。どんなわずかな隙も逃さぬよう、気を張っていよう」

「マシユ、いけるか？」

「問題ありません。任せてください」

再び干将・莫邪を投影し、構える士郎。マシユと視線を合らし、そのままキメラに向かって駆けだした。

「たあっ！」

「このっ！」

ネロとエリザベートの息の合ったコンビネーション攻撃が繰り出される。カリギュラを仕留めた二人の連携はそんじよそこらのコンビとは比べ物にならない。だというのに、ロムルスはその連携攻撃を片手で振るう槍だけで完全に防ぎきっている。

「ロムス！」

「ぬう!？」

「きやつ」

連携のわずかな隙をついたロムルス。横なぎに振るわれた槍の一撃が、防御していたはずの二人をあっさりと弾き飛ばす。膝をつく二人を、ロムルスは涼しげな顔で見つめる。

「うむう、さすがは神祖……余らの連携でようやく互角……否、むしろそれでも押されておる」

「ほんと出鱈目ね」

「当然。私は始まり。私は至高。私こそが、ローマである」

自信満々に……いや、これは自信ではない。自信などというちんけなものではない。

ロムルスはただ事実を述べているだけ。

皇帝であれば誰もが反論することさえできない、純然たる事実。

しかしそれでも抗わなければならない。

今の皇帝として。未来を作っていく皇帝として。

「余は、負けられないのだ！」

「そのいきね。あたしだって、負けられないわね。まだ二人でのリサイタルができていないもの」

「うむ。盛大なものでしょうぞ。ローマの全てが、我らを讃えるであらう」

「当然よ。最強のアイドルユニットなんだもの！」

笑顔を向けあいながら、ネロとエリザベートが武器を手に立ち上がる。その様子を見たロムルスの口元に笑みが浮かんだのには、誰も気づくことができなかつた。

「行くぞー！」

「任せてー！」

駆け出すネロとエリザベート。闘志は折れず、むしろ強い眼差しで敵を見据えている。ロムルスが手に持つ槍を振るい二人を迎え撃つ。再び、彼女らは激しい戦闘に突入する。

—————

「マシユー！」

「はい！仮想宝具 疑似展開／人理の礎！」

同時に飛びかかってくるキメラの攻撃を、巨大な壁が阻む。マシユの宝具による防御を、二体のキメラは突破できない。

「停止解凍、全投影連続層写！」

キメラの真上から、土郎が作り出した剣が降り注ぐ。一体は逃れたものの、もう一体は四肢を貫かれ、身動きが取れなくなっている。

「荊軻ー！」

「殺つた！」

音もなく忍び寄った荊軻の短剣がキメラの喉を切り裂いた。鮮血を首から噴き出しながら、ゆっくりとキメラの巨体が崩れ落ちる。

「まずは一匹」

「畳み掛けますー！」

仲間の死にも怯まず迫りくるキメラを、マシユの渾身の一撃が吹き飛ばす。着実に戦闘に慣れてきているマシユ。土郎の指示がなくても、即座に対応できるようになっっている。

追撃のために、飛び上がり、盾を振り下ろすマシユ。それをかわし、キメラが反撃しようとするも、マシユに気が向いているその隙に、反対側から荊軻が切りつける。致命傷とはならないものの、キメラの気を散らすには十分だった。

「二人とも、下がれ！」

士郎の声に、マシユと荊軻がキメラから距離を取る。キメラが声の方向へ大口を開けて飛びかかる。と、その口の中に、士郎の投げつけた剣が飛び込んだ。

「弾けるー！」

突然、キメラの体を突き破り、幾つもの刃が飛び出してくる。剣自体はランクが低く、それ単体では体内を刺したとて、到底キメラを倒せるものではない。しかし、剣に付与されたのは分裂する性質。体内に放り込まれたその剣が、そこで分裂し、キメラの体内から突き破る。「鮮やかだな。しかし、いささかやりすぎにも見えるが。マシユには刺激が強すぎるのではないか？」

「あ。そうだな……ごめん」

「いえ、そんなことはないです。私は先輩のサーヴァントですから。これくらいで」

「……無理はしないでくれよ。マシユは俺のサーヴァントだけど、だからといって何でも俺のすることに意見しないってことじゃないんだからな。マシユが嫌だっと思うなら、ちゃんと伝えて欲しい」

「……わかりました。でも、問題はありませんから」

「？……なら、いいんだけどさ」

マシユの言葉にどこか違和感を感じた士郎。けれども追求している暇はない。まだ後一人、大物が残っているのだから。

「はあっ、はあっ」

「っもう！本当に強いわね」

「ここまでだ、愛子よ。お前の愛では、私の愛は超えられぬ。最後に、お前に真なるローマを見せるとしよう」

ロムルスが手に持っていた槍を地面に突き刺す。莫大な魔力を集中させているその様子から、エリザベートは察した。あれは宝具だ。ローマ神祖と呼ばれる男の切り札。

「まづっ、ネロー！」

「遅い。すべて、すべて、我が槍にこそ通ず」「――

マグナ・ウォルイツセ・マグヌム
すべては我が槍に通ずる！」

国造りの槍と謳われる宝具。それを起点に、ローマの誕生から滅亡までを見守り続けたという大樹が顕現する。それは怒涛の奔流をもつてして敵を押し流す、過去・現在・未来、帝都ローマの全てを相手にぶつけるもの。皇帝であろうと、否、皇帝であるが故に、この宝具は絶大な威力となる。

迫りくる宝具の一撃を前に、ネロとエリザベートは避けない。いや、その奔流はそもそも逃れられるものでもない。

「くっ！」

「な、エリザベート！何をしておる！」

せめて今を生きるネロだけでも、そんな思いで、エリザベートがネロを庇うように前に立つ。自分はサーヴァント、負けたとて、それは死ぬわけではなく座に戻るだけ。この戦いに勝つために、絶対にネロは欠けてはいけない。だから、

「今ここで、あんたネロに死なれるわけにはいかないのよ！」

地面を踏みしめ、敵を見つめるエリザベート。槍を構え、守りの態勢に入る。

「勝つてよね、マスターネロ」

宝具が、エリザベートの元へと、辿り着いた。

ローマを示す時

(ここで終わりね……まあ、悪くはない経験、だったわね)

押し寄せてくる怒涛の奔流の前に立ちながら、エリザベートは諦観にも似た気持ちで、槍で防御の姿勢をとる。

強く目を閉じ、衝撃に備えていたエリザベート。

しかし、その衝撃波やって来ない。

耳に届くのは押し寄せる奔流の響き。宝具が停止したわけでも、消えたわけでもない。ならば何故？彼女が目を開く。

目に入るのは二つの背中。かたや黒いバトルスーツのような服の少女。かたや白の上着に、黒いズボン。肩を並べ、二つの盾が巨大な奔流を受け止めている。

「仔イヌ……それに仔ジカ……」

「間に合って良かったです」

「っ、荊軻！」

「うむ、任されるとしよう」

音もなく隣に現れた荊軻に、エリザベートが驚く。荊軻はエリザベートに肩を貸し、いつの間にか少し離れた場所に移動させられていたネロの元まで連れられる。側にエリザベートが来るや、ネロが彼女の両肩を掴む。

「エリザベート！なんともないか!？」

「え、ええ」

「そうか……愚か者！余を庇うなどと、何をやっておるのだ」

ガバっと抱きついて来るネロに、エリザベートが目をパチクリさせる。現状、士郎とマッシュが防いでいるとはいえ、敵の宝具が迫っている中で何をやっているんだとツツコミが入れるところだが、ネロの話に何か重要性があると感じ取ったのか、荊軻は今は見守ることにした。

「ちよっ、何何!?!どうしたのよ?？」

「そなたが居なくなったら、余が困る！」

「うえっ!?!」

慌ててネロの拘束から逃れようとしたエリザベートだったが、ネロの瞳が濡れているのを見て動きが止まる。

「余と共に戦ってくれるのであろう？余とユニットを組んで、共に歌うと決めたのであろう？その約束を反故にしようとするなど、余が許すわけなからう、馬鹿者が！」

「ネロ……」

「余はお主のマスターだったな。ならば命令するぞ！余と共に、最後まで戦え！余の許しなく勝手に消えるなど、許さぬ！そして、余と共に歌う約束は、きつちり果たせ！余のサーヴァントであるならば、この命令、しかと守ってもらおうぞ！」

令呪が彼女たちを繋いでいたわけじゃない。命令の数を意図して数えたわけじゃない。でも、ネロの命令はきつかり三つ。サーヴァントとマスターの間にある絶対命令権、その数と全く同じだった。

必死なその叫びにも似た命令は、命令としてはどこか幼稚で、なんともくだらなくも聞こえて、強制力なんてとてもないようなものだったけれども、その真つ直ぐな叫びは、しっかりとサーヴァントエリザベートの胸に刻まれる。

「わかったわ……そうだったわよね。一緒に歌うって、約束したんだもの！」

「うむ！」

「ぐっ！っ、なんとか、持ち直したみたいだな」

「はい、っ！でも、先輩、もう持ちません！」

攻撃の手を緩めることなく押し寄せ続けるロムルスの宝具。それは確実に士郎とマシユの防御を削っている。

「ネロ、これを！」

空いている方の手で、士郎がネロに向けて何かを投げる。ネロが受け取ると、それから強い力を感じる。手のひらに収まる大きさの、宝石が一つ。

「シロウ、これは？」

「っ、俺の師匠から貰ったものだ。その魔力、お前なら使えるんだろ

？」

今はまだ、本人の知らぬこと。しかしその先にて、ネロが手にするスキル、皇帝特権。本来持ち得ないものを短時間だけとはいえ獲得することができ、特殊中の特殊。それもランクはEXと規格外。生前の逸話を元に行っているのであれば、今の彼女にも当てはまる。

「過去だとか、未来だとか、そんなのは関係ない。あいつに見せてやれ！お前の、今の、正しいローマを！」

短い言葉の中に、ネロは確かに感じた。士郎の言うことは、まるでアーチャーのと同じだと。一度ならず二度までも、誰かに肯定してもらうことに助けられるとは。

「うむー任せるがよいー！」

ギユツと宝石を握りしめ、ネロが剣を地面に突き刺す。必要なのは相応の魔力。あとは彼女が築き上げるのみ。

思い描くのはとある建物の設計。

皇帝のためのみの晴れ舞台。

故に他の追随は許さず、ここでは自分が支配する。

ローマに築きし栄えある劇場。

黄金深紅の大劇場。

「神祖ロムルス、我が才を見よ！ 万雷の喝采を聞け！」

「しかしして讚えよ！ 黄金の劇場を！」

「門を開け、アエストゥス・ドムス・アウレア招き蕩う黄金劇場！」

バラの花びらが舞い、世界が紅に染まる。

ネロを起点として、迫り来る奔流をも包み込み、新たな舞台が作り上げられる。

「……」

周囲の変化に、ロムルスが初めて驚きの表情を見せる。

三つの剣が交わる、まるで三銃士のそれにも見える紋章。

絢爛豪華で雄麗。眩しく、激しく、美しく。

造られしは彼女の黄金劇場。

舞台が照らすのは只一人。

その場所を作りし唯一の皇帝。

「シロウ、マシユよ！退がるがよい！ここは、余の独擅場ぞ！」

「わかった。マシユ、3カウントだ！」

「了解です」

「1」

「2」

「3！」

合図と同時に二人が防御を解除しその場を飛び退く。止めるものの居なくなつた奔流が、再びネロたち目掛けて押し寄せせる。

「これぞ、余の示すローマである！受けるがよい！」

ラウス・セント・クラウディウス
「童女謳う華の帝政！」

黄金の劇場の力を身に受け、炎溢れる剣をネロが振るう。飛ぶ斬撃の如く、炎が刃の形となつて迫り来る樹木の波を迎え撃つ。

渾身の力を込めたネロの一撃は、樹木を切り裂き、燃やし尽くす。その勢いは止まることを知らず、ロムルスへと向かい続ける。

「それがお前のローマか……ふっ」

小さく呟かれた言葉はネロや士郎たちには聞こえなかつた。迫り来る炎の斬撃を止めるべく、ロムルスが槍を地面から抜き、防御する。槍で炎を受け止めるロムルス。拮抗ののち、ロムルスが両手で槍を持ち、全力で振り抜く。その本気の大振りは、炎の斬撃を切り裂いた。しかしその大振りこそ、ネロの欲したものだつた。

「ぬー！」

切り裂かれた炎の後ろから、燃える剣の切っ先が迫る。全力の大振りで先の攻撃を防いだロムルスだったが、それによつて生じる隙をこそ、ネロは狙つたのだ。

彼女の気持ちの高ぶりに呼応するかのようには、炎の激しさも明るさも最高潮に達している。

その炎は覚悟の炎。

瞳に宿りし信念の炎。

それを真正面から突きつけられ、ロムルスは――

——笑った。

赤い刃がその体を貫いたのは、そのすぐ後のことだった。

ポタリ——ポタリ——と。

赤い雫が剣を伝い、地面に落ちる。

心臓に当たる場所は刃が貫き、既に致命傷となっている。

後はもう消えるのみ、男は敗北したのだ。

にも関わらず、その表情を見た敵は、心底この男には、この御方には、到底かなわないと思わされる。

あるのは優しい笑み、愛しい子を見るような眼差し。

そのまま男が腕を持ち上げ、ネロの頭にその手を置いた。

けれどそれは攻撃のためではなく、賞賛のため。

恨みを持つてではなく愛情を持つて。

残された最後の力と時間を使った、男の最後の言葉。

「良い——それで良い、愛子よ。その輝きを、ゆめ忘れるな」
そう言つて男は消える。

この世に今一度現れた、仮初めの体と仮初めの命。

ただそれでも、その魂だけはまごう事なき男のもの。

己が作りし、愛すべき子^{ロマ}。男は、ただそのためだけに、その与えられた仮初めの時間を使い、そして今、使い切った。

「霊基の消滅を確認。サーヴァント、ランサー。神祖ロムルス、消滅しました」

ネロの展開していた劇場が消え、再び宮殿内に彼らは立っている。改めて確認をしたマシユの報告を受け、荊軻たちがほつと息を吐く。張りつめていた緊張が、ようやく解かれて——

「消滅したか。やはり神に至ったものとはいえ、所詮は人間、所詮はサーヴァント。あのセイバー同様、無駄なことを」

解けるかと思われた緊張は、響いた声によつて再び、否、それ以上に強くなる。特にこの声に聞き覚えのある、士郎とマシユは。

現れるのはシルクハットの男。この時代にはとても合わないキチンとした服装、そして狂気に歪んだ笑顔。

「ようやく見つけた……レフ！」

「ふん。久しぶりだな、衛宮士郎。そしてデミ・サーヴ^{出来損ない}の、マシュ・キリエライト。まさかここまでしぶとく生き残るとはな」

カルデアの事件を引き起こし、所長、オルガマリーを殺した張本人。レフ・ライノール・フラウロスが、玉座に座りながら、彼らを眺めていた。

レフ・ライノールとは

「シロウ、マシユ。あれは？」

「私たちが探していた魔術師です。そして、この特異点を生み出した元凶だと推測されます」

玉座に座ったまま、レフはその感触を確かめるかのように肘掛の部分を指で撫でる。その表情はひどく退屈そうに見え、ひどく怒っているようにも見える。

「ふん。過去の皇帝共であれば、この時代の攻略もたやすいことだと思っていたが、神祖殿はその気になってくれなかったのだな。新たなローマを作ること時代崩壊を招くという、回りくどい手を使わざるを得なかった」

特異点となった冬木同様、ロムルスもまた、この時代を維持しようとしていたのだろう。あの時、最後にネロに告げた言葉は、セイバーが士郎にくれたものと同じ、激励と肯定、そして彼もまた、ネロに託したのだ。ローマ^{世界}の未来を。

「まあ、サーヴァントも所詮は使い魔の類。替えなど、いくらでも用意できる。そういう意味では、貴様らに感謝しなくてはいけないな。面倒な奴を消してくれたことに、な」

ギリツ、と士郎の口から音が漏れる。その表情は今までにない程の怒り。

目の前の男は、英霊をなんだと思っている。まるで捨て駒のように、使い捨ての道具のように、この男は笑顔で語っている。ふざけるな。

サーヴァントと呼ばれるものは、大なり小なり、人々の願いや信仰を集めたり、その功績を称えられたりと、その生涯の結果として英霊となったものだ。

中には必ずしも褒められたものではない、大量殺人による反英霊という存在もいるが、その彼らの逸話もまた語り継がれ、人々の記憶に深く刻まれている。

様々な意味で人を超えた、超えることを求められたものたち。それ

が英霊だ。その彼らを、クラスという枠に押し込め、現界させたのがサーヴァント。マスターとサーヴァントは対等な関係、どちらがいなくても聖杯戦争は勝ち残れない。

本来ならば自分たちよりも遥かに格上の存在である相手。それを使役することがどれほどの意味を持つのか。士郎は自分の剣として戦うと言ってくれた彼女のことを思い出す。あれほどまでに気高く、正しく、美しい存在。その彼女と肩を並べ戦う、それはきつと本当に光栄なことなのだ。

「ふざけるなよ、レフ。サーヴァントを、英霊をなんだと思ってる！」
「言っただろう？ただの使い魔だと。私の手には聖杯があり、その気になればいくらでも呼び出すことができる。ただの使い捨ての兵士に過ぎないのだよ」

「貴様！何処まで余の先代の皇帝たちを侮辱するつもりだ！それ以上は許さぬぞ！」

「あたしも怒ってるんだからね。サーヴァントとして、戦士としての誇りとかは、正直あまりないかもしれないけど、あんたの言い分には怒りしかないわ」

「貴様ごときの首級には毛ほども興味はないが、その首、私が貰い受けてやろう。それが、全ての英霊のためにもなるだろうしな」

本気の怒りを見せ、ネロたちが武器をレフに向ける。サーヴァントによる強い殺気を受けながらも、レフは笑みを絶やさない。否、むしろその笑みはさらに深くなり、玉座に座ったまま、肩を震わせ笑っている。

「クハッ、クハハハ……思い上がるなよ。たかが霊長最高峰の存在ごときが、私を倒せるつもりかね」

「倒します！人理修復のためにも、この時代を守るためにも！」

マシユが盾を構え、戦闘態勢に入る。士郎も剣を構え、レフを睨みつける。

「どうする？5対1だ。降伏するなら今の内だぞ」

「ふん。たかだか5人。私の敵ではない。それに、必要な準備は既に

整っている」

レフが左手をかざすと、その手の上に金色の盃が現れる。聖杯が、レフの願いに応えるように魔力を巡らす。玉座の足元近くに描かれていたのは魔法陣。その魔法陣から溢れる光が、急速に回り出し収束する。

「まさか、新たなサーヴァントの召喚を!?!」

「その通りだ、マシユ。しかし今度のは君たちにもどうしようもないぞ。その前では、ローマを守ることなど無意味。力の無さを嘆きながら、この時代の消滅を見ているがいい!」

光の収束が終わり、人の形へとなっていく。

褐色の肌に、華奢な体。頭を覆う美しいヴェール。その姿はとても美しかった。けれども、それに不釣り合いに思えるほど異質な剣。纏う空気は、そう、何処か透明なもの。マシユの透き通るような透明さと違う、空虚。

「クハハハ!止められるものなら止めてみせろ!文明を滅ぼすその一撃を!やれ、セイバーよ!」

「いいだろう……マルスと接続する」

レフの命令を受け、セイバーと呼ばれた謎のサーヴァントが剣の柄を天井、否、空に向ける。そこから放たれるは一条の光。感覚でわかる、あれはまずい。発動させたが最後、どうしようもない一撃。

「発射まで2秒」

「先輩!」

「くっ!」

マシユと士郎がサーヴァントを止めようと走り出す。

「無駄だ、間に合わんさ」

レフの笑みが深くなる。士郎が剣を投げつけようとする。それでも何処かわかっている。間に合わない。

「終わりだ、人類最後のマスターよ」

「いいや、間に合ったさ」

突然聞こえた低い声に、レフが驚きその方向を見る。聞き覚えのあ

るその声に、ネロや士郎もハツとする。

So as I pray,
「その体は、」

UNLIMITED BLADE WORKS
「きつと剣で出来ていた」

準備段階に入っていたセイバーの隣に、降り立った赤い影。その男が言葉を紡ぎ、魔術を発動する。地面から湧き出る炎が室内を照らし

——その影とセイバーの姿は消えていた。

「……(っ)は？」

気がつくと景色は一変していた。

天井だったはずの場所には、雲に覆われた空が広がる。異常なことに、その空には歯車が噛み合いながら浮かんでいる。

そして広がるのは荒野。無数の剣が突きただけの荒野は、自分の持つ空虚さにも何処か似ている。

「マルスとの接続が切れた？」

「すまないが、ここは外界からは隔離された、私の世界だ。ここから外の世界に干渉することはできんよ」

少し離れた場所に立つ男。褐色の肌に白髪、自分とよく似た特徴の男。けれども、彼の纏う赤は、自分と違う。

人の血が通っているような赤、機械ではなく一人の個。だというのに、彼もまた、自分のように機械的な存在、のような気がする。

「何故ここに連れてきた？」

「あのままでは、君によってこの時代の文明が破壊されかねないのでね。全力で止めさせてもらおうとしよう、破壊の大王よ」

僅かにセイバーの瞳が大きくなる。その呼び方、自分の真名を知っていないければ出てこないはず。

「私を知っているのか？」

「ああ、知っているとも。でなければ、あそこで君をこの世界に引き込むことはできなかつただろう」

「……なるほどな。だが私に与えられた役割は文明の破壊だ。その邪魔をするならば、お前も切らねばならない」

「そうなるとは思っていたさ」

赤い外套の男はいつの間にか両手に白と黒の夫婦剣を持っている。元より一戦交えるつもりだったようだ。

「ならば文明の前に、お前の世界から破壊しよう」

破壊の大王、彼女が剣を取り切つ先を向ける。その刺すような視線を受けながら、男は、アーチャーは、笑みを返す。

「では行くぞ、フン族の王よ。貴様が挑むのは無限の剣。臆せずしてかかってこい！」

—————

「ふむ。アーチャーは間に合ったようだな」

扉から聞こえる声。ネロが見ると、エルメロイⅠⅠ世を始めとする、彼女の客将たち。誰一人欠けることなく、ここまでやってきている。

「お待たせ。なんとか間に合ったみたいだね」

「残る圧制者は一人のみ。おお、叛逆の最後の幕開けだ。叛逆者たちよ、いざ参らん！」

「外の兵士も、皆キャットがコロツと料理してやったぞ。酒池肉林の大盤振る舞い。満足だったわん！」

「連合の兵隊さんたちも降伏してきました。私たちの勝利も間近です」

「当然ですね。マスター、モタモタしていないで、さっさと終わりにしましよう」

「みな、よくやってくれた」

「はい。あとは、レフ教授を倒すだけです」

サーヴァントの視線を一身に受けながらも、レフは動じない。それどころか考え込むように独り言をつぶやいている。

「霊基が消滅したわけではない、か。別の場所、あるいは別の空間に転移させたか。余計な真似を」

顔を歪め、舌打ちするレフ。

「どうする？頼みの綱もいなくなったぞ」

士郎が剣を向けながら問いかける。

「フハハッ、フツハハハハハ！」

狂ったように笑い出すレフ。

絶望的な状況について気をやられたかにも見える。

しかしその気はおかしくなっただけではない。

一瞬前と異なる、恐ろしいほどの圧力。

サーヴァントのそれを軽く上回る殺気、存在感。

幾多のサーヴァントと出会った士郎でさえ、その圧力に剣が震える。

武者震い？

違う、これは恐怖だ。

初めてバーサーカーと出会った時にも似ている。

圧倒的な相手に対する、恐怖心。

「仕方がない。下等な人間ごとき、私自ら手を下す必要もないと思っていたが……喜べ人間。私自ら相手をしてやろう」

玉座から立ち上がり、士郎たちのそばまで歩み寄るレフ。狂気的な笑顔は消え、冷静に士郎たちを見つめている。

「なんなんだ……お前は」

「前にも言ったと思うが、私はレフ・ライノール・フラウロス、そして72柱が1柱。貴様ら風と呼ぶなら、魔神柱」

「72の、魔神柱……だど？」

「さあ。勝負と行こうか、魔術使い。私に相手をしてもらえることを、光栄に思うがいい」

笑い声をあげながら、レフの姿が変化していく。

人の姿から、おぞましい怪物の姿に。

無数の瞳を持ち、体からは莫大な魔力が検知される。

その姿はジルが怪魔を集めて変貌したものより禍々しく、恐ろしい。

「なっ、これは!？」

『士郎くん、何があったんだい!? 突然とんでもない、バケモノ級の魔力反応が、って……これは!?!』

通信越しにロマニが驚愕する。カルデアの観測でも類を見ない魔

力量、それを持った敵が目の前にいる。

「奴はフラウロスと言ってた。それに、魔神柱だとも」

『なんだって!? そんなまさか、ありえない』

「ドクター、あれは一体なんなのですか？」

『もし奴の言っていることが本当なら……奴は人間じゃない』

「あいつは神と同じく、人間とは根本的に違う」

『神話に語られるような存在、正真正銘、本物の、』

『「悪魔だ」』

完全な変貌を遂げ、レフ、否、フラウロスが雄叫びをあげる。

第二特異点、場所はローマ。

その最後の戦いへの幕が上がる。

夢のジョイント・パフォーマンズ!?

剣突き立つ大地に、剣撃が鳴り響く。

セイバーの前に突き出していた虹色の刃の光が落ち着き、回転が収まる。彼女の背後にあつた剣の碎けた残りカスが、魔力の粒子となり消えていく。既に放った宝具は何回目なのかさえわからない。聖杯による無尽蔵な魔力によつて、彼女は宝具の使用回数に制限はない。それでも、

「まだ終わらないのか……いくつ破壊したかわからない。破壊しても尽きることはない剣……面倒だ。しかし、もう、勝てないのはわかっているだろう?」

静かに告げるセイバー。色鮮やかなその剣は、全く切れ味が落ちない。本人も無傷のまま、片手で剣を相手に向ける。

「確かにそうだな。だが、私には果たすべき役割があるのでね。それまでは倒れるわけにはいかないのだよ」

対する弓兵は片腕は血を流し、もう片方の手で肩を抑えている。既に打ち合つて何十、何百、何千回。碎かれた剣は幾つあつただろうか。それでもアーチャーは動くほうの手で新しい剣を握る。

「まだまだ付き合つてもらおうとしよう。私の身が果てるまではな」

ニヒルな笑みを浮かべながら、アーチャーが駆け出す。片手で握つた剣を振り、セイバーに斬りかかる。

再び鳴り渡る剣撃。

弓兵はボロボロになりながらも、勝利の為にその剣を振るい続ける。

――
宮殿内。

激しい爆発音に、響き渡る叫び声。

戦闘は激化の一途を辿る。

「ぐっ、がああっ!?!」

双剣を交差させ、守りの態勢を取っていたにも関わらず、その一撃

は士郎を軽々と吹き飛ばした。両手に構えていた剣は砕け、魔力の粒子に戻っていく。

地面に背中をぶつけ、そのまま暫く勢いを殺せずに滑ってしまふ。支給されたカルデアの制服は普通の服と比べても耐久力が高く、また、使用者を守るための身代わり効果の魔術を込められていたというのに、あちこちが擦り切れており、士郎の体にもダメージが着実に溜まってきている。

「先輩！大丈夫ですかっ!？」

士郎に迫る攻撃をなんとか全体重を盾に乗せることで弾きながら、マッシュが士郎のそばにくる。彼女も既に息が上がっていて、肩で息をしている。

「ああ、っ！マッシュは?！」

「はい。なんとか。ですが、このままでは……」

二人が視線を向ける先では、まだ戦闘が続いている。サーヴァント11人、そこにネロと士郎を加えているというのに、攻めきれない。それどころか、手数はこちらの方が多というのに、明らかに自分たちが劣勢なのが見てわかる。

魔神柱。恐ろしいまでの魔力量は伊達ではない。

どれほど攻撃を受けようと、とてもではないが効いているように見えないのだ。呂布とリリイが同時に魔神柱に斬りかかる。決して硬くはないその身体を二つの刃が容易く切り裂く。が、

「ダメです。また再生してます」

「なんなの、こいつ。不死身なの!?それにしたって面倒ね!」

ジャンヌのサポートで火力を上げたはずのリリイの攻撃でさえ、僅かに動きを止めることはできても、ダメージらしいものを与えるには至っていない。

「デタラメだな……あの狂ったキャスターの呼び出したものも相当だったけど、これはそれを上回るぞ」

舌打ちをしながら士郎の元に来たのはロード・エルメロイII世。彼の防御と攻撃、両方のサポートをみんなが得てなお、押し切れない。それほどまでに、魔神柱は手強かった。

それにしてもかつての聖杯戦争の話だろうか。自分の起源でもあるあの十年前の聖杯戦争、それにロード・エルメロイⅠⅠ世は参加していたという。この前の特異点で彼らのであつたキヤスターも狂っていたが、偶然にも似たような相手に出会っていたのだろうか。

「なあ、その時はどうやって倒したんだ？」

「その時のセイバーが対城宝具を持っていたからな。そいつの宝具で消し飛ばしてもらった」

やはりそうか……あの怪魔の集合体も同じような方法で、ようやく倒すことができたのだ。けれども、こいつはそれ以上の相手だ。同じ手を通じるだろうか。何より、

『無駄な足掻きをー』

「ふぎや!？」

「ぬうお!？」

「くうっ」

無数の瞳が輝き、周囲が爆発に包まれる。まさに接近攻撃を仕掛けようとしていたタママモキヤットとスパルタクスが爆風で飛ばされる。二人を守るためにブーディカが宝具を発動させていたにも関わらず、その防御をたやすく上回っている。

「こいつの攻撃、デタラメすぎる……!」

視界に入れば、任意の場所に爆発を起こせる。謎の煙で広範囲に攻撃をする。複数の目のうち常に一つは、一人一人を別々に補足しているため、死角からの奇襲も望めない。あの時のように、あの剣を投影しようにも、その隙を与えてくれそうにない。

「どうやら物理攻撃も、魔術攻撃もダメージを与えてはいるようだが、再生が早すぎて追いつかない。通常この速度の再生なら魔力切れしてくれることが望ましいが、敵の手に聖杯がある以上、それもなにか。わずかにでも動きを止められれば、あるいは……」

『見たか。たかだか数体のサーヴァントを従えたところで、私には勝てぬ。所詮それが、人間である貴様らの限界だ』

勝ち誇ったように笑うフラウロス。しかし、事実このままでは、間違ひなく負ける。何か打開策が必要だ。だが何が？

「ぬう……こやつ、桁外れではないか」

「ん、もう！なんなのよ！これじゃいつまでたつてもネロとデュエツトするってお願い、叶えられないじゃないの！」

少し離れた場所でネロとエリザベートが共に戦っている。あの時のネロの叫びを自分も聞いていたこともあつて、その願いを叶えられるようにしたいと士郎は思う。けれども、今この状況をどうにかしたいと……

「ん？待てよ……そうだ！」

「先輩？何か思いついたのですか？」

「今はどんな策でも試してみる価値はあるかもしれないな。聞いてやろう」

「ああ。まず二人に……」

士郎の作戦を聞く二人。最初は興味深そうな表情だった二人の顔が、どこか引きつっている。マシユは真顔で、エルメロイII世は眉間にしわを寄せたまま、士郎を見る。

「正気か？」

「まあ、それくらいやってみないと」

「私は先輩の判断に従いますが……」

「二人は作戦を伝えながら、みんなにこれを配ってくれ。俺はあの二人に作戦を」

「わかりました。必ず届けます」

「やれやれ。これはまた、とんでもないことを思いつくマスターがいたものだ」

3人がそれぞれ別々の方向へ駆けていく。

『まだ足掻くか……無駄なことを』

勝者の余裕のつもりか、大技を発動させるわけでもなく、爆発を起し続けるだけのフラウロス。その爆風を掻い潜り、士郎はネロとエリザベートの元にたどり着く。

「二人とも、頼みがある」

「ぬ？この状況への打開策が？良い、申してみよ」

「二人に、全力で歌って欲しいんだ」

「は？えっ、子イヌ、あんた状況わかってるの？」
「わかってる。でも、この状況を打開するには、二人の歌が必要なんだ」

真剣な表情で語る土郎。二人は一瞬何言ってんだという顔をする
が、周りからしたらもつとそうだろう。

エリザベートの歌はもはや凶器、攻撃宝具にまで昇華されているよ
うな代物だ。一応彼女の名誉のために説明すると、本来は音量・声量
を上げ、その振動による攻撃だが、壊滅的なまでの音痴が、その力を
より引き出していると言える。それに加えネロ、彼女もまた、エリザ
ベートに勝るとも劣らない歌唱力の持ち主ということが判明してい
る。マシユやエルメロイ・II世でなくとも顔がひきつるだろう。
まあ、もつとも、本人たちはそんな自覚はないわけなのだが。

「うむ。シロウがそこまで頼むのであれば、応えるしかないな。よい
か、エリザベート？」

「まっ、ネロがやるなら、あたしもやるわ。二人のデュエット、実現さ
せちゃいましょう！」

「助かる。なら、合図したら、エリザベートの宝具を頼む！」
「オッケー！」

土郎が辺りを見渡す。みんな作戦が伝わったらしく、視線が合うと
頷いてくれている。呂布とスパルタクスは作戦を理解したのかわか
らないが、ブーディカと荊軻が頷いているのでなんとかなったのだろ
う。みんなにも渡した、小さなアイテム、所謂耳栓を耳に詰めながら、
土郎が叫ぶ。

「今だ！」

「サーヴァント界最高のデュエット、聞かせてあげる！」

「豪華絢爛、風光明媚。赤金彩る晴れ舞台ぞ」

エリザベートが地面に槍を突き立て、ネロがその槍を持つ手に自身
の手を重ねる。地面から湧き上がるのはエリザベートの魔城。しか
しそのデザインが微妙に異なる。

所々に薔薇の意匠、そして黄金のライン。城の時計塔部分には、ネ

口の黄金劇場と同じ、三つの剣が描かれた盾。二人のそれぞれの宝具で顕現する建造物。それらが混じり合った奇跡のコラボ。

それはまさしく、二人のための特別ステージ。

『なんのつもりだ?』

心底何をしているのかわからないという感じで、呆れたような声を出すレフ。

「さあ、ライトを向けなさい」

「余らの歌声に惚れ直すがよい」

「鮮血黄金魔嬢!!」

大きく息を吸う二人。士郎たちはすぐさま耳の上に手を置き、その衝撃に備える。

「♪ボエ〜♪」

一番近くにいた士郎は、後で感想を聞くところ答えた。

『危うし命助けて俺、ただいまライブで大ピンチ……て感じだな』

実際シャレにならない。

二人の歌はそう、なんとというか、とにかく凄まじいの一言である。耳栓をしてなお、士郎もサーヴァントたちも耳から手を話すのをためらわれるほどのものだった。そしてそれを実感したのは彼らだけではなく、

『ぬうあああああつ?!なんだ?!なんだ、これはつ?!ぐうおとおおっ?!』

初めてあげる悲鳴にも似た声。なんの備えもしておらず、二人のデュエットの直撃を受けたフラウロスがもがき、苦しみ出す。先ほどの笑い声も、余裕の態度も消え、ただただ悲鳴をあげ、苦しんでいる。

(よしっ、次!)

士郎がアイコンタクトで合図を出すと、エルメロイII世が孔明の宝具を発動させる。

「これぞ大軍師の究極陣地。石兵八陣!」

空から降り注ぐ柱が、フラウロスを取り囲む。その上から落ちてきた八卦遁甲板がまるで蓋をするかのようにフラウロスを押しつぶす。

地理把握・地形利用・情報処理・天候予測・人心掌握の五重操作。それは敵の進行も撤退をも拒む、まさしく究極陣地。フラウロスといえども、その動きを止めるのに十分だった。

『なんだ、これはっ!?動けぬっ、だど!?』

「貴様の動きは全て封じた。これで詰めだ」

与えるべきなのは強烈な攻撃。再生を封じている今しか、倒すチャンスはない。鳴り続ける歌を背に受けながら、士郎とリリイ、呂布にジャンヌ・オルタがフラウロスの前に並ぶ。

敵の能力は驚異的な回復力、圧倒的なほどの不死。倒すにはそれを突破しなければならない。

「投影、開始」

手に取るのは鎌にも似た剣。生前、あのライダーを殺したという不死殺しの剣。ただ、正確にはその原典。同じ特性を持つ、あの黄金のサーヴァントが保有していた神剣、その特性を纏わせ、チューニングされし剣。それを矢に変え、弓につがえる。

「これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮…」

「選定の剣よ、力を。邪悪を絶て!」

「勝利すべき黄金の剣!」

「吼え立てよ、我が憤怒!」

「!」

白と黒、同時に放たれた宝具がフラウロスに直撃する。炎が体を蝕み、槍と閃光が身体を抉る。直後に三国志最強の男の放った矢が命中し穴を広げる。それでも再生しようとするフラウロス。その身体の穴を狙い、士郎の矢が放たれる。

「不死身殺しの鎌!」

飛びこんできたその剣は、フラウロスの体内深くに突き刺さる。その一撃が与える傷は治癒不可能。残り続ける呪いといえる。しかしそれだけではなく、

「壊れた幻想」

傷口を塞ごうとした矢先に起こる強烈な爆発。不死殺しの神秘が

体内を抉り、隅々まで行き渡る。癒えない傷の痛みにも、フラウロスが悶え苦しみ、叫び狂う。

『があっ!?ば、馬鹿な。この私が、下等な人間如きにいいいいっ!』
魔神柱の身体がどんどん弾け、消えていく。もがき苦しみながらも、その姿を保つことを出来ない。

「当然ね。真正正銘の女神だった駄目ドゥーサさえもを殺してみせた武器だもの。あなたには抗えないわ」

ステンノが微笑を浮かべながら魔力弾を放つ。既に消えかけだった魔神柱の身体が崩壊が早まる。暫くして、そこに残されたのは、膝をつき、苦しげに顔を歪めるレフの姿だった。

—————

「巨大魔力反応消失。どうやら、力を使い果たしたようです」

「くっ……そうか。神殿から離れて幾分か経つ。既に身体が壊死し始めていたということか……そうでなければ、人間如きに敗北など、ありえん」

何やら一人でブツブツ言っているレフが、その場から一步退がる。まさにその時、荊軻の短刀が、レフの首のあった辺りを通り過ぎる。

「ほう、まだ動けたか。これで終わりにしてやろうと思ったのだが」

感心したようにつぶやきながらも、荊軻の目はレフを捉え逃さない。

「くっ……くはは、くはははっ」

「?何がおかしい?」

まさ突然笑い出したレフを訝しげに見つめながら、土郎が問いかける。再び狂気に顔を染めながら、レフが勝ち誇るように立ち上がる。「ふっ。確かにここでは敗れたが、まだ終わりではないぞ。いや、貴様らにとっては終わりだ。見る、タイムアップだ」

その言葉を言い終わるかどうか、部屋に光が溢れ、二つの影が現れた。一つはヴェールを被り、虹色の剣を持ち佇む女性、そしてもう一人は、血を流しながら、地面に倒れ伏している赤い外套の男。

「アーチャーさん!」

近くにいたりリイが駆け寄ると、アーチャーが僅かに身じろぎす

る。片腕は血を流し、服はあちこちが破られている。士郎たちが駆け寄る様子を、感情の無い空虚な瞳で、敵のセイバーは見ている。

「しっかりしてくださいー！」

「アーチャー」

「……………どうやら、時間稼ぎは十分だったようだな……………衛宮、士郎……………後は、任せる……………」

最後にしっかりと士郎を見てから、アーチャーの身体が粒子へと還り、消えていった。

破壊の大王

「所詮ははぐれサーヴァント。聖杯の力で呼び出されたセイバーに、勝てるはずもなかったな。結局できたことは時間稼ぎのみ、それも、結局のところ無意味なものだかな」

ニヤリと口元を歪め、レフがセイバーの隣に並ぶ。聖杯を手に、「だがそう悲観することでもない。貴様らも同じ運命を辿るのだからな。なにせこのセイバーは、破壊の大王にして純然たる戦闘王。文明を滅ぼすための装置にすぎぬ。根底に破壊を刻み込まれているこれを、貴様らが止めることなどできはしない。ローマがこれに滅ぼされるのは、まさに運命なのだからなあ」

「くっ」

士郎たちが身構える。破壊の大王、ローマを滅ぼすもの。そして戦闘王。そのキーワードを得て、士郎の脳内に一つの名が浮かぶ。ただ、もし本当にその英霊だとしたならば、この事態はよろしくない。

英霊にはその逸話、その歴史が宝具やスキルとして昇華されることがある。それは時に特定の対象、特定の目的のためにはサーヴァントをより強力にすることにもつながる。そしてこの場合はローマを守る士郎たちには、悪い方向で働いてしまう。何故なら彼女は――

「まさか……そいつ、フン族の王……なのか？」

「大王アツティラ……東西ローマ帝国を滅ぼしたと言われる……あの」

「ほう、流石に気づいたか。だが気づいたところで無駄だ。貴様らには止められん。そこで己の無力を呪いながら朽ち果てるがいい！ さあ、最後の時だ！ セイ――」

「黙れ」

ザシユ――響いたのは剣が肉を裂く音。ぽたりぽたりと血が垂れる。

驚愕の表情を浮かべるのは、刺された本人だけではない。

ただ淡々と、無表情に、無感情にその剣を振るったセイバー、アツ

テイラ……否、アルテラ。

彼女以外の誰もが、驚愕していた。

——そう、誰もが。

「がっ……な、んだと」

口から血をあふれさせながら、刺された本人——レフが口を開く。

「ぎ、貴様っ！サーヴァントの分際で、貴様を呼び出した私に逆らうのか!？」

「人は言う。私を破壊の大王と。神の懲罰と。私は文明を破壊する。ただそれだけのこと。そのために邪魔な貴様から破壊する」

「ぎ、貴さ——」

一刀両断

まさにその言葉しか思いつかない。

一瞬でその体は縦に切り裂かれた。

迷いのないその一撃は、レフ・ライノールの体を、綺麗に半分に分けた。

地面に落ちる半分ずつの体。足元が血だまりになりながらも、眉一つ動かさないアルテラ。

屈みこみ、血にまみれたレフの手から聖杯をそっと取り上げる。

あれほどの血だまりの中にもありながらも、黄金に輝く聖杯は一切血に濡れていない。

「これは……彼女に聖杯が取り込まれていきます！」

『そんなまさか！サーヴァントが聖杯を取り込むなんて……そんなことしたら……』

爆発的にアルテラの魔力が上昇する。レフの真の姿とも違う、魔力で形成されていただけの肉体が、霊核にエーテルをもって与えられただけのはずの肉体が、確固たる形を持っていく。

「まさか、受肉しているのですか？」

『この反応……まだ完全には馴染んでいないみたいだ。でも、このままだと、』

「器は得た。アルテラは今ここに誕生する。これより、この時代、この

世界の文明を破壊する」

三色の剣の刀身が発光しまわりだす。まるで虹のように輝きを増しながら、その剣の切っ先に魔力が集められていく。回転するその剣が向けられるのは、士郎たちの方向。狙いを定めるように向けられる視線は冷たく、空虚。

「やばっ!？」

瞬間、眩い閃光とともに、連合ローマ宮殿が消し飛んだ。

—————

『士郎君？無事かい？無事じゃないならそうと返事してくれ!』

「いや、無事じゃないなら返事できないと思うぞ」

完全に崩れてしまった連合ローマ宮殿、しかしその中の一部分のみ、破壊を免れた場所があった。そこに集まっている士郎たち。一枚のみになった花卉が消えていく。

「ありがとう、マシユ、ブーディカさん」

「いえ、先輩こそ。私たちだけでもったかどうか」

「まあ、こうしてみんな無事なら、それでいいかもね」

爆発の直前、咄嗟に守りの宝具を発動させたマシユ、ブーディカ、そして士郎。3人の力を合わせたおかげで、彼らはみんな無事ではある。が、

「恐ろしい威力だったな……っつ!」

「先輩!」

「シロウ!」

腕に痛みを感じ、抑える士郎。攻撃そのものの防ぎきれたとはいえ、その破壊力は絶大で、それを受けた衝撃だけで骨が数本ひびが入ったらしい。

「シロウ、すぐに治します!」

リリイが肩に手を置き魔力を流し込む。ゆっくりではあるが、痛みが引いていき、骨の傷が癒えていく。

「ありがとう、リリイ」

「いえ。こうして無事なもの、シロウのお陰ですから」

「ふむ。無事……か。とは言ったものの、状況はあまりよろしくない

な」

崩壊した宮殿の外を見つめながら呟くエルメロイⅠⅠ世。視線の先を見ると、アルテラがゆっくりと進んでいる。立ち向かうローマ兵を、鞭のように剣を伸ばし、薙ぎ払い、ただ同じ方向に進むのみ。

「ねえ、あの方向って、ネロの宮殿がある方よね？」

「おそらく、彼奴は首都ローマに向かっておる。この世界の文明、即ち余のローマを破壊するために！」

ブーデイカのようにローマを恨むでもなく、スパルタクスの様に叛逆するでもない。

ただ機械的に、破壊という目的のためだけに、彼女は動く。動き続ける。

「……止めに行こう」

その声は決して大きくはなかったが、それでも力強かった。士郎の言葉に、皆が同意する。

低空飛行、というほど飛んでいる感じはしないが、まるで地面を滑っているかのようにアルテラは目的地に向かう。途中邪魔してくるローマ兵をなぎ倒しながら進むものの、その一挙手一投足、動揺も乱れも全く見られず、ただ無感動に、機械的に、業務的に処理していくだけ。

「むっ？」

ふと殺気を感じ取り、振り向きながら剣を横なぎに振るう。鞭のようになつた剣が、すぐ背後まで迫っていた大量の矢を打ち落とす。大分距離があいていたはずだが、それでも届いたその弓の射程距離や精度に感心、というのだろうか。見事、という言葉が頭に浮かぶ。

「来たか」

視線を凝らして矢の来た方向を見る。馬やこの時代の戦車らしきものに乗る、こちらに向かってくる一団。その先頭にいるのは真紅の皇帝。そして鋭い視線の青年。色こそ違えど、あの赤い外套を纏って

いたサーヴァントと同じ鷹のような目を持つマスター。

「誰であろうと、私は破壊するのみ」

「どうだ？」

「全部落とされた。けど、注意を引くことには成功したな」

「動きが止まったという事か。まずは良しとするでしょう」

「うむ。ここで決着をつけようぞ。余のローマを取り戻す！」

前を見ると、こちらに向かってくるアルテラが見える。

こちらを見ている視線には、何の感情も見取れない。

ただ、破壊する者だから破壊する。

「けど、そんなことは絶対にさせない！」

—————

画面を見つめながら、ロマニが息を吐きだす。

カルデアから物資の支援や情報の提供、反応のサーチなど、自分たちにできるだけのサポートはしてきている。

けれども、実際に共に戦うことはできない。

「士郎君、マシユ……」

「心配かい？」

いつの間に管制室に来ていたのだろうか、ダ・ヴィンチが顔をのぞき込んでくる。いつも通りのなにもかもを見透かしているかのような笑み、本人のポーカーフェイスのままに見上げてくる彼女、いや彼……いや肉体的には女性……と、そんなことはどうでもいい。

ともかく、ダ・ヴィンチの笑みに対し、ロマニは小さく口元に笑みを浮かべながら答える。

「心配だよ。でも、彼らのことを信じてるから」

「おやおや。どっちかという心配症でネガティブな方向に物事を考えがちな君にしては、ポジティブじゃないか」

「そう、かもしれないね。でも、彼らならきつと成し遂げられると思う。特に彼、士郎君は」

「そうだね。私も彼にはあると思うよ——英霊の素質が」

「……何かに気付いたのかい？」

「さあ？どうだろうね」

何やら思わせぶりなダ・ヴィンチは鼻歌を歌いながら管制室から出て行く。その後姿を見送ってから、ロマニは画面へと視線を戻す。

「頼んだよ……土郎君」

二筋の黄金の輝き

彼女の存在は空虚である。

彼女の言葉は無感情である。

彼女の行動は機械的である。

しかしながらその攻撃は、類を見ない激しさを誇る。

「■■■■■■■■■■——!?!」

「ぬうおお!!」

その細身から繰り出されているとは到底思えない威力。鞭のようになり、伸びるその剣の一撃を受け、遥かに体格で勝るバーサーカー二人が吹っ飛ばされる。三国志最強の英雄も、ローマの叛逆の勇者も、彼女の前では赤子のように扱われる。

それだけの力を込めた攻撃ならば、隙の一つでも生まれそうなものだが、彼女にはそれさえもない。直後に斬りかかる荊軻の短刀を腕を掴むことで抑え、そのまま荊軻を振り回し、接近しようとしていたブーダイカ目掛けて投げつける。

たった一人の敵、それも圧倒的な巨体を誇っているわけでもなく、他と同じように召喚されたサーヴァントだというのに、彼女は圧倒的だった。

「くっ。こちらの守りをこうもあっさりと上回るか」

「聖杯を取り込んだことで、攻撃力が上がっているようです」

防御に専念しているマシュとエルメロイⅠⅠ世。二人のスキルによって、全員が防御力が上がっているはずなのに、それでもアルテラの攻撃は容赦ないダメージを与えてくる。

「これが、聖杯を手にしたサーヴァントの力……より座の本体に近づいているのか？」

サーヴァントの召喚、それは確かに英霊を使い魔として現世に呼ぶことを可能としている。だがそれは英霊のすべての力を発揮させることができるわけではない。クラスという枠に英霊を押し込め、現界させているため、その力には制限がかかる。

マスターの魔力やクラスなどに影響され、サーヴァントはステータスが定まる。スキルや令呪の補佐、狂化などによってそれも変動するが、そのステータスにサーヴァントは縛られてしまう。クラスという縛りによって、生前保有していた武器や能力が使えなくなるケースもある。

本来、サーヴァントはそういうものなのだ。

ジャンヌの操る黒い槍が、アルテラの動きを封じるべく、その周囲に突き刺さる。しかし、彼女は――

「どけ」

――それでは、彼女を止めることができない。

円を描くように、剣を伸ばし、しならせながら振るう。それによって、同時に多数の方向から攻撃を仕掛けようとしていたサーヴァントたちが弾かれる。

サーヴァントたちが束になっても敵わない、それほどの脅威に、彼女はなっていた。

「てああっ！」

「たあっ！」

飛び上がり、真上からネロと士郎が剣を振り下ろす。視線を上に向けてぬまま、アルテラが剣を振るい、全体重を乗せたはずの攻撃を容易くあしらう。地面に倒れる二人を庇うように、サーヴァントたちが集まる。

「シロウ、大丈夫ですか？」

「ああ。なんとかな……」

「ネロ、あんたは？」

「ぐぬう。こやつ、桁が違う。全く攻撃が届かんぞ」

ゆっくりと視線を彼らに向けるアルテラ。

これほどまで圧倒的な力を示しながらも、彼女には油断も余裕もなく見られない。

「もういい。お前たちも破壊する」

アルテラが今まで片手で振っていた剣を両手で握る。先程宮殿を吹き飛ばした時のと同じように、魔力が凝縮され、三色の刀身が回

転を始める。

「まずいっ！」

「またあの攻撃が来ます！」

やっとの思いで防いだあの威力。もう一度それを防ぐことが出来たとしても、満足に戦うことができるかどうか。

「人は呼ぶ。それを破壊の一撃と。受けろ、そして消えろ」

選択肢は何か考える。

防御は？ 駄目だ。それでは先ほどと変わらない。

回避は？ 駄目だ。それが出来るほど威力は絞られていない。

何もしない？ 駄目だ。ここで諦めること、それこそ絶対にしてはならないことだ。

であれば出来ることはもはや一つ。

迎撃し、そして打ち勝つことだけ。

「一か八か……やるしかない！ マシユ、ブーディカさん、念のために道具の準備をしてくれ！ 孔明も、防御スキルの用意を！」

「！はい！」

「了解したよ」

「いいだろう」

両手の夫婦剣を消し、弓に持ち替える士郎。

「トレイス・オン投影、開始」

光を放ち、回転するアルテラの剣。

対して士郎が用意したのは、今はまだ名もなき一振りの剣。剣を弓につがえ、狙いを定める。

「受けて立つ気か？」

「生憎と、昔から諦めが悪いって言われて来たからな。例えお前が何者だとしても、破壊されるわけにはいかない」

「そうか……あの威力を見てまだそう言えるか」

ほんの少しだけ、アルテラが感心しているようにも聞こえる。これまで見せなかった僅かな変化。けれども、それはすぐさま消え去り、

元の空虚へと還る。

「貴様が破壊を恐れぬのはわかった。だが、私のすることは何も変わらない」

光を纏いながら、アルテラの剣の回転が早まる。対して士郎は軽く息を吐き、魔力をさらに込める。

「I am the bone of my sword」
トレース・オーバーエッジ

「投影、超装」

まるで放電するかのように剣の周囲を魔力がほとばしる。矢として打ち出せるようにチューニングを施したその剣に、さらに手を加えていく士郎。

纏わせるのは複数の属性。

一つ、あらゆるものを焼き尽くす、熱と光をもたらした人類発展の始まりの「火」。

一つ、命の始まり、ものを清め、洗い流していく恵みの「水」。

一つ、命に必要不可欠な空気、形を変え、どこまでも吹きゆく「風」。

一つ、自然のすべてのものの土台、人々を常に支える基盤となる「地」。

一つ、天上の要素、変形しない永遠。天界を満たすエーテル、またの名、「空」。

それらの特性を司るもの、ゆかりのある伝承を持つもの。己が記録したありとあらゆる武器の中から、必死にその性質を引っ張り出し、それら要素を組み込んでいく。

かつての師、五大元素使いと呼ばれる一級の魔術師。彼女によって、五大元素についての知識を得た士郎。その全てを剣の特性として無理矢理引き出し、剣に纏わせ強化していく。

「この文明を破壊する。軍神の剣！」
フォトン・レイ

「ふっー」

剣を突き出すアルテラに、矢を放つ士郎。ほぼ同時に放たれた攻撃が激突する。

直後、アルテラの目が僅かに見開かれる。

破壊の一撃は銘なもなきその剣を確実に砕き、そのまま敵を破壊するはずだった。だというのに、その剣は砕け、爆発したはずにもかかわらず、自身の宝具の効力が打ち消されていく。

遠坂凜による五大元素の教えの一つ、自身の戦闘スタイルからして最も気をつけなければならぬと言われたトラップ。不活性化状態の五大元素は、あらゆる魔術、魔力を無力化し飲み込む、まるで底なし沼のように。

生み出された特徴は「無」。

何物にも染まらず、何物にもならない。

士郎のそれは、魔力や魔術に限らず、魔力を使用し発動するもの、例えば宝具や英霊の力を封じ込めるものとなる。

剣自体の神秘が低く、爆発したとて効果は一時的なものに過ぎず、使用者への負担も大きい。聖杯を取り込んだアルテラの攻撃ともなれば、一瞬止めることができる程度。

けれども、その一瞬こそが、彼らには必要だった。

「ネロ、ブーデイカさん！」

「うむ、行くぞ！ラウス・セント・クラウデイウス童女謳う華の帝政！」

「約束されざる勝利の剣」

二人の剣から繰り出される斬撃に魔力塊。流石のアルテラも宝具クラスの攻撃を無視する事はできず、なぎ払うように剣を振るう。

「リリイ、行くぞ！」

「はい！」

剣を構え、魔力を集めるリリイ。その隣で士郎が悲鳴をあげそうな体に鞭打ち魔術を行使する。この旅の中で何度も見せてもらった黄金の輝き、それを手繰り寄せるべく魔力を回す。

「投影、開始」

「選定の剣よ！汝の力、示し給え！」

体の奥が熱い。しかし同時に激痛が和らぐ。先ほどよりもはつきりとした頭でイメージを固定する。士郎の手に握られる剣。それは

リリイの構えるものと同じ。二人が同時に剣を突き出す。瓜二つの黄金の輝きは、真贋入り混じってなお美しい。

何処かの並行世界で、二人で一つを振るう事で大英雄をも仕留めた一撃。

それが二つ。今はその時を上回る。

その名が示す通り、この剣の前に敵はいない。

「勝利すべき黄金の剣!!」

「くっ!」

混じり合う二つの黄金の輝きは、防御のために振るわれた三色の刀身をも弾き飛ばし、アルテラの身を貫く。一つとなり、天に向かって伸びる閃光は、戦場にいるものすべての目に届き、その美しさに誰もが何もかもを忘れた。

その閃光が消え、静寂が訪れる。

肩で息をするサーヴァントたち。思わず膝をつく士郎。その戦いの中心に立つアルテラ。その胸には、大穴が開けられ、陽が地平線の向こうへ沈む様子が、そこから覗いている。気がつけば辺りが薄暗くなってきた。

ちらほらと星が輝き始める中、アルテラの手から剣が離れ、地面に突き刺さった。

最後までローマはローマ！である

「敗北か……そうか……私でも、破壊できないもの……そんなものがあるか……」

胸に大きく会いた穴を確認するように見下ろし、感慨深げにアルテラが呟く。敗北したというのに、どこか嬉しそうにも見えるその様子に、思わず士郎が声をかける。

「お前……望んでたのか？止められることを？」

「否。望んだわけではない。ただ、そうだな……破壊できなかったということは、破壊すべきではなかったものなのだろう」

「当然であろう！余が治めているのだからな！」

誇らしげに胸を張るネロを見つめるアルテラ。その口元には小さな笑みが浮かんでいる。

「そうか。このローマは良い文明、そう覚えておくとしよう」

「うむ。この経験を誇るがいいぞ」

既にアルテラの体の粒子化が始まっている。アルテラが士郎に顔を向ける。

「……名は？」

「士郎。衛宮士郎だ」

「エミヤシロウ……覚えておく。いずれまた、文明の破壊に立ち会う時が来るかもしれない……その時はまた、見せてもらおう。その文明が良いものかどうか」

「ああ。望むところだ。けど、出来れば次は戦いたくはないかな」

「……それは、約束できない。私は、破壊するものでしかない。その為だけの存在、なのだから」

「それは違うだろ。だって、今だって」

「笑ってるだろ」

僅かに口を開いたまま、アルテラが黙ってしまふ。呆気にとられているような、信じられないものを見たような、そんな表情。と、

「笑った……私が、笑った、のか」

「ああ。そうやって笑えるんなら、きつとお前にも、人間らしい感情が

あるってことだろ?」

「人間、らしい?」

「ああ。それに、何だか俺のよく知ってる男やつに似てる気がするから、多分……いや、絶対一緒に戦える時もあるさ」

暫く黙って士郎の話を聞くアルテラ。

ふっ、と先程より少しだけわかりやすく、口元に微笑みを浮かべる。

「なら、その時を期待してみるとしよう、エミヤシロウ」

「俺も、期待しておくよ。英霊アルテラ」

微笑を湛えたまま、アルテラの姿が完全に粒子と化し、後には黄金の杯が残された。マシユがそれを手に取り確認する。

「聖杯を確認、回収します。これで、この特異点での目的は達成されました、先輩」

「ああ。かなりやばいところもあったけど、なんとかあったな」

「はい……先輩、そろそろです」

「そうだな」

士郎がネロの方を向くと、彼女はこの後どうなるのか、もうわかっているような、達観した表情を浮かべている。

—————

「ネロ。そろそろ私たちも帰る時が来たみたい」

そう声をかけるブーディカ。彼女だけではなく、サーヴァントたちの体は徐々に粒子状に変化していく。

「そうか……まだ褒美も取らせてないというのに、せっかちであるな」

「あはは。まあ、こればっかしはどうしようもないよ」

「おお、叛逆者よ!見事なり。しかし汝圧制者とならんことを、我ここに願おう!」

「ああ。けど、もしまた大きな敵と戦わないといけない時は、その時は力を貸してくれ」

につこり笑顔のバーサーカー、スパルタクス。やはり士郎以外は何を言っているのかわからないらしく首を傾げている。同じくバーサーカーで言葉を発せない呂布は士郎を見下ろし頷くだけ。言葉は

無くともそこに込められた思いは受け止められる。士郎も領きを返す。二人の姿が、消えた。

「ふむ。今回は悪くない収穫だった。かつての雪辱を晴らした気分だ」

「そりや良かった。また一緒に戦ってくれるか？」

「さあてな、それは私にもわからないさ。もしかしたら、私に首を狙われるかもしれないぞ。だが、それもまた一興だな」

「物騒な話するなあ」

「ふふつ。だが、お前と共に戦う時間、悪くはなかった。縁があれば、きつとまたお前の下で戦おう」

「それではご主人、マシユ、リリイにジャンヌ！キヤットは大人しく帰るのだワン！」

「ああ」

「む、もう少し悲しんでくれても良いのだぞ！なんとと言っても、この良妻系従順サーヴァントとの別れなのだからな！」

「じゅ、従順……ですか？」

「あはは……」

「寂しくはなるかもな。でも、また会えるかもしれないだろ。なら、悲しむばかりでもないさ」

「むう。ならばまた出会った時には、人参を用意してくれてると嬉しいうぞー！キヤットはそれで我慢するでしょう」

「わかった」

「お主は何もないのか？」

「ええ。私に別れの言葉なんて不要なもの。でも、貴方にはお礼を言っておくわ。ほんの少し、楽しかったわ」

「そうか。またいつでも遊びに来るが良い！」

「ええ。その機会があれば、ね」

「ネロ。ここでお別れみたいね」

「うむ……仕方のないこととはいえ、残念だ」

「……あたしは楽しかったわ。ネロのサーヴァントとして戦えて。それに、ネロと一緒に歌うこともできて満足よ」

「そうか。余もそなたと共に戦えたこと、共に歌えたこと。どれもが
良き思い出だ」

「またどこかで会った時、その時は」
「うむ」

「どちらがより輝けるか、勝負！」
「であるな」

「負けないから！」

「マシユ、リリイ。二人はいい子だね」

「？ブーディカさん？」

「とても純粹で、とても誠実だ。そのままの二人でいてね」

「は、はい」

「わかりました」

「ジャンヌは……もう少し素直になればいいのに。せつかく可愛いのに
勿体無いよ」

「はあ!? なんのことですか？ 勝手に決めつけないでもらえますか？」

「ふふつ。はいはい……シロウ」

マシユとリリイを抱きしめ、ジャンヌの頭を撫で終えたブーディカ
が、士郎に向けて両手を伸ばす。気恥ずかしさはあるものの、意図を
察した士郎が、ブーディカの前に立ち、身を委ねる。

「……頑張つてね」

「ああ」

「……あはは、なんだろうね。言いたいこと、いっぱいあるはずなの
に、何も出てこないや」

「……その、ありがとう。ブーディカさん」

「ん……私の方こそ、ありがとうね。こんなこと言うのもあれだけどさ
……何だか、懐かしい気持ちになれたよ」

「そっか」

「うん。だから、ありがとね」

士郎の体を放すブーディカ。ゆっくりと、彼女はネロへと体を向け
る。

「うぬ……ブーディカ……」

「ん？何、ネロ公？」

「その、すまなかつた……それから、ありがとう」

「……どういたしまして」

交わした言葉の数は少ないが、二人の視線が言葉にできない思いを伝えている。

生前は倒すべき敵として。

此度は共に戦う仲間として。

次は……どうなるだろう……

ただ、ブーレイカが最後にネロに向けたその微笑みには、一切の曇りがなく、陰りもなく、どこか吹っ切れたものだった、そう、士郎は感じた。

サーヴァントたちが粒子状に消えて行くのを、士郎たちは見送る。共に戦った仲間たち。ここで繋いだ縁は、いずれまた彼らをつなぐだろうか？それはまだ、彼らにはわからない。

—————

『士郎くん、マシユ。そろそろ戻るよ』

「了解しました、ドクター」

通信を受け、士郎たちがネロの方を向く。士郎が一步前に進む。

「帰るのだな、そなたたちのあるべき場所に」

「はい……ネロさん。本当に、ありがとうございました」

差し出されたネロの手を、士郎がしっかりと掴む。ニカツという効果音が似合いそうな笑顔で見送ってくれるネロに対し、士郎もまた笑みを浮かべる。

偶然か必然か、その笑みはあのアーチャーがかつて凜にマスター向けたものと良く似た笑顔だった。

その笑みに、思わず彼女は見惚れた。ああ、この笑顔だ。これこそ、心の底から見せる笑顔。人間としてひどく当たり前のものなのに、如何してか、その笑顔に自分は惹かれる。そして同時に知りたいたいと思う。自分も、その笑顔ができるようになれるかどうか。

互いに手を離す士郎とネロ。と、ネロがむふー、とドヤ顔を浮かべ

る。

「そなたたらに褒美をやらねばならぬな」

「いえ、私たちは、」

「わかつておる。物はさすがにまずいのであろう？帰るといふのであれば、土地というわけにもいかぬ。だが、余は閃いたのだ！」

んく？と士郎たちが首をかしげると、ネロが胸を張り、自分のことを指差しながら、

「褒美は、余だ！」

なんてことを言つてのけた。ますます首の傾きが深まる士郎たち。御構い無しにドヤ顔を決めているネロには悪いが、なんのこっちゃかわからない。

「はい？」

「……何を言い出すのかしら、この皇帝様は？」

「ネロ？……それは、どういう？」

「む？今のは伝わりにくいな。では改めて、シロウよ！」

「？」

「ローマ帝国第5代皇帝、ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストウス・ゲルマニクスの名の下に約束しよう。余が英霊となった暁には、必ずそなたの力になると！困ったことがあれば、いつでも余に頼るが良い！」

満面の笑みで宣言するネロ。その内容に一瞬驚いたものの、士郎たちは笑みを返した……ジャンヌ以外は……

「またこれですか……本当に、誑し込むのがうまいといふかなんといふか」

何やらブツブツ呟いているが、内容が士郎たちは聞こえなかった。

「では、さよならですね」

「ネロさん、ありがとうございました」

「まあ、退屈はしませんでしたから。ええ、それなりに満足でした」

「じゃあな、ネロ」

「うむ！また会う時を、楽しみにしておるぞ！」

手を振りながら、士郎たち6人と1匹の姿が消える。それを見送ったネロの顔は、この戦いが始まった時よりも、自信に満ち溢れ、芯の強さがにじみ出る。

「これより帰還するぞ！我らが国、我らが街！我らのローマへ！」

拍手喝采、大歓声。

ローマの兵士は、戦いが終わったことに歓喜しながら、彼らの街へと向かうのであった。

えっ？6人じゃおかしい？二人多い？

そうそう忘れるところであった。

「というわけで、これからカルデアの仲間になることになった、」

「ロード・エルメロイII世だ」

「女神ステンノよ。退屈させないように、気をつけなさい」

「なんで二人増えてるんだ!？」

「いや、エルメロイII世の方は、俺が誘ったんだけど……」

「ステンノさん、いつの間に契約していたのですか？」

「あら、そんなの簡単よ。彼が眠っている時に夢を見せて、その隙に、ね」

怪しく微笑むステンノに、士郎が思わず苦笑する。

エルメロイII世は士郎の魔術について教えるという約束、孔明から譲り受けた人理修復の仕事。そして、アレキサンダーとの約束など諸々の事情あって、カルデアでその力を使うことを了承してくれた。が、ステンノはというと……

『あなたといると、面白そうですもの。それに、一緒にいれば駄メドゥーサとも会える気がしたから、連れてきてもらうことにしたわ』
(なんでさ)

心の中で呟く士郎。二つ目の特異点から聖杯を回収した士郎たち。長い戦いは、まだまだ続く。

第三特異点 封鎖終局四海オケアノス 二人の進む先に

「うん。体調に異常なし。今回も無事に切り抜けられたみたいだね」
「ああ」

シャツを着ながら、士郎がロマニに返事する。特異点の修復を終えた士郎は、ロマニによる健康検査を受けていた。

「あれ？士郎君、それは？」
「えっ？」

「いや、二の腕のあたりなんだけど」

ロマニが指差したところを見ると、皮膚の一部が濃い色に染まっている。普通に服を着た時には隠れてしまう場所だったため、誰も気づかなかった。

「痣かな？それとも火傷？」

「あ、これは大丈夫だ。怪我とか病気とかじゃないから」

「そうなのかい？」

「ん、まあ。俺の魔術の副作用というか、なんというか。ただ、身体機能とかには影響はない。心配するほどのことじゃないさ」

「魔術の副作用、ね。まあ、あれだけデタラメな投影を行えるんだから、何かしらの代償はあるか」

「そんなところだ。じゃあ俺は食堂の方に行くよ」

笑顔で手を振り、士郎を見送るロマニ。扉が士郎の背後で閉まると、ロマニの表情が変わる。

（それにしても、リリイちゃんの魔力による士郎君の治癒能力……あれは一体、どんな理屈なんだろう。二人を繋ぐ、何かがある。マスターとサーヴァントのパスだけじゃなくて、もっと別の何か……）

「やっぱり影響が出始めたか……」

先ほど皮膚が変わっていた部分をそっと抑え、呟く士郎。

「この調子だと、第七特異点を終えた時には、あいつと同じ見た目に

なっちまうのかもな」

身長も骨格も、あの時のあいつに近いものになってきている。このまま戦い続け、この力を使い続ければ、いつか自分は……

「いや、でも俺とあいつは別人だからな」

しかしこのままいけば間違いなくみんなを驚かせることになるだろうなあ、なんてことを心配する士郎。

（髪はまあ、いざという時は染めるって方法があるけど、皮膚はどう誤魔化したものか……）

—————

食堂へと向かう士郎。廊下を歩いていると、丁度近くの扉が開き、マシユが出てくるところだった。

「先輩、お疲れ様です」

「マシユこそ、お疲れ。検査の方は？」

「問題ありません」

「そっか。なら、ご飯にしよう。一緒に食堂に行かないか？」

「はい。是非ご一緒させていただきます」

並んでカルデアの廊下を歩く二人。そういえば最初に自分の部屋に案内された時も、マシユに連れて行ってもらったな、なんてことを思い出す。あれからそんなに経っていないはずなのに、もう随分と昔のここのように思える。

「？先輩、どうかしましたか？」

「あ、いや。初めてカルデアに来た時のことを、ちょっと思い出してさ。あの日も、こうしてマシユと二人で歩いていたな、って」

「そうでしたね。先輩のような方は、初めてだったので、正直言うと、少し驚いていました」

「驚いていた？」

「はい。聖杯戦争を勝ち抜いた方と聞いていたので、どんな凄い魔術師の方が来るのかと、身構えていました」

「あはは。なんかごめんな、こんな三流で」

ポリポリと頬をかきながら、視線を泳がせる士郎。同時に、そりやそうだとも思う。世界最小の規模でありながらも、世界最大級の戦力

がぶつかり合う、それが聖杯戦争。自分の時がイレギュラーなだけで、本来ならば歴とした魔術師が参加するもののはず。

期待が大きかった分、がっかりさせてしまったのだらうと思うと、あの時の所長の態度も納得がいく。マスター適性にレイシフト適性。自分が欲しくて、それでも得られなかったものを、こんな魔術師として三流の自分が持つていれば、怒りたくもなるはずだ。

「いえ。むしろ先輩は、私の思っていた以上の方でした」
「えっ」

思わずマシユの方を見る。士郎のことを見上げながら、マシユが微笑む。

「私が出会った魔術師の方々は、皆さんとても優秀な方でした。でも、そこは魔術師、どこか閉鎖的で、事務的で……そんな時に出会った先輩は、優しく、対等に話してくれて……聖杯戦争を勝ち抜いたことを自慢するでもなく、職員の方にも気を配っていて……そんな先輩だからこそ、私は『先輩』って、呼ぼうと思ったんです」

「マシユ……」

生まれてから一度も、たったの一度も、マシユはカルデアの外に行ったことがない。その話をマシユから聞いた時、士郎は不思議に思った。それはつまり、彼女がここで生まれ、ここで育ったということ。そしてサーヴァントとの融合に、レフの「出来損ない」や所長の「成功した」という言葉。

マシユの出生には、きつと自分が知らない秘密があるのだろう。けれども、それは自分が土足で踏み込んではいけない領域、なのかもしれない。

待つべきなのかもしれない。マシユが、自分から話してくれることを。

「それに、先輩はとても強い方です。魔術師ではサーヴァントには勝てない。それが本来の常識なのに、先輩はそうではありませんでした」

「それは、相性の問題とかも関係しているからな。遠坂……俺の師匠も、キャスター相手に有利に展開を進めてたこともあるし」

「かもしれない。でも、先輩の強さは戦闘だけではなくて、その信念、でしようか。どんな状況でも諦めずに、どんなに強大な相手にも向かって行く。そんな先輩みたいに、私もなりたいんです。先輩のサーヴァントとして、先輩の姿は、私の理想です」

力説するマシユ。そんなマシユを眺めながらも、士郎にはその言葉を途中から聞こえていなかった。

（理想……か。でもマシユ、その理想の先は、きっと地獄だぞ……つて、伝えるべきなのだろうか）

ガッツポーズをするように気合を入れ、語り続けるマシユ。きっと彼女は、まだ分かっていない。衛宮士郎の掲げる理想、それがどれだけ地獄の道なのか。

あの聖杯戦争で自分は知った。自分が辿るかもしれない道を。

そこにあつたのは死、死、死。おびただしいほどの死体、否、殺人の歴史。そしてその度に大地に突き立てられる剣。

その地獄に終わりはなかった。

ただ、より多くの人を救いたかっただけなのに。切り捨てるのはその救いたかっただけ者たち。殺すのは守りたかっただけ者たち。

理想は遠く、心は擦り切れ、衛宮士郎という個人までもが消えていく。

かつてあの男が辿った道は、一度は完全に自分の心を砕くところまで行った。

ただそれでも、その願いだけは間違っていないかった、そう断言できる。

だからこそ、自分はこの道を進み続けると決めたのだ。

自分に憧れるという少女。その理想の先にも、おそらく地獄が待っている。ただ、その時に、彼女の心が折れぬことを、彼女が理想を貫けることを、自分は願おう。

「なので、これからはもっと先輩との連携も考えたいと思っています。

いつかはアイコンタクトだけで、戦闘、炊飯、掃除、談話ができる……そんな関係になれることを目指しましょう！」

「マシユは勤勉だな。なら、力をつけるためにも、しっかりと食べて力をつけないとな。何かリクエストとかあるか？」

「リクエストですか？先輩の料理はどれも美味しくて、力が出ますから……そうですね……困りました、凄く悩みます」

日常的な話題、何気ない会話。繰り広げながらも士郎は願う。目の前の少女の未来に、幸あれと。

—————

「それじゃあみんな、準備はいいかい？」

ロマニの声に頷く士郎たち。今回のレイシフトに行くのは士郎、マシユ、リリイにジャンヌ。エルメロイⅠⅠ世は司令塔としてカルデアに残り、ステレンノは、

「私は行かないわよ。戦う力もないのだし、ここからでも貴方の旅は観れるもの」

と辞退したのであった。

「今度の特異点はほとんどが海だからね。船で移動する必要があるよ。こっちで用意することができないから、君たちでなんとかしてもらうことになるわけだけど」

「まあ、なんとかするさ」

「それじゃあ気をつけてね」

コフィンに士郎たちが入るのを見て、スタッフが捜査を開始する。

次なる特異点は封鎖された海域。

世はまさに、大海賊……ではなく、大航海時代。

周囲を海で囲まれた幾つもの島。

待ち受けるのは果たしてなんなのだろうか。

エルドラゴと呼ばれた女

視界に広がるのは一面の青。

上を見ると白い雲と輪っかは見える、晴れの空。下を見るとやや深めの青に染まった穏やかな海。

足が踏みしめるのは白い砂の感触。

耳を撫でるのは穏やかな波の音。

鼻をくすぐる塩の匂いを含む風。

「海、ですね」

「海だな」

「海ね」

「海です！」

感心したようなマシユ。興奮気味のリリイ。興味無い風を装いながらも、唇の端がヒクヒクしているジャンヌ・オルタ。3人ともローマで海を見たはずなのだが、あの時はいろいろありすぎてすっかりと見ることはなかったためか、落ち着いて海を見るのは初めてらしく、目の前の光景に見とれている。

足元ではまたまたついて来てしまったらしいフォウが、波打ち際で遊んでいる。

ここだけ切り取れば、まるでバカンスにでも来たみたいにも見えるが、悲しいかな、彼らのするべきことは他にある。

『士郎くん。その島から強い魔力の反応が出ている。気をつけて調査してほしい』

「わかった」

若干残念そうにしているマシユたちを連れて、士郎は島の奥、森の方へと向かっていく。

「森の中からの反応ってことは、サーヴァント関係か？」

「あるいは強い魔力を持った生物かもしれません。伝承などではこのような森には、魔猪と呼ばれる生き物が生息していたそうです」

「魔猪ですか？マーリンが剣の特訓にと、度々連れて行かれた先で会いましたね。人間に害をなすものが多いので、倒すしかありませんで

したけど」

「猪ねえ。でも、その程度なら大したことないじゃない」

「つてことは、もっと厄介な相手つてことかもしれないな」

森の奥へと進む士郎たち。と、何か焼けるような匂いが鼻に付く。間違いなく何者かが火を起こしたということだ。周囲を見渡ししてみると、煙が漂ってきている方向がわかる。目配せをしあい、士郎たちは殊更に気を引き締めて、煙の方向へ進み始める。

聞こえてくるのは笑い声。それも1人や2人ではない。何人かの男が共にはしやぎ、共に笑い、共に歌っている。決して上品なものではない笑い方、誰もいないはずの島。士郎の中で一つの可能性が上がる。

森の中の開けた場所、そこが煙の発生源だった。

そこにいるのは何人もの男たち。酒を木製のジョッキでかわし、火の回りではしゃいでいる。剣、銃、短刀など、様々な武器を持つ彼らの服装は、しかし騎士や旅人とは異なる。海の男たちではあるが、水夫や釣り人などではない。

「海賊か？」

パキリ

「フオツ!？」

「フオウさん!？」

と、大きな音が響く。慌てた様子のマシユの視線の先、フオウが杖を踏んづけてしまったらしい。

すぐさまこちらを向く男たち。その手は各々の武器に伸ばされている。暫しの沈黙。そして、

「敵襲〜っ!」

「野郎ども、やっちまえ!」

「やっぱりこうなるのか……」

「溜息ついてないで、戦闘準備しなさいな!来るわよ」

ぞろぞろと出て来る海賊たち。どうやらそこそこの規模の海賊団らしい。やれやれと思いつつも、士郎が武器を構える。

「とりあえず、話を聞きたいからな。峰打ちで頼む」

「わかりました、シロウ」

「お任せください。マシユ・キリエライト、行きます！」

やる気満々な2人を横目に、ポツリとジャンヌが一言漏らす。

「あんたたち、どうやって峰打ちにするのよ」

数分後……

「「すみませんでした」」

正座させられている海賊たち。さしもの海の猛者たちとはいえ、サーヴァントに敵うはずもなく、あつさりと制圧されてしまうのであった。

「それで、少し聞きたいことがあるんだけど、いいか？」

「はいっ！何でもどうぞ！」

「お前たちは何でここにいるんだ？というかここはどこだ？」

「へ、へえ。それはですね、」

「ここは海賊島。まあ、所謂休憩のための島って奴だね」

辺りに響く声。女性の、それもただならぬ強さを感じさせる、自信にあふれた声。声の主が森の中から姿を現わす。

紅色の長い髪に、いかにも海賊の船長っぽい赤いコート。ニカツという効果音が似合いそうな笑みを浮かべる顔にはしかし、大きな傷跡が残されている。

「うちの連中が急にすまなかったね。ちよいと浮かれてたつてのもあるのかもしれないけど」

「あ、ああ。いや、それはいいんだけど……俺たちと戦わないのか？」

「あたしかい？必要ないよ。本当に敵なら、あたしの部下たちが正座させられるだけで済むわけ無いからねえ」

あつさりと敵意がないと言つてのける女性。士郎たちとしてもできるだけ戦闘しなくてもいいというのであれば願ったり叶ったりなので文句はないが。

「俺は士郎。衛宮士郎だ。それからマシユ、リリイ、それにジャンヌだ」

「シロウね。自分からしつかりと名乗るとは、中々しつかりしてる

じやないか。それじやああたしの番だ。フランシス・ドレイク。この海賊団の船長さ」

差し出した士郎の手を躊躇いなくとる女性。その名に士郎とマシユは覚えがあった。

世界一周を生きたながらにして成し遂げた者。

最強と謳われた艦隊を打ち破った伝説を持つ者。

沈まぬはずの太陽を沈めた者。

又の名を、テメロツソ・エル・ドラゴ。

紛れも無い、英雄と呼ばれる存在が、そこにいた。

――

森の奥へと進むことしばし、ドレイクの用意していたキャンプにて、士郎たちはもてなしを受けている。

「ほら、飲みな飲みな！何はともあれまずは一緒に飲む。そつからだよ」

「そ、そうか。なら、頂くよ」

「そうこなくつちゃね。お嬢さんたちはどうだい？」

「いえ、あの……未成年なので」

「私もあんまり飲まないのよ」

「そうかい？ならそつちの黒いのも飲めないとか？」

「ふんっ、馬鹿にしないで。そのくらいのお酒、飲めるに決まっています」

負けず嫌いスイッチが働いたのか、差し出されたジョッキを勢いよく煽るジャンヌ。空になったジョッキを見せつけるようにし、笑みを浮かべているが、顔が赤くなっているのはパツと見てすぐにわかる。「おっ、いい飲みっぷりだね。そうこなくつちゃ。そら、シロウも」「いやいや、流石にそれはちよつと。頭がはつきりしているうちに話したいこともあるし」

「そうなのかい？けど、ジャンヌだっけ？かなりいいペースだよ？」「へ？」

後ろを見ると、既に顔を真っ赤にしながらジョッキを差し出すジャンヌ。口元を手の甲でぬぐいながら、ドヤ顔をしている。

「どうよ？まだまだ余裕よ」

「ああ、待て待てジャンヌ、そこまでにしとけって」

「うるさいわね。あんたも飲みなさいよ！ほらほら！」

止めようと士郎が近づくと、首に腕を巻きつけてくる。酔っ払って

いるからか、力がかなり込められていて、正直痛い！

「あ、ちよつ、ジャンヌ待て！絞まる、絞まるから！」

「ほら、飲・み・な・さ・い・よ・よ！」

「じゃ、ジャンヌさん！先輩が大変なことに！」

「シロウ、しつかりしてください！」

『全く……これではいつまでたつても話が進まないではないか。こんな序盤からつまづいているとは、全く嘆かわしい』

『ロード・エルメロイって、噂には聞いていたけど、本当に厳しそうだなあ。僕なら逃げてたかも』

「んー？どこからか声が聞こえるね。1人はまあしつかりしてるけど……もう1人は軽薄そうだね。あたしの嫌いなタイプだね、こりゃ」

『声だけでデイスられた!?!』

『ええい、さつさと本題に入りたいのだが!』

話がなかなか進まないまま、ジャンヌが士郎にもたれかかるように眠りにつくまで、わちゃわちゃした時間が過ぎて言った。

「スースー」

「まあ、とりあえずジャンヌは置いておいて……改めて俺たちの話を聞いてほしいんだけど」

「いいよ。酒を酌み交わしたらって話だったしね。それで？あんたらはどこから来たんだい？海賊って感じではないし、ましてや海軍だとかでもないんだろ？」

「ああ。俺たちは、カルデアのものだ。少し長くなるけど、いいかな？」

「船旅じゃ、長い話なんざ日常さね。さつさと話しな」

「わかった。まず、俺たちの目的なんだが……」

頼き海の仲間

「はくん、人理の焼却、ねえ。突拍子もなさすぎて、なんだか実感がわかないね、そりゃ」

ジョツキを片手で弄びながら、感心したようにドレイクが声を漏らす。

ジョツキにさらに酒を注ぎ、また一口ドレイクが飲む。

一方、士郎達は一言も発していない。

いや、発することができない、と言うのが適切だろう。

今ドレイクがジョツキとは別の手に握っているもの、それに視線が釘付けになっていたからだ。

「あん？どうかしたのかい？」

「いや、どうかしたというか……」

「あの……ドレイクさん……」

「ん？」

「その、手に持っているものは……」

「ん、ああ、これかい？旅の途中で見つけたんだけど、これがまた便利でね。食べ物とか酒とか、いくらでも出てくるんだ。不思議なものもあるもんだねえ」

ドレイクが手に持ったものを掲げる。

陽の光を浴びて、キラリと光る黄金の輝き。

「なあ、ロマニ……あれって……」

『うん……信じられないかもしれないけど……』

『ふむ。これは、流星に驚いたと言わざるを得ないな』

『あれは、間違いなく、聖杯だ！』

「聖杯？へえ、そんな名前なのかい、これ？」

軽い説明を受け、思案顔のドレイク。手に持った聖杯を眺めながら、何度か頷く。

「で、何？人理に異常があるのも、ここにあんたらが来たのも、全部これが原因ってことでもいいのかい？」

「ええ、まあ。そこですすね、ドレイクさん。無理を承知でお願いしたいのですが、その聖杯を渡していただけないでしょうか」

「はいよ」

「そうですよね、やっぱり無理ですよね……って、ええええっ!？」

あまりにもさらつと、事もなげに答えるドレイクに、驚きの声を上げるマシユ。声にこそ出していないが、士郎やリイも同様に驚いた表情をしている。

「ほら」

「え、あの、その……頼んだ私が言うのもなんですけど、そんなにあっさり渡してしまつて良いんですか?」

聖杯を差し出すドレイクに対し、わたわたしながら、マシユが問いかける。

「いいも何も、あんたらそれがどうしても必要なんだろ?それに、あたしの部下が襲いかかった時の分のお詫びみたいなもんさね」

「いや、別にお詫びなんていいんだけどな。まあ、でも、聖杯を回収しないといけないのは確かだからな。ありがとう」

士郎が礼を言い、呆然としているマシユに代わり、リイが聖杯を受け取る。

「シロウ、これでこの時代の修復は終わった……と言う事なのでしようか?」

「うーん……」

結論から言うと、もちろんそんなことはなかった。

『ちよつと待つて。確かにこれは聖杯だけど、特異点の異常の反応とは違う』

「ドクター、それはどう言うことでしょうか?」

『つまり、そこにあるのは真正正銘、その時代にあるべき聖杯だということだ。フランス・ドレイクが、旅の中で見つけた、彼女が持つべきものだ』

「との事らしいので、すみませんドレイクさん。譲っていたいたものをお返しするのは無礼だとは思いますが、こちらの聖杯の所有者は

貴方です。お返しします」

「そうかい。まあ、よく分からないけど、取り敢えずは返してもらっておくよ。また別のお礼を考えとかないとね」

ドレイクが聖杯を手取る。と、その聖杯は、まるで吸い込まれるように、ドレイクの胸のあたりから、体の中へと入っていった。

「えっ」

「なっ」

「ドレイク……今のは？」

「ああ、なんだか分からないんだけど、あたしの体に出たり入ったりするのさ。まあ、奇妙な感じがするだけで、特に害はないんだけどねえ。胸のあたりが苦しいったらありやしないさ」

カラカラと笑うドレイク。度量が大きいというべきか、大雑把というべきか。細かいことを気にしない姉さん気質なところは、士郎にどこぞの虎を思い出させる。

「しっかし、今の話を聞く限りだと、これとおなじものが他にあるってことだろ？」

「ああ、そうなるな」

「で、あんたらはそれを探しに行かなきゃならないわけだ」

「そうなりますね」

「で、そのための船はあるのかい？」

「……ない、です」

さっそく手詰まりである。まさか一から船を造るわけにもいかないだろうし、というかそもそも造船技術なんて誰ひとりとして持ち合わせてなんかいない。急ごしらえで作られた船なんかでは、とてもではないが海を越えていくことは不可能だろう。

『うーん、こっちからの物資を送ることはできても、船は流石になあ。エルメロイⅡ世は何か考えはあるかい？』

『流石に造船の知識はないな。調べれば出てくるかもしれないが、そもそも船を造るのにどれほど時間が必要だと思う？』

『だよね。言ってみただけ』

「ドクター、ふざけてないで何か策を考えてください」

あはは、と笑うドクターに対しマシユが軽く注意するも、正直エ
ルメロイ二世の言うとおりに、今から船を造るのでは時間がかかりすぎ
る。

「考えてみたら、船を造るだけじゃなくて、操船の技術も必要なんだよ
な……でも、俺たちは誰も船を操縦したことはないし……」

「だろ？そこでだ。あんたら、あたしの船に乗せてやるってのはどう
だい？」

「「えっ？」」

ニツと笑うドレイクからの提案に、驚く士郎たち。あのフランシ
ス・ドレイクが協力してくれるというなら、それは願っても無いこと
だ。

「いいの？」

「いい何も、こつちから提案してるんじゃないか。さっきのお詫び
も兼ねて、その聖杯の探索、あたしたちが手伝ってやるよ。それに、今
の海は異常さね。砲弾食らってピンピンしてるような連中もいる。
あんたらといれば、それも解決できるかもしれないんだろ？」

「サーヴァント……やはりここにも現界しているのですね」

「あたしもそれなりの修羅場はくぐって来たからね。あれが相当やば
いもんだってのはわかる。あたしらの船も、結構な傷を受けちまっ
てね。この島で修復してからまた旅に出ようとしてたところさ。この
異常な海について、もつと知りたいと思ってたしね」

「そうだったんですか……」

「で、どうだい？あたしもあんたらもこの海を探索したい。あんたら
は聖杯を回収したいし、あたしはこの異常をどうにかしたい。協力す
るには十分すぎる理由だと思っけど？」

手を差し出してくるドレイク。少し話ただけでも、彼女の人柄は
なんとなくわかった気がする。

やりたいことをやり、思うままに生きる。その自由さだけではな
く、仁義に正しく、面倒見がよく、そして親しみやすい。笑うときは
思いっきり笑い、楽しむときはまるで子供のように楽しむ。触れ合え
ば触れ合うほど、自分のよく知る女性姉と似ているように感じる。

そんな相手からの提案を、士郎が断ることがあるだろうか？

「ああ。こちらからも頼むよ、ドレイク」

しっかりとドレイクの手を握り返す士郎。それを見て、他の海賊が「新しい仲間に、かんぱーい」と騒ぎ出す。

「よーし、一先ず今日は騒いで、明日から準備に取り掛かるとしようか！」

「えっ、まさか……まだ飲むのか？」

「何言ってるんだい！こんなの、あたしらにとってはまだ序の口さね。あんたもほら、もつと飲みな」

海賊の一人からジョッキを持たされ、ドレイクに酒を注がれる士郎。視線の端では、マシユとリリイもお酒を飲み始めている。こりや逃げられそうにないな、と苦笑しながらも、士郎も酒に口をつけた。

なお、翌日の朝、ほどほどにしておいた士郎と酒豪のドレイク、そして早くに眠っていたジャンヌ以外のメンバーが二日酔いに悩まされることになってしまった模様。

「だらしないねえ、あんたたち」

「す、すみません、姐さん」

「俺たち、動けますっ、うげえ」

「この程度……海賊なら……あ、やつは無理」

「マシユ、リリイ、大丈夫か？」

「は、はい……な、なんとか」

「な、なんのこれしき……王様になるので、これくらい……」

「全っ然大丈夫じゃないじゃない！全く、何をしてるのやら」

「いや、ジャンヌは真っ先に寝てたからで、」

「何か言いました？」

「いえ、なんでも……」

この先大丈夫なのだろうか……なんて不安もあるが、なんとかやっていくしかあるまい。そう思いなおし、士郎は船の修理を手伝うべく、ドレイクに連れられて行くのであった。

魅惑の踊り子

「ふう……」

額に滲む汗を拭う士郎。その後、船の状態を確認した士郎は、二日酔い組のために軽い食事を用意し、自身は船の元へと戻った。

確認して見たところ、船の受けたダメージは想像していたほど酷いものではなく、船大工が動けなくても、士郎一人で数日以内に終わらせそうなものだった。

「お疲れさん、シロウ。ほら、これでも飲みな
「ああ」

みんなの様子を見ていと言っていたドレイクが、水筒を片手に戻って来る。因みにジャンヌはというと、

『海賊を信用したわけではないのです。こいつらが妙な真似をしないように、見張らせてもらうわ』

と言つて、マシユとリリーの側についている。二日酔いに苦しむ二人のことが心配だと、素直に言えはいいのに、なんて思いながら、士郎がドレイクから水筒を受け取り、中身を喉に流し込む。

「ぶっ!? つてこれ、酒じゃないか!」

「何言つてんだい。あたしら海賊にとつちや、そりや水とおんなじ。喉も潤うし、おまけに気分も上がる。むしろ水よりいいじゃないか」
「いや、それでみんな倒れてるんじゃないか」

「まっ、あいつらもすぐに動けるようになるだろうさ。それよりどうだい、船の調子は?」

ゲホゲホツと驚きに咳き込む士郎に対し、ニカッと笑みを向けながらドレイクが問いかける。袖口で軽く口元を拭ってから、士郎が一瞬ジト目でドレイクを見てから答える。

「まあ、これくらいならなんとかなるな。幸い、資材は豊富だし、数日以内には終わると思う」

「へえ、大したもんだね」

「まあ、昔からものを直すのは得意だったからな、つと、ここもだ」

図面を見ているわけでもないというのに、士郎はまるで船のどこに

何があるのかを、全て理解したかのように作業している。

「造船技術はないって話だったけど、やけに船の構造に詳しいねえ。図面もなしによくやるよ」

「ああ、まあ。俺の使える魔術の一つでさ。ものの構造を把握するのは、それなりに得意なんだ」

「便利だね、そりゃ。ま、そろそろ日も高くなるし、昼にしようじゃないか」

「っと、もうそんな時間か？わかった、戻ろう」

用具をしまい、立ち上がる土郎。ドレイクの後が続いてキャンプの方へと歩いていく。みんなどうしているかと思いつながらキャンプへ辿り着くと、

「あら、お帰りなさい」

「へ？」

「ん？あんた誰だい？」

「あつ、マスター」

「シロウ、気をつけてください」

眠りこけている海賊と、少し距離を取り警戒しているマシユたち。そして、海賊たちのそばに座り込んでいる一人の女性。

踊り子のように見える、露出多めの衣装は彼女の魅惑的な肉体をさらに際立たせるようにも見え、優しく微笑む様は、歳上の女性の余裕を見せる。

が、そんなことは土郎にとってはさほど重要とは思えなかった。何故なら目の前の女性、彼女からは紛れもなく、魔力の反応がしている。

「サーヴァント、なのか？」

土郎の問いに対し、ニツコリと微笑む女性。すっと立ち上がり、土郎とドレイクの前に立つ。

「初めまして、マタ・ハリよ。よろしくね」

優雅な所作でお辞儀をするマタ・ハリと名乗る女性。戸惑っているドレイクの隣で、土郎の目がわずかに開く。

マタ・ハリ。世界で有名な女スパイの名であり、男を手玉に取り、翻弄した……と言われている。

よく見ると、海賊たちはどこか幸せそうな顔で眠っている。もしか彼女に？そう思いやや警戒を強くする士郎。

「えっと、聞いてもいいか？」

「ええ、いいわよ。なんでも答えてあげる」

「あんた、なんのためにここに来たんだ？」

戦いに来たのだろうか。それともただ接触しに来たのか。前者ならば気は進まないが倒すしかない。後者なら、その目的を聞けばいい。

「何をしに、と聞かれると……あなたに会いに、かしらね。カルデアのマスターさん」

蠱惑的な笑みを浮かべ、首をかしげるマタ・ハリ。その仕草は大変可愛らしいものだったが、いかんせん、可愛い女性だからといって侮れないのは、聖杯戦争で嫌という程経験してきた。そんな士郎の警戒が下がることはなかった。

「俺に？」

「ええ。あなたと合流すべきだと言われたのよ」

「誰に？」

「心配しないで。あの人たちも、貴方の味方よ」

あの人たち、ということとは、どうやらマタ・ハリ以外にも事情を知っている人、それも自分たちのことを知っている者がいるということになる。だが、特異点化しているとはいえ、この時代にいた、或いは呼ばれた者の中に、カルデアについての知識を持つものなどいるのだろうか。

まさか、レフのようなやつがまだいる……のか？

「……あの海賊たちは？」

「ああ、ごめんなさいね。ここで待たせてもらう代わりに少し甘やかしてあげたら、気持ちよさそうに眠っちゃったの」

「……マシユ、今の話、本当か？」

「あ、はい。確かにマタ・ハリさんは、私たちに害をなす行動はまだしていません」

「そうか……どう思う、ドレイク？」

「ここで私に振るのかい？あんたに会いに来たって言ってるんだから、あんたが判断しな」

「わかった。一先ず、あんたは聖杯に呼ばれたサーヴァントってことでいいのか？」

「ええ」

「因みに、ここへはどうやって来たんだ？」

「海賊に乗せてもらったのよ。ドレイクの船を見たら、すぐに逃げて行っちゃったけど」

「ふむ……」

ここまでのやり取りの中で、マタ・ハリから敵意らしいものは何一つ感じられない。嘘をついているようにも見えない。が、そこはスパイとしては当然のことなわけで、完全に演技きつっている可能性もある……

それでも、ドレイクと出会えたとはいえ、今の特異点の異常については無知に近い。少しでも状況を知ることができれば、それは特異点攻略を進めることになるかもしれない。

「……わかった。取り敢えずは、あんたのことを信じよう。船の修理が終わったら、あんたの仲間のいる所に行けばいいのか？」

「ううん、その前に行かなければならないところ、というより、会わなければいけない人がいるの」

「会わなければならない人？」

「ええ。それがこの歴史を守るために、重要なことなの」

結局その後、マタ・ハリは具体的に『彼女』については話してくれなかった。というよりも、

『場所は聞いてるわ。でも、誰がいるかまでは教えてくれなかったの』と微笑みで返されてしまい、話を打ち切られてしまったのだった。

昼食の準備を行いながら、チラリとマタ・ハリの様子を伺うと、敵意がないことから安心していいのか、既にマシユとリリーの二人が楽しそうに彼女と話している。

いやまあ、確かに敵意がないわけなのだけれども、それにしても

色々と秘密にしているところが少し引つかかっている士郎だった。

「まあ、考え込んでも仕方ないか。よしっ、これで完成。おいしい、昼飯出来たぞー」

眠りこくっている海賊たちはほっておいていいとドレイクが言ったため、士郎が用意したのは自分たちとドレイク、そしてマタ・ハリの分だけだった。

「あら、私のも?」

「そうだけど、何かまずかったか? あっ、食べられないものがあつたとか?」

「ううん。そんなものはないけれど、私サーヴァントよ。食べる必要はないのだけど」

「食事を通じてでも、魔力の補充はできるんだろ? それに、一人だけないってのも変だしな」

既に食べ始めているマッシュたち。リリイとジャンヌに至っては、ドレイクも驚きの食べっぷりを見せている。

「本当にいいの?」

「当たり前だろ。むしろ食べてくれないと、俺が困る」

「そうなの?じゃあ、頂くわ」

長年のスパイ生活で身につけたのか、優雅な所作で食事を口に運ぶマタ・ハリ。その一つ一つの動きが、まるで男を魅了するための手管のように思えてくる。が、

「あ……とても美味しい」

「そりゃ良かった」

余裕のある笑みが、初めて崩れる。口にした料理の美味しさに、思わず素の表情が出てしまう。そのことにハツとするマタ・ハリ。

「?どうしたんだ?」

「あ、いいえ。なんでもないわ。それにしても、本当に料理が上手いよね」

向けた笑みは先ほどと変わらない。余裕を取り戻したような笑顔。それを士郎は、

「そっか。あんな風に言ってもらえるなら、嬉しいよ。みんな最初は

意外そうにするからなあ」

と先ほどの反応を追求するでもなく、今の取り繕った様子にも触れない。

「ふん。そりゃあそうでしょ。普通あんたみたいなのが、料理できるとは思わないでしょう。ほんと、詐欺よね詐欺」

「ジャンヌさん。それ、暗にシロウの料理がとても美味しいと言っていますよね」

「はあっ!? 違っ……き、許容範囲内? そう、まあまあ満足してあげられるレベルということですよ」

「先輩、これがツンデレというやつなのでしょうか?」

「あ、いや……まあ、うん……そんな感じかな?」

唐突に起こるマスターとサーヴァントによる交流に、目をパチパチさせるマタ・ハリ。

「とつても……仲がいいのね」

マタ・ハリの言葉に、顔を見合わせる士郎たち。

「そうだな。かなり色々とあつたからな」

「はい。最初の戦いが、もうずっと遠くの記憶のように感じます」

「これも、シロウの人徳のなせる技ですね。私はまだマスターとサーヴァントがどんなものか、理解しているとは言えませんが、みんな仲良くできる、シロウのようなマスターの元に来て良かったです」
「はあ? 何処がですか? 他はともかく、私は契約上、仕方なく力を貸しているだけです。まあ、退屈はしませんね」

その様子が、彼女にはたまらなく羨ましく思えた。聖杯戦争、そこに召喚される可能性のあるサーヴァントなんて、それこそ星の数ほどいる。自分はその中でも最弱の部類。わざわざ狙って呼び出すような酔狂なマスターもいないだろう。

そんな自分だからこそ、どれほど願っても叶わない、手の届かない^{願望}思い。でも、それに近いものを、彼らはすでに手にしていた。

「素敵ね……貴方達」

強襲する狂気

翌日

朝も早くから、士郎は船の修復作業に取り掛かっていた。今回は1人ではなく、ドレイクの部下たちも手伝ってくれている。お陰で修復作業もだいぶん速いペースで進んでいるのだが、

「シロウのアニキ、頼まれた木材、持って来やしたぜ」

「アニキ、看板の補修、終わりやした」

「次の指示をくませえ、アニキ」

「……なあ、そのアニキって呼び方、どうにかならないのか?」

「ダメですかい?」

「いや、ダメってわけじゃないけど……」

本当にどうしてこうなったのだろう。

自分はただ、昨日の夜ご飯を用意して、負傷者の手当てをして、お酒に付き合っただけ。それだけでこんなに慕われることなんて、ないはずなんだが……

「まあ、いいか。それじゃあ後は帆の修復さえ出来れば、出航できると思うぞ。俺は専門家じゃないから、最終的なチェックは、船大工に頼むしかないんだけど」

「なら俺たちがやっておきますんで、アニキは戻ってください」

「頼んだ。って、もう昼時か。じゃあ、昼飯用意して待ってるよ」

士郎の言葉に更にやる気を出す海賊たち。余程士郎の料理を食べるのが楽しみらしい。基本どんな場所でも、どんな材料でも、士郎の手にかかれば美味しく出来上がって来るのだから、彼らの期待もわからんでもない。

「あ、お疲れ様です、先輩」

「船の様子はどうでした?」

「お疲れ様、マシユ、リリイ。修理の方はもう少して終わると思う」

トレーニングをして来たらしいマシユとリリイと途中で合流してから、ベースキャンプへと向かう。相変わらず努力家である2人に感

心しながら、そんな2人のためにも美味しい料理を作ろうと密かに気合を込める。

「お、戻って来たね」

「おかえりなさい。川で水を汲んで来たの。冷たくて美味しいわよ。ジャンヌも手伝ってくれたわ」

「別に、暇だっただけですから、勘違いしないで。まっ、ありがたく飲むことね」

戻った士郎たちを出迎えるドレイクたち。マタ・ハリが笑顔でみんなに水を配る。士郎もありがたく喉を潤す。澄み切った川の水は、普段の水とは異なるうまさがあった。

「ありがとう。早速めしの用意をするか」

「私も手伝うわ」

「あ、ありがとう、マタ・ハリさん」

「どういたしまして」

ニッコリ笑顔で答えるマタ・ハリ。さらっと腕を組んでくる彼女の距離感に少し苦笑気味の士郎。それに対し、どこか苦々しげなジャンヌが近づく。

「ちよつと、馴れ馴れしくないかしら?」

「そうかしら?良かったら、ジャンヌも一緒にどう?とても安心できるわ」

「なっ、べ、別に!」

ふんっ、と思いつきりそっぽを向くジャンヌに、士郎は首をかしげる。隣のマタ・ハリは、ジャンヌの様子を見てくすりと笑う。

「可愛いわね、あの子」

「あの子って、ジャンヌか?顔立ちは可愛いというよりは美人って感じだと思うけど」

「そうね。でも、彼女のあり方が可愛らしいのよ。うふふ、まるで気まぐれな猫みたいね」

「猫、うーん……」

なんとなくわかるような、わからないような……そんなことを考えながらも、士郎はマタ・ハリと共に食事の準備を始める。女を磨く一

環で練習していたのか、マタ・ハリの手際も意外とよく、予定より早く、全員分の食事を用意することができた。

「美味しいかしら?」

「美味いっす!」

「毎日作ってくれ〜!」

「あらあら、うふふ」

だらしなく鼻の下を伸ばしながら答える海賊達に、慈愛の笑顔を向けるマタ・ハリ。完全に子供の様子を見守る親のような感じが出る。

「マスターはどうかしら?」

「あ、ああ。俺の知らない味付けだったけど、結構いけるな、これ。今度教えてくれるか?」

「ええ。いいわよ」

「なんででしょう、マタ・ハリさんの先輩を見る目が、海賊の皆様の時と違うような……」

「そうですね? 私はよくわかりませんが」

「……ふんっ」

「全く、うちの野郎どもと来たら……」

マタ・ハリの様子を見ながら話し合う土郎のサーヴァントたち。そして部下の様子に苦笑しながら溜息をつくドレイク。

賑やかな食事の時間は、穏やかに過ぎていく……

……筈だった

『遠坂の弟子、聞こえるか?』

「ロード・エルメロイⅠⅠ世か。なんだ?」

『長いから諸葛孔明と呼べと……いや、それはいい。島に新たなサーヴァントの反応が上陸した。今そちらに向かっている』

「っ!」

一瞬で緊張の糸が張り詰める土郎。その様子に、ドレイクたちも周囲を警戒します。

「敵かい？」

『ごめん、そこまではわからない。だから警戒は怠らないでくれ』

「クラスはわかるか？」

『ごめんそれも……でも、まっすぐ向かってるってことは、多分アーチャーやキヤスターではないと思うよ』

つまり、ある程度接近戦に自信がある、或いはそれだけの知性を失っている相手ということになる。

ズシリ——ズシリ——

重々しい足音が聞こえてくる。それほどの巨体か、或いはそれほどに重い獲物を持っているのか。

「来るぞー！」

「見ツケタ！見ツケタ、見ツケタ、見ツケタ！」

筋骨隆々な体に、何処か気品があるように思える顔。しかしその顔は狂気に歪み、身の丈ほどもある斧がまるで血に染まっているかのような赤色を覗かせる。

「こいつはー！」

「ドレイク、知ってるのか？」

「やばい奴さね。大砲の直撃喰らっても生きてたとはね。こいつもあれかい？サーヴァント、だっけか？」

「ああ。バーサーカー。狂戦士のサーヴァントだ。基本的に理性を失っているから、本能に任せた動きが多い」

「なるほどねえ。通りで唸り声しかあげなかったわけだ。こいつも、あの岩の塊みたいなもの」

すかさず銃を手に取り、ドレイクが構える。

マタ・ハリに下がるように指示し、士郎が両手で剣を握る。

「マシユ、前衛頼む。ジャンヌ、リリイ、マタ・ハリは後方待機！海賊たちを頼んだ」

「了解！」

「はいー！」

「ええ」

「わかったわ」

士郎とマシユがドレイクの横に並ぶ。

「ドレイク。俺たちがあいつに切り込む。ドレイクは銃による援護を頼みたい」

「言つとくけど、あたしは狙いがめっちゃいいわけじゃないよ。下手すりゃ、あんたらに当たるかもしれない」

「当てるのは強烈な一撃でいい。隙は俺たちで作る。直ぐに離脱するから、その時に頼む」

「気合い十分つてわけかい。いいよ、乗ってやろうじゃないか」

海賊たちに合図を出すドレイク。各々が銃を手に取り、ドレイクの背後に控える。ドレイクのすぐ後ろにジャンヌたちがつき、いざという時に海賊たちを守るようにする。

一歩前に進む士郎とマシユ。チラリと士郎がマシユの様子を伺うと、マシユが丁度士郎の方を向き、目が合う。

頷くマシユ。それに対し、士郎も頷きを返す。

「行くぞー！」

「はい！サーヴァント、マシユ・キリエライト、戦闘に入ります！」

雄叫びをあげながら、敵が斧を振り上げる。対する二人は臆することなく敵に向かって突っ込む。振り下ろされた斧が盾と激突する。全力で斧を弾くと、マシユが横にステップする。

「うおおおっ！」

入れ替わるように前に進み出た士郎の剣が、敵サーヴァントに向かって振り抜かれる。

それなりに離れた場所、木々の中から、男は様子を伺っている。手に持っているのは、その時代には似合わないライフル。そのスコープを覗き込むようにしながら、彼は正確に士郎たちを捕捉している。

「どうやら、邂逅したらしいな……きて、人類最後のマスターの実力、しっかりと僕が見極めるとしよう……」

完全に覆われた顔からはどんな表情をしているのかは伺えないが、その声はひどく冷たく、事務的なものに聞こえる。

彼の啜えたタバコの煙だけが、ゆらゆらとその場で揺れている。

迫り来る脅威

「ヌオアアアア！」

「がっ!?ぐうっ」

振り下ろされる斧を咄嗟に両手の剣を交差させることで防ぐ。ズシリと重い一撃はしかし、それだけで体力をぐっそりと削る。

受け流すことができたなら話は別だったろう。しかし真上から今にも自分を潰さんとする重い一撃に、士郎は身体が悲鳴をあげそうになるのを感じる。

(重っ……けど、今ならー！)

「やあああっー！」

斧と士郎に意識を向けていたバーサーカーの懐深くまで、マシユが踏み込む。薙ぎ払うように叩きつけられた盾の一撃は、バーサーカーを大きく後退させる。

更に一瞬攻撃の手が緩まった瞬間を逃さず、士郎が斧を弾き上げ、敵の手から落とさせる。

「ドレイクー！」

「応さー野郎どもー！」

ガラ空きとなったバーサーカーへと浴びせられる大量の鉛玉。本来人の武器でサーヴァントを傷つけることは難しいはずだというのに、その攻撃は確実にバーサーカーにダメージを与える。

「グウ……」

「あれを耐えるのかい？やっぱりバカみたいな耐久力だね」

「サーヴァントになったということは、基本は英霊になるだけのことをした人ってことだ。それに……」

チラリと士郎はバーサーカーが落とした斧を見る。素早く近づいたバーサーカーが斧を手に取る。即座に士郎はその武器を観察してみる。

(生きた武器……血を吸収し続けなきゃいけない性質か……)

つまりはこちらがダメージを受ければ受けるほど、あの斧は本来の力を取り戻していく。生きたまま武器として使われる魔獣の力……

血塗られたその斧と狂気……

『血斧王』

その二つ名が頭に浮かんだ。

「バイキングの王様、エイリーク・ブラッドアクス……」

「あん？」

「多分、あいつの正体だ」

「待ちな。エイリーク……エイリーク……その名前確か聞いたことがあったような気がするね……かなり昔の人物じゃなかったかい？」

「そうだ。サーヴァントは生前の逸話や伝説により、人間を超えた存在、霊長類最強にして最高。そんな奴が相手なんだ」

「聞けば聞くほどデタラメな連中だね、そりゃ。でも、あんたんこの娘たちも、おんなじくらいデタラメなんだろう？」

「……まあな」

ドレイクの言う通りだ。たとえ相手が恐ろしいまでの狂気を秘めた血に狂う王だったとしても、彼女たちがいるのならば大丈夫だ。

「よしつ。マシユ、ジャンヌ、リリイ！合図で前後入れ替え、速攻行くぞ！」

「はい！」

「お任せを！」

「ええ」

バーサーカー、エイリークが斧を振り上げながら突っ込んでくる。両手で斧を持った大振りの一撃。

「マシユ！」

「行きます！」

同時に走り出す士郎とマシユ。マシユが先行し、全体重をかけながらエイリークの一撃を受け止める。

「っああっ！」

素早く前に回り込んだ士郎が、勢いの止まった斧目掛けて、両手の剣を下から上に振り上げる。全体重を込めた一撃は、斧を弾き上げ、エイリークの態勢を崩す。

「リリイ！ジャンヌ！」

「行きますすー！」

「ふっ！」

士郎が合図を出すと同時に、マシユと2人で後ろに飛ぶ。入れ替わるように、カリバーンを構えたりリイと、旗ではなく剣を手にしたジャンヌが飛び出す。

同時に剣を振るう二人が、エイリークの身体を一閃する。胸元にX字の深い傷を負ったエイリークがよろける。

「グガウウウ……テツタイ……」

士郎たちがとどめをさす前に、エイリークは霊体化し、その場から姿を消した。あたりを警戒するが、どうやら言葉の通り、撤退したらしい。

「やった……わけじやなさそうだね」

「ああ。多分撤退しただけだ。けど、バーサーカーであるあいつが、そんな判断を自分でできるとは思えない。マスター、或いは他に手綱を握ってる奴がいるな」

「船長、エイリークが戻ったよ」

「見るからに撤退に追い込まれたみたいですね。ということとは、」

「どうやらお仲間が増えちまつたらしい。やだねえ、おじさん的には面倒ごとはごめんなんだが」

海上に浮かぶ海賊船。そこに乗っているメンバーは、一見普通に見えて、けれどもそうではない。この時代には似つかわしくない服装の男に、二人の女海賊……それらを従える船長は、

「デュフフ。どうやら新しく来たマスターはかなりの美少女をはべらせているらしいですぞ。それも後輩、純真、ツンデレ……属性盛り盛りで羨ましい！」

およそ海賊とは思えない口調と態度の男。けれども、そんなおちゃらけた態度を取っているにもかかわらず、その視線は鋭く獲物の方向を見ている。

「こうしてはいられないですなあ。総員、急いで奴らのもとに行きますぞー！いぎ、黒髭ハーレムを作るために！」

「いや、誰もそんなもののためにこの船は乗ってねえと思うけどねえ」

ザザーン——ザザーン——

甲板の手すりから少しだけ身を乗り出し、マシユがほうつと息を吐く。隣に並ぶように立っているリリイが、潮風になびく髪を片手で抑える。

無事に修理を終えた船に乗り、士郎たちは海賊島から出発し、この時代の聖杯探索へと出発していた。

「これが船から見る海ですか……ネロさんの時は楽しんでいる余裕なんてなかったので、よく覚えてないのですが……辺り一面が水、というのは、とても新鮮です」

「私입니다。修行の旅は基本的に陸路ばかりでしたから。こういう船旅も、いいものですね」

微笑み合う二人。少し離れた場所から、ジャンヌが二人を眺めている。ジャンヌにマタ・ハリが近づく。

「ジャンヌは混じらないのかしら?」

「何を聞いてくるかと思えば……結構です。私は別にこんな景色のこと、どうとも思っていないので」

「そうかしら? 私は好きよ。優しい波の音、潮風の香り、そしてこの日差し。とても素敵じゃない?」

「……ふん」

「あら、うふふ」

内心舌打ちするジャンヌ。何故だろう。このマタ・ハリというサーヴァントには何もかもお見通しとでも言わんばかりである。たしかに、初めて経験するこの景色に、心が少し、そう、ほんの少し踊ったこともなくはない。けれどもまるでそれを、わかっているわ、みたいな顔で見透かされるのはどうにもむず痒い。

「……最悪ね」

「うふふ。そういうことしておきましょう」

「んー……特徴ねえ」

「なんでもいいんだ。相手の外見とか、武器とか。そこから相手が何者か、絞り込めるかもしれない」

船内、ドレイクの部屋にて、士郎とドレイクが話している。ドレイクの出会った化け物のような人間たち、そのサーヴァントたちを特定すべく、士郎はドレイクに考えられるだけの特徴を上げてもらおうとしていた。

「そうさねえ……2人組の女海賊がいたね」

「2人組？」

「あー……確か片方はでかくて銃を使って……もう片方はちつこくて剣を使ってたね」

「剣に銃……女海賊……なあドクター。これって」

『うん、間違いない。女海賊で2人組、それもその武器ときたら、そんなのもう彼女たちしかいない。アン・ボニーとメアリー・リードだ。現代でも割と知名度のある海賊だね』

「あとはそうだねえ……なんだか古臭い格好した男もいたね。昔々の物語みたいなのに出てきそうなやつ。武器は槍だったね」

「……それは流石に幅広すぎるな。ちよつと予想できそうにもない」

「あとは船長って呼ばれてた男だね。立派な黒い髭を生やして、まさに海賊のイメージぴったりの格好してたね、ありゃ」

「黒い髭の海賊……」

その響きにピンとこない人はそういえないだろう。無理もない。彼は世界で最も有名な海賊なのだから。あらゆる富と女性、そして海は彼が支配し、その名は世界の果てまで残る。

「エドワード・テイチ……黒髭か」

気配を完全に断ちながら、男は彼らの様子を伺う。暗殺者故のスキルに加え、彼の保有する固有能力が、彼の呼吸までもを悟らせない。いつの間にか潜り込んでいた彼に、誰一人として気づかずにはいた。その瞳が青年を捉える。

「カルデアのマスター……僕は、考え方が合わなさそうだ」

彼の理想の正義は、自分のそれと近いようで、それでも異なるとする

ぐにわかった。

彼は自分のやり方をよしとはしないだろう。

なら、

「僕は僕のやり方で、この特異点の解決を進めるとしよう」

わかり合おうとするために時間を使うくらいなら、別々の考えを持ったまま行動した方が早い。そして、より確実でもある。

そう考えた彼は、青年から視線を外し、その場で姿を眩ませる。

異様な島

波に揺られる船の上から、士郎は水平線の彼方を見つめる。パツと見ではただ景色を眺めているだけのようにも見えなくもないが、彼は周囲の索敵をしていた。

双眼鏡や望遠鏡を使わずとも、彼には弓兵にとって重要なファクター、類稀なる視野を發揮することができる。

剣をより鋭く、盾をより硬く、光をより明るく。それが強化の魔術。その応用で己の感覚を補助している。

と、彼の視界に島が映る。それなりの距離を進んできたが、未だ手がかりなしの状態だった。あの島で何か見つけられれば……

すぐさま士郎はドレイクへ島があることを伝えたと、彼女も同意見だった。

「何かあるかもしれないなら探してみるのが吉さね。そういう冒険心があつてこそその海賊でもあるしね」

ドレイクが舵を切り島へと方向を修正する。なんとも言えない予感に近いものを感じながら、士郎がじつと島を見つめていると、

『シロウ、ちよつといいかしら?』

と、突然通信が入る。鈴の音のような少女の声。

「珍しいな。どうした、ステンノ?」

『ええ。普段なら別にあなたがどうしているかに干渉する気はないのだけれど、今回は別ね。気になることがあつたから』

「気になること?」

基本人間がどう困難に向かつて行くかを眺めて楽しむだけ、それが女神ステンノ。しかしそんな彼女がわざわざ自分に連絡してまで気になることなんて、一体何なのだろうか。

『今向かつてる島のことなのだけれど。感じたの』

「感じた?何をだ?」

『いるのよ、そこに。ロマニは反応はなかったと言っていたけれど、間違いないわ』

「いる、って誰が？」

『そうね……女神と……怪物、かしら？』

そう答えたステンノは笑っていた。あ、これは分かっている顔だ、と士郎は即座に理解する。その表情が彼女、遠坂凜の時折見せるからかうような表情に、とてもよく似ていたのだから。

「自分の目で確かめろってことか？」

『ええ。簡単に答えがわかってしまったら、旅に面白みがないじゃない？ 私はあなたの物語を見物するだけなもの』

「はいはい、わかりましたよ女神様。まあ一応忠告という形で受け取っておくよ。ありがとう」

『ふふっ、どういたしまして。それじゃあ、お話はここまでね。頑張って私を楽しませなさい』

最後にまたからかうような笑顔を見せてから、ステンノは通信を切った。

「怪物……またキメラかドラゴンか、或いは……」

かつて対峙したことのある怪物を思い出す。

まるで巖のような大男。

その動きは獣のそれと、勇士のそれとが合わさったまさに無双の男。

「サーヴァント、か」

気を引き締めながら、士郎は近づくと島をじっと睨んだ。

上陸前までの感想としては普通の島、そう見えていた。

だが、一步島に踏み込んだその瞬間、士郎は警戒レベルを上げざるを得なかった。

「先輩？ どうかしましたか？」

「……」

マシユの問いに答えるでもなく、士郎は足元の砂を険しい表情で見つめている。

否、正確にはその砂の奥を感じていた。

「シロウ？ 何かあったのですか？」

「ちよつと待ってくれ。確かめたい」

一歩足を踏み入れた瞬間に、体に謎の悪寒が走るのを、士郎は感じていた。それはまるであの時と同じ。学校に張られた結界に踏み込んだ時、或いは串刺し公の領地に踏み込んだ時に似ている。

何者かの支配する領地、空間。自分にとって危険とも思える場所にして、その支配者の狩場足り得る場所。

つまり……

「トレイス・オン
同調、開始」

嫌な予感を確かめるため、地面に手をつき魔力を走らせる。遠坂にも言われた自分の空間把握力の高さを信じるなら恐らく……あたりにあるのは砂と海、そして……

「っ、やっぱりか……ドレイク」

「何だい？」

「ドレイクたちは船の側で待機してくれ。探索は俺たちでやる」

「先輩？」

「シロウ？」

突然の士郎の発言に驚くマシユとリリイ。一方ジャンヌは声にこそ出していないが、何やら納得したような顔をしている。

「シロウたちだけでかい？別に構やしないけど、またどうしてだ？」

「この島は何かおかしい。多分何かしらの結界が張られている。それも大規模なやつだ。この規模のものを張れるなんて、並大抵じゃない。多分、サーヴァントかそれに近い何かがいる」

「なるほどね。だからあんたたちだけのことかい」

「ああ。それに……」

先程のステンノとの通信を思い出す。恐らく彼女は嘘をついていない。彼女とはまだ知り合って日が浅いが、つまらない嘘をつくはずがないことはわかる。

つまり、この結界を張っているのは女神か怪物のどちらか。それも、どちらかは、或いは両方、彼女がわざわざ気になる、と言うほどの存在。女神の場合はそれなりの神格であるということ、怪物の場合にはそれだけ危険であるということ。

不測の事態を考えるなら、ドレイクたちにはすぐに逃げられるようにしておいてもらったほうがいい。

「本気でヤバイと思ったら、合図を出す。すぐに逃げられるよう準備してくれ」

「……はあ。わかったよ」

海賊としては島の探索に加わりたかったのだろうドレイクだったが、士郎の本気の視線に折れた。

「何かあったときのために、サーヴァント側も何人が残った方がいいんじゃないの？」

と、意外なことにジャンヌから提案が上がる。確かにその通りだと感じる士郎。必ずしも探索側が遭遇するとは限らないのだから。

「なら、今回行くのは俺と……そうだな……」

「私が行くわ」

真っ先に挙手したのは、マタ・ハリだった。これまた意外な出来事に、思わず驚いてしまう。

「マタ・ハリさん？いや、でも戦闘は苦手って」

「ええ。でも私は元スパイ、クラスはアサシンよ。こういう隠密行動には向いていると思うのだけれど」

「む」

確かに。悪意のなさげな言動から忘れがちだが、彼女は有名な女スパイである。もともと、どちらかといえば表立って行動するタイプのスパイだった気もするが……

「まあ、わかった。ならマタ・ハリさんと、」

「わ、私も行きますー！」

名乗りをあげるマシユ。何やら慌てているようにも見えるが何かあったのだろうか。

「マシユ？」

「いえ、その。と、トラップや奇襲があったときに、私ならすぐに防げると思うので」

それもまた確かに、と納得してしまう。シールドという特殊なクラスの彼女は、あらゆる攻撃に柔軟に対応できる。加えて彼女の宝具

の守りも一級品だ。

「わかった。なら、俺とマシユ、それからマタ・ハリさんの3人で行くよ。2人はここで船を守っていてくれ」

「お任せくださいー」

「わかったわよ」

グツと拳を握り気合いを入れるリリイ。ジャンヌはどこかほっとしている様子。ちらりと彼女が微笑んでいるマタ・ハリに視線を向け、さっとそらす。

どうやらマタ・ハリと別行動できることにほっとしていたらしい。仲良くして欲しいけどなあ、と思わず苦笑してしまう土郎だった。

「……………」

「この島か……」

一足先に森の中に入っていたフードの男が、影に隠れて土郎たちの様子を伺う。

特異点の危機を回避する最速の方法、それを実行すべく彼はここまでついでってきた。

「後は彼女を見つけ出し、始末することだな」

物騒なことを呟きながら、男は気配を消しながら歩き出した土郎たちを追う。

己がやり方で救うために。

男は啜えていたタバコの火を消し、銃を手取る。

フードの奥の瞳は、まるで死んだ魚の如く覇気のないものでありながら、同時に獲物を狙う狩人の如き鋭さを見せる。

仕事だから。

それが彼が殺す理由。

それがより最善であることを信じて。

迷宮への入り口

「それにしても先輩、どうして結界が張られていると分かったのですか？普通、一流の魔術師でなければ、隠された結界に気づくことはないと思うのですが……」

島の奥へと進むため、木々の間を進みながらマシユが士郎に問う。試してみた結果、どうやらこの島にいる間はカルデアとの通信も阻害されているらしく、映像が繋がらない上、会話も途切れ途切れのものになってしまっていた。

ここまでして、いかに厄介な結界があるのか把握できたものの、そもそも何がきっかけで結界の存在自体に気づけたのかが、マシユには不可解だった。

本人は魔術師として三流と言っていたが、事実彼は他の誰もすぐに察知できなかった結界に気づいている。戦闘時の能力についてもそうだが、魔術師としての腕についても、謙遜しているのではないかとそう思った。

と、その問いに対し、士郎は片手で頭の後ろをかきながら、少し考えこむ。

「あー、なんというか……これも俺の固有結界の副産物、なのかもな。どうにもこういうのには気付くつていうか……前にも結界に足を踏み入れた時にわかったし、その基点らしいのも割と感じ取れたしなあ」

「副産物……先輩の解析や投影と同じですね」
「そういうことになるな」

曰く衛宮士郎は魔術師として三流もいいところ。それは彼が保有している唯一の魔術にのみ特化しているから。

しかしその魔術に必要なものに関しては、彼は常人どころか一流の魔術師ですら軽く凌駕する能力を持つ。

例えば宝具の解析。更には宝具の投影。

カルデアにいる者誰もが秘匿情報として報告書にも記載しなかった彼の魔術。その事が明るみに出れば、彼は間違いなく封印指定さ

れ、多くの者から追われる者になるだろう。でも、

(きつと先輩は、そうなるとわかっていても、誰かの為にその力を使います……それが自分を追い詰める事だとしても……)

未来が取り戻されたとして、いつか来るであろう出来事を思い、少女は1つの感情を抱く。

その時になっても、この人を支えたいと……

魔術師としてはやはり不思議だ、そう彼女は感じた。自分の生前にも魔術を研究するものはいたし、スパイとして魔術の情報を集めたこともある。

その中で知った魔術の探求者たちは、思想は違えど1つの共通点があった。

己の魔術はその探求のため、己の知識は探求のため。来るものを拒み、去る者を逃さない。どこか人としての温かみをなくし、まるで機械のよう^とまで思えるところもあった。魔術師は人と思うべきではない、そう彼女が思うまでに。

死後、まさかサーヴァントとして呼ばれるようなことがあるとは思って^もいなかった。けれども同時に魔術師の相手は慣れているため、いつも通り、^{スパイで暗殺者}マタ・ハリでいればいいのだろうと、そう思っていた。

けれども、彼は違った。

ここで出会ったマスター、魔術師であるはずの彼は、人並み、いやそれ以上に他者を思いやり、温かい。その温かさは歪だとどこかわかりながらも、彼の与えてくれるものは、どうしてもマタ・ハリを、^{マルガレータ}彼女を呼び起こしてしまう。

ただスパイとして、サーヴァントとしてではなく、本心から、このマスターについて行ってみたい、そんな気持ちにさせてくれる。

(聖杯への望み……私の……)

—————

「つと、2人とも止まってくれ」

急に立ち止まり声をかける士郎。何か見つけたのだろうか。周囲

を警戒してみるが、敵らしき影は見当たらない。

「何かあったの？」

「いや、この辺りに、何か強い違和感というか……」

「先輩がそういうのでしたら、何か隠されてるのかもしれないね。例えば……そうですね。あの大きな茂みの後ろに何かしらの神殿への入口があるとか」

「いや、流石にそこまでわかりやすいものは「あったわ」えっ？」

士郎が振り向き、少し前にマシユが指差したやたらと大きな茂みの方を見る。いや、正確には茂みのあった場所を。

マタ・ハリの魔力弾により、茂みはどかされており、その裏から大きな洞窟のようなものが現れる。ぐ丁寧に、地下へと向かっているらしい階段付きで。

「なんでさ……」

「ほ、本当にありましたよ、先輩」

「凄いわねマシユ。お手柄よ」

「いえ、これは先輩の言葉を頼りにしただけで」

「でも見つけるきっかけを作ったのはマシユだ。マタ・ハリさんの言う通り、お手柄だな」

「あ、ありがとうございます」

マタ・ハリによしよしされながら、マシユがはにかむように微笑む。微笑みを返し、士郎が洞窟の方へ向く。

各地を旅した中で培われた感覚が訴える。この先は危険だと。単純に中から漂う異様な魔力のこともだが、ステンの言葉のこともあり、油断はできない。

「この先だな……2人とも、準備はいいか？」

「はい」

「ええ」

領き合う3人。あたりをもう一度警戒し、ゆっくりと地下へと続く階段を降りていく。

「あの中に入るのは、流石に厳しいか……」

顔を覆った男が呟く。敵に場所を悟られないようにそれなりの距離を保ってきたが、それ故にあの中での追跡は不可能となってしまうた。

「下手に散策して、僕の存在に気づかれるのも厄介だから……ここ
で待つとしよう」

そもそもあの中に入ったからには、自力で出ることはほとんど叶わないと見ていい。あれは一度入ったものを決して逃すまいと作られた、一種の牢獄。

伝承によると脱出に成功したあの英雄も、助け[※]がなければ、そのままあの中を彷徨っていたであろう。

それに、そこに潜む者……牢獄の住人でありながら主、王子でありながら怪物……出くわしたとして、果たして彼らは生きて出られるだろうか。

「さて、見せてもらおうとしようか。この迷宮^{ラビリンス}をどう攻略するのか」

「ううっ」

「どうかしたの？」

「だれか、きてる。まりよく、かんじる」

「そう……ついにここまで来てしまったのかしら、あの黒髭の海賊」

「だい、じょうぶ。ぼく、たおす。たお、して、まもる」

「そう。ありがとう、『雷光^{アステリオス}』」

その迷宮の奥も奥。たどり着くことはおそらく不可能なのではないかとさえ思える、そんな奥の場所で、怪物と女神は話をする。それはまるで、御伽噺の世界のように、恐怖も、怒りもなく、ただどこか美しい光景だった……

ラビリンスの主

階段を降りきった先はもう視界が真っ暗、というわけでもなく不思議と視界だけは良好だった。それだけにはつきりと見えてきたものがある。

「これは、迷路でしょうか？」

「みたいね。どうでしょうか、マスター？」

「進むしかないな。ドクター、反応は？……ドクター？」

自分たちの侵入した迷路——いやこの場合は迷宮といった方が正しいだろう。内部に入ったからには何かしらの反応をキャッチできるようになったかもしれない、そんな僅かな期待もありカルデアに呼びかけたが、応答がない。

「どうやらこの迷宮の中じゃ、カルデアとの通信も阻害されているみたいだな」

「困りました。これでは敵性反応の接近も感知できないかもしれません」

「油断は禁物ということね、任せて。それでもスパイだったのよ。人の気配を察するのなら少しは役に立てると思うわ」

「助かるよ、マタ・ハリさん。つと、そうだ。試してみるか？」

言いながら士郎が迷宮の壁に手を当て目を閉じる。

「同調、開始」
トレース・オン

魔力を走らせ迷宮の構造を把握しようとしてみる。身体から流れ出た魔力は壁に浸透し——

「っ、ダメだ。ここの構造はどうやら俺には読み取れないものみたいだ」

魔力を浸透させようと試みたものの、壁に触れた瞬間に、自身の魔力がはじかれる。剣ほどではないが物質の構造を読み取ることがそれなりに得意なはずだったが、まるで英雄王の乖離剣を読み取ろうとした時と同じように、いやそれ以上に構造を把握することが不可能なように思える。

「この迷宮そのものが結界ってことなのかもしれないな」

「だとしますと、こちらからの干渉は難しいと思われまます。解除するには結界の起点を破壊するか、結界を仕掛けた術者を倒すかしかありませんから」

「でもそううまくいくかしら？迷っちゃいそう」

「そうですね……って、先輩！来た道順、覚えてますか？」

「あ」

まさかのここで痛恨のうっかりである。遠坂から伝染してしまったのだろうか、もしそうだとしたら厄介極まりないことであるが。しかしまあ本当に厄介なことになってしまったらしい。さらに言えばこの迷宮、入ったものを絶対に逃がさないための概念でも定められているらしく、道順を覚えようとしてもすぐに忘れてしまう。そう簡単には進ませてくれないらしいし、同時にそう簡単に帰らせてもくれなさそうでもある。

「これはもう、迷宮の主と出会えることを期待して進むしかないな」

「そのようですね。先輩、ここは私が先頭に立ちます。トラップの類がある場合、盾を持っている私なら傷を負う可能性も低いかと」

「でもそれじゃあマシユを一番に危険にさらすことになるだろ？それはちよつとなあ」

「あらあら、マスターはマシユのことが心配なのね。でもここはマシユの言うとおりにする方が正解だと思うわ。あなたが先に倒れてしまったら、私たちは二人とも戦えなくなってしまうもの」

「……だよな。すまないマシユ、頼めるかな？」

「お任せください」

盾を構えなおすマシユ。マシユ、士郎、マタ・ハリの順に並び壁を伝うように歩を進める。いやに静かな空間には自分たちの足音だけが響き渡る。

「そこそこ歩いてきたけど、トラップや敵の類はいないのかもしれないいな。いるとしたら、」

「この迷宮をここに作り出した何者か、ですね。この規模ともなると人間の魔術師とは考えられません。やはりサーヴァントの類でしょうか？」

「かもな。実はここに来る前にステンノからこの島には女神と怪物がいるって言われていたんだけど、もしかしたらそのどちらかかもしれない」

「もしかしたらその両方かもしれないわよ」

ステンノがわざわざ忠告するのだ、よほど厄介な相手が待っているということなのだろう。気を引き締める三人だったが、

「みつ、けた」

「っ!」

かけられた声は後ろから。いつの間に関り込まれていたのだろうか。気配も何も感じ取ることができなかった。

しかも驚くべきことは小さな相手ならいざ知らず、相手はかなりの巨体だった。自分の知っている巖のようなあの大英雄、それよりも更なる巨体。両の手に持っている長い獲物は、生半可な力では振るうことすら叶わないだろう。

しかし何よりも目を引くのは顔を覆う仮面。ある動物を連想させるその仮面。目にあたる部分は空洞となっており、まるで死体を連想させる。仮面から伸びる二本の大きな角は、相手の体格をさらに大きく見せてくる。

「うう、おまえ、くつてやる」

唸り声ともとれる片言の言葉。目の空洞の奥に見えた瞳は、しっかりと士郎たちを見据えている。

「ま、まさか」

「そういうことかっ。この迷宮は神話に伝わる大迷宮、「ラビリンス」!その主つてことはこいつは神話の怪物、ミノタウロス!」

両手を広げ立ちふさがる巨大な影は、圧倒的な存在感と威圧感を放ち獲物を見据える。

「わた、さない。ぜったい」

「?何のこと、っ!」

勢いよく振り下ろされた一撃をかろうじてよける士郎。先ほどまでの通路のサイズであれば、彼の持つ長い武器を振り回すことなど不可能だったというのに、いつの間にか狭かったはずの通路が広がり、

十分に戦えるだけのスペースが出来上がっている。

「どうやら、ミノタウルスの意味でこの迷宮を自在に操れるようですね」

「そういうことはつまり、こいつを倒さない限りは脱出することもできなさそうだな。マシユ、戦闘態勢。マタ・ハリは下がってくれ」

「わかったわ」

「了解です、マスター」

近接戦闘が得意ではない、どころか隠密行動・諜報活動以外のことに關しては不得手であるというマタ・ハリを下がらせながら、士郎は素早く両手に武器を投影する。

盾を構え地面を踏みしめるマシユの隣に並ぶ士郎。

「これだけの巨体となると、パワーもかなりのものだろうな。マシユ、気を引き締めていこう」

「はい、マスター。マシユ・キリエライト、行きます！」

神代の少女

「がああああっ!!」

「ぐっ、つつあ!?!」

怪物の振るう一撃を双剣で防いだものの、その巨体から繰り出されたパワーまでは防ぎきることができず、大きく弾き飛ばされてしまう士郎。地面をすべるようになりながらもなんとか勢いを殺そうとするが、壁にそのまま背中を強く打ち付けてしまう。

「がはっ」

思わず空気が漏れる。呼吸が止まり、膝をつく。

「ぐあああっー!」

雄たけびをあるようにしながら怪物が士郎に迫る。立ち上がろうにも今の衝撃で体がしびれてうまく動けない。士郎めがけて怪物が武器を振り上げ――

「マスターー!」

突如飛んできた魔力弾が怪物の背中に直撃する。大きなダメージにこそならなかったものの、怪物の意識がそちらに向けられる。

魔力弾を放ったのはマタ・ハリ。サーヴァントとして現界した際に使えるようになった数少ない攻撃手段の一つ。しかしながらその魔力弾もあくまで敵の意識をそらすことにしか使えない。

怪物が標的を変えマタ・ハリに迫る。動じることなくマタ・ハリはまるで踊るように一歩、また一歩と下がる。士郎から怪物を少しでも遠ざけるため、怪物の意識を引き付けておこうと下がりながらも魔力弾を連続で放つ。

しかしやはり戦闘向けのサーヴァントではないこともあり、その威力は怪物にはさほど効いていない。

体格の差もあり、マタ・ハリが距離を取るよりはやい速度で、怪物は彼女に迫る。

「そっち、からだああっ」

吠えるようにしながら獲物をふるう怪物。マタ・ハリとしてはそれなりの距離を保っていたつもりであったが、それ以上に怪物の巨体と

武器のリーチは大きかった。驚愕に目を見開くマタ・ハリへ今度こそ武器が振り下ろされ――

――大きな盾がその衝撃を正面から迎え撃った。

「マシユー！」

「っ、大丈夫です。マタ・ハリさんは今のうちに距離を！」

衝撃の重さに一瞬顔をゆがめるものの、すぐに凛々しい表情に変わる。全体重を乗せるように盾をふるい怪物の姿勢をわずかに崩すことに成功すると、先の攻撃とは別の方の腕からの攻撃を盾で受けとめる。

一撃、また一撃とかなりの重量がたたきつけられながらも、マシユと彼女の支える盾が崩れる様子はなかった。

「うう、かた、い」

「投影、開始」

「うっ?？」

力の限り攻撃を加えても壊せない盾に怪物がいらだちを見せた瞬間、背後で魔力の流れが生じた。怪物が首を向けると、少し時間を稼ぐことができたからだろう、いくばくか回復した様子の士郎が弓に剣をつがえているところだった。

「I am the bone of my sword」

手にしていた剣――ジャンヌ・ダルク・オルタの愛用しているものと同じ剣が、形を変え矢と化す。狙いを定めた士郎の瞳が、すつと細められる。

「喰らえー！」

放たれた矢が怪物めがけて迫る。とっさに両の獲物を交差させ防御の体制に入る。矢は丁度その交差した箇所につつかり――

――爆炎が怪物の周囲を覆った。

「ううっ、ひ?あつ、い」

「その熱は俺たちが受けた衝撃を、まとめて攻撃力に変えている。お前の攻撃の衝撃はかなりのものだったからな。簡単には消えないし、簡単には抜けられない」

ジャンヌ・オルタの宝具、その本来の力は元であるジャンヌ同様そ

の旗に起因する。勿論アヴェンジャーとしての攻撃力は並のサーヴァントを優に超えているものの、その爆発的な攻撃力は旗によるダメージの収束にある。聖女たるジャンヌの宝具は旗に攻撃を集め味方を守るために作用するが、ジャンヌ・オルタの場合はその集めた攻撃を自身のものとして相手にぶつけることができる。打撃、斬撃、銃撃、はては毒や呪いの類までもすべて、己の炎として転換することができるのだ。しかも、味方のダメージも含まれる。

士郎が用いたのはダメージを収束させる力。怪物の攻撃の直撃こそ喰らっていないものの、自身とマシユの受けた衝撃は決して小さくなかった。そしてそれが何度も与えられているのだから、総合的な威力が高くなることは想像に難くない。もともと、士郎の場合は対象に直接ぶつけるのではなく、怪物の動きを封じるために周囲に炎を展開する形にとどめているが。

自分を取り囲む炎をかき消そうと怪物は腕を振るうが、それは己の身を焦がすのみ。自身の攻撃で自分が苦しめられていることに、戸惑いを隠せずにいる。

「あ、ついに」

「お前に聞きたいことがある。だから動きを封じさせてもらった。素直に話を聞いてくれるなら、すぐにその攻撃をやめるから、おとなしくできないか？」

「ううう、だ、めだ。まもる、っていった」

「守る？それって」

「もういいわ。そこまでにしてあげなさい」

響いたのは可愛らしい声。この場にいるのには不釣り合いともいえる少女のような声。

ひどく怪しく、妖しく、そして聞き覚えのある声。

カツツ、カツツと響く足音。音の軽さはどこかこの空間には不釣り合いにも思えるものの、音が近づくとともに強くなる一種の威圧感にも似た気配。英雄王や大英雄、そしてつい最近カルデアにも来ることとなった一人の女神が備えている——神性。

「あの海賊たちとは違うみたいだけれど、あなたたちも私を追ってきたのかしら？」

どこか諦観めいた声音で話しながら彼女は姿を見せる。その姿を見た際に、マシユが小さく息を漏らす。なぜならあまりにも、あまりにも彼女はそっくりだったからだ。カルデアで待つ、あの女神に。

「うう、えうりゆ、あれ。だめ」

「いいのよ、もう。ここまで来ては逃げられないもの」

心配そうに女神を見つめる怪物。その視線に対し小さく笑みを返してから、女神の視線が士郎を捕らえる。

「それで、人間のマスターさん。この女神エウリユアレを捕まえて、何をするつもりなのかしら？」

ラビリンスの真実

「女神、エウリユアレ、さん？」

「ええ。どうかしたのかしら？」

「あ、いえ。私たちの知っている方と似ていたものですから」

「似ていて当然だと思うぞ。エウリユアレとステンノは姉妹だからな。更に言うならメドゥーサもそうだけど」

「よく知っているわね……まさかとは思うけれど、その二人まで捕えているのかしら？」

すつ、とエウリユアレの瞳が細められる。先ほどまでであった諦観にも近い視線から、敵意にも近いものへと変わる。ただそれだけのことだというのに、肌がぴりつくような感覚に襲われる。

（流石は女神。神格を落とし、かろうじて英霊の枠に押し込まれた状態でもこれか）

さらに言えばステンノもエウリユアレもともに男性に、より正確にいうなれば英雄に対して圧倒的な強みを持っている。事実士郎自身は謙遜するであろうが、既に積み重なった功績は、単なる武勇伝とはいえない域にある。

「いえ、私たちはあなたたちを捕らえに来たわけではありません」

若干慌てるようにマシユが士郎とエウリユアレの間に割り込む。

「私たちはここにサーヴァントがいるという情報があったので、そのサーヴァントを確認しに来ただけです。もしそれが聖杯が自ら呼び出したものだとしたら、味方になってくれるのではないかと」

「味方に？」

「はい。現在把握している情報から察するに、お二人は海賊黒髭、エドワード・ティーチに追われているという認識で間違いないでしょうか？」

「名前はよく知らないけれども、そうね。変な笑い方をしながらニヤニヤしてる黒い髭の男に追いかけているわね」

「そ、そうですか……」

若干ひきつったような表情になりながら、マシユが何とか笑みを返

す。まあ気持ちもわからなくもない。今の説明だけ聞いたなら黒髭はかなりのド変態待ったなしである。

「俺たちはその黒髭と戦うためにここに来たんだ。黒髭と黒髭に味方するサーヴァントと戦うために、俺たちも仲間を集めている」

「そこで私たちのところへたどり着いた、というわけね。なるほど」

先ほどまでの敵意のある視線は弱まったものの、まだ完全にこちらへの警戒をやめたわけではないらしい彼女の様子に、士郎はミノタウロスの周囲を包んでいた炎（剣）を破棄する。突然消えた炎にやや驚きながらも、その巨体がまず目指したのは女神のもとだった。

「えうりゆ、あれ。だい、じょうぶ？」

「ええ。あなたこそ、熱かったでしょ？」

優しく微笑みながらエウリユアレはいたわるようにその腕のやけどの跡を見る。白魚のような指がわずかに傷に掠るだけで、ミノタウロスが小さなうめき声を出す。

「うう。まだ、やれる」

「そう？頼もしいわね。でもいいの。この人たちはどうやら戦うつもりはないみたいだし」

ちらりと士郎に視線を寄こしながらまるで諭すように、或いはあやすようにエウリユアレは怪物の腕を——当然傷のない部分を——撫でる。

「ああ。戦う必要がないなら、それは俺たちとしてもありがたい」

「そう。それで、さっき話していた黒髭——だったかしら？その男とあなたたちは敵対関係にある、そう見ているの？」

「状況から察するにはそういうことだと思われます。私たちの協力者であるフランシス・ドレイクさんやマタ・ハリさんの話とエウリユアレさんの話を合わせると、現在黒髭及びその配下に加わったサーヴァントたちは何かしらの理由でエウリユアレさんを狙っていて、それを阻止する必要がある、ということのようです」

「そうね。概ねそんなところになると思うわ。できればこの後協力者たちと合流したいと思っているのだけれど」

そう言いながらマタ・ハリはエウリユアレの方を見る。言外に問い

かける。一緒に来てくれないかと。

当然その意図はわかつているであろう女神様だが、口元に微笑みを浮かべながら士郎の方を見つめている。言葉に出さずとも、恐らくは彼からのムーブを待っていることは明らかである……もつとも、そういったことに関してあまり優秀とは言えない士郎ではあるが。

「?なんだ?俺の顔に何かついてるのか?」

「いいえ。なんでもないわ。まあ、あなたには期待する方が無駄のようね」

「?まあそれはいいとしてさ、二人とも困っているんだろ?よかつたら一緒に来ないか?」

全くもってエウリュアレからの無言の振りに気づいた様子はないものの、さらりと正解を言つてのける士郎は流石ともいえる。しかもちゃんと「二人」と言っているあたりが特に。

「あら、大丈夫かしら?彼に襲われたばかりなのに?」

「それはエウリュアレを守るために戦つただけだろ?確かにさつきは戦うことになつたけど、俺は力になりたいと思つてる。どうだ、ミノタツじやないか。アステリオス、でいいのか?」

特に敵意も怯えも感じ取られない士郎からの視線。そして自身のことを「怪物」ではなく「雷光」アステリオスとして呼ばれたことから、彼は戸惑わずにはいられなかった。

「こわく、ないの?」

「怖いもんか。アステリオスみたいに大きな体を持つているやつなら馴染みがあるしな。あいつとは話をすることはできなかつたけど、アステリオスとはできるからその分親しみやすいかもしれないけど」

少しの冗談交じりに士郎がアステリオスに笑いかける。事実サーヴァントには一般の人を凌駕する巨体の持ち主は少なくはない(アツセイ!)……今何が聞こえた気もするが気にしてはいけない。

それに加えて、衛宮士郎が戦うことを決めた直後、最初の対戦相手もまたアステリオスに迫るほどの巨体を誇っていたのだから。巨体に加え、アステリオス以上に飛ばされた理性、獣のごとく吠えながらも戦士としての技量を持つて戦うその戦士は、これまで数々の英霊と

出会ってきた士郎をして、未だに格が違うと認識せざるを得ない相手だった。

その男と戦った時のことを思い返せば、アステリオスに対する感情もまた変わってくる。同じなのだ。一人の少女を守るためにその身をとじて戦う。怪物のように見えてしまえども、彼もアステリオスも行動はまさに英雄、英霊のものだった。

「もし俺たちを信頼してくれるなら、手伝わせてほしい」

そう言いながら士郎が手を差し出す。攻撃のためでも、自衛のためでもない。ただ差し伸べるために、その手を怪物ではなく、一人の英霊に伸ばした。

「う……」

考えるようにアステリオスの視線が士郎の手、顔を行き来し、そしてエウリュアレに向く。彼女はほとんど表情を変化させなかったが、アステリオスだけが気づくようにほんのわずかに微笑みを深めた。

「う、ん。いつ、しよに、いこう」

「ああ。よろしくな、アステリオス、エウリュアレ」

「ええ。でも、女神を連れて行くのだから、ちゃんとエスコートしてもらわね」

「そこはご安心ください。先輩のおもてなしスキルは一級品ですから」

とまあ、なんやかんやでまたまた旅仲間が加わることになったわけだが……

（あれ？アステリオスが休めるような広い場所、船にあつたつけ？）

とまあ、若干の不安要素を思い浮かべる士郎ではあったが、一先ずこの島での目的は果たせたことに安堵するのであった。

森の中に息をひそめながら身を隠していた男がピクリと動く。

先ほどまで自分がいらんでいた洞窟、そこから漂っていた魔力の気配が薄れていくのを感じる。

「迷宮が解除されたか。化け物退治に成功したのか、それとも懐柔に

成功したのか。僕としては、前者の方が仕事がしやすいんだがね」
スコープ越しに洞窟の入り口を見つめていると、中から先ほど入っていたマスターとサーヴァント2騎、そしてターゲットと化け物が現れる。

「やれやれ。どうやら僕と彼との相性は、最悪らしいな。楽に仕事をさせてもらえそうにない」

ため息を吐き出しながら、男は手に持った銃を構えなおし、ためらうことなく引き金を引いた。

もう一人の正義の味方

洞窟のすべてが迷宮だったわけではなく、どうやらアステリオスは元あった洞窟に自身の宝具を展開していたらしい。地上に出るにあたりさて迷宮をどう脱出したものかと思案した士郎だったが、その心配は杞憂に終わった。

とは言ったものの、これはアステリオスの信頼を得たからこそその結果であり、実際エウリュアレ曰く、

「確かにアステリオスを殺してもこの迷宮は消えるけれども、その場合は……そうね。迷宮が崩れ落ちてくるのだから、命がけの脱出劇も見られたかもしれないわね」

とのことだった。改めてアステリオスの宝具の恐ろしさを認識させられる。

しかしながらその怪力や宝具、そして容姿からは恐ろしさを想起させられるものの、アステリオス本人からはそういったものは既に感じ取れなくなっていた。どこか少年のような言動、そして根は優しいのだろう、エウリュアレやマシユ、マタ・ハリとの関係も悪くはなさそうである。

「なんだか、少し驚いてしまいます。こんなに優しいアステリオスさんが、神話で語られるミノタウロスだなんて」

「そう、だな。でも伝説なんてあてにならないことは、もう見てきただら？アーサー王だってそうだ」

「そうですね。アステリオスさんを討ったという英雄、テセウス。彼は怪物として退治しに来たはずの相手がアステリオスという人だと知った時、どんな思いだったのでしょうか」

「どうだろうな。俺たちは想像することしかできないけど——」

けれどもきつと、その英雄は心を痛めたことだろう。怪物としての役割を持たされてしまった少年のような心の存在のために。

宝具が完全に解除されると、無限に続く空間にも思えた迷宮から一転、入り口が割とすぐ見える程度の広さの洞窟だったことが明らかに

なる。自然の光が外から差し込んで見える。

『もしもし！士郎君、マシユ！聞こえるかい？』

とここでもようやく通信が復旧したらしい。D r. ロマンの慌ただしい声が聞こえてくる。

「はい、ドクター。こちらは無事です」

『ああよかった。君たちが洞窟に入ったあたりから急に接続が途切れちゃったから心配したよ』

「多分アステリオスの迷宮に入ったからだな。そうだ、新しい仲間がいるんだ」

『新しい仲間？』

「今言ったアステリオス、それから——」

エウリュアレ

『私、でしょ？』

ステレン

「あら、私？どうしてそこに？」

『シロウと契約してこちらに来させてもらったの。駄メドゥーサがないから代わりに守らせてるわ。あなたもどうかしら？』

「そう、それは面白そうね」

仲のいい姉妹の会話、ではあるもののどちらも女神。どこか妖しげな笑みで話し合う様子は一見ほほえましくも見えるが、どこか身震いさせる怖さも感じられた。

「とりあえず、積もる話もあるだろうけれども一旦船に戻ろう。ドレイク達にも紹介したいしな」

「そういえば他にもいるのだったわね。大丈夫かしら？」

「大丈夫。ドレイクは豪快な人だし、リリイもジャンヌも頼れる仲間だ。海賊のみんなも、結構よくしてくれるしな」

「そう？まあ、ならいいのだけれど」

そんな話をしながらも洞窟を出る。士郎は明るい日差しに一瞬目を細め——

「っ！」

——すぐさまエウリュアレの前に投影した剣を振り下ろした。

「えっ？」

ガキンツ、と衝突音が響く。エウリュアレの前に静止している士郎の剣。刃は地面に向けられ、その側面から何かがポトリと落ちる。

「これ、弾丸?」

「先輩!」

「ああ。狙撃された!」

すぐさま臨戦態勢を取る士郎達。

「アステリオス!エウリュアレを後ろから守っていてくれ!マシユは正面!今の狙撃の狙いは間違いなくエウリュアレだ!」

「うう、わか、った」

「了解!」

剣の投影を破棄し、代わりに士郎は弓を手に持った。周囲を見渡し、狙撃場所を探る。

単なる銃撃であればこの時代の海賊の可能性もあり、警戒レベルはもう少し低くても問題ないかもしれない。

だが明らかに違うと確信が持てる。

弾丸の形状から察するに使用されたのは「300ウインチェスターマグナム」、製造が始まったのは1963年、つまりこの時代からは遙か未来のもの。そもそもこの弾丸を使うということは使用している銃は恐らく狙撃用のライフル。

「比較的近代の英霊が呼ばれているってことか」

自分たちが出た瞬間を狙った狙撃。恐らく最初からエウリュアレをターゲットとしていたうえで、自分たちが出てくるのを待っていたのだろう。狙撃という手段を取ったということは、想定されるクラスは二つ。

「気をつける。恐らく敵はアーチャーか、或いはアサシンだ。俺とマシユは狙撃に備える。アステリオスとマタ・ハリは近くの気配を探っていてくれ!」

アーチャーであれば注意すべきはその狙撃。ライフルを使用している場合、自分たちが認識できる距離の外側から攻撃できるかもしれない。その場合こちらは防御に徹しながら移動する必要がある。

逆にアサシンである場合はより厄介である。アサシンの持つ気配

遮断スキル。遠くからの攻撃ばかりに気を取られていて気づいたら接近されていた、なんてことになりかねない。

「どこからだ？」

普段の数倍集中するように最初の弾丸が飛んできた方向を重点的に見る。しかしながら木々が生い茂っていることや、この地形について詳しく把握しているわけではないことから、視認することは難しうだ。

「ドクター！サーヴァントの反応は？」

『ある！でも君たちのほぼ正面付近にいることしか、こちらからは……待って、移動してる。それもすごい速さだ！君たちの方に進行しているー！』

通信の内容を聞き、さらに警戒を強める土郎達。

「先輩、このサーヴァントのクラスは、っ！」

ほんの一瞬、土郎の方向へ視線を向けただけだった。1秒あったかなかったかもわからない程の些細な隙。しかしその一瞬の隙だけあれば、男には十分だった。

はっとなり視線を前に戻すマシユ、しかしすでにその眼前に男は迫っていた。赤い布をフードのようにかぶり、顔のほとんどすべてが覆われているため表情が全く読めない。盾を構えなおす暇もなく、男の延ばした手に握られたナイフがマシユの顔に迫り――

——ガキンツッ！

再度響く金属音。男の腕からナイフが弾き飛ばされる。

「くっ、アサシンのサーヴァントか」

「ええ。隠密行動については私もそれなりに心得があるの」

「マタ・ハリさん！」

ナイフをはじかれた手を軽くさすりながら、男が魔力弾の飛んできた方向に顔を向ける。笑顔でありながらも、どこか気迫を感じさせる表情のマタ・ハリが見つめ返す。

「まさか僕の気配遮断が気づかれるとはね」

「殿方の所作を観察するのは得意ですもの。敵も味方もね」

そう言いながらマタ・ハリがマシユの手を引き後ろにずれる。と、

ちやうど二人がいた場所を一本の矢が通り過ぎ、フードの男へ向かう。

「!くっ」

瞬間、男が尋常ではない速度で身をよじるようにし、矢をかわす。「なるほど。剣ばかりだと思っていたけれども、弓も得手か厄介だな」「そういうあんたも、さつきとは比べ物にならない速度で動いてたな。今の距離で躲されるなんて、正直思っていなかったんだけど」

「説明でも求めているのか? やめておいた方がいい。時間の無駄だ」「そういう割には会話には応じてくれるんだな」

くぐもつていてはつきりとはしないが、どこかドライな印象を与える抑揚があまりない声。淡々とただ仕事をこなすかのように、彼は真つ先にエウリュアレを狙った。そして先ほども、一瞬隙を見せてしまったマシユを、ためらうことなく、殺すつもりで迫ってきた。

「どうやらあんたは、生粋のアサシンって感じらしいな」

「別に生前暗殺者だった覚えはない。戦争を終わらせるために最適な方法がそれだったというだけだ。そのやり方のためにアサシンのクラスで現界したのだろうけど」

言いながら男がナイフを士郎めがけて投げつける。とっさに弓から剣に持ち替えた士郎がナイフをはじき、男に迫る。男の動きは完全に見切っていた——はず。

だというのに振りぬいた士郎の剣は空を切る。まただ。また突発的に、或いは瞬間的に、或いは爆発的に、男の動く速さが上がり、士郎の視界から消えた。

「先輩!」

「っ、投影、開始!」

マシユの声に反応し、咄嗟に背後に大剣を壁のように投影する。直後、背後に回り込んでいた男の銃——今度はキャリコム950A——による連射が襲い掛かる。

「っ、武器を瞬時に? 転送、ではなさそうだ」

「やあっ!」

「固有時制御、time alter 2倍速double accer」

ぼそりと男がつぶやいたのは、たった2行の詠唱。しかしその後、既に肉薄していたはずのマシユの盾は、先の士郎と同じように空を切った。

「っ、消え」

驚くマシユをよそに男はいつの間にかマシユの背後に回り込む。また別のナイフを手に取った男はマシユ——ではなく、再度エウリユアレめがけてナイフを投げつけた。

——ザシユツ

ナイフの刃が肉を割く音が聞こえ、そして鮮血が舞う。

しかしそれは女神の血ではなく、

「うう、させ、ない」

「ちっ」

外大きな腕でエウリユアレをかばうようにアステリオスがナイフを受け止めた。血こそ出たものの、彼にとってそのサイズのナイフによる傷はそこまでのものではなく、即座に腕を横なぎに払うようにし、男を後退させる。

「流石にここまで警戒されている中で、この人数を相手にするのは分が悪いか。ここは退かせてもらおうとしよう」

言いながら、追撃が来る前に男はまた加速し、姿を森の中にくらませた。

追おうにも地理的な知識もなく、また相手のアサシンの気配遮断により、とてもではないが探し出すことは難しい。

「先輩……まだ、近くにいますのしょうか？」

「わからない。けど、どうやらもう仕掛けてくるつもりは……少なくとも今はないみたいだな」

気を抜くことはできないものの、いつまでもそこに留まっているわけにもいかないため、士郎たちはあたりを警戒しながらドレイクの船の方へと移動するのだった。

アサシンの心

「暗殺者、ねえ」

「ああ。それも確実にエウリュアレを殺しに来ていた。いつまた狙ってくるかもわからないから、気を抜けなさそうだ」

船上、ドレイクの部屋。

あれから無事にドレイクと合流し、新たに加わったアステリオスとエウリュアレを紹介した士郎たちは、すぐに船を出して島を離れた。ドレイクも急ぐ様子の士郎に疑問を感じながらも、事情があるとみて了承してくれた。

因みにアステリオスはマシユの仲介もあつてか、リリイ達とも仲良くできているようだ。驚いた、というよりも感心したのはジャンヌ・オルタがアステリオスのことを気にかけていることだった。彼女の基になった聖女ジャンヌにも面倒見の良いところはあるようだったが、そういうところは同じらしい。

そんなアステリオスの様子を微笑みながら眺めるエウリュアレはエウリュアレで、海賊たちからは遠巻きに、しかし憧憬の眼差しを向けられている。気づいているのは明らかで、しかもちよつと楽しんでいいのか、時折クスリと彼らに向けて微笑みかけて定期的に飴を与えているのだから、まあ、その人気はうなぎのぼりである。

「しっかしこんなに別嬪が船に増えるなんてな」

「いつもの航海と違って華やかだぜ」

「こんな美人ばかりが周りに集まってる……」

「『流石アニキ』」

本人のあずかり知らないところで勝手に士郎の評価がさらに高くなっていく。

本当にそんなことなどつゆ知らず、士郎とドレイクの話は進められていく。

「女神さまとそれを守る者、ねえ。なんだか御伽噺にでも出てきそうだね」

「まあ、その感性もあながち間違いではないな。実際、神話に語られる

存在だし」

「そりやそうか。ところで、その暗殺者には心当たりはないのかい？」
「悪い。あいつの顔はよく見えなかったし、声もくぐもった感じではつきりとは。ただ、この時代にあるはずのない武器を使っていたのは確かだ。つまり奴はここから見て未来から召喚された……サーヴァントとして」

「またそれかい。やっかいなことばかりだね。ともかくにも、あの女神様つてのが狙われている理由が知りたいね。守つてやるのは別に構わないけど、永遠に守つていられるわけじゃないから、せめて目的とか最終的な到達点が知りたいもんだよ」

「そう、だな」

黒髭の一味、そしてあの謎のアサシンはエウリュアレを狙っていた。しかし、エウリュアレの話から察するに、黒髭の一味の目的はエウリュアレの確保であること。殺すつもりはなさそうだ。対する謎のアサシンは迷うことなく、明確にエウリュアレを殺しにかかった。

このことからあのアサシンは黒髭の一味ではなく、全く別で単独行動していると考えられる。だが、

「何でエウリュアレが狙われているのか、つてことだよなあ」

「女神さまだから、つてだけなのかねえ」

「……まあわからないことを考えても仕方がないか。とりあえずマタ・ハリの言った方向にある島に向かうしかないよな」

「あの島ならあたしも知ってるよ。確か無人の島だったはずだけど、この調子だ、誰かがいてもおかしくはないんだろうね」

話がさかのぼること少し、アステリオスとエウリュアレとを加えた後の目的地について話していたところ、これまたマタ・ハリから意見が上がったのだった。

彼女曰く、

「あなたたちを待っている人たちがいるの。私はマスターたちを案内するために来たのよ」

とのこと。そういえばエウリュアレを探すための出発よりも先に

そんな話もしていたなと思いだす士郎。

「それって誰なんだ？」

「ごめんなさい。直接会えるまでは伏せておくように言われているの。その情報が漏れてしまわないようにすることが重要な。きつと切り札になつてくれるはずだから」

「そっか。なら、仕方がない、のか？」

「でも一つだけ、わかることもあるわ」

そう言つて話に加わつたのはエウリュアレだった。

「わかること？」

「ええ。貴方を送つたという相手、私のことを、神霊であることをわかつた上で案内したのでしょう？」

「ええ、そうね。あの様子だと、きつとそうだと思うわ」

「じゃあ決まりね」

「えくと、何がどう決まつたんだ？」

何やら一人で納得した様子のエウリュアレに対し、士郎たちは完全に置いてけぼりである。頭に疑問符を浮かべながら士郎がエウリュアレに問いかけると、小さく息を吐き出してから、エウリュアレが士郎の方を向く。

「サーヴァントはサーヴァントの存在をある程度は知覚できるわよね？」

「ん？まあ確かそうだったけど」

「でも私のような女神、神霊はそれだけじゃないのよ。この世に自分と同種、同等の存在がいればそれを感じ取ることができるの。神だけが発している気配、みたいなものかしらね。それがわかるのよ」

「そうなのか？でも、今その話をしたってことは」

「ええ。恐らくそこにもいるのね。私と同じ、神霊が」

そんなわけで、士郎たち一行は再び神霊を探すための航海に出いたのであった。エウリュアレのおかげで大よその方向はわかるため、それをもとに進んでいるが……

『士郎君、一つの特異点に二人の神霊が現れるっていうのはかなりの』

異常事態だ』

「だよな。確か神霊はかなり霊格を落とさないと現界さえできないんだったよな」

『うん。だから本来、一人でも現界していること、それ自体が異常として観測されてもおかしくはない。今は特異点化の影響で現界しやすくなっているということなのかもしれないけれど』

「まあでも、マタ・ハリの話だと俺たちの味方っぽいし、大丈夫なんじゃないのか？」

『だといいがな。忘れるな、遠坂の弟子。マタ・ハリはスパイとして有名な英霊であることを。必ずしも、お前の味方である保証はないぞ』
忠告するように会話に入ってきたのは、ロード・エルメロイⅡ世。

孔明と融合した影響による戦術眼によるものなのか、はたまた彼生来の慎重さ故なのか。いずれにしても、彼自身の考えももつともではあり、また士郎が確実に勝つため、負けずに修復を可能とするためには、念頭に置いておかなければならないことには違いない。

彼女が本当に聖杯が抑止力代わりとして呼び出したサーヴァントなのか、それを現時点では判断することができないのだから。

「そうかもな。でも——」

でも、そう士郎は続ける。確かに敵か味方かなんてはつきりわかっているわけではないのかもしれない。それでも、彼自身が信頼している——信頼できることが一つだけある。

「——俺はマタ・ハリを信じるよ」

『どうしてそう言い切れる？』

「だって、料理が美味かったから」

『は？』

通信先の向こう側でロマニとエルメロイが固まったのを感じながら、士郎は笑顔で続ける。

「料理っていうのはさ、作ってるときも出来上がったものにも、作り手の人柄や気持ちが反映される。ただ万人受けにおいしく作ろうと思っていたら、確かにそれなりのものができる。でも、料理が本当においしくなるのは、食べてくれる人のことを思って作る時だ。マタ・

ハリの料理には、それがちゃんとおった。だから、そんな風に料理を作ってくれる彼女のことを、俺は信じる」

そうやって士郎がカルデアと通信しているところから、ほんの少し離れた場所。

決して盗み聞きするつもりはなかったものの、結果としてその会話はしっかりと聞こえてきていたのだった。

「マスター……シロウくん」

名前を小さく呟くと、胸の奥がキュツとしまるような、不思議な感覚。

戦闘面で褒められたわけではなかった。容姿を誉められたわけではなかった。自分の有用性を誉められたわけでもなかった。

『料理が美味かったから』

かつて男を虜にするために料理をふるまったこともあった。でも、本当は心を込めて料理を作りたかった。それを食べた誰かに、美味しいと言ってほしかった。そんなささやかで小さな幸せを、ずっと願わずにはいられなかった。

自分のご機嫌を取るためではなく、自分のいないところで——それも自分を信じている根拠として言ってくれた彼のその言葉は、ああ、どうしてこんなにも温かい気持ちにさせるのだろう——

そう思った直後、

ドオン！

大きな音と共に、船体が揺れた。

船上の戦場

船体が大きく揺れた。それも自然の波ではないことは明白だった。度々聞こえる大きな音、そして船内からでもわかるほど巨大な水しぶき。確実に砲撃を受けていた。

急いで士郎が室内から飛び出すと、すぐにドレイクが目に入る。

「ドレイクー！」

「ああ。どうやら見つかったようだねえ」

鋭い視線でドレイクが見据える先には、また一つ別の船——海賊船がこちらに向かってきているのが見える。目を凝らすと船首の方に男が立っているのが見えてくる。

「あれが、黒髭……」

「デュフフ！エウリユアレたん、お迎えに上がりましたぞ〜！さあさあ、拙者の船にいらっしやい！そして是非ともprprさせてほしいですぞ〜！」

「いや、ないな」

「ないですね」

「ないのですか？」

「ないわね」

「あらあら、うふふ」

あまりにもあんまりな男の発言に、思わず真顔で（リリィは戸惑うように、マタ・ハリは固まった笑顔で）士郎一行がバツサリ切り捨てる。

その様子に溜息を吐くエウリユアレ。

「残念だけれど、あれがそうよ。大海賊、エドワード・ティーチ」

「ううう、あいつ、きらい、だ」

心底いやそうな表情を浮かべているエウリユアレを守るように、アステリオスがその体でエウリユアレを包み込む。その表情からは、明確な黒髭に対する敵意が見て取れる。そのすぐ後ろには以前襲い掛かってきた血斧王、エイリーク・ブラッドアックスの姿も見える。

「おいおい、随分な怪物も一緒とはね。これはおじさんも気合い入れ

ないとダメかな？」

「まっ、相手がどんなでもやることは変わらないけどね」

「そうですね。海賊らしく行かせていただきましょう」

黒髭の後ろに立っている三人の人影。二人組の女性海賊、背が高く銃を持つ女性と背が低く剣を持つ少女。

「あれがアン・ボニーとメアリー・リードか。それに」

もう一人、説明だけでは真名がわからなかった槍を持った男。おじさんと自分のことを呼ぶだけあって、髭を生やした気だるげな男。しかしその様子を遠目から見ただけでも、隙らしき隙が見当たらない。

何より彼の持つ槍——否、正確にいうのであればあれは槍ではなく剣だ。剣の柄を伸ばし槍状にしてはいるものの、持ち主がたたき折ろうとしてなお健在であったその鋭い切れ味は、決して隠しきれるものではない。

『絶世の名剣』と呼ばれた剣を原典に持つ剣。

「デュランダル……いや、それをやり状にしているということは、あいつは」

『うん。トロイア戦争におけるトロイア最高の英雄、兜輝くヘクトールだ！』

『気をつけろ、遠坂の弟子。奴はかなりの武芸者だが、同時にかなりの戦術家でもある』

「確かに。少なくとも、アキレウスという大英雄と渡り合うやつだ。少しの隙も見せられないな」

ロマニとエルメロイⅡ世の忠告に耳を傾けながら、土郎は敵方を見据える。やはりあのアサシンは一緒に行動しているわけではなさそうだ。サーヴァントの数はこちらが上。しかし決して油断はできそうにない。

「アステリオスはエウリュアレを守っていてくれ。マシユとリリイはアンとメアリーを抑えててくれるか？」

「うう、わかった」

「はい」

「お任せください、シロウ」

「ジャンヌとマタ・ハリさんは暫くの間あいつを、ヘクトールを頼む。海上で使うかはわからないけど、あいつの宝具には気を付けてくれ」
「仕方ないわね」

「ええ。任せました」

「ドレイク、黒髭の船を頼む。あの船は恐らく宝具だ。あいつはそれを維持する必要があるから直接攻勢には出ないと思う。あいつの船を抑えてもらえるか？」

「任しときな！船での戦いなら、負ける気がしないよ」

「よし。俺はエイリークを倒す。黒髭が何故エウリュアレを狙っているのかはわからないけれど、絶対に守り抜くぞ」

各自に指示を出す士郎。それぞれの役割を確認し、改めて接近してくる敵を見据える。両船からの砲撃がより激しさを増すものの、互いに沈むことはなくその距離は少し、また少しと近づいていく。

武装を展開するマシュ、カリバーンを構えるリリイ。

ジャンヌは腰に差した剣を抜き、マタ・ハリは妖艶に微笑む。

不安げにエウリュアレの瞳が揺れると、それを安心させようとアステリオスの腕が彼女を守るように包み込む。

ドレイクは仲間に指示を出しながらも鋭い視線を敵船に向ける。

「じゃあ、まずは――」

そして士郎はその手に双剣、ではなく弓を取る。一本の剣を投影し矢としてつがえる。

「――先制攻撃だな」

その言葉と共に、士郎の放った矢はまるで吸い込まれるかのように黒髭たちのいる甲板へと向かい、大きく爆発した。

「見事に命中です、先輩！」

「いや、来るぞ」

爆炎が上がる中から、飛び上がる人影がいくつか見える。先ほどの攻撃をかわすだけではなく、その爆風を利用した超長距離跳躍。流石にサーヴァント、それも海の戦いを得意とする者が多いだけのことはある。

「ドレイク！」

「ああ。野郎ども、そいつらには近寄るな！あたしらはあの船の相手に集中する！」

「「「「アイアイ、キャプテン！」「「「「」」」」」」

サーヴァントではないただの人間では、この戦いで格好的となりかねない。それを避けるため、また士郎たちが憂いなく戦えるように、ドレイクの指示を受けた海賊たちが甲板から去る。と、丁度跳躍してきたサーヴァントたちが船に降り立った。

「全く、いきなりあんな攻撃するかい普通。おじさんちよつと驚いちちゃったよ」

「他のサーヴァントまで味方につけてたのね。これは、楽な仕事にはならなさそう」

「でもやることは変わらないよ。さっさと終わらせちやおう」
「がっ、ああ。コ、ロス」

戦闘準備万端らしい敵を前に士郎たちも気を引き締める。

「やるぞ」

「はい」「ええ」「うん」

改めて敵を目の前にして、士郎は獲物を持ち変える。ここまで来たら弓はむしろ不利でしかない。

馴染み深い白と黒の剣を携えた士郎が一步前に踏み出す。

「今からあいつらを散らす。みんなはさっきの指示通りに頼む」

両側が頷くのを確認した士郎は剣を構え、言葉を紡ぐ。

「トレリス・オン投影、開始」

彼の頭上に複数の剣がどこからともなく出現する。

「ソードバレルフルオープン全投影連続層写！」

降り注ぐかのように一斉に飛んでくる剣の雨を、敵側がばらけるように避ける。その瞬間、士郎たちは直ぐに行動を開始した。

「なるほど。先ほどの攻撃は私たちが分断するため」

「ということ、君たち二人が僕たちの相手ってこと？」

一見温和なお姉さんと幼い少女。しかしその視線から感じる威圧感、まじごとなき強者のもの。

「リリイさん、行きましょう」

「はい。シロウのためにも、必ず勝ちましょう！」

それぞれの獲物を構える四人の少女。その場面だけを切り取ったのであれば、とても芸術的にも思えるワンシーンかもしれない。が、一人一人がその実一騎当千のサーヴァント。その場所の華やかさを上回る緊張感が場を支配している。

「それでは」「行くよ」

「海賊の力見せてあげる（あげます）」

「マシユさん！」「はい、戦闘開始します！」

引き金が引かれ、放たれた弾は盾に阻まれる。それを合図としたかのように、4人のサーヴァントが激突する。

その男、船長につき

「やれやれ。二人がかりとは、ずいぶん警戒されちゃってるね」
「軽口を叩けるとは余裕ですね。それともなめているのかしら?」

魔力弾の援護を受けながらジャンヌが旗をふるう。寧猛ささえ覚える激しい攻撃は、単体でも強力だというのにそこにマタ・ハリの援護が加わっているのだ。通常ならばとてもさばききれるものでもなし、更に言うのであればその正面に立っていることすら難しいはずだ。

だがこの男——ヘクトールにとっては難しいことなどではなかった。

「そおらー!」

「っ、ちい」

攻撃の隙を縫うかのように繰り出された槍が頬をかすめる。一筋の赤い痕が白い肌に刻まれ、思わずジャンヌは舌打ちをする。追撃を避けるため、咄嗟に繰り出した蹴りも槍の柄で防がれたものの、何とか反動で距離を取ることに成功する。ヘクトールの方も少しふらついたものの既に体勢を立て直している。

「おっとつと。思ったよりやるね。こりやおじさんもうかうかしていられないかな?」

「ふん。よく言うわ。全然余裕そうじゃない、あんた。腹立たしいわね、まったく」

「いやいや、これでもおじさんなりに褒めてるつもりなだけどね。攻勢に出るのは得意じゃないとはいえ、おじさん相手にここまで粘れてるんだから」

ピクリとジャンヌの眉が動く。表情は最初と変わらず基本的に冷笑を浮かべているだけだが彼女を知るものからはすぐわかる。

あ、これ怒ってますわ。

人の感情の機微を読むことに長けているマタ・ハリにもそれは明らかで、彼女は彼女でポーカーフェイスの笑みを崩さぬまま、ジャンヌの隣に並ぶ。

「あらあら。冷静さを欠いちやだめよ」

「ええ、言われなくともわかっています、それくらい」

「そう？ごめんなさいね」

「…ねえ、むしろそういうのが冷静さを失わせそうなのですけれど？」
唇の端をひくひくさせながらジャンヌがマタ・ハリをにらみつけるように見つめる。並の者であれば怯むであろう視線を受けながらも、マタ・ハリは笑顔のまま魔力弾を前方の敵、ヘクトールに向けて飛ばす。

「おつとつといく。そっちの嬢ちゃん、本当に冷静だねえ」

「あら、殿方の前では常に優雅でいたいじゃない？」

「いうねえ。いい女なものには違いないね。おじさん敵として出会いたくなかった気もするよ」

「褒めてくれるのね、ありがとう。でもごめんなさいね。私には素敵なマスターがいるもの」

「そりや残念」

「ちよつと……」

軽口のような会話の応酬をするマタ・ハリとヘクトール。と、低く小さなつぶやきのようなジャンヌの声がそのやり取りを遮るかのよう聞こえてくる。

「ん？うおつ!？」

防御の構えをとるヘクトールの頭上から渾身の力を込められたジャンヌの旗が振り降ろされる。防ぎ切った、その瞬間旗の力が緩むのをヘクトールが感じ取った直後、彼の顔の下から上に向けて黒い剣が振り上げられた。

「っ、とおい。こっちの嬢ちゃんは乱暴だねえ」

「うっさい。それよりあんた」

「私？」

ぴしやりとヘクトールの言葉をシャットアウトしたかと思ったら再びマタ・ハリをにらみつけるジャンヌ。これにはマタ・ハリも首を傾げる。

「素敵なマスターって、どういうことかしら？」

「?何かおかしかったかしら?」

「そうね。急にそんなことを言い出した理由がとても気になるわ。素敵なマスターですって?素敵な?またあのマスターはやってくれやがったのですか、そういうことですか?」

途中からまるで独り言のようにぶつぶつぶつぷやき始めながらも、ジャンヌの中で苛立ちがふつふつと湧き上がっているのはマタ・ハリからもヘクトールからも見ていて明らかだった。

「あーっ、ほんつとイライラするっ!このイライラ、この怒り!存分にぶつけさせてもらうから覚悟しなさい!」

「あらあら」

「何に怒ってるのかよくわからないけど、こりやおじさんも少し気を引き締めるべきかな。さっきの攻撃も、油断ならなかったし、な」

首元についた一筋の傷からにじんだ血を確認し、ヘクトールが槍を構えなおす。飄々とした雰囲気は変わらずとも、その顔に現れている笑顔は、やや小さいものとなっていた。

「ヌアアアアッ!」

「くっ、おとおおっ!」

渾身の力で横なぎに振りぬかれそうになる巨大な斧を、彼はすんでのところ躲し、その後ろ側から両手の獲物をたたきつける。

サーヴァントと人間との間では大きすぎる力の差が存在する。真正面から受け止めることはほぼ不可能、できたとしてもその後の動きに影響が出てしまう。

多対一の場合はそれでもいいかもしれない。大きな一撃を受け止めたとき、相手の隙を誰かがつくことが可能なのだから。

しかし今回は一対一、であるならば彼の、人間の衛宮士郎の魔術師のとれる行動は回避、そして――

「吹っ飛べ!」

斧に叩き込んだ剣を力いっぱい振りぬく。元々斧にかけられていた勢いをさらに後押しするように力を込める。振った本人の予想を超える勢いをつけられた斧がエイリークの手から離れる。

「ガアッ!? オオオオオッ!」

得物を失い一瞬怯みこそすれど、狂戦士は止まらない——止まることを知らないし、止まることを考えない。

ただ目の前の獲物を屠るためにその腕を振りかぶり、勢いよく振るう。対する士郎も双剣を振るうが、エイリークのリーチは士郎の剣が届くか届かないかの範囲からの攻撃を可能とする。かすった程度では意味はなく、よけられるほどの余裕もない。

獲った。そう狂化しながらもエイリークは思った。だが——

「トリース投影・オーバーエッジ」

瞬間、血斧王の身体は目の前の人間に切り裂かれた——否、引き裂かれた。

先ほどまでの美しい形状の刃ではなく、刀身を伸ばした双剣は今や無数の刃が羽のように束ねられた形状へと変化していた。数多の戦いを経験してきている英霊ならば、それに対処することも不可能ではなかったかもしれない。が、狂気に落ちた英霊にはその変化に対応できずがなかった。

切るというより——斬るというより——抉る。

強烈なその一撃は、エイリークの胴体を両断した。霊核さえも砕いた一撃には狂戦士も実態をこれ以上維持することはできず……

「……よい、戦いだった」
「っ!」

「願わくば、また、戦いたいものであるな」

最後にそんなことを言つて、笑いながら消えていくのだった。

「普通に喋れたのかよ……けど、また戦うのは正直勘弁だな。とりあえずは、まあ、眠っててくれよ、バイキングの王様」

小さく息を吐き、呼吸を整える。少しばかりの敬意を払ってから気を引き締める。

まだ戦いは終わっていないのだから。

「よしっ」

両の手で双剣をより強く握る。伸ばした刀身はよりなじみのある元の長さに戻しておき、士郎は次なる敵に向かって駆け出した。

「――■■■」

「?どうした?何か感じ取ったのか?まさかと思うが、あそこに馴染みのある相手がいるということなのか?」

「そうみたいです。どうしますか?」

「ふんっ。だとしてもやることは変わらない。それにたとえ馴染みのある相手がいても関係ない。こいつに勝てるやつなど、いるはずもないからな。女神を手に入れたい力を得るのは、私たちだ」

勝利を確信した笑みを浮かべ、男は高らかに笑うのだった。

「でも、まだ到着までは時間がかかりそうですね。パンケーキでもいいかがですか?」

「っておい!人がせっかく気分よくなっているのに、本当にいいタイミングで水を差してくるな、お前は!?!そしてやめろ!パンケーキだけはやめろ!ふりじゃないからな!?!」

海賊が海賊であるゆえに

「メアリー！」

「くっ、うわっ」

パートナーの声に反応するように少女が剣を構えたものの、

「やあああ！」

魔力を推進力代わりに噴射することにより降りぬかれた、騎士の一撃の勢いを完全に殺すことはできず、小柄な体が後退させられる。

「だったら私が！」

「させません！」

一撃を振りぬいた直後の拘束時間を狙って放たれた弾丸を遮るように、盾が射線上に割り込み弾丸をはじく。

攻撃を防いだ隙に反撃を、と思つて小柄な少女の方を見ると、弾丸を撃つてからすぐに行動にうつつていたらしく、大柄な女性の方が少女の前に——かばうように立ちふさがっている。

様子をうかがうように対峙する両者。

海賊のコンビは小さいほう——メアリーの方が消耗しているものの、もう一人のアンはここまでほとんど中でのサポートしか行っていないため余裕がある。

対するマシユとリリイは消耗こそメアリーほどではないものの、どちらも入れ代わり立ち代わりで攻めと守りを切り替えるようにしながら戦っているため疲労が見える。特にデミ・サーヴァントであるマシユはそれだけでもなく、巨大な盾を使用しているためなおさらだ。「ありがとうございます、マシユさん」
「はっ、はっ……いえ。でも、なかなか決め手が見つかりません」
「どちらか片方だけなら何とかなつたかもしれませんが、敵ながら見事な連携です」

「アン・ボニーとメアリー・リード。あのお二人は女性海賊のコンビとして有名ですから、パートナーとしての完成度はさすがに高いですね」

「メアリー、大丈夫？」

「うん、なんとかね。デミサーヴァントと半人前の王様。脅威にはならないかと思っただけ」

「どうやら油断できない相手のようですね。どうしかけます?」

「……いい加減、勝負を決めにかかったほうがいいかもね。宝具いける?」

「ええ。いつでも」

「じゃあ、決めにかかろう」

視線を交わし、アンとメアリーが二人同時に駆け出す。

「マシユさん!」

「はい!」

鬼気迫る相手の様子に気を引き締めるマシユとリリイ。マシユが前に立ち盾を構え、リリイはその少し後ろで剣を構える。

接近してきたアンとメアリーが、突然左右に分かれるように飛ぶ。

無意識のうちにマシユの視線は遠距離を持つアンに、リリイの視線は剣を持つメアリーを追っていた。二人の役割分担ではそうしていたのだからそれも仕方ないことだろう。しかしそれは同時に、もう一人の存在を自分の意識から外してしまうこととなっていた。

「っあ、これは!リリイさん!」

思わずマシユが声を上げる。

距離にしてほんの一步分。しかしその一步分が大きかった。

——届かない。

アンの銃口が狙っているのは、自分ではなかった。

ニヤリと笑みを浮かべながらアンが引き金を引くところを、マシユは見た。

盾を持った手を精一杯伸ばす。

それでも、弾丸が通り過ぎるのを防ぐことはできなかった。

「この勝負、いただきました」

「リリイさん!」

メアリーの剣を受け止めていたリリイはその弾丸に気づくことができず、彼女の後頭部をめがけて飛んで行った弾丸は——

突如飛来してきた別の弾丸にはじかれた。

「はっ。」

「今のは——島の時と同じ?。」

驚きの声を漏らしたアン。大きな隙が生じているがその隙をつけるほどの余裕がマシユにはなかった。どこからともなく飛んできた弾丸。それは先ほどエウリュアレを狙ったものに近いものではないかと思っただからだ。急いで当たりの様子を見るが、その弾丸を放ったらしい者は見当たらない。

(かなり遠くからの狙撃でしょうか……或いは私たちに気づかせの間もなくこの場から離脱した?でも、どうして今回はリリイさんを助けてくれたのでしょうか?)

「マシユさん!。」

「っ、っあっ!。」

互いに気を取られてしまった場合、どちらが先にそこから盛り返すことができるのか——それによって勝負は大きく傾く。その点、戦闘経験の差がはつきりと生じてしまい、マシユは咄嗟に盾で直撃を防いだものの、アンが力いっぱい降りぬいた砲身での攻撃を受け、大きく弾き飛ばされてしまった。

「っ、まだ「もらったよ!。」」

慌てて体勢を立て直そうとするマシユめがけて、リリイを振り切ったメアリーがカットラスを振り下ろす。

戦場とは常に状況が変動するもの。戦う相手は一人と限らず、状況に応じて戦う相手を切り替えることもまた当たり前のこと。一対一の正々堂々とした試合とは違う、それゆえに場数を踏み、戦局を見極め、最善の手を打つ必要がある。今のマシユにはそれが足りず——アソとメアリーはしっかりとできていた。

ガキンツ——とカットラスが受け止められる。自身を阻んだ黒い剣を認識したかと思っただ瞬間、メアリーは自分の意思とは関係のない浮遊感を感じ、投げ飛ばされたのだと察した。

「わっ、とっ」と

咄嗟に受け身を取りながら、メアリーが視線を上げる。そのそばに

アンが駆け寄る。

「メアリー、大丈夫？」

「うん。でも、ちよつとやばそうだね」

「ええ。まさかあのバイキングの王様を破ってくるなんて。本当にただの人間のマスターなのかしら？」

「生憎と、ただの人間だよ。ちよつとばかり魔術が使える、魔術師崩れっただけで、他は普通の人間だ」

そう言いながらメアリーを投げ飛ばすためにフリーにしていた方の手に、夫婦剣のもう片割れをすぐさま取り出す土郎。エイリークとの戦闘による疲労やダメージこそあれども、まだまだ戦闘を続けるのに支障はなかった。

「ありがとうございます、先輩」

「シロウ、そちらはもう終わったのですか？」

「ああ。少しダメージはあるけど、問題はない。早いところこいつらを倒して、黒髭の方に向かおう」

「はい」「ええ」

「ただの人間がサーヴァントの前に立って生きている、これだけでも奇跡なんだけどね。流石に分が悪いかなあ」

「ええ。ここは一時撤退、と行きたいところですけど——この船の様子だとそうもいかなさそうですわね」

銃を土郎たちに向けたままチラリと自分たちの船の方を一瞥するアン。

宝具により現出しているティーチの船。

本来であればこの時代に存在している船を相手に後れを取ること、どころか勝負になることすらないレベルではある。が、しかして現在。この時代のフランシス・ドレイクの操る船相手に展開されている戦いはほぼ互角のものとなっている。

これには主に2つの要因が働いている。

1つ目はドレイクの保有しているもの。彼女が冒険の果てに手に入れた、まごうことなきこの時代における正しい聖杯。万能の願望器と呼ばれるだけある聖杯を手に入れたことにより、ドレイク及びその

船には魔術的な加護が施されていた。少なくとも、サーヴァント相手でもある程度は攻撃が通るほどに上昇されている能力が手伝って、黒髭の宝具相手でも簡単には負けない。

そして2つ目は現時点での黒髭側の船員の状況である。黒髭の宝具、「アン女王の復讐」には特殊な性質がある。それは搭乗している部下の力量が上昇するほどに船そのものの性能も上昇されるというものである。この特性故に、他のサーヴァントと同盟や主従関係を結び、その船に迎え入れることで黒髭の宝具はより強くなれる。

一方、それは搭乗していることにより上乘せされる効果であるがため、船を離れてしまうと効力が下がるといふ欠点が伴う。手中に収めていたものから供給される魔力さえあれば修復も可能であることを踏まえ、本来であれば自軍の船での戦闘の方が望ましいのだ。が、それは士郎の最初の一撃により破綻してしまった。意図せずに、彼の狙撃は敵側の有利をつぶし、自軍にとって有利な展開に持ち込むことに成功していたのだった。

「——クク、クハハッ——クハーツハツハツ!!それでこそフランシス・ドレイク!英霊でもない身でこれほどとは!やはり伝説は真実だったな!ハハハ!ハハハハハハ!アーツハツハツハツハツ!デュフフフフwwww」

「なんだい、あんたあたしのこと知ってたのかい。そりやいいね。海賊同士の真つ向からの勝負、嫌いじゃないよ!——ところで、その威厳のない笑い方はなんとかならないのかい?」

「デュフフww——痛いところを突っ込んでくれますぞ、この女。しかし黒髭が黒髭であるために、こればかりはやめられない止まらないのですぞー!」

「なんで喋り方までおかしくなってるんだい、こいつは」

方や大笑い、方や若干呆れ気味ではあるものの、そこは後世に名を残した大海賊同士。互いの船による砲撃や揺れを意にも介さず、ただ眼前の獲物を見据えるのみ。

現状船に戻れば拮抗した状態を崩せる可能性はあるものの、目の前の敵に背を向けて何事もなく戻れるかと問われれば難しい。まして

や自分たちは2人で一つなのだ。どちらかが撤退中にやられれば、もう片方もつられて現界を維持することができなくなってしまうのだ。

「やるしかないっばいね」

「ええ。それに」

「ここで逃げたら、海賊が廃る！」

ニツ、と同時に好戦的な笑みを浮かべながら、二人組の女海賊が突っ込んでくる。それはさながら彼女たちの最後の戦いの時に。圧倒的な窮地に陥り、他の男どもが戦意を失うほどの絶望的と思える状況に、果敢に飛び込んでいた時のよう。

「やっぱり、サーヴァント——いや、英霊ってのはどいつもこいつも凄いな。二人とも、気を抜くなよ」

「ええ。承知しています」

「来ます、先輩！」

まるで号砲のようにアンの銃が火を噴き、その弾丸がマシユの盾に阻まれる。その瞬間、5つの影が交わり、再び戦いの火蓋が切られた。

海の脅威は止まらない

S i d e
???

「これ以上の接近は気づかれますね。まだ暫くはこちらで待機となり
そうです」

「あいつ、まだ目的を果たせてないのか？大英雄という話だったから
もう終わっているものだと思っていたが」

「確かにあの方は大英雄に違いありませんが、狙う相手も大海賊。特
に海上、船上においては隙を見つけることも難しいのかもしれませんが
ね」

「ふん。まあ確かに、航海を率いるものは冷静で隙のないことが多い
からな。一概に奴の怠慢とは言えないか……だが、どんなに冷静な者
でもこと戦闘中においては隙が生じやすい。上手くねらってくれれ
ばいいが」

激戦を繰り広げる二艘の船を離れた場所から魔術を用いて少女は
様子をうかがっている。少女の言葉に返すのは、煌びやかな金の髪を
持つ男。小さく舌打ちをした直後、そばに控えている大男の方を見
て、頬を緩めた。

「まあ、いざとなればこいつもいるか。たとえどんな相手であろうと、
俺の船最強の英雄に敵う者などいるまい」

不敵に笑う男には絶対の自信があった。如何なる英霊が相手であ
ろうとも、万が一にもこの大男の——ひいては自分の負けはないと。
事実その大男は規格外——英霊という枠からしても規格外のつわ
ものなのだから。

巨大な斧とも剣とも見える武器を軽々振り回す剛腕。

巨体に似合わない俊敏性と機動力。

狂気に身を落としてもなお忘れぬ卓越した戦闘技術。

生半可な攻撃ではその肉体を傷つけることに能わず、また同じ手は
二度と——比喻等ではなく本当に二度と効力を持たない。

よしんば攻撃が通り、致命傷を与えることができたとしても、

果たしてそれを十二度、それも毎回異なる攻撃でなしえられる存在がどれほどいるのだろうか。

英雄の中の英雄、豪傑の中の豪傑。

大神の子であり、神話に語り継がれる自分が知りえる最強の男。

「頼むぞ。ヘラクレス」

そう言い自信満々に男は笑うのだった。

「やれやれ、あっちもこっちも大盛り上がりだねい！」

「くっ」

ケラケラと軽口をたたきながら薙ぎ払うように振るわれた槍。咄嗟に旗で受け止めることには成功したものの、攻勢に出ていて重心がずれてしまっていたジャンヌは踏ん張りがきかず、大きくはじかれる。なんとか無事に着地するものの、思わずふらついてしまう。

「っ、ちっ。なんなのよ、もう。守りうますぎるでしょ、こいつ」

「最初に言ったでしょうが。おじさんは守りが得意なんだって！」

「ぐうっ」

自身に向けて飛ばされてきた魔力弾をあっさりと槍ではじきながらジャンヌに迫ったヘクトール。まだ体勢を立て直していなかったこともあり、繰り出された強烈な突きを旗でそらしたはいいものの、その衝撃だけで大きく後ずさる。

「それじゃあおじさんも、そろそろ仕事をしようか、ねっ！」

「っ!？」

足元にあつた樽を蹴り上げ、そのまま槍の平面で殴るようにし、ヘクトールはジャンヌとマタ・ハリに向けて飛ばす。それぞれが旗と魔力弾で樽をはじく。木の破片が一瞬間の視界を遮る中、二人は咄嗟に警戒する。大英雄たるヘクトールであれば、その一瞬の隙をつく形で奇襲をすることも造作のないことであるのだから。

が、追撃が来ることはなかった。

「あらっ」

「ほっ、いなっ」

いつの間にか、対峙していたはずのヘクトールの姿が、どこにも見

当たらなかった。

「なんなのあいつ！逃げるとか、信じられない！」

「落ち着いて、ジャンヌ。とりあえず、マスターのほうに向かいますよ。もし先ほどの方がマスターを奇襲するなんてことがあったら大変なもの」

「……ええ、そうね。そうしましょう」

ギリイ、と思わず歯ぎしりをしてしまう。さっきの戦い、こんな幕引きだとすれば相手の勝ち逃げもいいところである。有効打こそこちらでもらっていないとはいえ、2対1だったのだ。それでも攻めきれなかったどころか、防御に回った途端にほぼ何もさせてもらえなかった。そのことがひどく腹立たしい。

「次は絶対に、私が仕留めます」

「気合いっぱいなのはいいのだけれど、あまり無茶はしないでね。マスターも、きつと心配するわ」

「余計なお世話です。甘く見ないでください。でも、その忠告については頭の片隅に置いておいてあげましょう」

「うふふ。そう？それならよかった。さあ、行きましょう」

「ええ」

槍をしつかりと握り直し、ジャンヌはマタ・ハリとともに走り出した。次回戦う時のリベンジに燃えながら。

鉄と鉄が幾度となく響きあい、その戦闘の激しさを物語る。

果たしていく度目かの打ち合いか、もう誰にも分らないであろうけれども――

――でも確実に、終わりはくる。

「っ、くっ」

咄嗟に繰り出された連携攻撃により、士郎の手から双剣が弾き飛ばされる。

「もらったよ」

「終わりですわね！」

不敵に笑う女海賊コンビが接近する。体勢的に通常の回避は間に

合わない。その一瞬の判断後、士郎はとっさに足元に小ぶりの短剣を複数個投影し、

「爆ぜろ！」

ほんの一步後ろに跳びながら身構え、僅かに内包されている短刀の神秘を破裂させる。小規模ながらもその爆発はアンとメアリーを一瞬怯ませ、また同時に後ろに跳んだ士郎にとっては追い風となり、距離を取ることに成功する。むろん爆風に伴う熱波や破片、衝撃によるダメージが皆無なわけがなく、あくまで肉を切っても骨を守るための咄嗟の行動。

自分一人で戦っていたのであればその後反撃に移ることは難しいだろう。

——が、

「今だ！」

「はい！」

後退する士郎の両脇を二人の少女が駆け抜ける。アン目がけて突き出される盾の切っ先。そしてほぼ同時にメアリーに振り下ろされる剣。二人の少女騎士が繰り出した一撃は、先の爆発により視界、体勢共に狂わされていた二人組の海賊には防ぐすべがなかった。

「あくあ…やられちゃったか」

「そうみたいですわね。でも、今回は——」

「そうだね。離れ離れでもなく、不自由の中でもない」

「海賊らしく——船上で」

「うん。そして海賊らしい戦場で」

消えゆく身体を確認しながらも、顔を見合わせながら二人の海賊は笑った。

みょうちきりんな船長と共に繰り出した今回の航海。結果として自分たちは目的を手に入れることは叶わず、この航海の最終地点を目標することもできずに途中退場となってしまった。

ただそれでも、今度こそ共に終わるのであれば、そこに心残りはあるだろうけれども、悔いはない。

「じゃあ、僕たちはもう行くね」

「人類代表のマスターさん。またどこかの航海で会うことあれば、リベンジ、させていただきますから。勿論、貴方の可愛い騎士たちにも」
そう言いながら海賊たちは最後の敬意を敵対者たちに向ける。

「あ、あの船長に、最後に挨拶くらいはしておいた方が良かったかなあ」

「仕方ないでしょう。そんな時間はもうありませんしね」

「だね。それじゃあ」

「ええ。それじゃあ」

「「ヨーホー！」」

なんて、どこか気の抜けているような、それでいて海賊としての誇りを失わぬようなそんな言葉と共に、双翼の女海賊たちはその座の元へと送還されるのだった。

「先輩」

「お疲れ、マシユ。リリイも、お疲れ」

「はい」

「先輩。アンさんとメアリーさんですけど、その。こう言うと思議かもしれないませんが、なんだか楽しそうにも、嬉しそうにも見えました」

「そうだな。きつと、二人一緒だったから、だろうな」

「二人一緒、ですか？」

「はい、リリイさん。あの二人は後の世でも有名な二人組の女海賊、まさにベストパートナーです。でも、最期の時を一緒に過ごすことは叶わなかったようです。だからこそ、笑っていたのかもしれない。同じ船に乗り、同じ船長の下戦い、同じ戦場で一緒に終わることができたから」

「最後の瞬間を、大切な相手と一緒に過ごすことができたから、ですか」

「そうですね。私——少しだけ、分かるような気がします」

どこか寂し気な笑みを浮かべたマシユが回想するのは、炎に燃え盛るレイシフトのあの日——自分が終わりを迎えると思ったあの日の

こと。潰されて、もう助からないと思って、それでも何故か——安心して微笑んだ。

そして浮かぬ表情のリリイもまた——彼女にその記憶がなく、あくまで可能性の話であれども、同じように思うところができるのかもしれない。聖剣を携えた王の終わりは、最も忠義の深い隻腕の騎士に看取られながら、最愛の夢の続きを見に行くもの——そうなる未来も可能性もあるのだから。

「……あとは黒髭とヘクトールだな。他のみんなも心配だ。行こう」

「はい」

戦場ゆえに感傷もそこそこにしておくほかはなく、士郎に促される形で彼女たちはまた別の戦いへと向かう。敵の戦力は大きく減らした。後は船長と大英雄を倒すだけ。謎の狙撃手の存在も気がかりではあるものの、戦いに終止符を打つために三人は駆け出した。

——より大きな脅威が近づいてきていることには、まだ気づかない。

「厄介なのが近づいてきているな。僕の攻撃じゃ、あの巨体をしとめることはまず不可能。かといって、大将を狙撃しようにもあの尋常じゃない圧。下手に攻撃しても見切られそうだ。こうなると、あのマスターたちと距離を置いてしまったのは痛手か」

いつの間にかドレイクの船から拝借していた小舟に乗りながら、男が呟く。スコープ越しに覗く更なる脅威に対する悪態か、それとも自身の予想や見通しの悪さに対する皮肉か。

「とにかく、通常の方法であれを攻略するのは不可能だ。場合によっては……」

いくつもの戦術を、戦略を考え組み立てる。さながら軍師のようなことをする男はしかしそんな役割ではなく、またそれらの思考は軍や集団を動かすためのものではない。

彼はあくまで奇襲を用いる暗殺者であり、世界に遣わされた守護者

であり、正義のミカタなのだから。